

〈資料紹介〉

アメリカにおける日本人移民一世の歴史

—— 鷺津尺魔 『歴史湮滅の嘆』 ——

A history of the first generation Japanese immigrants in the United States:
Washiazu Shakuma, Rekishi Innetsu no Tan

片山 一 義

資料の解説

本資料は、戦前期アメリカ合衆国において、日本語新聞の発行・編集に携わる文筆家であり、同時に、在米日本人移民の歴史家でもあった鷺津尺魔が、邦字日刊紙『日米』（英語名『The Japanese American News』）紙上に一九二二年四月五日から同年七月一四日までの間、「歴史湮滅の嘆」のタイトルのもとに計九九回に亘って連載した在米日本人史に関する記事を纏めたものである。

周知のごとく、日本人のアメリカ合衆国本土への移民は、一八八〇年代半ば以降にみる「貧しい学生層」、いわゆる「出稼書

生」を嚆矢とする。その後一八九〇年に入って、農民出身階層の「出稼渡航」が主流となった。そして、北太平洋定期航路（九六年日本郵船のシアトル航路、九八年東洋汽船のサンフランシスコ航路）の開通、更にはハワイからの膨大な転航者を背景に、一九〇〇年からそのピークとなる一九〇七年までの間、合衆国への労働移民は年間一万人を超える規模に達した。

これらの初期移民は、当初、主に農業、鉄道（保線）業、林業における労働に従事し、季節ごと地域間を移動する浮動労働者であった。しかし、移民が増え、北西部諸州のサンフランシスコ、サクラメント、シアトル、ポートランドなど主要な都市に「日本人町（Japan town）」を作って集住するに伴い、多様な

都市サービス業に従事する者も増大した。外務省外務大臣官房報告課の調査⁽¹⁾によれば、一九〇八年（明治四十一年）十二月末現在、ハワイを除く米本土在留日本人の職業別構成は、農業が三九、九〇〇人で全体の四四・七％を占め、次いで家内労働九、六五九人（二〇・八％）、鉄道労働者八、五三〇人（九・五％）となっているが、残りの三分の一は六六種類に亘る多様な都市サービス業が主体であった。それを列挙すれば、以下のようになる。すなわち、商店員一、六五八人、料理及飲食店一、五九八人、代書業一、二六二人、旅・下宿業一、一九四人、料理人一、一四五人、雑貨商七五二人、食料品商五二八人、理髪業五一五人、和洋風裁縫業五〇六人、職工四五六人、遊戯業四三二人、遊芸稼業三二二人、和洋服洗濯業三〇八人等々である。すでに医師も一七七人に達していた。

ところで、以上のような在米日本人が形成した初期移民社会の内実について説明しようとする場合、我々は大きな困難に直面する。それは、アメリカ国内において有益な一次資料や文献が極めて少ないという点である。その原因は二つある。一つは一九〇六年四月十八日に発生したサンフランシスコ大地震と大火による貴重な資料の焼失である。いま一つは、太平洋戦争勃発後の大統領令九〇六六号による日系人十二万人の合衆国西部地区からの強制退去であり、「転住所」への強制収容であった。かかる事情について、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校（UCLA）の日系人研究プロジェクト（JARP）⁽²⁾を実施し、「日

系人研究に欠くことのできない、英語及び日本語の文献、新聞や雑誌、団体・教会の記録や書類、個人の日記や書簡など、入手できるすべての文献・資料を蒐集する」事業に携わった阪田安雄氏は、次のように述べている。⁽³⁾

「一九〇六（明治三九年）年のサンフランシスコ大地震直後に大火が発生し、同市の日本人町を破壊させてしまったことはよく知られている。日系人研究に携わる者にとって、日本人町の焼失よりも悲しむべき事態は、この大火が、日本人居住者たちが所持していた文献、新聞綴り、記録、書簡や日記など貴重な資料のほとんど全てを灰にしまったことである。」「灰になった資料は、サンフランシスコ市や近隣のアラメダ市やオークランド市など直接被害を蒙ったサンフランシスコ湾岸地域に在住していた日本人に直接関係する貴重な記録であっただけでなく、当時サンフランシスコ日本人町を根拠地として中・北カリフォルニアで農業労働者として働いていた日本人に関する記録をも含んでいた。したがって、サンフランシスコ日本人町にあったこれら資料の破壊は、あたかも黒板の字を消したように、当時カリフォルニアの中北部に在住した日本人の生活体験、就労状態、それに日記などに記されていたと推察される彼らの喜びや悲しみについての記述も、歴史のページから永久に消滅させることを意味していた。」

また、後者の問題については、強制収容に際し、各人が携帯

を許されたのは両手で運べるだけの荷物であったことに加え、次のような事情も説明されている。

「日本人」一世は、母国と戦争を始めた居住地アメリカで、一夜にして「敵国外国人」になってしまった。排日感情の激しい地域に住居している場合は、たとえそれが実際に起きなかったにしても、生命の危険に身を晒すことを恐れなければならなかった。その結果、日米開戦後に、多くの一世とその家族、あるいは日本人会、日本人商業会議所、県人会など日本人団体組織の関係者たちは、敵国となった母国日本に忠誠を示す根拠となる恐れのある文献、記録や文書などを、自分たちの手で焼却したり、海へ投げ捨てたり、埋めたりして消滅させるよう努めた。そして、彼らが不安に怯えて、「危険な」記録や文書を選ぶ基準としたのが、まず第一に「日本語で記されている」ことであつたことが、戦後の聞き取り調査などで明らかにされている。場合によっては、記録や文書の無差別な焼き捨てや破壊が行われたことが推測される。」⁴⁾

その結果、初期移民社会を客観的に知り得るための重要な第一次資料は、外務省外交史料館所蔵の外務省「記録」⁵⁾(移民関係ファイル)とそれを選別、編纂し公刊した『日本外交文書』(領事報告、移民調査、具申書、付属書等の文書)、更に領事館から本国政府に送られた米国の通商経済関係の「領事報告」⁶⁾及びそれを纏めて編纂した文書など、日本国内にある資料にその多く

を依存せざるを得ない状況にある。他方、アメリカ国内の資料としては、戦前日本人の移民向けに発行されていた邦字新聞(『新世界』『日米』『羅府新報』『大北日報』『櫻府日報』『央州日報』など)に掲載された記事類、あるいは邦人新聞社発行の年鑑(『日米年鑑』『北米年鑑』など)が一次資料となっている。同様のことは、阪田安雄氏と同じくUCLAの日系人研究プロジェクトに係わり、アメリカにおいて日系移民史研究の第一人者であるユウジ・イチオカ(Yuji Ichio)氏も指摘している。⁸⁾

こうした状況の中で、本稿に収録する鷲津尺魔の「歴史湮滅の嘆」は、邦字新聞『日米』紙上に連載された一般読者向け記事という形態ではあるが、その内容は質量ともに在米日本人史に関する貴重な一次資料であると考える。それは次のような理由からである。

まず第一に、この連載記事は一八八〇年代から一九一〇年代における合衆国本土の移民社会について、女性・売春婦、学生、浮浪者を含め各階層の生活状態、および移民社会を構成している多様な職業や業界を取り上げ、代表的な日本人とその活動などを歴史家の目で客観的に伝えているところにある。特に、後に『羅府新報』紙上でも連載し、最終的に著書『在米日本人史観』において集大成される「元祖しらべ」に連なる各種業界・団体の歴史研究は、自ら「是迄在米日本人間に之に關する正確の記録はありません。各種の發展史、縣人史などは可なりに多く出版せられてありますが元祖調べにはあまり關係を有ちま

「せん⁹」と述べるように、他に類を見ない鷺津尺魔の最大の功績と言えよう。

この点に関して「歴史湮滅の嘆」では、「賣春婦の元祖」「洗濯業の開祖」「日本人鐵道人夫供給の元祖」「在米日本人靴工の元祖」「炭坑ボスの元祖」「活字新聞發行の元祖」「日本人土地借地の元祖」「在米日本人料理屋の元祖」「理髮師の元祖」「砂糖ビーツ請負の元祖」などが紹介され説明されている。同時に、そこでは当時の洗濯業、鉄道保線、邦人靴工、炭坑業、新聞業、銀行業、料理店、雜貨商、大和コロニーを含む農業など初期移民社会を代表する業界の実態が明らかにされている。

第二に、以上のような歴史家として「多種多様な事蹟」について「眞を寫す¹⁰」という鷺津の姿勢そのものが、在米日本人の在米中国人に対する差別意識を批判し、最初の日本人墓地の建立など、在米中国人が日本人移民及び移民社会の形成に如何に貢献したのかという事蹟を取りあげたことがあげられる¹¹。この点はこれまでの日系移民史研究にはなかった視点である。

「歴史湮滅の嘆」のなかで、在米中国人の問題にふれた箇所はかなり多いが、当時の移民社会における中国人蔑視に対する批判には鋭いものがある。一部引用すれば、次のようなものである。

「今頃の日本人は生意氣に支那人を目してチャン公といふ輕蔑詞を用いるが、これは悪いことだ。チャン公とは、熊公、八公の如き稱

號と同じい意味になっている。人様を輕蔑した稱號で排日米國人が日本人をチャップと云に同じき失敬の言葉である。

在米日本人が支那人をチャン公と唱へだしたのは、故・黒澤・格三郎（醫師）だと思はれる。格三郎は地口駄洒落の妙を得た醫者で桑港日本人間最初の醫師として有名な男であった。彼れが支那人をチャン公と唱へたのは、明治二十七年日清戦争當時から日清戦争は日本を世界に廣告するには頗る有力な戦であったが、此時から日本人は舊恩を忘れた自大野郎となつたのであつた。

日清戦争前までは支那人を目して先生と唱へていた。先生とは師匠先輩を意味したる一種の敬語である。

……（中略―引用者）……

支那人は日本國の師匠のみでなく米國移民の師匠であつた。加州を始め山中部北部諸州を旅行する人は各都市に支那人街を見るであらう。其支那街は當時の支那移民の發展を記念すべき好個の歴史資料である。そして此支那人街の一隅に日本人が居候的に巢を作つた事蹟を見るであらう。

「支那町に居候するジャップ哉」此の諷句は私が二十五年前サンノゼで詠んだのであるが、日本人は全く支那人の居候から發達したものである。考へて見れと支那人先生をチャン公など呼ぶのは忘恩の野郎共の申分だ。¹²

「ギブソンは支那人墓地の中に小さき場所を求め、之を日本人墓地に充てた。此代金五十弗程で、此頃の青年等が此地を募集することは容易の事業でなかつた。

私は茲まで書いて来て、再び支那人に對する懷舊の念を禁じ得ない。日本人は何といふても支那人に對しては先生の稱號を奉るべき歴史的事情を有している。明治七年に、既に支那傳道會館が桑港に在り、達磨以上のギブソンが在り、日本人が其ベスメントに養はれて居り、支那人墓地の一角を割きて日本人墓地を設けたのであった。生活的經濟的に在米日本人は支那人の居候をしたのみでなく、墓地まで支那人の居候をしたのであった。

斯う考へて見ると、日本人はドノ點からしても、チャン公を馬鹿にする資格は無い。私は此機會に於て明かに言ふ。日本人が支那人を輕蔑する間は、決して日本が有力の國にならない。日本及び日本人が先輩の支那に向つて尊敬の念を深くすることに於て、日本は世界の先進國たり、東洋諸民族の支持者たる事が出来るのである。⁽¹³⁾

戦前の日本人のアジア人、特に中国人に對する差別意識、劣等民族意識は、日系移民史研究においても、大きな影響を与えてきたのではないかと私は常々考えている。それは何よりも、アメリカの日系移民史あるいは移民史研究において、当時、同じ空間で生活していた中国人あるいは中国人の問題がほとんど出てこない、語られないという点にあらわれている。あるいは語られる場合があつても、在米日本人の周辺にいて日本人に賭博や売春などを誘惑する貧民窟の悪人のようなスタイルで登場することが多い。それは歴史資料にこの種の叙述が多いことの反映でもある。このような取りあげ方は、中国人への差別意識、

あるいはその影響以外の何ものでもない。

鷺津尺魔も述べているように、アメリカの各都市にある日本町 (Japan town) は、チャイナタウンに隣接して形成されることが多い。つまり、日本人が英語を話すことができず、右も左も分からないアメリカに単身で渡つて、生活する場所はチャイナタウンの片隅なのであった。食生活も含めて、先に米国に渡つたアジア人でもある中国人に頼つたのである。サンフランシスコのみならずオークランド、サンノゼ、サクラメント、ストックトン (以上、北加)、フレズノ、サンタ・バーバラ (以上、中加)、さらに南加のロサンゼルスも例外なく、全てチャイナタウンの片隅に日本人が集まり、ジャパントウンを形成した。その意味で、在米日本人の發展史において、中国人の影響は無視できない。しかし、どのような意味で影響があつたか、あるいは影響し合つたか、そうした視点からの歴史研究は日本人が書いた図書、雑誌論文等では皆無ではなかつたかと思う。

戦後の我々日本の研究者も、戦前の在米日本人が根底に持つていた中国人への差別というものの見方から完全に自由ではなかつた。少なくともそれを自覚して日系移民社会の構造をみて来たとは言いがたい。在米日本人史は、在米中国人との関係史という視点から改めて再構成する必要があるのではないか。本資料はそのような移民史研究の課題を示唆していると言えよう。

次に、鷺津尺魔の略歴について触れておこう。ただし、詳し

くは尺魔の孫に当たる佐渡拓平氏が上梓した書物に書かれており、年表も作成されているのでごく簡単に留める。

鷲津尺魔は、本名は鷲頭文三という。一八六五年八月十七日(慶應元年)、新潟県三島郡飯塚村字中島で生まれた。星亨の政談演説会を聞いて政治に関心を持ち、自由党に入党。一八九〇年二五歳のときに新潟県議会議員選挙に立候補して当選した。

翌年、信濃川の河川工事請負事業に失敗。一時、北海道に新天地を求め、一八九四年一二月、三〇歳でサンフランシスコに渡った。

その後、一八九五年に『桑港時事』の筆耕生、九七年『桑港日本新聞』の発刊メンバーとなり、またその間、滑稽雑誌『臆はずし』を発行、『ジャパン・ヘラルド』の事業に参加した。一八九二年六月『日米』サクラメント支社長、同年一〇月に安孫子久太郎らと共に「日本人勸業社」を起こして、日本人への土地斡旋、ビート農園の耕作請負、労働者供給事業などを手がけた。一九〇三年に『日米』の主筆、翌年「日本人勸業社」の「日米勸業社」への発展改組に伴い同社支配人に就任した。

サンフランシスコ大地震の後、「日米勸業社」が計画して作った大和コロニー(リヴィングストーン)に移住し、一九一〇年『日米』を辞して一時帰国。のち『日米』に相談役として復社し、一九二二年「歴史湮滅の嘆」、一九二四年「吾輩の米國生活」を『日米』を連載、一九三〇年に『在米日本人史観』を上梓した。その間『羅府新報』の客員となつて「元祖しらべ」を連載した。

一九三六年四月、神奈川県茅ヶ崎で死去、七二歳であった。

「歴史湮滅の嘆」は、最初に述べたように一九二二年四月五日から同年七月一四日までの間、『日米』の第一面において九九回にわたって連載されたものである。最初に、その全体を鳥瞰することが望ましい。そこで序から始まる「見出し」のみを以下に並べてみた。順序とサブタイトルの構成はこのようになっている。

(序) 歴史私考

(一) 女の渡米事情

(二) 女の渡米事情(ロ)

(三) 夜の女性の事(イ)

(四) 夜の女性の事(ロ)

(五) 夜の女性の事(ハ)

(六) 夜の女性の事(ニ)

(七) 米國に於る邦人行商

(八) 慶長前後の日米

(九) 明治卅年の邦人廣告

(十) 出放題の史論

(十一) 各地古物禮拜記

(十二) 岩倉開拓使と女學生

(十三) 日本人會の始め

(十四) 日本人會の工夫請負

- (十五) 高濱萬次郎が事
(十六) 東部と西部との學生
(十七) 風俗壞亂罪
(十八) 日米條約の嚆矢と新見大使の渡米
(十九) 二十年前のフレスノ 驚くべき發達
(二十) 浮浪漢の跋扈と農園に於る賭博
(廿一) 浮浪漢の大掃蕩
(廿二) 三百年前の渡米者 矢座田中と支倉
(廿三) 學生時代の桑港生活 穴居同様な不潔状態
(廿四) 廿年代田舎の生活 無錢旅行者の事ども
(廿五) 岩倉開拓使の渡米 米國全土の大見世物
(廿六) 洗濯業の開祖 同業者の迫害
(廿七) 日本人洗濯業と排日事件の経路
(廿八) 鉄道人夫請負率先者 嬪夫全盛の時代
(廿九) 鉄道労働時代の群雄と移民禁止の暮の鐘
(三十) 各地同好の紳士諸君 御共鳴の好意を謝す
(卅一) 二十年前土地所有者 フロリンが第一
(卅二) 靴工同盟の由来 邦人職工同盟の始祖
(卅三) 白人靴工の迫害 靴工同盟の成立
(卅四) 靴工の迫害十數年間 同胞の結束と相互扶助
(卅五) 日和見外交の外務省 二十年前の滿洲と米國
(卅六) 外國へ来て錯誤だらけの日本外務省のやり方
(卅七) 炭坑ボスの元祖 支那人虐殺の経過
- (卅七) 炭山發展時代と日本人の活動状態
(卅八) 先生とチャン公の由来 支那人は日本人の先輩
(卅九) 女がなければ世が暗 土着永住の奨勵
(四十) 最初の日本使節 米國側の記録
(四十一) 最初の日本使節 華盛頓に於ける光景
(四十二) 米國佛教會の始まり 今の坊主は高利貸
(四十三) 米國佛教會の其後 他力本願の衰頹期
(四十四) 炭山に於ける支那人 虐殺の動機と其光景
(四十五) 加州開拓の先驅者と妻帯媒介人の巨人
(四十六) 米國最初の二領事 富田と高木の渡米
(四十七) ペルリ來訪の側面觀 一生懸命の大滑稽
(四十八) ペルリ來訪の側面觀 一生懸命の大滑稽
(四十九) ペルリの再航 日本空前の外交談判
(五十) 日本空前の外交談判 林大學頭の答辯
(五十一) 日本空前の外交談判 恩人乎、非恩人乎
(五十二) 區別待遇の撤廢 自由平等の宣傳
(五十三) 新聞雜誌の今昔 驚くべき言論機關
(五十四) 新聞雜誌の今昔 生活の粗惡第一
(五十五) 新聞雜誌の今昔 貧乏生活の好模範
(五十六) 誹毀の訴訟事件 相撲場の心理状態
(五十七) 加州民歴史的自覺 四十九年祭の創設
(五十八) 四十九年祭の印象 日本姫おけいの手箱
(五十九) 四十九年祭の印象 古色を帯びた遺物

- (五十九) 正金銀行、三井物産 東洋汽船出張所の始り
- (六十) 三元老の會合、三十六年前の懷舊
- (六十一) 長澤鼎の渡米と薩藩の海外留學生
- (六十二) 三元老の會合(續) 松岡謙の櫻府入り 貨車がホテル
- (六十三) 日本人の元祖争ひで私の不學を恥ぢた
- (六十四) 森、鮫嶋等の渡米 日本公使の元祖
- (六十五) 中澤晰加州に移る サンタローザの開拓
- (六十六) 料理屋の初期時代 大和屋彦天大黒屋
- (六十七) そばやとすしや及び料理人の名人考
- (六十八) 日本料理の元祖と東西文明の調和
- (六十九) 生稻忠兵衛と米僊畫伯 有法の極は無法に歸す
- (七十) 時計及寶石屋の昔時 渡邊四郎と中島某
- (七十一) 福音會と美山貫一 在米日本人團體の元祖
- (七十二) 日本人墓地の設備 美以長老の創立
- (七十三) 政府自ら貿易に當る 神鞭知常氏の渡米
- (七十四) 東部邦人移住の先驅 森村、新井等の移住
- (七十五) 森村兄弟の貿易 士道的商人の成功
- (七十六) 村井保固の渡米 森村組の大發展
- (七十七) 太平洋沿岸の雜貨商 甲斐織衛、竹山祐嗣
- (七十八) 太平洋沿岸の雜貨商 甲斐織衛、竹山祐嗣
- (七十九) 色々の仕事の開祖
- (八十) 技術名人考
- (八十一) 技術名人考 隠れたる英雄
- (八十二) 技術名人考 「釣道樂」の話
- (八十三) 妻ノロジの元祖 上野と吉岡の妻ノロ
- (八十五) 高峰の海外留學と新發明の發表
- (八十六) 新島襄の渡米 日本人最初の學生
- (八十七) 新島襄の手簡
- (八十八) 新島襄の手簡 ハーデー夫人に送れる(續)
- (八十九) 沿岸農業史の片影 サンノゼとワッソソビル
- (九十) 沿岸農業史の片影 モントレーより南加迄
- (九十一) 岩倉大使の事に就て 鷺谷南強氏より來簡
- (九十二) 岩倉大使の事に就て 鷺谷南強氏より來簡
- (九十三) 大和植民地の由來 模範的日本人農村
- (九十四) 大和植民地の由來 模範的日本人農村(續)
- (九十五) 大和植民地の由來 模範的日本人農村(續)
- (九十六) 大和植民地の由來 模範的日本人農村(續)
- (九十七) 本題の結尾 民族特長の維持
- 【留意】
- 第廿一回「三百年前の渡米者 矢座田中と支倉」(一九二二年四月二七日)と第五十一回目「區別待遇の撤廢 自由平等の宣傳」(一九二二年五月二八日)は、誤植により回数がダブって記載されている。また第七十九回目(一九二二年六月二六日)の記事「色々の仕事の開祖」は原文では(七十四)と番号が誤記されている。さらに、第八十四回

目に当たるとの記事は、同新聞に掲載がない。以上のような誤りに対して、本稿では以下のように取り扱った。まずダブって番号が振られている第二十一回目と第五十一回目はそれぞれ原文通り(廿一)、(五十二)と記載した。また順番において(七十九)を(七十四)と誤記した箇所については、訂正して(七十九)と書き換えた。さらに記事が存在しない八十四回目は欠番として扱った。したがって、収録にあたって左の如く連載記事は(八十三)から(八十五)に番号が飛んでいる。

なお、本稿への収録にあたっては、新聞記事原文をできるだけ忠実に活字化した。その際に以下の処理を行った。

- 1、原文ではすべての漢字にルビが付けれられているが、それをすべて取り除いた。ただし、傍点は原文通りとした。
- 2、仮名遣いは原文通りとし、送り仮名の使い方が不統一の箇所(例えば「彼は」「彼れは」など)もあるが、そのまま原文の通りとした。
- 3、変体仮名は、読みやすさを考慮するとともに、全体の文字と文体を統一する意図から、通行の字体に改めた。
- 4、句点のない箇所はそれを補い、行末のために略されている句読点はそれを補った。
- 5、明らかに誤植と思われる箇所については修正した。

(かたやま かずよし 社会政策専攻)

※本稿は、二〇一六年度在外研究における研究成果の一部である。

- (1) 外務大臣官房報告課編『海外各地在留邦人職業別表(一九〇八年二月現在)』。なお、同年同月末現在の在米日本人総数はハワイに在留する六四、四四二人を除き八九、三二五人であった。性別では男八一、〇五〇、女八、二七五人であり、女は一割に満たない。また地域別にもれば、サンフランシスコ総領事館の管轄内に住む邦人数は六六、六〇四人で、ハワイを除く合衆国本土全体の七四・六%を占めていた。
- (2) カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)の日系人研究プロジェクト(JARRP)は一九六三年から始まり、蒐集された日系移民に関する文献や資料は、Ichioha. Yui. *A Buried past: an annotated bibliography of the Japanese American Research Project Collection*. (Berkeley: University of California Press) 1974. Ichioha. Yui. Azuma. Enchiro. *A Buried past II: the sequel to the annotated bibliography of the Japanese American Research Project Collection*. (Los Angeles: Asian American Studies Center), 1999. に掲載されている。
- (3) 阪田安雄「移民研究の歴史的考察とその課題」 阪田安雄監修『日系移民資料集 北米編 第十八巻』日本図書センター、一九九四年七月。一〇〇―一一頁。
- (4) 同右、一四―一五頁。
- (5) 外務省「記録」とは、交信・覚書・電信・信書・条約書・諸帳簿等公務に関する外務省の記録文書をテーマ別に編纂・ファイリングしたものをいう。移民関係ファイルについては、阪田安雄監修『日系移民資料集 北米編 第十八巻』巻末資料において、「在米本邦人ノ状況並渡航者取締関係雑纂」「北米合衆国ニ於ケル本邦人渡航制限及排斥一件」についてリスト化されている。
- (6) 同右の『日系移民資料集 北米編 第十八巻』では、「官報」と「通商彙纂」に掲載された移民関係の重要な「領事報告」が目録にされている。

- (7) この文書類では、『太平洋沿岸地方探検報告書』(一八九四年)、『北米合衆国「アイダホ」州移民地探検報告』(一八九五年)、外務省通商局編『移民調査報告』第一回、第二回、第六回、第九回、第十回、第十一回(一九〇八年)一九一四年)、外務省通商局『移民地事情要覧 第一』(一九一〇年)などが重要な文書である。
- (8) Ichioka, Yui. *The Issei: the world of the first generation Japanese immigrants, 1885-1924*. (New York: Free Press, 1988, pp. 293-294.
- (9) 鷺津尺魔著『在米日本人史観—附在米在布日本人歴史の源』羅府新報社、一九三〇年四月、附録表紙。
- (10) 「歴史湮滅の嘆(序—歴史私考—)」「日米」一九二二年四月五日。
- (11) 鷺津尺魔の孫にあたる佐渡拓平氏もこの点を大きく評価している。氏は「気骨のジャーナリスト尺魔」の「物語」を執筆した動機は「日本人のすべてが何の躊躇もなく、中国人を蔑称呼ばわりすることが当たり前であった時勢に逆らって、『日米』紙上にその非を説いた」ことにあると述べている。佐渡拓平著『気骨のジャーナリスト尺魔が刻したカリフォルニア移民物語』亜紀書房、一九九八年、一九頁。
- (12) 「歴史湮滅の嘆(卅八)——先生とチャン公の由來、支那人は日本人の先輩——」「日米」一九二二年五月一四日。
- (13) 「歴史湮滅の嘆(七十二)——日本人墓地の設備、美以長老の創立——」「日米」一九二二年六月一八日。
- (14) 佐渡拓平、前掲書。

(資料)

鷺津尺魔『歴史湮滅の嘆』

(序)

— 歴史私考 —

多くの歴史は先人の事蹟を後人が書くものだ。歴史のアテにならぬのも、歴史の面白いのも此處にある。實は歴史の有りがた味は後人の想像に成れるものが大部分を占めている。けれども若し、太古以來世に物好きがあつて、其時代々々の事を書き記したものがあつたらば、後人の歴史家が多大の苦心と無用の努力とが省ける譯である。

たとへば生物發達の歴史に就いて考へて見るに、今日の生物學、進化學は、其實、推理の學に過ぎない。「有機界の始めは原形質の一樣なる團塊である」と科學者はいふ、而して更に此一樣の團塊が自然生殖の經過に依つて幾千萬億年の間に、それが段々と凝結して細胞を形成し、其細胞の有機體は互に相連結して複細胞の生物となり虫類に進化し、脊椎動物に進化して魚類となり、爬虫類となり、鳥類となり、哺乳類となり、遂に人類にまで進化したといふのである。今日では此生物學者が一般に信ぜられているが、果して此れ等學者のいふ通りが疑はしいと云へば疑ふべき理由は澤山にある。

若し茲に幾千万億年の昔に何者かゝ在つて、今日我々が見て解し得る文字で其時代の事實を書き附けた者があるとしたならば、今日の生物學者が百年も二百年も費やして山を掘つたり海を採つたりして研究する手間が省ける譯だ。

私は今、日本通俗の文字で通俗の言葉を書く。そして其書くことは少しく以前か乃至は自分の實驗したことを書く。實驗したことはないが、見たことのない事蹟には多少の誤りがあるかも知れぬ。併し生きて人が見、生きて居る人が聞いた事ゆへ、全然想像で丸めたものとは質が異ふ。此意味に於いて此文は後世の珍品となるかも知れない。

私の性質からすると過去の事を書くことを好まない。併し過去は現在の祖先であり、現在は未來の母である。祖先を離れて現在の民族なるもの無く、現在を離れて未來の人間は無い。然らば過去を記すことは親を記憶するが如き尊き物の一つである。

歴史に最も困難なるは、其傳説の眞偽を判別することにある。同一の事實を甲に糺して乙に尋ねるに當り、既に二個の異説を生ずる。或は年代に相違があり、或は事實に相違がある。同一の事件にして甲乙の説を並立して別個の事件の如く思はるゝことが屢々ある。これ歴史の實を傳ふるに困難なる所以である。

私は幸か不幸か存命している。存命の中に自分の見聞する史料を書き附くるは、後人に對する義務だとも言へ得る。此意味に於いて此雜記を書くのである。

此文は次第を立てず順序を追はず隨感する處を隨記したものである。併し其史實的價値に就てはゼロとは考えられない。何となればそれは眞を寫すに於いて可なりの注意を拂つてゐるつもりであるから。

然れども私の見聞する處は固より廣くはない。過去五十年間我同胞が米國人と接觸せる多種多様な事蹟は興味あることであらうが、之れを一巻として讀者の前に展開することは私の力では出来ない。唯だ私は私の實驗せる程度に於いて或は見聞せる程度に於いて此雜記帳を諸君の前に提供するに過ぎぬ。而して此文中多くの誤りあることは私の大に恐るゝ處である。これは大方の是正を待つて改刪を施したいものである。

天下の能文の人は史實を理想化するに専らにして事實に疎なるの憾みがある。而して其反對の史家は史實を探究するに凝りて徒らに紙虫拾ひの邪道に墮花するものがある。二者共に不可である。蓋し歴史は人生の經路に於ける靈活の事象を捉えざるべからず。死兒の齡を數ふるが如きは史家の恥づべき所。

然れども歴史を讀む者また其用意を怠るべからざる要件がある。史蹟の記述は其筆者によりて同じからず。而かも其史蹟記述の時代と四圍の事情を考慮して活斷を與ふるは讀者の領域内に屬す。

若しそれ歴史記録の業をして時の權力者の爲めにし、或は營利の爲めにし、他者の壓迫の爲めに其筆を二三にするが如きは史家の大耻辱にして大罪惡である。

〔日米〕 No. 8047 April 5, 1922)

(一)

Ⅱ女の渡米事情Ⅱ

神世の昔より、女ならでは夜の明けぬ國と歌はれし大和民族は、其渡米歴史の第一頁に女性の出現が無い。有ったかも知れぬが、記録にも口碑にも傳説にも無い。多分これは當代人が其事蹟を湮滅せしめたのであらう。苟も大和民族といはるゝ程の者が、女を伴はぬ歴史を持つ筈はない。

併しコロンブスが、アメリカ探検の當時、其船中には女が乗って居らなかつたやうだ。是も後生人が胡麻化したのかも知れぬ。兎に角、吾々年代の人は其史實を見出し得ない。

吾々の知る限りに於て日本婦人の米國に渡つたのは、明治二年獨逸人スネールが卒た四十名の中に「おけい」といふ者あり、此婦人が米國に於ける天照皇大神だと思はるゝ。當時十八歳の少女が此一行中に唯一人あつてそれが此一行中の某者の妻か乃至獨身者か、審でない。人妻として海外に渡航したとすれば、餘に年若である。さればとてスネールの妾としても餘りに年若である。

獨逸人スネールは慶應元年頃和蘭船に乗りて日本に渡つたものだ、その目的は軍器賣込であつた。彼を蘭人といふは誤傳で、當時和蘭船の外、入港を許されなかつた頃、渡日した爲めに蘭

人と誤傳されたものだ。スネールは徳川幕末日本政界の風雲急なるを知り、火繩銃を携えて之を幕府に賣り付けたが、戊辰の時には會津庄内の各藩を訪問して軍器を供給し、且つ射的の術を教えた。彼は右眼の明を失した男で、鐵砲を打つに左眼を以て狙つたを以て有名であつた。

スネールは會津公より松平武兵衛なる名前を頂戴し、常に松平武兵衛と稱することを名譽としていた。處が戊辰最後の戰爭で會津は落城し、庄内は降参した。形勢斯くの如くなつたので彼は随分損失を招いたらしい。そこで横濱に出て、征途をアメリカに向けたのである。

當時のカリフォルニアは金礦が発見されて間もない時で、其噂は世界に響いた時であつた。富殖の道は黄金を拾ふを以て第一とした時代であるゆへ、此噂を聞いた世界の健兒は加州へ加州への標語を唱へながら押寄せた。丁度現今石油熱が熾んで、油田油田と押掛けると同じ趣であつた。

世界を跨にかけていたスネールが、加州金礦の消息に血が踊つたのは當然である。そして當時は奴隸賣買の流行した頃ゆへ此金礦に奴隸を運ぶのは、非常の金儲けと考へたであらう。彼等初期の移民が契約労働者として渡米したとあるは、史家の好修辭で、實の處はスネールが奴隸として買入れたものだ。

そこで此「おけい」さんは此一行の何に當るか、一層疑問となつて来る。何分年が十八だから途方に暮れる譯である。然らばおけいは、一行中某者の娘であるとの説も起る。併し當時

渡米した連中は青年であつて、大工の國は十六歳であつたし、柳澤佐吉は十九歳であつた。十八の娘を持つやうな中年者や老年者は居らなかつたやうだ。

そこで一説には、おけいは祭文語りで一行の無聊を慰めるためにスネールが雇入れたもので夫募集の廣告に使つたものだという説がある。此説或は信を措くに足るであらう。其證據はおけいの遺品中、衣類、髪飾りなど可なりに華奢のがあるといふ。若し田舎娘ならばそんな華奢の品物などを持參する筈がない。

以上の結論として、おけいは横濱の貧しき家の娘で、祭文の稽古をし、顔をに愛嬌のある可なり大膽な娘だといふ事になつた。

おけいは明治二年十月(第二回目移民)チャイナ號に乗りて渡米し、翌三年八月に没した。フラサビル丘上榲樹天を掩ひる所彼女の墓碑がある。其刻する文に曰く。

Memory of Okei Japanese Girl Age 19 — 1870

おけいは三四日病んで死んだということである。それは熱病か毒殺かは分からない。自殺ではなかつたことは慥だ。

〔日米〕No. 8048 April 6, 1922)

(二)
Ⅱ女の渡米事情(口)Ⅱ

明治維新當時の日本政府は今から考ふれば大膽であつた。特に婦人渡航に就いては大膽であつた。おけい嬢が明治二年に渡米してより間もなく、明治五年に岩倉具視公が特使として米國に見えられたが、此時は漸くおしめの離れたばかりの少女津田梅子(十三歳)瓜生繁子(十四歳)山川捨松が十七歳であつた。緋の袴を着用に及んだ此娘たちは明治政府の大膽と同じく大膽であつた。

併し此娘たちは相當の家柄に生れ、相當の保護者があつて修學したので、あたかも今日の官費留學生のやうなものである。之れに比べるとおけい嬢はずんと大膽さの分量が多い。

それから明治二十年ウードランドにお鶴さんといふのが居た。これはエッチ・アモアという人の妾となつて渡つたのである。お鶴さんは大阪の女で、アモアが大阪で貿易商をしていた頃の所謂ラシャメンとなり、アモアが熊本縣下益城郡の青年七人を引連れて渡米せる時、同伴したものであつた。

アモアは最初雲州蜜柑を米國に移植する計劃を立て、先づ地をサンタ・クルーズ郡ソケオに相し、山腹を切り開いて移植の業を始めたが、此地方は山林地帯にて開墾頗る困難であつたため、後ウードランドに二十英加の土地を年賦拂ひで買受け十四五人の人を入れて開墾をなし蜜柑を移植しやうとしたが資本金

が續かずして途中で廢止して仕舞ふた。此七人組に後れて明治二十年熊本縣人渡邊利吉がアモアをたよりに渡米した。渡邊は最初ソケオに來りしが、アモアがウードランドに移轉せるを聞き同所に赴いた。

渡邊のウードランドに入りし頃は、アモアの開墾地は破産に瀕していた。此時お鶴さんは渡邊に飯を炊いて馳走をしたが、渡邊に向かつて「此處は最早や望みがないから、あんたはんは桑港へいきはって教會を尋ねて働らんせ」と忠告したそうである。お鶴は此時廿五六であつたが、其時どうなつたか行方が分らぬ。一説には桑港に出て賣春婦になつたといふ。

明治二十年時代には日本人の賣春婦が多く桑港にいた。獨り桑港のみならず、苟も都市と名のつく處には必ず日本人の賣春婦が居て、白人や支那人勞働者に春を商ふたものであつた。大陸横斷鐵道全通後はネバダ、ユトオ邊にまで賣春軍を進めたもので、この當時、桑港の一角にのみ閉居していた青年をして其冒險的遠征に舌を捲かしめたものだ。

明治廿五年に發行された『新國民』なる月刊雜誌に左の短評がある。

「アングロサクソン人の殖民は傳道師先づ未開の土地を拓き野蠻の民を教へて然る後殖民は之れに従ひたりといふ。日本人の殖民は醜業婦先づ淫を未知の國土に賣りて然る後殖民は之れに従ひたりといふ。茲に到りて吾人は疑ふ。日本の宗教家は醜業婦の開きたる國土に、彼女等に導かれつゝ行きたることを。

醜業婦エラキ乎、宗教家エラキ乎。日本の宗教家はこのエラサ加減の勝敗を直ちに決せざる可らず。之を決する方法如何。たゞ彼女等と其勇氣を戦はすにあるのみ。さても信仰と熱誠なき宗教家は果して彼等惡魔の勇氣に勝ち得るや否や」云々。
何時頃から始まつたか賣春婦の元祖は逆も調査が出来ない。想ふに日本人の賣春婦は明治初年頃に既に米國に居たと思はる。而して賣春婦輸入の團體は明治十五年頃に出來、これ等は桑港のセーラボーデングと結託して種々なる計略によつて輸入を謀つたものらしい。

桑港市廓清運動の盛んでない三十年前には賣春婦は某々の區劃に限られて店を張つていた。グラランド・アベニューの大半(其頃はデユボン街と稱す)モートン。セントメリー(今は公園となれり)クインシー。スクラメント。クレイ街のカネー街に近き所などは、大概遊廓區域であつた。

明治廿七年以前までは日本婦人にして同胞を相手とする賣春婦はなかつたが、其後同胞の増加と共に其數が増え、桑港震災前にはパイン街邊に十二軒の妓樓があつた。

『日米』No. 8049 April 7, 1922)

(三)

|| 夜の女性の事 (イ) ||

新植民地と賣春婦とは月と地球の如しとは、余輩の曾て駄洒

落たる所である。此駄洒落が何程の眞理を含むかは讀者の判断に任ずるが、何れの植民地を見ても其初期には賣春婦が伴ひ、以て殺伐の氣風を緩和したものである。吾輩は賣春婦が植民地の開發に無くてはならぬ者である乎。無用の害物である乎は、是亦讀者の判断に任せる。唯だ茲に一考すべきは、世上に無用の者は存立せずといふ原則よりすれば、賣春婦の存立せる時代は必ず其社會に必要なしを察すべく。而して彼等が美衣を纏ひ美食に飽き、時に豪然として市街を闊歩し、時に劇場高席の客として萬人の視線を引くも必らず怪訝の現象とは考へられぬものである。

アメリカに渡りて賣春を業とせる婦人は初めより之を目的として渡米せる者でない。これは日本人でも歐洲人でも黒人でも同様であらう。其後に營業を目的として來航せる者も、先入者の金儲けを見聞して自分等も一儲けしようと考えたからである。そして婦人自身が自發的に此營業を爲さんとせる者は無い。多くは無頼漢の術計にかゝつてこの營業を餘儀なくするやうになつたものらしい。

いはゆる淪落の女が自暴自棄的に賣春婦になつた例は東西古今を通じて其數が多いやうだが、米國に渡る程の婦人で始めから醜業の目的を抱いたものは皆無といふべきである。今より三十餘年前米國に渡つた日本婦人は大概修學の爲めか、乃至は小商賣をしていた夫に連れられて來たもので、日本に在つては相當の家庭に育つたものが多い。然るに此淑女が不知案内の國土

に渡るや否や誘惑の手は四方から繊弱なる彼女に及んで、知らず／＼の間に賣春婦となつた。

尤も賣春婦となるには、各人それ相應の理由がある。或者は夫婦共稼ぎを理想として渡米し、夫に病まれ醫藥の料に窮して身を苦界に沈るのもあり、或者は商賣の資本に窮して短期間身を沈めて賣春婦となつたものもあり、或者は無頼漢の好餌となつて身を陥れたものもある。要するに知らぬ他國の恥はかき捨てられると考へ、一時の方便とのみ考へて此道に落ちたのが過りの元で、泥足を洗ふことは容易の業でなくなつたのである。

されば今より三十餘年前に米國に渡りて醜業せる婦人を洗つて見れば、此中には奥様もあれば令嬢もあつた。それは丁度我々が學僕として下女同様の働きを執たと類似の心理状態である。

異國に來りて生活に苦しむ時は人間は其能力のありたけを盡して生んとする。其生んとするに方つては最も捷路を取る。その捷路を取るに際して、社會的制裁の希薄なる時代には何物をも撰ばない。唯自身が危険でなく容易に生活の資を得らるゝ者を選んで生んとするのである。世の道德は此時代には適用せぬことが多い。

日本人は文明人としては道德の標準が低いやうだ。其實日本人は道德的潛勢力を有つてゐることは他文明國人以上である。これは文明の訓練が古いためか又は男女關係の哲理に開眼せるためか。それは讀者の一考を望むのであるが、兎に角、日本で

は婦人の賣春者を目して商賣人という通語がある。女の商賣は一に賣春に限られた一の證據であらう。それゆへ日本人は女の金儲けは女郎の外に無いと考いていた時代があったのだ。

今日になって見れば、米國のやうな富國に來て、何が不足で女郎などをしたのかと怪しむであらうが、三十年前の昔、日本人は働かうにも働く場所が無かった。それゆへ此當時夫婦者が金を持たずに渡米したが最後、實に慘澹たるもので、宗教凝り固りの人でない限り、賣春の手段に出でねばならぬ事情が多かった。何となれば現時代に夫婦が衣食する程の働口を求むることは星の世界に働口を求むるほど困難であったからである。

金が人間社會に尊ばるゝ時代は賣春婦的心理時代である。金が爲に社會が其人を尊敬する時代には醜業婦を罵る資格の無い時代だ。

〔日米〕No. 8050 April 8, 1922)

(四)

||夜の女性の事 (口) ||

古いことを書いている記録に日本婦人が新開の土地に進入して醜業を營んでいるのを指して「娘子軍」と稱えている。「娘子軍」とは實に振った名前で、神后皇后か尼將軍が引卒し相な一隊にも聞える。實は鐵製の武器を携え、たゞ肉體優柔の婦人連である。

この「娘子軍」が最も早く組織されたのは桑港であるが、鐵道が開けたる後には、ネバダ州リノ市に可なり多く入り込み、また明治十七年頃には北部線からモンタナ州のビュート市に乗り込んだ。ビュートは山中部州の鑛山中最も早く殷盛を來たし處で明治二十四五年頃は三十名位の娘子軍が駐屯していたらしい。

さて日本婦人が此國に渡りて醜業婦となる迄の徑路如何と考ふる時は、茲に種々なる悲劇が演ぜられている。前にもいふた通り、賣春婦は生まれ乍らの賣春婦でない。寧ろ當時の賣春婦は日本に於ける其當時の所謂「新しい女」であった。パイオニア精神に富んだ者であった。泰西文明の先覺者として、未來を指導せんとする才媛であった。併し此パイオニア精神ある才媛にして眉目艷麗なるものは賣春婦としての誘惑を受け、三平二滿の醜婦は反つて其厄難を遁れたやうである。實に美人薄命の諺は千古の名言である。

私は米國に渡つて賣春婦になつた經歷談中の二三の例を左に紹介する。

花子さん(假名)はエジプト産の卷煙草をふかしながら語る。「妾だつて根からの苦勞人ではありませんでした。横濱を船出す頃は随分の希望も抱負も有つて居ました。アメリカに行きたいといふ考は、ちやうど念佛宗の門徒さんが西方極樂淨土に行きたいといふやうな、夢のやうな希望が胸に描かれたのでした。妾の親類に當る人のお友達がアメリカで大層成功して一人

は葡萄酒を百町歩も有ち、一人は薯畑を千町歩も有つて何百人といふ人を使つて居らつしやる。その人の處へ尋ねて行けば、學費も出して下さる、大學へも入れて下さるといふ話で、其お友達の處へ添書を貰つて來たのでした。年は十九でした。」

「船が二十三日目で桑港に着きました。淋しい異國の感じがしました。ドナタか迎ひに來て下さる筈で待つて居りますと、迎ひの群衆の中から年頃三十二三歳の男が「花子さんは此船ですか」との聲が聞えました。「ハイ妾です」と物なつかしく答へました。そして其男は私の紹介された春野友行(假名)といふ人でした。

女が最初に男を看破するには何を標準にするかといへば、服装である。春野友行君は流行のスーツにネクタイ・ピンやら手袋やら、帽子やら、靴やらが流行の者であつた。お花さんは此青年を米國に初見して何等の但書もなく信用して仕舞ふた。

日本婦人は純粹である。其本能に對して絶対に純粹である。男が女を奴隷にしようとか、食ひ物にしようとか、そんな疑ひ深い觀察は失敗した後の事、其初めには純潔無垢で男に對するのが日本婦人の特長である。「四谷で初めて遭ふた時、スイタらしいと思ふたが、イツ惚れるともなく深くなる。」

日本婦人は初めて遭ふた時、直ちに惚れる。私はこの惚れ方を嬉しく感ずると同時に、米國に於ける賣春婦は男に早く惚れたるが爲めに身を苦界に陥れたとも考へられるのである。即ち、お花さんは迎ひに出た男に但書なしに惚れた。悲しむべく

お花さんの戀は無常であつた。此時お花さんを迎へた男は、女郎のピンブであつた(ピンブとは女郎を妻とし、乃至妻を女郎とする男を意味する)。

妾はサクラメント街のある家に導かれ行きました。其家には香水の馥りのする娘たちが二三人居りました。「ターちゃん」だの「ハーちゃん」だの「よんちゃん」など呼ぶ人々で、あまり品のよい顔でありませんでした。妾は不思議に感じました。暫くすると、色々の御馳走が參りました。そしてそれはすべて支那料理でした。「花ちゃん召しあがれ」と年増の女が申しました。何だか氣味がわるいので箸も取りませんでした。其晩は其家の下に寝ました。最前迎ひに來た男は妾の傍を離れず親切に世話してくれました。

〔日米〕No. 8051 April 9, 1922)

(五)

Ⅱ夜の女性の事(ハ)Ⅱ

「春野友行君は、妾の初戀でありました。米國に渡つた日より斷へず親切にしてくれました。妾はこんな人を日本で見出し得ないと感じました。妾の靴下まで洗つてくれました。妾の食事も拵えてくれました。何でも妾のいふ事は聽いてくれました。妾はこんな親切の人に何でもあげたいといふ氣になりました」或日春野さんは下の如きことを妾に話しました。「私の葡萄酒

は不作で私の薯畑は虫が付きました。其損害が二千弗程で再舉を謀るには差當り千弗程入用であるが、其金が無い。どうでしょうね、「ハーちゃん」や「よっちゃん」のやうに働いて下さつて、私の危急を救ふて下さることは出来ませんか」

「ハーちゃん」と「よっちゃん」は支那人相手の女郎であつた。妾は此人達の商賣を見てゾツとした。しかし、世間の人のする程の事が出来ないとは思はれぬ春野さんの急を救ふ爲には「ハーちゃん」の眞似くらいは出来そうに思ふた。妾其の其時代の道徳は自分が女郎になつて自分が恩を受けた男に盡すのが道徳だと信じたのであります。そうでしょう悪くは無でしょう。

お花さんの倫理は徹底している。實際道徳といふものは孤嶋では無用の長物である。若し日本人が此國に渡つて其社會的事情が孤島同様ならば、女郎であらうが、泥棒であらうが勝手次第である。

「全くそうですナ」と僕は答へた。お花さんは快心の微笑を洩らして語りつづけた。「妾の好いた男は賭博も打つ、馬賭けもする墮落したスポーツ・マンでした。ですから時には金に困つたようでした。時々金に困る人は不意に大金を賭けますが、大概金に困つておりました。或時妾に大難題を持ち込みました」

「それから私は女郎になりました。女郎生活は素人の知らないのが花です。嬉しいこともあり、悲しいこともありますが、

畢竟あんな商賣は人間のすることではありません」と花さんは苦笑を洩らした。

人間のする商賣ではないのをドーして人間が商賣にした乎。私はお花さんに突込んで訊いて見た。

「その頃の男は、全く賭博と飲酒でした。妾等もそれを怪しみませんでした。日本人は酒に産まれて賭博に死ぬる動物ですからね」

驚くべき斷案は彼女の唇から迸した。

「女なんて、エラその事を申しますが、大事なものを有つて生まれたんですから、其大事な物のために男に引かざるのです。つまり性の自然が然らしむるので、妾どもが女郎になるのも男の性に率いられたので、それに抗議を申込む程の理由がないのです」

彼女は悟つたような述懐を洩らして微笑した。

「男にだまされたのか、自分でだまされたのか、罪は五分五ですわ。どうせ同情なんといふものは譯からず屋の口實ですからね。クリスチアンの人々が同情々々といふ口の下から、慾のありたけを發揮するなどは、近來の皮肉ですわ。あなたもイイ加減に同情などをおヤメなされ。」

お花さんの口は自由自在に動く。まご／＼すると何程罵倒されるか知れない。私は早速に切りあげたい。しかし其機會を見出しかねた。

お花さんは、暫時、沈黙であつた。そして泣いているやうだ。

今迄の大氣焔家は急に沈黙の人となった。彼女は顔をあげた。そして嘲けるやうに笑った。「あなた、今時の人をどうご覧なさいですか。妾から見れば皆んな女郎ですわ。人情の無い女郎ですわ。妾共は人情にまけて女郎になりましたが、今時の人は人情知らずの女郎ですわ。そして世間の人は世に時めく男女郎を嬉しそうに尊敬しています。ホホホ、馬鹿ですわね。」

〔『日米』No. 8052 April 10, 1922〕

〔六〕
 Ⅱ夜の女性の事 (二)Ⅱ

「妾は天草の農家の娘でありました。明治廿二三年頃、私の島に利口げな男が見えました。其男は長崎邊で製造した海産物を商ひに来て、時々町で面白い話をしました。其面白い話は、外國の話で浦鹽には鮭が澤山いて、子供が舟に遊んでいると、其舟に飛び込むといふことや、南洋の海濱では子供が眞珠や珊瑚をおもちゃにしていることやアメリカでは川邊に金塊が轉がっていることを話しました」

「妾は伯母の家で其男と近づきになりました。男は妾に長崎に遊びに行くことを勧めました。妾の處と長崎とは目と鼻ほどの間で小舟に乗って一時間足らずで行けるので、或る月夜其男と共に舟に乘りました。男は妾を長崎の舟宿に連れて行き、色々御馳走をしてくれました。」

翌日妾は其男と外國船を見物に出掛けました。此船はアメリカ力の「オシアニック」という船で、大きな蒸氣船でありました。妾は始めて乗った大きな船を珍らしく感じまして、デッキを歩いておりしました。すると其男は妾を其船の水夫に紹介しました。水夫は年齢三十七八歳の男で九州の人らしく、至って氣軽な人でありました。「姉さん此船に乗ってアメリカに行きませんか」などと戯談を言つて居りました。

「アメリカに行つて見たいわ、だが誰も知つた人が居ないから困るでしょう」といふと、「なアに、アメリカには日本人が澤山居て、皆んな金持ちですよ。姉さんもアメリカで二三年も辛抱すれば何千圓という金持になれるよ」。お母さんが心配するでしようから」といふと、「何アに後から手紙を出してやれば心配はないさ」

「妾は半分アメリカに行きたいし、半分は心配でいる、とジャントくと鈴を叩くやうな音がして乗客がせわしく歩くやうでしたが、其船は錨を巻いて港外に出て仕舞ひました。最前妾と一緒に來た男は見えなくなつて、水夫が「姉さん船は出たから私があなただをアメリカに連れて行ってあげます。心配は決してありませんよ」

「何んだか夢のやうでした。併し其夢は希望のある夢のやうでした。此船に乗つてアメリカに行けるなら行って見たい、人間の住む國に人間が行くのだからと度胸を据えました。」

船は太平洋に浮かびました。波はだんくと高くなりまし

た。水夫は私を或る一室に入れて寝かしてくれました。「食事を運んで来ますから、あなたは此室から外へ出てはいけませんよ。ひよつと見付かると、海の中へ投げられますよ」

「見附かると、海の中へ投げ込まれます」「は驚きました。成程今から考へますと、女の密航者なんですから容易の事件でなかったのです」

「二十日あまりの航海で、船は桑港に着きました。或夜其水夫は妾に西洋服を着せてくれて船から連れ出しました。何だか眞暗の夜を水夫に手を引かれるままに歩んで行きました」

「何だか名の知らぬ家に着きまして、色々の話を聞かされた友人達にも紹介されました。話が細かになればなる程、世間に當り觸りが出来ますから、モ―此話はお仕舞いにします」云々。

此當時、天草、長崎等には婦人を密輸出する可なり大仕掛けの悪黨があつたものらしく、右の娘は此悪黨に誘拐された一人である。

不義を働く團體は、其金錢の融通の付くに随つて誘惑の手を延ばし、桑港、シアトルにも其聯絡があつたやうだ。明治三十年頃、シアトルには百名、桑港には百五十名程の賣春婦が居つた。是等悪黨を退治しようとしても、其動作が變幻出没で巧妙を極めたものだから、容易に押へ付られぬのであつた。

併し其巨頭と目ざる者は官憲の手で送還されたものもあつた。又支那人街の醜窟にいる者は時々檢舉されたこともあつた。

時代の進むに従つて、桑港市は薄紙を剥ぐやうに醜窟を驅り出し、明治三十四五年から風俗矯正の運動は盛んになり、明治三十九年震災を大段落として年と共に廓清の事業が功を奏して今日に及んだ。

『日米』No. 8053 April 11, 1922)

(七)

|| 米國に於る邦人行商 ||

明治十八九年頃日本から龜の兒のおもぢやを携へて渡米した青年があつた。それは石川縣人加藤誠六である。誠六は龜の兒のおもぢやを携へて渡米し、巨利を博さうとしたのであつたが思ふたほど大金は儲からなかつた。併し彼れは廿二年一度歸國して細君同伴再渡米して明治三十年村田耕と共同で國産社を創立した。

日本では加藤が龜の兒を持參した話が傳はつて、大金儲けをしたやうに羨んだ者が澤山あつた。そこでおもぢやの輸出は誰かれと無く有利の物と考へられた。或者は風車を輸出した。或者は達磨を輸出した。何れも一時の珍に過ぎずして長續しなかつた。それは當然の事で元來珍しい物に永續するものは無い譯だ。

東部では紐育邊に森村市左衛門が明治十八九年頃行商を始めた。彼れは羽織の紐を買つて歩いたといふことである。それか

ら絹ハンケチを賣り、繪草紙なども賣った。

明治廿六年にシカゴに博覽會があつて、此會場内に口附シガレットを賣り始めたものがあつた。それは村井吉兵衛であつた。

此頃桑港近邊でも日本の錦繪や絹ハンカチフを賣つた青年學生があつた。シカゴ博覽會の年の前年(明治廿五年)は志賀重昂の書生であつた野口米次郎が、重昂氏の後援で渡米し彼れは芳國、歌麿の板畫を賣り歩いた。併し商賣にならないので新聞生活に轉じ、其後英文の詩を書いて一時文名を馳せた。

鹽田竹三(今のグランド街の鹽田商店主)は明治二十八年頃から繪畫骨董の類を携えて行商した。彼れは説明の妙を得ていた男で、彼れの手にある者は如何なるイカサマ物でも歷々たる時代物と變じたといふことだ。此道の天才と稱すべきであらう。

セントルイス博覽會の時、和歌山縣人崎山信二は會場内でアイスクリームを商ふていたが相當の利を占め、其後桑港に衣類店を開き次で櫻府、スタクトン支店を出した。

明治廿七年頃羅府の未だ幼稚時代にリバサイドに竹細工店を出した青年がいる。森文五郎、井上昌、福島雷次郎などであつたが、之れは行商を兼ねたる竹細工店で、其後日本雜貨店に變じ其後大に發展して、羅府に商店を設けた。

明治四十年頃から十年程の間に日本からおもちゃを輸入して米國各地に賣り歩く一團體があつた。此一團は可なり廣く米國

各地に行商をしたやうだが、桑港、シアトルに日本人貿易商が殖え、其輸入を盛んにするやうになつた爲め引合はなくなつて廢絶した。

日本人が各地農園に發展すると同時に、農園勞働者當込みで賣藥、化粧品、寶石、時計などを行商する者が殖えた。併しこれも日本人社會が整頓シタウンに諸種の設置が完成するやうになつてから衰微した。唯今では蓄音機行商などが相當に活動するのみである。

行商の事を書く序に私が馬の藥を商なふた事を書く。それは明治四十五年頃で、此以前から馬の藥を賣つて歩いた獸醫學生があつたが、私は某獸醫の獻策を納れて馬匹七大奇藥の發賣を始めた。「其徳禽獸に及ぶ」といつたやうな振出しで七色の馬の適藥を調査して各地日本人の商店に卸付けた。

處が此藥は利くことは利くけれども、原料に澤山の金が懸る。藥九層倍は愚かの事、何程の利も得られない。それに人間の心理は馬の病氣などに親切で無い。自分か自分の妻子の爲めには大金を惜まず加療するけれども、馬の病氣となると、第一に計算が先き立つ「其徳禽獸に及ばず」であつた。

特に老馬とか安馬とかになるとミジメなもので、寧ろ死んだ方が便利だといふ考が起るので、折角の七大奇藥は賣行きが無い。數千弗の資本をかけて製藥したのが、其百分の一も賣れない。卸した先きの商店に對して氣の毒であつた。さりとて人道を飛び越して獸道を高唱する譯にも行かず、其まゝ消滅したこ

とがある。

『日米』No. 8054 April 12, 1922)

(八)

|| 慶長前後の日米 ||

今より三百五十年程以前、日本海岸は二方面から外國船の見舞を受けた。其一は和蘭船であり、其二は露國船である。和蘭船は専ら平和的通商を以て日本人と親善の交誼を保つていたが、露國船は侵略的疑惑を以て目されていた。和蘭人は世界的行商であり、露國人は世界的海賊であつた。

和蘭人の來航と露西亞人の來航とは犬と猿、イヤ猿と狼の相違であつた。歴史上に現はれたる斷片に徴するも、其事蹟が歴々として現はれている。たとへば、

天正十五年(西曆一五八四)秀吉公、島津征伐の時、博多に於て茶讌を開き貿易商を召見し海外の事情を聞きたるは和蘭人と會見して親善の關係を保つたものである。

此時秀吉は日本武器の西洋に劣れるを知り、銃砲の註文を内々小西行長に命じたといふ傳説もある。

然るに北方露國の天地を見ると、幸か不幸か露國人は過去二百年前から日本人の威嚇者となつて來た。左の事蹟に徴するも露西亞人が日本に疑はれたるも道理である。露國は

(一) 正徳五年(西曆一七一五)カムシーツカを征服し、砦を築

き兵を置いた。

(二) 明和初年(西曆一七六七)より奥蝦夷(今の樺太)を占領し松前藩の貢物たる鹿皮の數、逐年減少す。

(三) 明和八年(一七七〇)ポリシア國人某の献言によれば、露國南侵の勢、日に加はる日本宜しく之を防遏すべしとする。

(四) 安永三年(一七七四)露艦は筑前長門の海面に現はれ、北行して青森海峡を通過し、千島に南下したり。

(五) 天明五年(一七八五)露人ドロヘー擇捉島に七年館滞留漁業をなす。寛政四年(一七九二)最上徳内をして北地を巡視せしめ北警の首唱家林子平を幽閉し、翌年老中松平定信豆總の沿岸を巡視し砲臺の位置を定む。

(六) 文化三年(一八〇六)露使レザーノフの随行員フォーストーフ一艦を率いて樺太のタシンコタンを侵し數人を虜にして去る。

(七) 翌年露艦二隻擇捉島の舍那を砲撃したり。間宮林藏、戸田又太夫が防戦すべしと勸告すれども肯かずして、内保に退去すべきを令す。翌年幕府は仙臺會津二藩に命じて出兵せしめ露艦打拂ひを令す。

右の如く露國が我北境を窺ふために、奥州以北の日本人は頗る海外的反抗心が旺盛となつた。

文化年代に仙臺に志士が産れた、その名を金忠助といふ。金忠助といふ名前は理想的の名前で本名でないであらう。即ち金

剛の忠臣といふ意味を名義したものと考へられる。此金忠助の作つた詩として後生に傳へらるゝものに

海城寒析月生潮。波際連櫓影動搖。自是二千三百里。北辰星下建銅標。

此詩を吟味するときは、如何に當時露國の船が日本近海に出没して志氣を刺撃したかを想像せしむる。逆に露國の軍艦を壓伏して二千三百里の北地に雄骨を記念としたる銅標を建てやうとした英魂氣魄が髣髴として見ゆる。

一説によれば、金忠助は文化四年十九歳で露國に入り其後カリホルニア國に渡り、此國の王と爲れりといふ。若し此説にして眞を措くに足らば、今より百年、其國の王様となつた譯である。

併し百年前に日本人がカリホルニア國に渡つて王様になつたといふことは、今日には何の役にも立たぬ。今日は今日である。今日のカリホルニアは白人のカリホルニアで、日本人の爪も立たぬ程の國になつた。なまじかつ百年前乃至三百年乃至千年前に日本人が此國に時めいたといふ歴史が無い方が我々には氣樂である。假りに我々祖先が百年千年以前にカリホルニアの王様であつたにした處が、今日我々は王様の子孫として何等の特權をも有ち得ぬのである。下手にまごつけば、それが爲め反つて排斥の種を大きくするに過ぎぬ。

(『日米』No. 8055 April 13, 1922)

(九)
明治卅年の邦人廣告

明治三十九年(千九百六年)四月十八日に桑港に地震あり、次いで大火災となつて、これ以前の記録は丸焼になつた。此記録中、私の集めていたのは、桑港邦字新聞の最古なるものとへば

十九世紀。桑港新聞。

金門日報。新世界。

雜誌、遠征。同 愛嬌。

同 東洋。同 喜の音。

同 腮はづ誌。同 太平洋。

右の外、文倉某が日本人墓地墓標を調査せるもの一冊ありき。右は黒澤格三郎の處に保管されておつたが、全部烏有に歸した。唯だ二冊焼け残つたのがある。それは『腮はづ誌』明治三十及三十一年出版と『新國民』明治三十五年、三十六年とである。

この兩雜誌は私が發行したもの故其頃の廣告料も記憶している。先づザツと左の如きものであつた。

◆富士合資會社 月三回

半ページ廣告料 一弗

◆日本商會

四分の一同上 五十仙

◆ドクターは

曾我菊治郎。 黒澤格二郎。

妻木政太郎。 北野豊治郎。

松丸調劑處。

右すべて一ヶ月三回にて廿五仙也。

◇齒科醫は

大學生大久保。 笠井 甫。

隈元 清。 松田正二。

朝比奈藤太郎。 三好保之助。

右同斷。

◇宇藤運送處。 水藤貸本屋。

堂本植木店。 中嶋時計店。

國產社。 松波商店。

◇不動商店。 井手商會。

◇旭株式會社。 金門質店。

◇サンマフィルド衣服店。

◇フィリエム寫眞館。

◇ホーラー寫眞館。

◇瀬川床。 櫻湯。

右の内二三軒を除くの外、すべて一ヶ月三回にて廿五仙。

◇料理屋にては

千代志。 小川亭。

大黒屋。 やぶそば。

右は一ヶ月五十仙。

◇丸一旅館。 水原美術修繕。

右も二十五仙宛。

△此頃商店の最大なるものは第五街の富士合資會社で、最小なるものが國產社であった。

△料理屋では小川亭は「日本風の新座敷」という廣告が見えていたが、其實甚だムサクロシキもので田舎芝居の茶寮よりも變なるものであった。

△千代志の廣告にこんなのが出て居る。

「室内は清潔にして總て電燈を點し、集會に適する大廣間及

び會談に便なる小座敷あり」

△又大黒屋の廣告に、

「お江戸の眞中で鍊えあげた料理番の腕前は米。土。を。震。動。す。

名代御すし。清酒正宗。春駒は諸君の御便利を計り升。賣。仕

候。白酒もあり」

△此頃の料理屋で婦人の給仕は無かった。千代志には小林といふ御客にケン突くを喰はす有名な給仕人が居り、其他何れも男のみであった。明治三十年に小川女將が渡米したので、料理屋で始めて三味線の音が聞えた。

△此頃の醫師の診察料は一回一弗で、齒科醫のクラオン一齒が二弗五十仙位であったと覺ゆる。

△廣告に電話の記されている者は一つもない。勿論ドクターの中には電話のあったのは黒澤君だけで、商店中電話のあったのは富士、井手だけであった。料理屋にも他の商店にも電話は無

かった。それは驚くに及ばない。新聞社でも日米、新世界とも電話が掛けて無かったのだから。

△料理屋で此頃日本酒一本が十五仙であった。升賣の最も安かった時は一ギャロンの正宗が金七十五仙であった。

△刺身が一人前十仙。煮肴同断。吸物が五仙。飯が五仙。すし一人前十仙。うばはかけととりが五仙。親子、天麩羅の類が十仙。ビアが大瓶一本十五仙、二本廿五仙であった。

△宴會の會費が普通五十仙で、肴三品とビアが大瓶一本が附いていた。私の知って居る宴會で(確か社同人の送別會だと思ふ)一番安直のは廿五仙の會費で煮肴も吸物も刺身も出でビア一本附いたことを覚えている。其頃の人は日本料理を食べに行くに廿五仙以上費したものは多く無かった。

〔『日米』No. 8056 April 14, 1922〕

(十)

Ⅱ 出放題の史論Ⅱ

我々は歴史の尊重すべきを知ると同時に、出放題の歴史談を排斥しなければならぬ。處が多く、歴史は既往の事蹟を書くので現代人が知っていないことが多量である。ソコで或者は歴史を取扱ふに方って頗る亂暴である。彼等中には書くのを職業としている故、事實の相違などには頓着せぬらしい。寧ろ好んで虚偽を誇張して傳える。

石川半山氏が昨年十一月十一日『日本及日本人』の特別號に掲載してある「米人の如く粗野ならず」といふ一文中には随分無鐵砲のことが書かれてある。其一節に曰く。

「スタンフォードの如きは、支那人を使役して金礦を掘り出し其賃金を自分へ預けさせ、相當の額に達した時、其大部分を虐殺して其金を奪ふて、富豪となつた者だ。コンナ惡黨は日本人の中から出なかつたのである。」

スタンフォードは加州金礦發見時代、大陸横斷鐵道を企てた大事業家で、時の大統領リンカーンと交を訂し、横斷鐵道の保護金を中央議會に要求し、一哩に付六萬弗を得た程の腕利である。支那人の賃金を自分で預り相當の額に達した時、支那人を虐殺したなどいふ事實は何に據つて得たか。右様の事を考へるのは半山氏位の者で、自分の氣を他人に振舞ふのであらう。

半山氏は戦争が始まつたといふので、日本刀を縁もゆかりもない外國元首に献上するといふて、歐米に漫遊する程の人でなければ考へられぬ事だ。

彼は歐洲大戰の終結する頃に白鞘の日本刀を幾口か持參してそれを歐米諸國の元首に献上するといふて居た。何の爲に兇器を元首に献上するのか、其理由が分らぬ。強いて考へればキツト戦争をやれといふ暗示だとも取れる。平和を好愛すべき者の目から見れば阿房千萬な贈物である。兎に角彼れは、そんなことを考へる人だけ暴斷を平氣でする。

私の知る處、且信ずる處では、スタンフォードは加州金礦時

代より約四十年間、加州の開発に盡したる偉大な事業家であった。彼れは加州知事となり政治上に顕著の功を現はしたのみでなく事業稍成功するや其全財産を擲つてスタンフォード大學を起しアングロサクソン民族の偉大を現示したる加州の第一人者である。

支那人の目腐金などを踏付けて富を成したなど考ふるのは賄賂を取るに長じた滿鐵邊の日本人や、それをユスつて新聞を書いている與太記者の考へる事である。

スタンフォードは千八百七十年頃加州金礦發見當時東部より移住し來り（彼れは元法律を學び代言人であつた）プラサ金礦地に雜貨店を開業し、後サクラメント市に出で大陸鐵道創立の主唱者となり、ハンチントン、クラッカー等と共にセントラル・パシフィック鐵道會社を起し、支那人を使役して其事業を大成し、千八百八十五年パロアルトに地を相し、スタンフォード大學を創立したのであつた。

彼れが大學を創始するや英國に渡り、ハーバード・スペンサーを總長として來任を乞ふた。スペンサーは老年の故を以て固辭し、自己の最も尊敬せる壯年學者ジョルダンを推薦して同大學に總長たらしめたといふ逸話がある。以てスタンフォードの人格を視ふべきである。

支那人が大陸鐵道工事に就働せる頃山中部、太平洋沿岸とも殆んど無人郷であつた。夜間狼軍に襲はれたこともあつた。金山に押掛けた無頼の徒も多かつたので、支那人が生命財産の危

害を受けたことは一再に止らなかつた。又工事中負傷したものと熱病に倒れた者も多かつた。けれども此時代の事情から考へれば、それはスタンフォードの罪ではない。

スタンフォードは事業の成功が顯著であり、其速度が速かつたのと、政界に乗り出した爲多少の非難を反對黨から浴びた。それは公人として當然に受くべき非難で止を得ない。支那人の臍くり金などを覗つた男と男の質が違ふている。私は須氏に怨恨がない、唯だ先輩の爲に公平なる史實を傳へんとするのである。

〔日米〕No. 8057 April 15, 1922)

(十二)

Ⅱ各地古物禮拜記Ⅱ

在米日本人の古物は何といふても桑港が本家である。赤羽根忠右衛門が明治三年に桑港に渡り、同年四年には田中鶴吉が渡り、明治二年にボストンに長澤鼎が渡つた。これを明治十年前の三柱の神とする。田中は東京人、長澤は薩州人、赤羽は信州人である。

桑港に御三家といふのがあつた。それは明治二十七八年頃の事で、セーラ・ボーデングの三家を指したものだ。第一が赤羽忠右衛門、第二が高橋七五郎、第三が西本長太郎、これに鈴木政吉一家を添へて四天王といふたものだ。今では四天王の家は

何れも桑港に見えぬ。古跡もない。

其後世が變つて、又候御三家が出来た。それは明治三十年から四十年代のことで、第一正金銀行支店、第二三井物産支店、第三東洋漁船出張所であった。これは現に桑港に鎮座まじくして社運益々御長久となる。

遙かに北方の天を眺めると、新井達彌、山岡音高、古屋政次郎はシアトルの三家であった。新井は先年歸朝し、柴田、平出が其候補として御三家の一を繼ぐべき順序だが、既に物故せられた。

ポートランドでは伴新三郎が國常立命であったが、今は米國に無い人で、下村眞鋤が其繼承者である。

更らに北方の天を眺めると、ビーシー州コロンビアにはずんと古いがある。ビクトリアに美術雜貨商を営んでいた永野萬藏は明治十年の渡米であると承はる。

東方の天を見ると、ユタ州ソートレーキには田中忠七が二十三年に來りて、鐵道人夫請負を始め、伊集院兼政が伯樂（今の獸醫）の始りてオクデンに罷在り。西山元がロックスプリング炭山に始めて日本人を入れたのが明治三十一年で、橋本大五郎がリオグラド鐵道に人夫を入れたのが同時代だから、随分古い神々である。

少し後れて明治三十七年頃にユタ州の農園に活動を始めたのが、ガーランドの柴田嘉治、アイダホの寺澤六之助、秋元正規。これはユタ、アイダホ兩州に於ける農園三柱の神様。

さて又南方の空を拜むと、南加地方では明治二十五年から三十年までに出現した神々は、森文五郎、井上昌、稻澤謙一、高木梅軒、湯淺銀之助、菊地武治で、リバサイドには金子眞成という大古神があった。

沿岸方面を眺めると、サンタクルーズには丹正之が梵刹を構へて丹山寺を號し帝釋天を相手に拈花微笑しているし、サリナスでは西博夫が仁王の如き御姿で鎮座していらる。

沿岸を上つて順禮すると、ガタロープには森銀之助といふ古神があり。モントリーには曾て野田音三郎といふ漁業の神があった。ずんと上つて行くと、明治三十年頃にサンタモニカに帆前船で漁業をした神々があつて、其後サンピドロの漁業の殷盛の初めをなし、鮪罐詰の開山遠山則善が生れた。

サクラメント方面では山田義雄、竹崎犀吉、中畑六郎、今城長緒、渡邊四郎、樋口門之助、野田音三郎の神々が農園ボスとして明治二十二年頃から萬人の歸依を集めた。

女神の方では、彦天の婆さん、金鐵の婆さん、お竹婆さんなどいふ三婆さんが桑港にあり、魔神の方に風船お爲、三ヶ月お増、南京お桃が三役であった。男の魔神に青森、黒森、赤森といふのがあり。之れに横田、岩田といふ二魔を入れて、五魔といふた。胡摩の灰と間違ふてはならぬ。

更らに北方の天を見ると、池田有親が加奈陀の鑛山を發見し池田灣と名づくる港灣がある。

ロッキーマン山以東で、外園直一が開山で、テキサスでは西原清

東が先陣。

帝國平原では齋藤徳三郎、田和亥之太が先陣で、次に阿部市松、天城太郎、飯塚郁郎等が中陣である。

忘れてはならない。南加漁業の先陣は佐野初次、豊田デツキが帆前船で鮪を釣り始めたのだ。

此他澤山の神々があれども、新聞の紙面君から御法度を申付けられたので、又の日に譲る。歸命頂禮、謹んで申す。

「よきも神、あしきも神とたたへてん、我ゆく道のやすくもあるかな」

(『日米』No. 8058 April 16, 1922)

(十二)

Ⅱ岩倉開拓使と女學生Ⅱ

明治四年十二月東京を發し、翌五年一月十五日桑港に着したる岩倉大使——日本では此一行を開拓使といふ——は、五名の少女を伴はれた。此少女たちを追懐するときは日本婦人の勇氣と進取とに驚かざるを得ない。

世間傳ふる處によれば、此一行中津田梅子が最少で十三四歳といっているが實は然らず、即ち五女史の年齢は

津田梅子 八歳
永井しげ子 十歳
山川 捨松 十二歳

吉益りよ子 十五歳

上田てい子 十五歳

といふのが事實で、それも日本の數へ歳であるから米國流に勘定すれば一づつ減るわけで、津田梅子は實に七歳の少女で有た。

考へて見ると實に大膽なものであった。其両親が歴きと揃つて而かも名家の娘たちである。越後獅子や、サーカス連の兒なら格別、何足なき名家の娘たちが海外萬里の旅を自から進んで希望したのだから驚く。それに両親、特に母親がおしめの離れたばかりの娘を海外萬里に修學のために手離すといふのが却々尋常のことで出来る者でない。

處が調べて見ると、之には重大な動機が含まれているのである。

過去數千年間、比類を見ざる英照皇太后は、明治天皇が御即位の初めに誓はせられた五條の御誓文中「廣く知識を世界に求め万機公論に決すべし」と宣はせられたる御勅諭を體得せられ、日本婦人も亦智識を世界に求むべしとの御令旨が岩倉公御出發の間際に發せられたのであった。

此御令旨は、今より考ふれば日本婦人解放の第一聲であつたと拜察し奉る。

即ち皇后陛下の御令旨は、輦轂の下にありし女性を感奮せしめ、次いで妙齡の少女を感激せしめたのであった。

そこで愈々五少女の米國留學の志願が出て、宮中にも御詮衡があつた後、五少女は皇后陛下の御前へ出で拜謁を給つた。

此時優握なる御令旨が下った。

「其方共女子にして洋行の志まここに神妙なり、追ては女學取立ての義も候へば日夜勉強、歸朝の上は天下の模範と成るべきやう心掛くべし」

右の御令旨が下ると共に洋行の娘たちに陛下より緋縮緬一疋づみ下賜せられ、其行を盛んにせられた。

さて此五少女の監督者としては時の駐日米國公使デロング夫人であった。

米國に着いてから五少女はデロング夫人に伴はれて東行し先づ華盛頓府に着き、一軒の家を借りて同居し、家庭教師を附けられて教育を始められた。

處が若い娘たちのこととて、何れもお喋舌である。日本語でばかり話して英語の方が身に入らない。家庭教師も手古摺って仕舞ふた。

そこで監督デロング夫人は、此娘たちをそれ／＼白人の家庭に分けて教育することにし、先づ山川捨松(十二)はアリス・ベーコンといふ家に養はれ、津田梅子(八つ)は其當時日本公使館顧問たりしチャールズ・ランメンといふ家に育てられることになり、其他の娘たちもそれ／＼白人の家庭に預けられた。

梅子の育てられたランメン夫人は兒のない人で、梅子を我兒の如く愛して育てたといふことである。ランメンは其當時存命なりし世界的詩人ロングフェロの詩友で、詩作と繪畫の造詣の深い人であった。

同行中の吉益りよ子(十五) 上田てい子(十五) は學業途中で歸朝し、山川捨松と永井しげ子は後バスター大學を卒業し、津田梅子は師範學校を卒業し、しげ子二十、捨松二十二、梅子十八で歸朝し、しげ子、梅子は華族女學校の教師となった。梅子は其後間もなく再渡米してバスター大學に入りて卒業した。捨松は後大山大將に嫁し、しげ子は瓜生大將に嫁した。梅子は獨身生活を續けて津田英學塾を開いたのである。

前號所載の三女史の年齢は誤りであるから茲に訂正す。

〔日米〕No.8059 April 17, 1922)

(十三)

|| 日本人會の始め ||

明治廿四年は記憶すべき年であった。此年六月桑港には加州日本人を連結すべき大日本人會なるものが創立せられた。これが抑も日本人會と稱する同胞團體の嚆矢である。

是より先き桑港には澤山の會があった。

福音會。美以教會。愛國同盟。

遠征社。同舟會。重人會(十人會)。ラーキン青年會

等で、之等の團體は三人寄れば文殊の智恵といふ格言其まゝに重任會の如きは十人を以て組織したる程にて、互いに異を樹て黨を作つて、他を惡罵したものであった。而して是等少數者を以て異論曲説を戦はすことの非なるを覺りかけたのが愛國同盟

一派であった。

そこで珍田領事が赴任し、同君は圓満の人で、周旋好きの人であったから、愛國同盟の袖領菅原傳、大和正夫、日向角太郎などが同君を説き茲に大日本人會という大風呂敷を製造して、各會の上に冠せた。其會長は珍田捨巳君であった。

此會が出来るや否や、サクラメントに居留せる日本人青年は同地にも日本人會成立の必要を感じた。しかしサクラメント地方だけで、獨立するのは心細いやうな氣がしたと見えて、其會名を「大日本人會サクラメント部會」と稱した。始め規約起草者は「サクラメント部」とのみ書いたが、草案委員會では、部の下に會の字を加へないでは、習慣上不都合である。たとへば、會員、會費、會報、入會、退會などの場に部では言葉を成さなといふ議論があった。

そこで、部會といふことに納まり、創立委員としては樋口門之助。渡邊四郎。村山信四郎。林三郎。森音三郎。水野重壽。中畑六郎。亘理篤治。井上平三郎。安倍市松。近藤安馬。

等で、すべて勇氣凜々たる青年書生であった。

そこで、サクラメントから桑港大日本人會に交渉委員が派遣されたが、桑港側ではサクラメント日本人部會を相手にしない。「中央と地方では其実情が異なるから、諸君は別に獨立して一會を組織すると宜しい」といふ挨拶であった。此返事は當を得たものであるが、其當時の事情からすれば、全く馬鹿にされたの

であった。

そこで委員はシオレて歸つて來た。とても自分等だけでは會の維持が出来ないと思案投首の體であったそうだ。然るに發起人中に元氣のよいのが澤山あつて、我々だけでやらうといふ説が起り、遂にサクラメント日本人會といふのが出來た。これが明治二十四年十一月である。

處が實際、日本人會を起して見ると、桑港よりはサクラメントの方が仕事が澤山ある。此當時日本人公會の仕事は移民労働關係の仕事で、新來の移民に働口を與へるといふことが第一であったのだから、桑港の如き家内の労働口のある所は、教會、福音會などの周旋部に依頼すれば用が辨じたが、田舎ではそんな機關が無いから、一に日本人會に働口を求めて來たのであった。

それゆへ桑港の大日本人會は看板をぶら下げて見たが、實際の仕事は何にもしない。移民の上陸には教會幹事、福音會幹事が世話をする。イザといふ時には珍田領事が出馬するといふ風で、大日本人會は有名無實の會合に過ぎなかつた。

それは丁度、今日の在米日本人會と地方日本人會との如きものであった。

今日では在米日本人會（舊の大日本人會の子孫）は領事館から證明料を頂戴しているゆへ、會の生活には差支なく、有給の書記を澤山置くが、昔はすべて會員からの醸出で會を維持したので、有名無實の會に金などを出す者は實に少數で、すべて

役員は名譽職であつた。幹事などは無い。

大日本人會のする事業は、一年一回十一月三日に天長節を主唱する事と、七月四日獨立祭に参加する爲めに寄附金を募集するに止つた。此當時大日本人會を「お祭り會」と綽名したのも當然であつた。丁度現今の在米日本人會を「無能會」或は「無責任會」といふに同じ趣であつた。

〔日米〕No. 8060 April 18, 1922)

(十四)

|| 日本人會の工夫請負 ||

桑港大日本人會が、有名無實で、時の書記たる日向角太郎(後に輝武)が金門日報の記者をしたり、菅原、松岡などが田舎の勞働口を取たりして糊口していた時、サクラメント日本人會は地理上の必要から色々の仕事を始めた。

同年夏、サクラメント日本人會はホイットランドのドクターのハップス園に人夫を供給する仕事を請ひ、同秋チコーのジョンクラウチの伐木仕事を請負ふた。

此年、サクラメントに在住する井上平三郎、安倍市松(屠龍)、巨理篤治、近藤安馬等は同じくホイットランドのホース・プラザのハップス園を引受け、人夫約七十名程を入れた。すべて桑港邊から夏期休暇を利用して田舎に飛び出した青年で、少數の農民も交つていたが、此園場で少しの間違から大事件が発生した。

此一行中に皆方某なる者があつて、ハップス摘採の際、不慣の事とて、葉や莖を摘込んだ。或は慾のためかも知れないが、此摘採の粗惡を白人ホームマンが再三注意したけれども、皆方は平氣で濟まし、其注意を用いなかつた。そこでホームマンは怒つて皆方を蹴飛ばした。皆方も負けぬ氣になりてホームマンと争ふたが、之れを見たる近藤安馬は嚇となりてホームマンに打て掛りホームマンは拳骨で来る、近藤は柔術の手で格闘したが、近藤は強力で腕利であつたから、ホームマンは散々に打擲された。就働中の日本人は走せ集つて大騒ぎとなつた。之を見た白人馬使勞働者の一人は裸馬に鞭ちタウンに駆け行き應援を求めた。

根はツマラス事であつたけれども、日本人を使つた經驗のない白人等は此事件を重大視した。タウンの白人は其急報に接して手にライフルを提げ、數十人の連中は馬車に駕してハップス園へと進撃した。「ヂャップ・マストゴー」の叫びがタウンの應援隊から叫ばれ、七十餘名の日本人はすべてタウンに追拂はれ、地方警察官は日本人のすべてはタウン以外に立ちのきを命ぜられた。

一行の連中は、夢見る心地してサクラメント行の氣車に乗せられて放逐されて仕舞ふた。

次でサクラメント日本人會が請負ふた隣園ドクターの日本人も立退を命ぜられて、其日暮方に散亂して仕舞ふた。

そこで此七十名と隣園の三十名程の日本青年はサクラメントに集つたが、其頃日本人下宿屋といふのは、吉見外一軒位いで

多敷を宿泊せしむるに足らないので、河邊の明地に野宿したのも澤山あった。

此年六月、中畑六郎、鍋島某はフレスノに出發した。そこで同地に労働口を求めたので、ハップス園から放逐された日本人は多くフレスノに向つて進發した。フレスノ地方に日本人の多く入りたるは此年を以て始めとする。

當時サクラメント日本人會の連中は、此頃ボスと稱して各地労働口に人夫を供給し、手数料を取る者の中に横暴不正の者ありとし、之れを矯正して労働者の利益を保護せんとしたものであった。當時のボス中には一日日給一弗二十五仙で、人夫供給を請負ひ、一日一弗位で労働者を働かせた例もある。是等を制裁しようとして、日本人會が起つたのだから日本人會は働口の請負をもせねばならなかつた。

處がボスは經驗があつたが日本人會の連中は經驗が無かつた。結局労働口は取つても會の費用を辨することも出来ない程の苦境に陥つて、日本人會は二年ならずして消滅して仕舞ふた。當時日本人會の會員と稱する者も同一の地に一年留ることは不可能であつた。今日はナトマに働き、明日はアラメダに去りフレスノに行くといふ風で、多くの人は夏場所だけの働きに押し掛けるのだから、十人にも足らぬ人だけが會の常連たるに止り、會費を以て會を維持することなどは到底望むべからざるものであつた。今日の日本人會の會員は定住者ゆへ、おツキ合にでも會費を出す。昔と比べて會は維持し易いわけだ。

『日米』No. 8061 April 19, 1922)

(十五)

Ⅱ 高濱萬次郎が事Ⅱ

安政元年一月十日(西歴一千八百五十四年) 日本南海の海は平穩であつた。天寒く、海面には六花のちらつくのを見た。翌日藏開きの食膳に上すため、土佐幡多郡の漁夫は小さき帆船前船を艤して海洋に出漁した。同船中に十四歳の青年萬次郎といふのが乗つていた。

鰯や鰹がしきりに釣れる。鹿逐う獵師が山を見ざる如く、魚釣る漁夫は空を見なかつた。小舟は潮流に乗つて知らずぐの間、遠く海洋に出た。同舟の一人仙助といふのが此日甚だ不漁であつた。周圍の連中が大漁にも拘らず、彼れは龍神に見捨てられたかの様に釣れなかつた。

仙助は情氣さに遙かに霧島山を眺めた。驚くべし濛々たる烟は急轉直下して、天地冥晦を呈した。黒雲山角を壓して、山雨將さに到らんとするの光景であつた。「しけだぞ」と一聲高く叫んだ。

仙助の警告は既に遅かつた。同舟の運命は既に決していたのであつた。忽ちにして風すさまじく起り、怒濤山の如く騰り、漁舟は木の葉の如く翻弄せられた。「取り舵ー取り舵ー」一同は高く叫びながら舟を西岸に進めんと焦つた。猛烈なる一波は、

舟頭の舵を折った。帆檣は左右にゆれて海面を打ち、舟將に覆らんとす。

「柱を切れ々々々」と叫んだ。万次郎は帆檣を根元から切斷した。震動雷電、雪交りなる暴風。目も口も開き得ず。同舟の者は唯だ西方を望んで、「南無金比羅大権現」を唱ふるのみであった。

此大暴風の爲めに二人は檣を誤りて海中に落ち、三人は週數間漂流して遂にサンドイッチ島に漂着した。彼等の漂着したるは無人嶋であった。

サンドイッチ島は熱帯である。年中椰子、バナナ等が實のつていた。餓えたるものは食を撰まずとかや。三人は思ひ／＼に其天産の果物を採り食ふた。

此時米國の捕鯨船はメキシコ西岸より鯨群を逐ふて、サンドイッチ島附近に通行した。驚くべし是迄無人島と思ひたりし孤島の海濱に煙りが見える。望遠鏡を取り出して見ると、半裸體の人類が海濱に貝を漁っているのである。

捕鯨船長は船を岸に近けると嶋内の人類が両手を舉げて歓迎する風だ。いよく船を着けて見ると、日本人の漂流者であったことが分り、兩方とも言語不通ゆえ手真似でそれと知らせ、三人を捕鯨船に乗せた。万次郎は十四歳の青年で物利いた男ゆえ船長の氣に入りマサチュセッツ州ニューベットフォード市の自宅に連れ行かれた。他の二人の行方は其後審かでない。

万次郎は船長の家に養はれ小學校に入り次でハイスクールを

卒業した。彼れの歸朝は何年なりしやを知らず。兎に角万次郎は幕末政府に奉職し、姓を故郷の高ノ濱に取り、高濱万次郎と名乗った。萬延元年（千八百六十年）新見豊前守條約批准交換國使として渡米の際は、咸臨丸に搭乘し通譯をしたと傳へられている。

或る記録に高濱万次郎はペルリ提督日本訪問の節通譯をしたとあれど、高濱の漂流したのは安政元年（千八百五十四年）でペルリ提督日本訪問は嘉永六年（千八百五十二年）なれば万次郎が未だ漂流せざる以前であるから此時万次郎が通譯などする譯が無い。

万次郎は高知縣幡多郡清松村字高ノ濱といふ漁村に生れ、日本教育は少しも受けて居らなかった。即ち彼れが漂流時代には日本では下民には苗字が無かった。若し彼れが村の名主とか庄屋とかの家を生れていれば、姓はあつたらうが、そうでない證據に彼れは歸朝後幕府に奉職するに方って、其姓を出生地の高ノ濱より取り、高濱と唱へた處からするも、一介の漁夫の子であつたことが知れる。

高濱と同舟なりし二人の漂流者は翌年ポストンより英國船に送られて歸朝したといふ説がある。之れは信ずべき説と思はる。何しろ高濱は安政年中に米國ハイスクールを卒業して幕臣に採用せられたので、其名が現はれたのだ。若し便船で送り還されていたら、今頃其名さへ知る人があるまい。

〔日米〕No.8062 April 20, 1922)

（十六）

Ⅱ東部と西部との學生Ⅱ

日本學生として自發的に米國に渡つたのは、元治元年（千八百六十四年）上州安中の人、新嶋襄で、彼れは北海道函館から米國船に潜伏して渡航したものである。船主ハーデーは此青年を愛して教育を授け、初めアンドヴァーのフリーッブス學校に勉學し、在學二年の後、アマスト大學に入り、明治三年（千八百七十年）に卒業した。

明治五年岩倉大使が東部に見えられた時に通譯を勤めたとある。彼れは歸朝後、京都に同志社を起し、今日の同志社大學の始祖となった。

其後二年即ち慶應二年横井左平太、同太平の兄弟は、和蘭改革派の外國傳道師フルベッキの周旋により密かに蘭船に乗りて紐育に渡つた。此兩人は横井小楠の甥だけありて國事を中心とし渡米し、海軍砲術の研究を志した。不幸にして兩人とも病患に罹り中途にして歸朝した。

明治初年頃田尻稻次郎、服部一造、岩倉具綱、同具定、目賀田稻太郎、金子堅太郎、富田鐵之助、勝子鹿等米國東部に留學せるが、其年代不詳。これは日本各藩等より留學せるものである。目賀田稻太郎は明治七年ハーバード大學を卒業し當校日本人第一着の卒業生だ。

珍田捨巳、佐藤愛磨、外二名は明治十年渡米し、インディア

ナ州、グリーンキャスル市にある、デポー大學に入學した。此學生等は青森縣弘前に傳道せる宣教師イング氏の周旋によりて渡米したものである。

明治八年七月小村壽太郎、鳩山和夫、菊地武夫、齋藤修一郎等は大學南校第一期の卒業生で文部省官費留學生の初である。すべて在學五ヶ年東部各地の大學を卒業した。

東部行きの留學生は概して官吏となつて日本有用の材となつた。然らざれば宗教界の指導者となつた。

それに反し太平洋沿岸で修業したものは多くは實業界に入つて重鎮となつたやうである。米山梅吉（三井重役）は明治十八九年頃の渡米で、福音會に居り。星野行則は明治二十三四年頃の渡米で同じく福音會に居り其後靴工となつた。今では大阪鹿嶋銀行の専務取締をしている。

伊東米次郎は明治十六年頃に渡米し、初め桑港に居り後シアトルに出で醫師の玄關番を勤めて専門醫學校を卒業したが醫師になりそこなつて、郵船會社に入り累進して今日郵船會社々長となつた。

武藤山治も太平洋沿岸で教育された男であるが今は日本紡績界の重鎮となつてゐる。

其他桑港育ちの學生が日本財界に飛躍する數は甚だ多い。これを東部出身の者と比較するに太平洋沿岸出身の者は社會の風雨にもまれた分量が多く、經濟社會に邁進して有用の器とするに足るのであらう。

書物をいぢらせたなら東部出身の者が上手かもしれないが、社會を漕がせるには太平洋沿岸出身の人が上手である。之を考へて見ると人間の學問といふものは書物でなく實際社會にあるといふことが分る。

日本の官學出身の者が長い間天下を取っていた。明治初年から明治四十年頃まで此風が續いた。然るに四十年後今日に及んでは形式的の官學がすたり實際有用の材が天下を取るやうになつたのは時世の變遷とは申しながら國家の慶事といはざるを得ない。

日本人が長い間、水師提督ペルリーを日本開國の恩人とし、米國を正義人道の國と尊重したのは全く東部で學問した人々の純朴(寧ろ無邪氣)の賜である。之が爲め長い間日本人は米國人を尊敬して其短所を知らずに濟んだ。

然し我々太平洋沿岸に育つた日本人は長い間米人の排斥侮辱を受けていた。それで格外に米人の長所を無視する弊に陥り易い。これは何れも不可であろう。東部育ちの人が正義人道の丸呑をしたのも悪い。同時に太平洋沿岸育ちの人が米國人をすべて泥棒根性だと見下るのも悪い。米國には良い處も悪い處もある。(昨紙高濱と在しは中濱の誤)

〔『日米』No.8063 April 21, 1922〕

(十七)

Ⅱ 風俗壞亂罪 Ⅱ

明治二十四年六月、桑港に始めて大日本人會が設立された當時、サクラメント市には夏期休暇を利用して働きに出掛けた青年書生、バンクーバ邊から轉入した労働者などが百餘名集つた。是等の人々は第一ホイットランドのハップス園を目かけて集つたものであるが、此中に畑中六郎なる青年があつて、フレスノ視察を思ひ立つた。

フレスノといふ處は干葡萄の産地で秋期收穫時には一時に多くの労働者を需要し其給料も高いといふ噂が加州北部青年の好奇心を煽つた。そこで元氣者の中畑六郎は鍋島某といふ青年と語つて視察團を募たのであつた。

「フレスノは氣候が暑く、熱病が流行するから、死んでもよい人が行く處だ」と某青年がいふ。中畑は「どうせ人間は一度死んだ、そんな弱いことを云ふな」といふと、其中の青年で強がりの連中が「往つて見やうじゃないか」と誘引の第一聲を放つ。よかろうといふので中畑を始めとして都合七人が六月下旬櫻府を出發してフレスノに向ふた。これがフレスノに日本人の活動を始めた元動であつた。

其頃のフレスノは不健康地として有名であつた。其實フレスノが不健康地であつたのか乃至は労働者が不衛生であつたの分らない。當時フレスノに労働せる連中は毛布一枚をも持參せ

ず、着のままに原野の中に寝たもので、飲料水は灌溉用の江筋から持運んでガブ／＼呑む、腹が減れば生葡萄をムシヤ／＼食ふ、三度の食事といへば麥團子に鹽汁で野菜物など見たくも無い、こんな不攝生の生活をして朝四時から夜の九時まで打通しに働くのだから堪らない。イクラ健康地でも命の有てる道理が無い。

然るに多くの勞働者は自分の不衛生を棚にあげてフレスノを悪疫地と恐れたものだ。

中畑等七人の一行は此變地に出掛けて往った。

彼等はフレスノに着いて支那街邊をウロついて居ると、警官二三名が此一行を引捕えてすべて警察署監獄に投げ込んだ。

一行中英文語の自由に話せる者は一人も無い、無論其頃の田舎に通辯はない、一行は何の爲に投獄されたのか更に譯が分らぬ。

そこで桑港帝國領事館に電報を打ち救助方を願出でた。領事珍田君は其時大日本人會々長であつたゆへ、幹事日向輝武をして一行救助の爲にフレスノに急行せしめた。

日向が警察署で尋ねて見ると、此一行は風俗壞亂罪で拘引したのだといふ。然らば一行は春晝でも持ち歩いたか、乃至は立小便でもしたのかと聞いて見るとそうでない。此一行は荷物も持たず、コートも無く、ジャンパー一枚で市中をウロついたからであると分つた。

そこで今後を戒めるといふ申譯で七人は牢から出された。

此當時サクラメント邊にある日本人で夏季コートを所持して

いる者は殆んど無かつた、冬になつて寒氣を感ずればベスマントから古着を探し出して着る。夏になれば捨てゝ仕舞ふといふ風であつた。其風體の醜惡なること今日想像が出来ない程の者であつた。七人組はサクラメントで爲來りの風でフレスノに飛び込んだまでの事で、別に風俗壞亂などは夢にも思はなかつたのである。

此衣服の持合はせのないことは啻に田舎のみでは無かつた。

桑港の名都に在留している學生連でも衣服らしい衣服を着ている者は暁天の星の如きもので、桂庵から働口が掛ると、よさそうなコートを着ている友人からチヨイと貸せてそれを着用し及んで働口の掛合に往つたものだ。

一般の在留民がコンナ風であつたから、稀に綺麗な服を着ている者を見ると、あれは嬪夫だとか、あの野郎はニヤケて居るとかケチを付けて仲間に入れない風があつた。それゆへ商店などに働いている青年と、スクールボーイ連とは肌が合はず、常に反目していたものであつた。

フレスノ先發隊中畑等の七人組は、それから直ぐに農園に潜り込で木の下に寝たそうである。

『日米』No. 8064 April 22, 1922)

(十八)

|| 日米條約の嚆矢と

新見大使の渡米 ||

水師提督ペリーが相州浦賀に黒船七隻を浮べて、日本幕府に迫り開國を強いた後、安政二年(千八百五十五年)米國政府はタウンSEND・ハリスといふ人を領事に任命して、伊豆下田港に駐在を命じた。ハリスは日米條約の原稿を幕府に示して其締結を促がし翌年通商航海條約が締結せられた。此條約批准交換の爲め大使として新見豊前守が米國に派遣せらるゝこととなつた。

新見豊前守は幕府の外國奉行であつた。今日の外務大臣の格である。米國より軍艦ボーハタン號が新見大使出迎ひのために來航し、正使新見豊前守一行はボーハタン號に搭乘し、萬延元年(千八百六十年)正月二十二日横濱を發し、二月十四日ハワイ島着、二十七日同地出帆、三月九日桑港着、航海日數三十六日也。

同年副使植村淡路守一行を乗せたるは、日本軍艦咸臨丸にして勝麟太郎(後安房と改め伯爵に叙せらる)艦長として正月十九日浦賀を出帆し、二月廿五日桑港に着し、正使一行を待ち合せた。此航海日數三十七日であつた。

咸臨丸は、木造、螺旋蒸氣三本櫓「スクーナ・コルベット」にて長三百六十三尺、幅二十四尺、百馬力、排水量約三百七八

十噸なりといふ。正使を乗せたるボーハタン號は何程の大きなりしや不明なるも、千噸以内の船なることは當時艦船一般的状態より推測が出来る。

一説には咸臨丸船長は木村攝津守にして、航海長勝麟太郎なりといふ。尙ほ考ふべし。

新見豊前守の一行は、桑港に於いて咸臨丸搭乘の一行と會し一同米國軍艦ボーハタン號に便乗し、巴奈馬地峡に到り、之れより地峡鐵道によりて大西洋に出で紐育まで海路に依り、それよりワシントン首府に到つた。

咸臨丸は桑港碇泊二十三日間にして、閏三月十八日桑港を出帆し、四月三日布哇着、五月六日品川に着した。

新見大使一行の大部分は紐育に出で、歸路は大西洋、アフリカ、香港等を経て歸朝した。

第二回の渡米

軍艦と大歡迎會

米土に日本軍艦の見舞ひたるは右咸臨丸を第一回とし、其後明治十三年(千八百八十年)第二回の軍艦派遣ありき。即ち帝國軍艦筑波は此年八月太平洋を横斷して桑港に着いた。艦長相良紀道であつた。此時在留同胞の數は百五十名以内にして、(米國政府の統計に據れば此時在米日本人全數百四十八名にして加州在留者八十六名とあり)桑港には男女合せて百名程ありしなるべし。

時の領事柳谷謙太郎は筑波艦歓迎會に企て、在留同胞は血を湧かせて喜んだ。ワシントン街支那人傳道館は其會場に充てられ、此時集れる同胞實に八十名にして空前の大集會であつた。

此當時、曾て東部に留學せる鳩山和夫、齋藤修一郎、菊地武夫、小村壽太郎等は五年の修學を卒へ將に歸朝の途に就かんとする頃であつた。偶々軍艦筑波の歓迎會あるを知り、此集會に參列した。鳩山は一行を代表して此時歓迎會演説をしたといふ。

筑波歓迎會に出席して演説せるは、福音會代表柴柴四郎(東海散士)領事柳谷謙太郎、學生代表鳩山和夫の三名であつたと傳えられている。

海外にある日本人が一番血を湧かして喜ぶのは母國軍艦の來訪であつた。近來は練習艦隊がしばしば來訪して餘り珍らしくも無くなつたが、明治十三年頃の軍艦來訪は故郷の父母に會ふやうな氣がしたらしい。

そして桑港の白人社會に於ても日本軍艦の見えた時には、日本人を殊更尊敬するやうにも見受けられる。一般の空氣が生々して道で白人に會ふても先方から握手を求められるのは軍艦來訪の時に著しいやうである。

今日では海軍縮小などと世界人類が大騒ぎをしているが、此當時一隻の軍艦を手に入れることは屬島の一つや二つ手に入れるよりも骨が折れたらしい。彼の威臨丸などは僅かに三百七八十噸の軍艦であるが、而かも其頃は北海道にも代へかねまじき

大切な寶物であつた。

〔日米〕No. 8065 April 23, 1922)

(十九)

二十年前のフレスノ

驚くべき發達 Ⅱ

今より二十年前の明治三十五年に時の領事上野季三郎と私は加州を一周したことがある。同年私が經營していた『新國民』雜誌にフレスノ郡なる題目の下に左の記事がある。現在同地方の發達と比して如何なる感情が浮ぶか、僅々二十年間の變遷實に驚くべきものがある。曰く、

「フレスノ郡に於ける重要な產物たる葡萄園の反別は大約四萬英加にして昨年の統計によれば(即明治三十四年の統計)乾葡萄七千五百五十萬斤を出し、此代價三百萬弗に上りたり、之に依て見るに、フレスノ郡は加州の乾葡萄の四分の三を產出する割合なり」(中略)

「葡萄收穫と利益の割合。葡萄栽培者はいふ。乾葡萄耕作の利益は年によりて差違ありと雖も、大凡一英加より七十五弗より百五十弗までの收穫ありて、而かも一英加の耕作及取揚の費用は二十五弗を要するのみと。斯くの如き大利ある事業は農業中他に多く求むる能はざる處にしてフレスノ郡の地味が天恵多ければこそ右の如く長足の進歩を來したるなれ」

「日本人農業者と地主。フレスノ郡はレーズン(乾ぶどう)の耕作と共に去る千八百九十年より以來二萬人の人口増加した。されば日本人の此地に來りて労働するものゝ中にも土着永住の基礎を作り土地を購買するものゝ出で、小作業者として年々同胞の發達すべき傾向あり。余が去る十月中旬同地を巡回して取調べたる結果によれば、

土地私有者

四十英加	隅田 實一
四十英加	川野 才吉
四十英加	毛保 宇一
四十英加	前田 寅吉
借地人	姓名
英加	中澤 謙一
四〇	平野初太郎
八〇	松 田
二一〇	淺井 組
八〇	久保田 某
八〇	共同
八〇	東 野
八〇	増 田
八〇	森本 某

即ち土地所有者三名、百廿英加借地人六組、合計五百七十英加に及びたり。

「未だ植附けざる土地を所有せんと欲せば一英加大約五十弗内外を以て買取するを得べしと雖も、植附を終り収穫の期に達したものは、三百弗内外なり。而して借地の方法は如何といふにフレスノ市にレーズン農業組合なるものありて収穫を抵當として金員を貸附くるの組織あるを以て多額の資金を要せずして小作業に従ふを得るなり」

「アーメニヤ人の勢力。フレスノにあるアーメニア人の勢力は驚くべきものにして、彼等は農園を所有し、組合を設け、販賣の業をも兼ね。彼等一小國民にして其勢力は斯くの如し、堂々たる日本帝國の移住民は何が故に斯く浮浪の労働者のみ多きや。四十七人の日本醜婦業と支那バクチは遂に日本人を驅りて小アーメニア人にも及ばざる苟且儉安國民と化せしめたる乎。吾人はフレスノ市に集まる四千人の人足中セメテは百分の一の實業家を生ぜんことを冀ふ。アーメニア人の勢力に鑑みて深く恥ぢ日本民族の前途に想到して慚然たらざるを得ず。願くは其蠻風を掃蕩し其亂脈を矯め以て我國民の榮達を計るは、先達諸士の任務にあらずとせんや」云々。

右の記事によると、廿年前フレスノの土地は五十弗内外で収穫期に達した。熟田が三百弗内外、乾葡萄の相場は一斤四仙二三厘であったことが分る。而してダイニユバなどは未だ見る影もない處であった。

それから夏期四千人の同胞が此地に集合して盛んに支那賭博を爲し四五十人の日本人醜業婦が居り、日本人社會の状態は實

に亂脈を極めていたことも分る。

最も奇に思はるゝのは、土地所有者が三名、百廿英加で、借地人が六組であることだ。今から考へて諸君どんな心持がする乎。回顧すればフレスノの發達は實に長足の發達であつた。

『日米』No. 8066 April 24, 1922)

(二十一)

|| 浮浪漢の跋扈と

農園に於る賭博 ||

明治三十年以後、日本人の數が加州に増加するにつれて、何時とは無しに無頼浮浪の徒が現はれた。此徒の中には日本より博徒としての經驗ある者と、渡米後不良の徒と交りて悪感化を受け、遂に博徒と變じたのとの二種類あるが、兎に角賭博を常習とする浮浪漢が、加州各地に徒黨を組み、賭博場のテラを以て贅澤な衣食をする者が殖えた。

是等の徒は夏季農園繁忙期に際し、サクラメント、フレスノ、サンノゼ等に本拠を構え農園ボスに取入つて農働地に割込み労働者を誘引して、賭博を勧めたものである。此頃の労働者は娛樂機關もなく、且つ同胞社會に制裁が行はれない時代ゆへ、其九分九厘までは賭博を娛樂としていたものである。

そこでサクラメント附近の農場の大なるものは、ナトマの葡萄園、ホイトランドのハップス園、バイナの葡萄園それから各

所の砂糖ビーツ園などの繁忙期には博徒が人夫募集者となりてボスの歡心を買ひ、その報酬として賭博場を園内で開いたものだ。

ボスの中でも道念の高い人々は農場に博徒を入れないために彼等の反對を受けたこともあつた。そして博徒等は無賭博の農場に行かんとする労働者を脅迫したこともあつた。

道念の高いボス連中は博徒の横行を憂ひ、其驅除策を圖つたが何分無職業の浮浪漢を相手に喧嘩もならず、さりとして彼等の横行に放任せば、在留労働者は墮落するばかりである。そこで一策を案出したのが、勸業社發揮人中の秋元正規で、彼れは砂糖會社とビーツ耕作請負者間の契約中に左の條項を設けた。

(一) ビーツ耕作請負者は病氣其他止を得ざる事故なくして農場に徒食する者を在任せしめざる事、

(二) ビーツ農園各キャンプに於て請負人が賭博をなさしめたる時は砂糖會社は其契約を取消し、全部の労働者を農場より立退かしめ、且つ請負契約金を支拂はざることあるべし、

此契約は請負者にとりて頗る不利益なる契約であるけれども此契約ありしが爲めに、加州砂糖會社耕地には博徒が入込むことが出來ず、結局請負人の成功を助けたのであつた。

併し或る時は博徒がボス事業の失敗を糊塗するに都合のよい事もあつた。此頃のボスは何仕事によらず値段構はず引受けたもので、爲めに請負上多大の損失を招き、労働賃銀の支拂に窮

したことが間々あった。斯ういふ時に博徒の入込んでいる農場ではボスが現金の代りに小切手を發行する、これを俗に幽霊チャッキと稱へたもので、労働者は此幽霊チャッキを以て賭博場に至り夜を徹して賭博に耽る間に大概は負けて仕舞ふ。それでボスと賭博との間に了解が付いているから、ボスは尻尾を出さずに損の始末を付けたこともある。

故峰島儀一が明治三十三年頃コルサ地方で砂糖ビーツ耕作を請負ふたことがある。此頃のコルサは春夏氣候がわるく田園には雑草繁茂し、作業が困難であつたため彼れは六弗請負の畑に八九弗も耕賃を掛けて仕舞ふた。サテ愈々勘定日になると、二千弗の穴が明いている。

給料を拂はねば労働者は紛擾する拂ふには金が無い。そこで峯島はサクラメント市の友人に電話を掛けて急を訴へた、暫くすると一人の博徒の親分がコルサの農業に飛び込んで來た。「諸君、給料の勘定をするから集つてくれ玉へ」といふ、労働者は給料の支拂と聞いて喜び親分の周圍に集つた。

すると博徒の親分は二挺のピストルをテーブルの上に置き「峰島が諸君に支拂ふ給金は僕が受取つてバクチに負けて仕舞ふた。サア此ピストルで僕を打殺して下さい」と胸を開いた。一同は唯だ呆氣にとられて一言も發する者が無く、眞青になつて四方に散亂して仕舞ふたといふことである。斯んな芝居も其頃は各所に行はれたらしい。

斯んな風で博徒はボスに恩を着せていたので愈々蠻風が原野

に漲つたようだ。(つゞく)

〔『日米』No. 8067 April 25, 1922〕

(廿一)

|| 浮浪漢の大掃蕩 ||

博奕等はサクラメントを中心として各所の農場に賭場を開き其閑暇にはサクラメントの同類俱樂部に集つて賭博をし附近にある醜業婦の魔窟に出入して衣食の料をユスつたりしていた。斯くして明治三十六年一月農閑散の砌り櫻府に一事件が突發した。其頃の『新國民』に左の記事が現はれている。

「櫻府浮浪の徒」悪魔の一團は其個人々々に分解せば意外にも柔順なる分子なきにあらず、然れども苟も無智にして業を有せざるものゝ通弊として陥り易き賭博は之等柔順なるものを驅りて現當眼前の逸樂を貪るべく遊惰の徒と化し去り賭博に曉を徹したる後はまた他の罪惡を求めつゝ動亂せり、その酒を鯨飲して良心を麻痺せしめたる結果は獸慾を貪らんとして狂ふに至りけり、彼等は酒を得んために金に究すれば兇器を以て他人を脅かし、色を得んために究すればまた兇器を以て之を脅かす。斯くの如くにして人道の何物たるを辯ぜざる惡徒は去る一月卅一日、川崎重五郎、島田佐太郎、戸田某、藤本某の四名は同地料理店の給仕女イワノなる亭主持ちの婦人をピストルにて脅迫し携へたる馬車にイワノを乗せ之を郊外に連れ行きたり(或は

強姦したりと傳へらる) 主人木原權十郎は之を警察に急訴し遂にイワノを救ひ出したり。次で川崎、田島の兩人は警官の爲捕縛せられたり」

「櫻府正義の士の矯風運動、悪徒が櫻府の安寧を破ることは今回に始まりしにあらず。而かも今回の事件は人道に關する大事件なれば豫ねて悪徒を制裁し櫻府の風紀を廓清せんと志す人士は端なくも此事件を聞いて怒髪天を衝き悪徒征伐の聲は各所より起り二新聞社員、各團體、正業者の一大結合起りて遂に悪徒を驅逐すべしとの議一決し此運動を開きたる帝國領事館各地教會及び國民的諸團體は同情と賛成との聲と共に櫻府有志を援けて正義の全勝を得せしめんと力め加州の一大輿論となりたり」

即ちイワノ誘拐事件は正義派の奮起を促がし、櫻府浮浪漢掃蕩運動は各派教會、佛教會、日米新世界支社員等によりて企てられた。當時櫻府に支社を設けし日米、新世界兩新聞社にして日米支社は山村四郎、新世界支社は佐藤迷羊主任であつた。

櫻府の賭博團は日本町を中心として長き間、不正不義を行ひ正義派は煩ひをなしていた。正義派は機會あらば之を掃蕩しようと思つて睨んでいた。然るに悪徒四名がイワノ陵辱事件は絶好の機會を與へた。即ち一面警察の力を藉りて博徒の巢窟を襲ひ、三十餘名の浮浪漢を櫻府以外放逐した。

此當時、浮浪漢掃蕩に關し『日米』は左の如く論じた。

〔前略〕思ふに今回の誘拐事件は我在留同胞が罪惡に對する

觀念の試金石なり、兇漢何くにか潜伏する彼を隱蔽して其罪惡を庇護するものは誰ぞ。罪人を隱匿するは破落戸社界の義侠心なり、今日の如く罪惡に對する觀念の著しく發達したる社會は斷じて兇漢の庇護を恕さざる也。」

新世界は「浮浪取締規則」と題して左の如く論じている。

「出稼人移住民風情に碌でなしの多きは固より知れること當該國の警察官を煩はすも裁判官を煩はすも果たして何等の耻辱かある支那人が動もすれば白人より排斥されんとするの理由の一に數へらるゝものは彼等が罪惡を隱蔽するの傾向あるが爲めならずや、日本人たるもの少しく眼光を大にせざる可らず」

又新國民は

「五十年前に於て桑港にヴィジランス・コミッティーなる市民の團體起りて浮浪の徒を掃蕩したり、彼の櫻府に於て正義人士の義憤が矯風運動となり根本的に惡漢の撲滅を企劃するが如き其精神に於いて相同じ」云々。

此年フレスノの正義人士も亦浮浪漢掃蕩の大運動を起し一舉にして巢窟を奪ひ、之をタウン以外に放逐したる大事件があつた。

〔『日米』No. 8068, April 26, 1922〕

(廿一)

|| 三百年前の渡米者

矢座田中と支倉 ||

千四百九十二年(明應元年、將軍義政薨去の後三年)コロンバス米國を發見した。是より約百年後は葡萄牙、西班牙、和蘭の三國が海上に勇飛した頃であつた。特に西班牙は葡萄牙を壓伏して雄を世界に稱へ、中央アメリカを領土とし、遠くヒリピン群嶋を領有した。それゆへ日本東海岸には三百年前西班牙船が屢々見舞ふたやうである。

慶長十四年(西一六〇〇年)九月二日上總國夷隅郡岩田村の暗礁に乗揚げた外國船があつた。此船は西班牙領メキシコ船でサンフランシスコ號といふのであつた。此船は一千噸程の大船で乗組員三百七十七人、其中五十六人は難破の際溺死した。

此年フィリピン前總督たりしドン・ロドリゴ・ド・ビベイロが墨西哥へ歸國の際七月十一日ラドロ郡嶋で暴風に遭ひ、日本に漂着したとある。

此處で迷ふのは右サンフランシスコ號が上總で難破したのに前提督が乗つて居られたのか、それとも總督が座乗した船は別なのか明かでない。サンフランシスコ號が乗組三百七十七人もありといへば、それは只の船でない。先づ軍艦と考ふべきである。總督の乗つて居そうな大船である。然し總督が暴風に遭ふたのは七月十一日、サンフランシスコ號が暗礁に乗揚げたのは九

月二日で四十日も後の事である。

何れにしてもサンフランシスコ號は上總國で難船しヒリピン前總督が此年難船のために日本に上陸したことは記録にある。

そこで話は新らしくなる。即ち徳川家康はフィリピン前總督を墨西哥へ送り還すため其頃日本に在留せし英國人三浦安仁(本名ウイリアム・アダムス)に命じて百二十噸の黒船を造らしめた。此船は十ヶ月間程で建造された。

右の黒船を總督に貸與し同船には墨國視察者として朱座三成・田中勝助を同行せしめた。そして國書を墨國總督に傳へた。此船は慶長十五年六月十三日江戸を發し、途中呂宋に寄航し同年冬墨國に着し大歓迎を受けた。これが日本から米大陸に船を出した始めて人を出した始めてであらう。

それから後三年、奥州仙臺の城主伊達正宗、其臣支倉六右衛門ををして羅馬に赴かしめ、法王に國書を奉った。正宗が何の爲めに羅馬くんだりまで使臣を派したのか更に理由が明白でないが、兎に角支倉は日本人製の大船に乗つて慶長十八年九月仙臺領牡鹿郡月ノ浦を出帆し月日不詳、墨國アカプルコ港に上陸し、それより西班牙船にて歐洲に赴いた。

支倉の歸國は元和六年(千六百二十年)であるから往復に七年間も費やした勘定である。

そこで支倉と同船して墨國に上陸した連中の大部分は、墨國に留り、支倉の歸路を待つことにしたが、支倉一行は鐵砲丸同様で更らに音沙汰がない。

其次第は斯ふだ。始め支倉は日本人製西洋型の船で歐洲まで乗切れると思ふた其船は長十八間、幅五間半、高十四間で曩にフィリピン總督を送り還した船よりも大きい。乗組員日本人百五十人、葡萄牙人四十人許とあるから二百人程乗っていた譯だ。

然るに右の大船は墨國に着くや否や最早各所に損傷が出来て用に立たない物となつた。假りに用に立つとした處が完全な海圖を所持しない。當時海圖は極秘にせられ決して之を公開せなかつたものだから航海を續けることは出来ない。

そこで一行の大部分を墨國に残して支倉等數名は西班牙船に便乗して羅馬に赴いたのである。取残された連中は或は墨國船で日本に歸つた者もあらうが、大部分墨國に留つて土人と結婚したらしい。日本語や日本人種が墨國に多いのは其爲めである。支倉使節は歸路墨國に寄らず蘭陀船で歸朝した。

「講釋師見て來たやうな嘘をつき」といふ狂句のやうだが右の事蹟は古記録に據つたものであるからまんざら嘘であるまいと思はるゝ。但支倉が歸路墨國に寄つたといふ記録もある。それは嘘らしい。

〔『日米』No. 8069 April 27, 1922〕

(廿二)

Ⅱ 學生時代の桑港生活

六居同様な不潔状態Ⅱ

前回に、明治二十年代在留者の服装の事を書いたから此序に住居食事の状態を書いて見る。

明治二十年代の在留日本人は其生活が實にプーワなものであつた。此頃は日本人の眞價が一般白人に知られず、働いても確なものが無い。日本人といふ形の小さな人種は正直なのか、質が悪いのか、働けるのか、役に立たぬのか分らない人種であつた。それで自然働口を得るにも困難であつた。

空想を抱いて渡米した多くの書生等は衣食住といふ人間生活の第一要件を満たすために全力を傾注せざるを得なかつた。日本國としては貧乏であらうが、我々多くの學生は日本に居れば食ふに困るやうな事は無かつた。たとへ「親の脛かちり」であつたにしても衣食住に事欠かずに濟んだ連中のみであつた。

然るに米國に踏出して來たが最後、一日と雖も「脛かちり」の機會がない。獨自一己の働きで食はねばならぬ。

日本に居つた時には掃木持つすべも知らず、大根一つ煮るすべを知らない連中が、家内の勞働で衣食するといふ大變化が一身を襲ふたのだから、其苦心は一通りでない。ソコで教會の桂庵やら先輩の周旋でスクール・ボーイに行くのもあり、皿洗ひ、ハウス・ウォーク専門の働口に行くのもあつたが、不慣れな仕

事でもあり、英語が不自由である爲めに働先から追出されることが屢々であった。

そこで働口の無い連中が自炊をしたり寝泊りするために色々な會が起った。何會かに會といふ會が其頃多かつたのは實に學生の合宿所で別に他の目的があつたのではなかつた。

當時桑港最古の會合で人物の戴淵を以て目せられた桑港第一の福音會ですら始めはワシントン街の支那傳道會館のベスマントにあつた位で、其他の會は三弗か五弗の借家料で白人住宅のベスマント又はダウンセラーに住んでいたものだ。この時代の日本人を穴居時代と稱するも過言でない。

桑港で日本人が最初に巢を作つた處は、ゼシー及ステベンソン街である。別に醜業に關係ある者、水夫上りの連中などは支那街附近に巢を作つた。是等の諸街は桑港の貧民窟ともいふべきケ所で、古るほけた小さな家が澤山あつた。家賃は十弗か十五弗位いで、今時は物置にも使用の出来ない程の小ギタナイ家のみであつた。そして未來の英雄豪傑は其家に割據して縦横の論を戦はし、天下を吞吐するの氣焰を吐いていたのであつた。

合宿所の食事は大概ブレッドにバターとコーヒーで、米食は容易に口に入らない。其頃米は安かつたが日本食としての副食物に乏しい。醤油も味噌も澤庵漬もない。たまにあつたにしても價高くして買ひ切れない。

事情右の如くであるから、衣服の事などは省るに暇がない。多くの學生は働先のベスマントから古服を拾つて着るか、然ら

ざれば二三弗を工面してハワード街の古手屋から買つて来る。

靴も同様で此頃古靴一足五十仙位いで用が足りた。當時福音會長たりし安孫子久太郎の如き貧乏學生の泰斗で、グリースだらけの古服を三年も着流して平然たるものであつた。

私の渡米した頃、日本人の家を訪問するに當つて、番地などは入用でなかつた。何街の何街邊だと承れば、それで屹度其家を尋ね當てる。といふのは、其頃日本人の家を捜すには、ベスマントにしてカーテンの燻つた家を見付け出せばよいのである。そこには必ず日本人が穴居的生活をしていたのだ。

之に順じて食事場の不潔にして不整頓なことは一層甚しいもので、合宿所にストーブのあるのは無い。すべて一本心か二本心のオイル・ストーブでクックする。オイル・ストーブでコーヒーを拵ふ、ブレッドを焼く、スモーク・サーデンなどを焼く。黒烟濛々として室内はいやが上に暗い。臭氣紛々として鼻を突くなどは平氣である。

其頃スクール・ボーイの給料が一週五十仙から一弗。クック専門で三十弗内外、レストランの皿洗が一日働きづめで十五弗から二十弗。時間働が一時間十五仙から二十仙。電車賃は相變らず五仙であつた。

〔『日米』No.8070 April 28, 1922〕

(廿三)

Ⅱ 廿年代田舎の生活

無錢旅行者の事どもⅡ

明治二十年代には桑港日本人家中カーペットを敷いている家は三軒しか無かった。正金銀行出張所長の社宅、領事官邸、黒澤ドクターこれだけであつた。此生活状態は明治三十年頃まで續いた。

フロアにカーペットが無い代りにスピツンも無かつた。啖をフロアの上に吐いて靴で踏み散らかすから世話が無い。此筆法で生活した連中が稀にカーペットの敷いてある家に訪問すると平生の習慣が此處に應用される。啖をカーペットの上に吐いて靴でコスつて置く、煙草の吸殻は散らばる、實に野蠻極る不作法であつた。

田舎の方に行くと、一層生活状態が下等であつた。此頃の農園働きは夏期果物の摘採かハップス摘採の仕事位いで一時に多人數を入れる準備がして無い。それで労働者は木の下やら厩の隅やら野原に寝たものだ。テント生活はずつと後の事である。

田舎働きの食事は前にも記した通り、麥團子にベーコン汁が上等の部で、罐詰物などは田舎に普及していなかった。勿論醬油も味噌も無い。米飯に牛肉といふのが稀れにあつたが、それは文字通り副食物が無かつたので實に粗悪なものであつた。

明治二十四年頃プレスノに向つた先發隊の某が園主から馬の

飼育を託された時に面白い話がある。

某青年は葡萄收穫期にプレスノ近在の農園に働き、厩番の口を得た。葡萄摘採の爲め支那人歐洲人などが澤山此農園に集まつていた。或朝青年は乾草を厩に運ぶべく積重ねた乾草を兩手に抱いた、するとキヤーといふ聲と共に乾草が踊り出した。

青年は驚きの餘り尻餅をつくと草の中から女の足が飛び出した。それは歐洲から渡つた新移民夫婦が乾草の中で一夜を明かしたのであつた。

此頃の田舎は單り日本人支那人のみならず労働者は大概野原に寝たことが多い。ある者は草の中に寝て毒蛇に噛まれたといひ、ある者は馬に踏まれたといふ珍話もあつた。

田舎を轉々して歩く労働者は其賃銀は大抵生活費又は遊蕩費に消えて仕舞ふ。次の働口を見付けるには百里も旅行せねばならぬ。然るに懷中に一文を剩さない。そこでトランプ(無錢旅行)を始める。

無錢旅行の元祖は田中鶴吉だといふ話だが、彼れはネバダ州の鑛山から加州桑港まで四百哩の間をトランプで通した。今日ではトランプに食事を與へたり宿泊したりする人も少ないが、其當時の人々は一廻は經て來たことのある經驗ゆへ、トランプを餘り見下げなかつたものだ。

私の友人の中で高石芳郎はアイダホ州から千何百哩をトランプで通した。野口米次郎は詩人とあつて冬の十二月にヨセメテに向つて無錢旅行した。又井上幸次郎といふ私の愛した青年は

貨物運車の中に這入って夜間某地に行かんとしてアベコベに五十哩も逆戻し名も知れぬ處に貨車を置きにせられたこともある。

私が同行四人と共に明治二十八年頃サンノゼの田舎からロスゲタス邊に旅行した時、四人で廿五仙しか持合せないので、二手に分れて食を乞ひ、途中日が暮れてサラトガ近邊の農家の厩に一夜を明かしたことがある。

此頃サンノゼ市に日本人の下宿屋があつた。高橋五郎という書生が始め、それから竹川藤太郎(黙嚇)がその後を繼承した。下宿料一泊食事は廿五仙で、一泊が五仙であつた。勿論ベッドといふも名のみにてマドレスは木の屑がはみ出しスプリングはデコボコでまご／＼すると胸腹に穴があきそうな代物である。食堂は臭氣紛々として蠅が雲霞の如く襲ふ。

廿八年九月買物の値段は左の如くであつた。

麥粉五十斤	七十五仙
卵一打	十五仙
牛肉一斤	十仙
ベーコン 一斤	十四仙
米一斤	十仙

(但百斤ならば六弗)

日給冬季七十五仙。夏季一弗より一弗十仙であつた。

(『日米』No. 8071 April 29, 1922)

(廿四)

Ⅱ 岩倉開拓使の渡米

米國全土の大見世物Ⅱ

こんな見出を附けて、岩倉大使の事を其時書いたならば、吾輩の首は忽ち飛んで仕舞ふか又は公儀を憚らざる罪によつて人牢を申付かる事は請合である。併し最早五十餘年も経過した事蹟を書くのだから罪は無い。

岩倉具視公は明治維新の大柱石であつた。公は三條實美公の消極的なるに似ず、頗る大膽にして進取の氣象に富んでいた。公は米國開拓使として明治四年十二月東京を發し、翌五年桑港に上陸せられた。此時、桑港には四十人程の日本人がいた。是等の多くは水夫上り又は政治的亡命者等である。此在住者中に田中鶴吉と赤羽根忠右衛門が居つた。

岩倉公開拓使一行は百數十餘名の大勢で、隨行者には大久保利通、伊藤博文、杉浦広藏、久米邦武、安場安和、武官には村田新八等があつた。其他は多く學生で、女學生も五名加つていた。此女學生は七歳の少女津田梅子を始めとし永井しげ子(九歳) 山川捨松(十一歳) 吉益りよ子(十四歳) 上田てい子(十四歳)といふ若姫様である。

男學生の方では、林薫(後伯爵) 田中光頭(後伯爵) 金子堅太郎(後子爵) 牧野伸頭(子爵) 團琢磨(三井理事) 田中貞吉(ペルー移民卒先者) 日下武良、何禮之等であつた。

岩倉開拓使には烏帽子、直垂の御装束にて手に笏を持ちお脚様の圖よろしく、頭にはチョン髷を安置してあった。お伴廻りは晝夜附切りにて便所に行かるゝにも刀を提げた大男が二人附添ふたといふ。今から見れば滑稽のやうなれど、其頃では當然の事であつた。

此航海中にも色々面白い話がある。女學生の方では五人の娘たちが米國公使デロング夫人を取圍んで毎日戯れていたが、年少者の津田梅子、永井しげ子などは遊び倦んで頼りとおもちゃをデロング夫人に求めるのであつた。日本から持參の京人形は既に首がモゲたり足が折れたりしたので。

デロング夫人は娘たちに向つて桑港に着いたならアメリカのおもちゃを買つて進ぜるといふ約束をして慰められた。船がいよ／＼桑港に着くやおもちゃの催促が頗る急なので、夫人は五人の少女の手を引いてマーケット街でおもちゃを買つて與へられたといふことである。此時五少女とも緋の袴を穿ち草鞋を履へて市中に出たので、市史萬人の注目を惹いたとある。

岩倉一行はマーケット街のグラランド・ホテルに投宿せられた。此ホテルは現今パレス・ホテルの所に在り、其頃桑港第一のホテルであつた。さて愈々ホテルに御着になつて、公始め一同は椅子に腰掛けずカーベットのの上に跪座したので、まず接待の米國人を驚かした。此頃相馬永胤オークランド市にスクールボーイとして在住して居たが、大使の招きに應じて馳せ參じ、一同の體たらくを見て膽をつぶし、米國の風俗習慣などを申述べた

といふことである。

此一行は實にサーカスの行列同様で全米人の好奇心を挑つた。併し一行はそんな事に氣が附かない。

大使到着の翌日、岩倉大使はグラランド・ホテル前で在留日本人に向つて演説せられた。此時桑港全部四十人の居留民が集つた。此演説を聞いた田中鶴吉の談によると左の意味の訓令であつた。

「其方達は知るまいが、大日本帝國は王政維新といふてナ、徳川幕府から大政の奉還を受けた。今後の日本は天子様が御政治をなされる。そこで世界に知識を求め、日本國を西洋に劣らぬ國とするのじゃ、其方達は外國に在る身ゆへ、一事一業を習ふて早く歸朝いたせ。必ず重く取り立てつかはずぞよ」

右の演説を聞いて在留民は勇み立ちて喜んだ。田中鶴吉が鹽濱に働き製鹽業を學んで日本へ歸つたのは實に此演説に感奮したのであつた。(以上、田中鶴吉、赤羽忠右衛門の實話)

一行は桑港市民の歡迎と歡送とを受けて、大陸横斷鐵道に乗つて東上した。途中ソートレーキ市に到るや、風雪甚しく爲めに一行は同市に一週間滞在した。

一行の學生は歐洲に渡るもの多く女學生はすべて米國で教育を受けた。

『日米』No. 8072, April 30, 1922)

(廿五)

Ⅱ洗濯業の開祖

同業者の迫害Ⅱ

東洋人が米國に於て洗濯業を始めたのは支那人が最も早い。支那人は千八百六十年(安政元年)頃から米國各地に於いて洗濯業を始め千八百八十年(明治十三年)頃には桑港のみにて百戸以上の同業者が在った。當時支那人排斥の聲高く時には暴力を用いて放逐の擧に出でたることもあり、明治十五年には有名なる支那移民禁止法案が中央會議で通過し、加州人は率先して支那人放逐の行動を擅にした。

此頃桑港では支那人の洗濯業者約百三十戸に達した。勿論支那人はすべて手洗で器械力を用いて營業している者は一人も無かつたが、其數が多いのと洗質の安いので白人同業者の強敵であつた。

そこで白人同業者は支那人洗濯業者を根本から撲滅しやうと掛かつて市政を動かし始め、同年桑港市洗濯業者取締規則を制定した。此規則によれば、今度洗濯業を営まんとする者は家屋を煉瓦造りとし且つ近隣住人の承諾を求むべしといふのであつた。此規則は表面一般市民に應用する體裁を備へているから別に文句を云ふ譯に行かない。實に巧妙なる排斥規則であつた。

然るに實際に臨むと埒が明かない。即ち支那人の洗濯業が認可證出願に際し、近隣の白人等は承諾を與へない。白人同業者

二百名が總べて出願して認可されたのに、支那人百三十名は一人として認可されたのが無い。茲に至つて事重大となつた。支那人の憤慨するのも無理はない。

桑港にある支那大會社は同胞の訴へを聞いて義憤し、有數なる辯護士に依頼して上等裁判所に訴へたが初審には敗訴した。次いで大審院に上告した。

米國大審院は公平である。即ち支那人の訴訟により市規則は違法なる旨の判決が下つた。その要領に曰く

「桑港市が規則を設けて洗濯業者を取締るは合法であるけれども隣家承諾の有無を以て認可不認可を決するは不當である。其設備が市規則に違反せざる限り之に認可を與ふべきである。隣家承諾の有無は問ふ所にあらず。」

以上の判決が下つたので市政家の巧妙なる排支規則は無効となり支那人は依然として手工洗濯を繼續することになつた。省みれば大審院の判決は實に常識的で人情の機微を洞察したものである。

日本人が米國で洗濯業を始めたのは矢張り桑港が一番古い。明治二十三年頃桑港に二軒の日本人洗濯屋が起つた。東京ランドリー、横濱ランドリーである。

東京ランドリーは畑中兄弟が經營し、横濱ランドリーは佐藤周三といふ人が經營した。場所はヒルバート街であつた。

此頃サンノゼ市のホテル・ベンドムに愛媛縣人丹正之といふ人、洗濯職工として就働し、千葉縣人塚本松之助を助手として

いた。塚本翁、私に語って曰く(其時の給料一ヶ月二十弗で其給料の内五十仙を小使とし、餘剩十九弗五十仙を植木業共同資本に提供したと當時翁はサンノゼ市に於て佐藤九藏と共同にて植木屋を始め九藏は栽培に従事し翁は洗濯働きをなして資本を投じた)。

塚本は明治廿五年サンノゼ市の植木園を兵庫縣人大石徳太郎に譲り、獨立の洗濯業を起さんと志し、營業の場所を物色した。此時恰度チブロンに一軒の廢屋が見附かった。

チブロンの廢屋は明治十七年頃支那人が洗濯屋を開業していた家であったが其支那人は白婦人に不禮の舉動があつたとかでタウンから放逐を喰つて其後日本人榎本某といふ鹿兒島縣人が經營していたが引合はずして廢業したので明家となつていた。

塚本は此廢屋で洗濯業を開始したのが明治廿五年の夏であつた。此家は圍板が失はれていたので廢船の古板を運んで繕ひ洗濯物は最初手洗ひであつた。

一年の後器械を入れる程に業務が繁盛した。塚本は此処で四年間辛抱した。

〔日米〕 No. 8073 May 1, 1922)

(廿六)
日本人洗濯業と
排日事件の経路

塚本はチブロンで四年間の辛抱をして、洗濯業の智識を養つた。そして蒸氣機械で洗濯するんでなければ多數の顧客に満足を與へないことを實感した。而して百尺竿頭一步を進めて桑港の大都會に出づる事に決心した。

當時桑港ヒルバート街にある横濱ランドリーは手洗式の洗濯所であつたが、塚本は持主佐藤周三に説き、共同事業として蒸氣洗濯所を起すこととし、明治三十一年第二十三街の古家を借受け、此處に蒸氣洗濯所の設備をした。之がサンセット・ランドリーの始めである。

諸般の設備を完全に整へ營業認可を申請すると、官憲側では酸の蒞弱のと云つて中々認可證を下げない。それも其筈だ、白人同業者はサンセット・ランドリーが蒸氣機械を据付けて開業すると聞いて、猛烈の反對運動を企て居たのであつた。

最初ボーラーが悪いといふ後にはチムネが悪いといふ。塚本は唯々諾々として専門技師の指圖通りにした。最後に近隣の住人が故障を申立てたから許可しないといふ。斯くの如くして遷延二ヶ月に亘つたので、塚本は最早戦ふ外なしと決心の臍を固め同年秋公々然と營業を開始した。

白人同業者は之を官憲に訴へ、塚本は捕縛投獄せられた。素

より覺悟の前塚本はこれより同業者の妨害と官憲の壓迫とに對し惡錢苦闘を續けたこと實に三年に亘つたが、遂に勝利に歸して營業を續けた。

何故に塚本が右の如く妨害を受けたかといふに、是まで東洋人にして蒸氣機械を据付けて營業する者は一人もなかつたに反し、塚本は新式の機械を入れて大仕掛けの洗濯所を創立したため、白人同業者の嫉妬を受けたのであつた。

此洗濯所迫害事件は端なく同胞一般の義憤となり、塚本應援の演說會が開かれ、訴訟入費の醸金をなすものあり、日本人排斥問題として一時桑港を騒がしたものだ。

一九百十四年歐洲の大戦は勃發し同十七年米國は聯合軍に加盟して軍隊を歐洲に送ることにした。此時塚本の長男は出帥軍人の數に入った。彼れはチブロンで生れた米國人であるからである。

此報を聞ける周圍の白人はヤング塚本の出帥を謳歌した。サンセット・ランドリーは大なる人氣を博し、業務は益々榮えた。ヤング塚本は平和克復の後無事に歸桑した。そして此間に今のビープルス・ランドリーは計畫せられたのであつた。

人の運は根に基くものらしい。根強ければ運を開き、根弱ければ運が來ない。塚本の事蹟を按ずるに、彼れは最初小笠原無人島に開墾に従ひ、後、田中鶴吉、井上角五郎と共に米國に渡り、土地を購ふて失敗し、以來サンノゼに於て洗濯業を習ひ、チブロンに獨立洗濯業を經營して此方實に三十二年間此業を以

て一貫している。若し彼れが白人同業者間の迫害に屈して業務を他に轉じたならば、今日の歴史を作る事が出來なかつたであらう。

曩きに桑港を通過して歸朝せる幣原大使は日米社の希望によりて「不屈不撓」の題字を書かれた。蓋し在米日本人の現在はこの四文字で押通すより外に道はあるまい。他力本願を棄てて自力本願に徹底するので無ければ在米日本人は決して成功しない。この點から見て塚本は好模範を示した。

今の在米日本人は排斥の聲に恐れる臆病者が多い。是等の臆病者の心事を解剖して見ると、嫌はれる處に居もんでもよから金を溜めたら早く日本に歸るといふのだ。併し世界のドコに行くも好きと嫌ひをば半々づゝある。日本に歸つて好かれると思ふのは、歸らぬ前の當推量である。歸つて御覽じろ、日本人から排斥される。外國に來て外國人に排斥されるのはマダ辛抱も出來るが、母國に歸つて排斥されたら堪つたものであるまい。塚本の洗濯の先生丹正之はサンタクルーズで今なほ洗濯業を續けている。恐らく同年代に此師弟は洗濯業を始めたのであらう。丹は西脱落、塚本は粘着隱忍、而かも三十餘年間一事業を繼續せるは沿岸日本人の異數と稱すべきである。

『日米』No.8074 May 2, 1922)

(廿七)

Ⅱ 鉄道人夫請負率先者

婿夫全盛の時代Ⅱ

日本人鐵道人夫供給の元祖は田中忠七である事は疑ひないが、年代と事實に多少の異説がある。

(甲説) 明治二十四年頃、支那勞働者鐵道人夫頭アセーなる者、ロックスプリング炭山に本據を構へ、時々ソートレーキ市に出で來りたるが、此頃同市の賣春婦中、田中忠七の妻あり。アセー一夜。

軟柔郷に遊びて、忠七の妻なるものと相知る。アセー深くこれ愛し誘ふてロックスプリングの本據に携へ妾となす。此時忠七はアセーの居候となるの機會を得、伴なふてロックスプリングに到る。而して妻をしてアセーに説かしめ、日本人夫を鐵道に供給するの道を開かしむ。アセー諾す。忠七即ちポートランドに到り四十人の人夫を日給一弗にて之をオレゴン・シヨートライン鐵道に入れたり。之日本人鐵道人夫供給の始めなり。」

(乙説) 明治二十二年神戸移民會社々員伴新三郎、外務省の囑託を受けオレゴン州に渡り日本勞働者移入の道を開かんとす。

此時、オレゴン・シヨートライン鐵道は人夫の必要を感じたるを以て伴新三郎と契約し、工夫四十名を同鐵道に入れ、田中忠七をして監督者たらしむ。後明治廿五年新三郎は獨立事業としてエス・ピー鐵道沿線に人夫を供給するの道を開きたり。」

右の兩説を比較して考へて見ると甲説が正しい。何となれば、神戸移民會社代表者伴新三郎が人夫供給を契約したとすれば、餘りに少數であるのみならず、當時ポートランド邊には可なり澤山の同胞が職を得ずして困つていた事蹟がある。それに鐵道に四十人の人夫を入れた後、神戸移民會社はポートランドに人夫を送つて居らない。乙説は新三郎の成功が顯著なりし爲め、後人が附會した説だと思われる。

田中忠七は水夫上りで、無教育の男であつた。其妻を醜窟に陥れ、其金でゴロついていた程の男で目に一丁字なき者であつた。彼れはアイダホ州ナンパに事務所を置き、銳意人夫募集に努めたが、事務上に事缺いたため桑港愛國同盟員たりし勝沼富造を顧問として雇聘した。當時オレゴン・シヨートライン鐵道人夫の供給元請負人はレミントンといふ人で、支那人アセーは其下請人であつた。即ち忠七は下請人の其又下請人であつたのだ。

勝沼がアイダホ州に到るや、忠七に獻策して直接下受人たるの地位を得、ハンテントンよりグレンジアームまでに至る人夫供給を契約した。之が明治廿五年の春であつた。其年加州に新たな鐵道人夫供給者が現はれた。それは、

長谷川源司といふ者である。源司は此頃桑港にゴロツキ居り、廣島縣佐伯郡の今朝田某なる女と關係を結び、其女に醜業を營ましていた。いはゆる婿夫であつた。併し小才の利いた男であつたゆへ、珍田領事に取入つてエス・ピー鐵道に人夫を供

給する契約をした。

源司がエス・ピー鐵道人夫供給を始めた頃は日本直航、布哇轉航の同胞が可なり多く桑港に上陸し、之等渡米者は純労働者も多かったので、鐵道就働の人夫募集には事缺かなかった。源司が第一着手として鐵道に入れた労働者としては、

廣島縣人遠藤音吉を筆頭とし西田兄弟、土井、初倉、木本、田村、吉川、

の八人であった。遠藤音吉は最初鐵道人夫供給の事を源司に勧めた關係上、第一着の人夫頭として就働を懇望され、七人を率いてデビスよりテハマに通じる支線ウエロースのセキシオンに働いた。是れ實に加州に於ける鐵道人夫の元祖である。時に明治廿五年五月。

遠藤音吉は現にマウンテンビューに商店を有し、今尙健在である。

此時代の鐵道人夫請負人は王侯の如き勢力を有したものだ。在米日本人事業家として何人をも認むることの出来ない幼稚の時代であったから、人夫請負事業は實に一般出稼者流羨望的であった。而して此羨望的は、すべて嬪夫が占領したのであった。此邊から考へて見ても當時の賣春婦關係者が在留民間の一潛勢力であったことが聯想される譯である。そして日本人は金の爲に手段を選ばざりし耻辱が含まれている譯である。

『日米』 No. 8075 May 3, 1922)

(廿八)

Ⅱ 鐵道労働時代の群雄と

移民禁止の暮の鐘Ⅱ

明治二十四年(一八九一年) 田中忠七がアイダホ鐵道に始めて日本人を供給してより十五年間、日本より或は布哇より渡米せる労働者は必ず鐵道労働の洗禮を受けたものである。實に日本人は鐵道就働より始まりて農業商業に轉化したる経路は支那人と同じい。但異なるのは漁業だけだ。

私は日本人の渡米歴史を考察する毎に、支那人と同じい道を辿つてゆく心地がする。それは史實が證明する所である。

支那人は始め鐵道工夫として米國に渡つた。日本人の大多數もそうであつた。支那人は鐵道から脱線して町に出た。畑に働いた。そして排斥の憂目に遭ふた。日本人も其通りである。

支那人は大陸國民だけ海洋の智識に乏しい。それが爲めに此國で漁夫となる者が稀れであつた。單り日本人は國情が異なるため海洋の雄者となつた。米國に於ける日支人経路の差は唯だ此一事のみである。

明治二十五年加州では長谷川源司が、加州エス・ピー鐵道人夫を請負ひたる其年にポートランド市に本據を構たる伴新三郎は同じくポートランド市より加州國境まで、エス・ピー線に鐵道人夫の請負を始めた。

明治三十年、シアトル市の山岡音高、築野一太郎、高橋徹夫、

橋本養造、古屋政次郎等グレート・ノーザン鐵道に人夫を供給し始めた。

明治三十二年、脇本勤、倉永昭三郎と共同して、サンタ・フェ鐵道に人夫を供給し、此年倉永は桑港に出て、エス・ピー鐵道に一日一弗の低級にて人夫供給を始めた。

明治三十三年三月、西山元、高塚吉造、共同して支那請負人の手を経てライオグランド鐵道に人夫四十名を供給した。此日給一弗二十五仙にして、空前の高給なりと稱せられる。

同年五月、橋本大五郎ライオグランド鐵道に八十名の人夫を供給した。其後十餘年間橋本は同鐵道に人夫を供給した。

同年、森田萬次郎、ユー・ピー鐵道オグテン附近に人夫供給の請負を始めた。

明治三十六年、脇本勤、西村龍雲、共同し、遠くノース・プラットまで労働軍を延長した。

明治三十四年、假谷卯太郎はエス・ピー鐵道會社のラウンド・ハウスに人夫を供給し始め、今日まで繼續した。

明治三十五年八月、橋本大五郎はサンピドロ・ロスアンゼルス鐵道に人夫を供給し始め、今日まで繼續している。

明治三十六年四月、木山定造、高塚吉造、共同してコロラド州マフエット鐵道に三百人の人夫を供給した。日給一弗七十五仙で記録破りの高給であった。

明治三十五年、伴新三郎はバアリントン鐵道に人夫を供給した。

明治三十七年、日米勸業社はエス・ピー線スパークス以東、ユー・ピー線グリニリバー以西に人夫を供給した。

明治三十九年、日米勸業社はウエスタン・パシフィック鐵道新工事に人夫を供給した。此年桑港に大地震あり、次いで火事起き全部烏有に歸した。

同年學童問題が桑港に起り翌四十年に至り布哇轉航禁止の命が下った。指折り數へて見れば、支那人排斥法案が通過してから正に二十五年目に當る。

鐵道全盛の時代は桑港震災の年を以て絶頂であった。此時代に鐵道炭山を通じて就働せる日本人の數は大凡二萬人位であった。北はグレート・ノーザン鐵道より東はユー・ピー。南はエス・ピー線にかけて其労働地の延長約一萬哩に亘った。

移民禁止前の支那人は、太平洋沿岸、山中部にかけて鐵道、炭山、農園に到る處に發展したものであった。而して移民禁止後は専ら農園に發展したものであった。然るに今日支那人の活動せる農場すら見るべきものが一つも無い。現時は荒廢せる支那町に日本人の數が増した光景が各所に見受けられるのみである。

日本人は米國に於て今迄支那人の足跡を辿って歩いて來た。今後其荒廢の跡を辿るであらうか。支那人の青年は都會に澤山いる。田舎には居ない。日本人も斯ふなるのでなからう乎。此處が肝腎要の處だ。

〔日米〕 No. 8076 May 4, 1922)

(廿九)

|| 各地同好の紳士諸君

御共鳴の好意を謝す ||

私が見聞の浅い米日本人歴史的片影の記述に對し、各地舊友同人諸君より諸種御獎勵の御狀いただき有がたく存候。

特に拙文に現はれたる史的事實の誤謬につき態々御申越し下され候事、私にとりては千百の讚辭よりも嬉しく拜讀いたし、更らに研究の歩を進むるの勇氣を培ひ申候。

リビングストン御在任の奥江清之助君。ロサンゼルス御開業のドクトル唐木保三君の御注意申越され候、彼の中濱萬次郎を高濱と記載せるは小生の罪にして且つ校正の罪に候。該文は余が其題目の一字を誤りたるに因し、當時代に該事蹟を省るに暇なき青年校正掛りの將棋倒しに中を高と校正したること後にて相分り汗顔至極に御座候。翌日直ちに正誤いたし置候間御了承下され度候。

オークランド市御在任の舊友竹崎犀吉君よりフレスノ卒先者中畑六郎の事に關し、疑義御申越の條々感謝仕り候。君の申さるるには、「中畑六郎は明治二十三年ウエンタース地方に於て就働し、それよりエルクグロープのブラドフォード葡萄園に就働し、明治廿四年度はサクラメントに居れり」とあり。

私の調査も右の通りに候。併し中畑は廿四年六月喧嘩鍋島等と共に七人の同勢を整えフレスノ市に向ひたることは當時櫻府

に在住せる水野重壽の談によりて得たるものにて候。

尙ほ御來示の「廿四年度フレスノに赴きたるは野田音三郎の一隊なるべし」との事、これも間違ひなく候。野田存命の砌り、小生に語る處によれば「明治廿四年、フレスノに行きしにサクラメントより二名の惡童來りて盛んに此地方を荒らし歩くといふので、其人に面會し打懲らさんと考え、某キャンプに尋ね行きしに中畑と鍋島は木陰より出で來り、僕を抱擁したり」

して見ると、野田がフレスノに行った以前に中畑等は同地に先着したものと思はれ候。

ビッグス、チーコー方面に於ける日本人の沿革は小生の手元に更に無之、閉口いたし候處へ大分縣人早川清の先入者たるを御教示下され荒涼たる砂漠に夜光珠を發見せるが如く覺え候。

マンテンビューなる遠藤音吉君より二回まで書を寄せられた。加州鉄道工夫日本人就働の起原を知り多大の感興に耽り候。特に明治廿四五年頃の桑港の光景躍如として眼前に髣髴し、醜業婦に關係して金融の途に窮せざる者が當時の多數日本人を支配せることに想到し、初期時代移民の理想は肉慾金慾なることを痛感仕り候。

アリゾナ、ネバダより數通の御狀下され候が、失禮ながら文意了解に苦しみ候。但、「ネバダ州リノ市に白狐のお愛なるものあり、多くの日本人を殺せり」といふ御説には感服いたさず候。小生の知る處によれば白狐のお愛なる婦人は長崎の産にて身元賤しからず、年十九歳にして某水夫に伴はれて渡米し、桑

港醜婦業入團の毒手に懸りて身をネバダ州リノ市に陥れ、其後桑港より來れる上田某といふ色情狂者に見込まれ彼の誤解の爲めに銃傷せられたることあり。而して、此上田もお愛も小生は熟知の間柄にて一時小生はお愛を救出さんと企てし程の一人に候。

會春君の咸臨丸船長は木村攝津守にして勝安房にあらざる御證明、至極と存じ候。當時の記録は湮滅に歸し、恐らく後人の推測に成れるものならんと存候。

茲に申上たき事は、世間には小説を書く氣にて史蹟を書くものあり、史蹟を書く氣にて小説を書くもの有之候。この兩者はいづれも一面の眞理を有し候が私等の如き事實一點張に固着し、年月日、人名、場所などを氣にかけ候作者は、後世人の物笑ひたるべく、況や現代人の白痴者たるべく候。

吉住君。成瀬君。大井君。其他諸君の御來狀御讚辭を感謝いたし候。但小生は在米日本人歴史に關してのみ、該文を草するものなる故、本稿の外に亘りたる雜感は御答申とす。多謝々々。

『日米』 No. 8077 May 5, 1922)

(三十)

二十年前土地所有者

フロリンが第一

今から二十年前には日本人社會公共の機關が整備して居らず

同胞發展の狀態に關し一個の統計も無かつた。桑港駐在領事上野季三郎、明治三十四年二月九日着任、翌三十五年十月九日桑港出發、日本人狀態視察の爲め加州を一巡した。私は此時領事の案内役として同行した。

先づ道をバカビルに採つた。それからサクラメント、フロリン、河下地方、山麓地方と視察してフレズノに出で、南加に至り沿岸を通つて歸桑した。此旅行十五日間であつた。

帝國領事が加州地方の日本人の狀態を視察するために旅行したのは此行が始めて、専ら農業方面の視察研究を目的とした。

各地農業家を訪問して、借地契約反別、種類、土地所有者、反別人名等を調査したが、地方篤志家諸君の贊助を得て二ヶ月程で大體の統計が出来た。私は領事官邸に立籠つて之を整理した。

其記録の全部が焼け残っている。借地の方は煩はしいから書かぬが、土地所有者だけを左に掲げて見る。

(明治三十五年十一月調)

地名	英加數	姓名
サクラメント府フロリン村	四〇	巽 栄治郎
同	八〇	松田及山田組
同	八〇	小柳 平吉
同	八〇	西本 滿之助
同	八〇	田中 彌太郎
同	三六	横井新左衛門

同	三〇	石川組
同	四〇	天野 才兵衛
同	八〇	石垣 健三郎
同	二六	田中組
同	四〇	中村組
同郡エルグロープ	四〇	池田組
フレスノ郡フレスノ	四〇	隅田 寶一
同	四〇	川野 才吉
同	四〇	毛利 宇一
同	四〇	前田 寅吉
ロサンゼルス郡ロサンゼルス	一五	平泉 小三郎
同	五	池 百 松
サンタクララ郡サンノゼ	宅地	田中 鶴吉
サクラメント市	宅地	櫻府仏教青年会
モントリール郡サリナス	五	北與 三松
サンマテオ郡サンマテオ	八	竹山 祐嗣
アメラダ郡フルツベル	三五	堂本 譽之進
オークランド市	四	兩上 兄弟
サンフランシスコ郡	三	木村 兄弟
エンゲルサイド		

(合計九百七英加)

前表の内土地總代價を支拂ひたる者と、年賦にて支拂ふ契約の二種あり、農業地はすべて年賦拂の契約であった。

右土地所有者の現はれしは明治三十三年以後の事にして、該調査の二年前であった。

右の外日本人にして他州に土地を有せるものは田中鶴吉がネバダ州に三百英加町の山林地を買収せるのみであった。

此當時フロリンは日本人の注目地として有名なもので草苺耕作の絶頂時代であった。葡萄耕作者は稀であつて、苺畑の中に葡萄を植始めたのが武田久治郎等であつたが、其産額は微々たるものである。

明治三十五年十一月の調査によるとフロリン葡萄耕作者は、合計六十二組其耕作反別千三百四十一英加、それに三十五年十二月から翌年二月までにフロリンに移住せる者十五組に及び戸數九十三、日本人口三百五十人であつた。

ロスアンゼルス郡は其頃農業として見るべきものはトロピコの苺のみであつた。明治三十六年三月二十五日私(尺魔)が同地を視察した時、日本人にて宮川・豊人、三原・茂・數兩氏共同にて十八英加の苺園があつた。兩氏は三年前に始めて此地に耕作を開始したことを話された。

其他トロピコには旭屋組が三英加半と他に一名の小作業者があつたが名は忘れた。其頃トロピコ全體で二百英加の苺畑があつたのみだ。

然るに大正七年(千九百十八年)の調査によると

フロリン土地所有者 戸數 團數 土地所有面積

二〇七	フロリン借地	七六	一、七八〇
團數		借地面積	
一三一	フレソノ土地所有者	三、六二七	
戶數	團數	土地所有面積	
六八五	一三八	六、二三九	
	フレソノ借地		
團數		借地面積	
四四七		二二、五四六	
	南加州土地所有者		
戶數		土地所有面積	
二、三五〇		二、九五〇	
	南加借地		
團數		借地面積	
二、二六六		八一、六五〇	

『日米』No. 8078 May 6, 1922)

(卅二)

Ⅱ靴工同盟の由來

邦人職工同盟の始祖Ⅱ

日本は下駄の文明國で、靴の文明は長く棄たれておった。神

武天皇御東征の圖を見ると、天皇は下駄を履いておられない。靴を履いておられる。尤も其靴は今の女の靴に似ている優美なものである。

日本がイツ頃から靴を廢めて下駄を履くやうになつたのか審かでない。日本が傳へた印度、支那文明は下駄國でなかつた。朝鮮人も昔から靴を履いていた。然るに日本は悠長の國柄だけあつて下駄の文明が成立したのであつた。

日本は曾て代議政治の國であつたが、奈良朝時代から藤原氏が政權を専らにするやうになつてから此政治も廢れた。日本は袖なし股引の服装であつたのが、之れも藤原時代から長袖のだけらしい着物になつた。然るに明治維新は王政復古のみでない。履物復古、着物復古が出来上がった。

此履物復古の文明を代表したのが西村勝三翁である。(勝三は故宮中顧問官西村茂樹先生の實弟) 西村翁は明治十年頃東京に製靴所を設け、澤山の徒弟を教育せられたが、此弟子の中から新潟縣人城常太郎と云のが居た。

明治十九年『國民の友』紙上に米國人支那人靴工の有望なる報道が説いてあつた。そこで日本靴工者は東京で集會を催した。砌り米國靴工視察の議が持上り、西村翁の賛助を得て城常太郎が先發隊に撰ばれ明治二十一年十月に渡米した。これが在米日本人靴工の元祖である。

此頃渡米するといふても五十圓の渡航費は容易でない。城は約半年工賃を貯蓄して漸く旅費を調達し、當時歸國中の高木豊

次郎（豊次郎は明治十五年の渡米にして其後長く玉場を經營しておられた。城常太郎とは同郷の人である）と共に、渡米したのであった。

常太郎は素よりノーサーベーターであった。靴工業は有望である事だけは確めたが、店を開く資金に窮した。止を得ず第五街のコスモポリタン・ホテルに掃除人として働いた。併し彼れは第一回の報告を西村翁に宛てて出した。此報告に基いて渡米したのが關根忠吉で、時に明治二十二年六月であった。

關根が渡米するや城は相共に開業することとなり、森六郎といふ人の通辯でミッシオン街に小店を借り茲に營業を開始した。之れが靴工營業の嚆矢である。

此最初に開店せる小店は家賃一ヶ月八弗で兩人は其裏の方にケチン、ベッドルームを布切れて仕切り寢食して居た。誠に見すばらしい生活で今時の人の想像することの出来ない程小ギタナイものであった。

同年森六郎の紹介によつて其頃桑港で製靴所を有つていたチースといふ人の製靴仕事をすることになった。それはスリーバを作る仕事である。此工賃一足につき金三十五仙であつたと記憶する。

關根は製靴請負の吉報を携えて本國に到り櫻組職工長伊藤金之助、相濟社員、高梨幸助と共に技術卓逸の職工十五名を卒い二十三年十月に渡米した。相原鍊之助其一人であつた（相原鍊之助は現にカリフォルニア街に靴工場を有している。）

チースから引受けた製靴仕事はエツカー街で工場を借りて始められた。處が白人靴工同盟は此事を嗅ぎつけ製靴業者聯合してチースに抗議を申込んだ。此事件は騒擾に紛擾を重ねチースは一時市外に隠遁し、辯護士に其解決を依頼した程であつたから工賃の支拂を停止せられ職工一同饑渴の困難を感じた。

此迫害事件から日本人同業者は獨立靴工の方針を取るべく覺悟を定め、桑港、王府に小工場を設け修繕を主として斯業の發達を計つた。然るに白人靴工業は尙ほも念執く排斥の行動を續け日本人靴工に對し營業妨害を試みたること數度であつた。

此營業妨害に對して靴工業者は能く隱忍し不屈不撓の精神を以て事業を繼續した。それは日本人の伎倆が白人に勝れていたので白人顧客は人目を忍んで日本人靴工に修繕を依頼した者が多かつた。（此稿つゞく）

『日米』No.8079 May 7, 1922)

(卅二)

|| 白人靴工の迫害

靴工同盟の成立 ||

製靴請負の仕事は白人同盟の反抗のために失敗した。そして我が靴工業者は恨を呑んで、各獨立すべく努力した。第一着手としてミッシオン街と第七街に、第二、第十四街に、第三、アラメダ市パーク街に、第四、桑港グローブ街に開業し、専ら技

術の上に優勝を示さんと努力したのであった。

然るに白人同業者は一層迫害の毒矢を放った。或時は店頭に見張りを付けて顧客の入店を妨害したこともあったが、日本人靴工は水とパンとで生活を繼けて能く平和的に戦ふた。

日本から靴工職工は毎船踵を接して渡米し明治二十五年には店舗の數二十に達し、職工數五六十名に上った。そこで同年十月二月靴工同盟を組織して、白人同業者の迫害に當るべく協議が一決し、翌二十六年一月發會式を舉行した。當時其主意として發表されたものは、實に堂々たる名文である。左の如し。

「浦賀一聲の氣笛三千餘年の迷夢を覺破してより世界大勢の潮流は端なく東瀛の國を卒い遂に優存烈滅の渦中に投ぜしむ爰に於てか氣運一轉亦昔日の退守に甘んずる能はず輿論滔然商工の興起を唱へ移住植民の急務を道ふ洵に故あるなり吾人不肖固より敢て國民の卒先たるに當らず唯だ其業務の促すところ遠く故山を辭して萬里異域に航するに至れり然れ共吾人の職業は業に已に白人の久しく執れる所、需給また久しく平均したる所なり。吾人今その間に起て亦これを營まんとす勢ひ必ず兩者の競争を避くべからず吾人は幸に大和民族の特質を享け製靴の技術に於て敢て對手に讓る所なしと雖も黃白人種を異にし東西言文を同ふせず四邊の事物吾人に不利なるもの擧げて謂ふべからず吾人は是等の障碍に克て而して自己の發展を計らんとす豈容易の事ならんや説聞く毛髮の弱き之を東條すれば以て千均を擡ぐべしと吾人亦應救し益々團結の鞏固を致し聚力を利用せざるべし

らかず合資の力を以て大資本に當り又時に此の抑壓に反抗するの覺悟なかるべからず吾人は更に同業者をして各其身を修め家を齊へ居住の地盤を堅めしめざるべからず蓋し大勢に順行して優存の地に立たんと欲する者の必ず取るべき道なりとす而して吾人は之を實行するの機關を要するは素より言を俟たざるなりこれ今回靴工同盟を組織したる所以なり」

(エー・ビー・シー順)

一千八百九十三年一月創立

渡邊 伊喜	相原 鍊之助
明石 精一郎	福島 安兵衛
花井 直次郎	平野 永太郎
岩佐喜三郎	今村 積五郎
城 常太郎	城 辰造
片岡 富造	清田 元三郎
岡本 貞助	關根 忠吉
鈴木 謹十郎	鳥山 徳造
友枝 英三郎	依田 六造
谷田 部孝造	山本 富造

右の主意書は愛國同盟員巨篤治先生の起草で菅原傳、大和正夫等の訂正を経たものであった。

白人同業者は長き間迫害を續けたが日本人はこれに屈する模様もなく追々と業務が隆盛に赴くので嫉妬に堪へず最後の手段として皮革商コールマン・サース會社に向つて日本人に皮革の

取引を拒絶せんことを申込んだ。處がコールマン・サーズ會社は此申込を以て人道に反する者として拒絶した。

コールマン會社の態度は日本人同業者に勇氣を與へ同盟員は緩急相救ふて商業道德を守り一方顧客に對して誠實を盡したのでサスガ執念き白人同業者も我を折るに至りこれより日本人の靴工業者は桑港、王府等に大發展をなし一時會員三百名に上つたことがあつた。

以上列記した同盟創立當時の人で現在桑港にある者は相原・鍊・之助と谷田部・孝造の二人だけである。

近々歐米視察のため見えらるゝ星野行則は明治三十一年頃ラーキン街に店を有つていた。上原徳三郎の徒弟であつた星野は現在大阪鹿島銀行の専務取締で東京の三井銀行取締梅山・山吉と相對して桑港出身の成功者である。

〔『日米』No.8080 Mar 8, 1922〕

(卅三)

Ⅱ靴工の迫害十數年間

同胞の結束と相互扶助Ⅱ

日本人靴工は最も早く米國に起りたる工業だけ最も早く其迫害を蒙つたのであつた。併し彼等は同胞扶助の決心を堅くして能く忍んだ。彼等が開業の第一聲を揚げてより約十五年間其迫害は續いたのであつた。明治三十五年發行の雑誌『新國民』の

記事とはよく其消息を傳へている。曰く

「日本人靴工に對する白人の迫害運動は正しく人種的迫害なり其因て起る所以の動機は、正しく經濟上に於ける利害の衝突にあるや云ふ迄もなし。試みに白人靴工同盟が配付せる印刷物を見るべし。今その要項を擧げんに左の如し。

一、日本人は支那人と同じく衛生に注意せず、不潔極りなきこと (誇張)

二、廉價にて働く結果として白人の營業を奪ひ、妻子を有する白人の靴工者は死地に陥し入ること (嫉妬)

三、日本人靴工は本國にあるトラストの支配に屬し、西村なるものその支配人として當地日本人靴工に原料を供給すること

(虚構)

四、以上の理由により苟も白人に屬するものは宜しく白人の顧客たらん事を希望すること

以上はその大畧なり彼等は一方に於て此のサーキュラーを配付すると同時に、他方に於て陰險なる手段を用ひて屋主に迫り日本人を追立てんとする策を廻らしたり、是れ日本人靴工連盟の基礎意外に堅く、到底尋常手段を以て志を達する能はざるを見ればなり、果然日本人靴工同盟の一人たる宮之内峰吉なるものフォルソム街四〇六番、ヘンリー・コーンなる酒屋の隣りにて表通りの一ルームを八弗にて借り受け、靴修復の營業をなしたるに忽ちにして追立てられたり、其他家賃を値上げせられ若しくは悪童の爲めに石を投げられたる靴工二三に止らず是れ豈

利害の衝突より起れる人種的迫害にあらずとせんや。

「日本人靴工同盟の態度——然れども右に記するが如き陰險手段に載せられて犠牲となりたるものは、意外に少数にして靴工同盟の本陣は整々堂々たり。今日に於ては未だ格別の打撃も蒙らざるに似たり。されど天の未だ陰雨せざるに當つて牖戸を稠繆す誰か之を侮るものぞ…。日本人靴工同盟は白人靴工同盟に左の書を與へたり。

「日本人靴工同盟頭取某頓首再拜して書を貴組合に呈し余が代表する組合に對し貴組合が世に頒布したる廻章の誤謬を正し併せて双方の間に便益となる可き事項の一二を擧げ以て貴組合の參考に供せんと欲す。

第一貴組合に於ては我が組合がトラスト或は或る人物に因て引率せらるゝとなすと雖もそは事實を誤りたる者なり吾人の靴工をなすや個人的たり未だ嘗て本國又は其他に於ける所謂引率者なる者に向つて報告をなし若くは醸金して我が靴工職業上の監督をなさしむるが如きことは之れあらざるなり。

吾等は我が勞力に因つて自ら衣食を儲くる者はれ人間社會の運命にあらずや誰れが此世界に於て生を營み業を營む上に於て此運命を脱する者ぞ次ぎに貴組合の注意を乞はざる可らざるは吾等が貴組合に對して驚嘆の情を禁ずる能はざる也出來得可くんば手を携へて事を共にし營業價格の如きも双方協議の上之を均一にして其仕事の品質の如きも相對照商量して大ひに改善する所あらんこと吾人の切望して措かざる所なり。

日本人は勞働の神聖にして尊む可きを知る故に營業者の地位を高め之をして名譽ある者たらしむるの希望に至つては敢て諸君の背後に落ちざるを信する者也故に生活の情態をして卑下しせめつゝありとの非難に至つては吾等の忍んで黙過する能はざる所とす若し諸君が所謂公衆に訴ふて廻章にして果たて價格を均一にするの主意に出でしめば吾等は思ふ諸君の主意を達するは容易の業のみと然れども若し諸君にして徒らに人種的僻見に驅られてかゝる行動に出でたりとせば請ふ遠慮なく之を明言せよ吾等之に對して採るべき道なしとせざればなり謹んで貴下等が與ふる回答の晩からざらんことを希ひ大敬意を表して此書を呈すること然り

月 日

日本人靴工同盟頭取某拜

『日米』No. 8081 May 9, 1922)

(卅四)

|| 日和見外交の外務省

二十年前の滿洲と米國 ||

日本外務省當局が日和見外交家として有名なりしは近頃の事でない。陸奥宗光、星亨等が米國公使たりし頃は可なりに見識があり、米國政府に翻弄されずに濟んだが、彼の二人が死んで後は最早や米國の後塵を拜するのみで何一つ外交らしい外交は

無かった。日本人移民問題で常に四九尻っていたのも米國側をあまりに畏敬し過ぎたからのことである。

今から二十年前の記録を見ると日本政府が先見の明がなく自ら退嬰して海外植民を怠っていたことが明々地に分る。千九百〇三年(明治三十六年)には小村壽太郎が外務大臣で杉村虎一が通商局長であったが其頃杉村が米國移民論者に向つての談話は左の如くであった。

「移民事業の擴張せねばならぬことは本省にても篤と認めて居る所であります。布哇は今後餘りに多く望を置くべきでないが其以外に結構な場所を見付け内地に溢るゝ日本人の放散地とせねばならぬのです。それに唯土地の廣いのをのみ選んで例へば西伯利亞や滿洲と云つた所で仕方がない。結局する所誰れが見ても濠洲と米國になるのです。

「人動もすれば南米邊を指示するけれども南米は日本人放散地として開拓したなら豪い場面も開けましょう。けれども月一回の定期航路すら未だ開けて居ない。ソコで北米合衆國にはドシ／＼日本人を注入したいが、困るのは排斥熱で今更つたらぬ事をして他日大に注入する邪魔になつてはならぬ。そのみ心配になるのです。太平洋沿岸の事情は上野君の報告で大層能く分つて來ました。それに貴下の所謂解禁といふことに付ても其後本省に於て篤と研究もし手配りもして居りますが結局する處は

前期の米國議會で通過した移民條例改正法律案の一件が今回

同上院に於てドウなるかです。若し新案にして通過したならば日本の農民のみならず商人までが米國に往くことが出來なくなるのです。否な米國本土のみならず其屬地なる布哇や比律賓にまで往けなくなる。外國語で書いた米國の憲法位を讀めんでは上陸が出來ないといふことになる。中々大變です。夫れで本省に於ても殊の外これを心配して右改定案を多少改正するやうに助言を申送つて居るので、兎も角米國上院に於て今後如何に此問題を決するかを見て居るのです。其見定めが付かぬ内は残念ながら渡米解禁する譯にゆきません。

「大臣(小村)は米國に居て其實情に精通して居る人だから私よりも強硬な意見を持つて居るやうです。もし米國側で日本移民に對し好都合の態度に出たならば解禁もしようが、其時には員數を限り年に三千とか五千とかいふ風にしてソロリ／＼と目立たぬやうに米國へ注入する外はありません。

以上の談話を見る時、如何に日本外務省が無定見にして不見識なるかが明かである。日本國策を自ら立てるので無く、外國の鼻息によつて國策を立てやうとしている繊弱能力の外交振りが見え透いている。

米國人の鼻息を窺ふて自らの態度をきめる外交方針は外務省の傳統政策であつた。それが爲め外務省の畑で育てあげられた前總領事太田爲吉などは鼻息を窺ひそこねて寫眞結婚を廢止するなど々申出した。米國排日派は赤い舌を吐いて微笑を洩らした。そして日本政府を見縊つた結果として一般投票で不法の法

律を濫造した。相手が相手だから世話はないと思ふたのである。

小村外務大臣が米國排日派に對する申譯が本氣で言ふたのか明かでないが此時分日本人滿韓集中論を發表した。而も滿韓には滿洲鐵道會社と朝鮮拓殖會社が私服を肥やす横着者の飛躍以外一人として拓殖に従事した日本人も起らない。日本勢力範圍だなど大きなことを言ひ乍ら其勢力範圍には日本人殖民が居らない。そして米國の鼻息だけを窺つて移民を禁止していたのであつた。眞面目ならば大馬鹿であるし、そうでなければ恕すべからざる國民の公敵である。

〔『日米』 No. 8082 May 10, 1922〕

(卅五)

Ⅱ 外國へ來て錯誤だらけの

日本外務省のやり方Ⅱ

(今より二十年前訓令)

日本人は海外の智識にかけて西洋人より後れているのが三百年程で在米日本人が母國より後れているのが三十年だとは私が常に地口るのであるが、明治三十六年三月に下の如き論達を發した。丸で人民を人形扱ひにした跡が歴々として見える。否奴隷扱ひにした跡が看取される。人民を奴隷扱ひにして外交を甘くやらうとした稚弱の有様が滑稽に見えるから其全文を記して

見る。

〔布哇總領事代理岡部三郎氏は去る三月十七日を以て左の論達を在留日本人に發し米國行に就て注意する處ありたり。

「我國には、移民保護法と法律ありて我が移民は之に服従すべきものなり日本政府は少しく考ふる所ありて當分の内米本土に渡航する事を差止めあり然るに布哇に渡航する爲に許可を得旅券の下附を受け一旦布哇に上陸せし後更に米本土へ轉航するは右移民保護法の認めざる所にして若し日本出發の際右様のこと日本政府に判り居りたるならんには決して渡航の許可を得又は旅券の下附を受けること能はざりしはづなるに布哇に渡航する許可と旅券を得て更に日本政府の趣旨に逆ひ法律の精神に違反してまでも渡米を企つるの輩尠なからざる由なれども元來右様の周旋人等は領事館には名も知れざる人にして可成領事館の目を忍びて移民諸氏を勧誘する形跡あれば一般には決して信用す可からざるなり現に斯る周旋人等の爲めに詐偽に罹り船賃の全部或は一部を騙取されりとて領事館に届出でたるもの今日までに前後數十名に及びり又周旋人等切りにカリホルニヤ近傍の利益あることを説く由なれども同地方は一年中業務あるにあらざるを以て十年を平均して比較すれば布哇の方遙かに利益あるはづなれば決して彼等周旋人等の甘言に欺かれざる様注意を要す今後若し渡米を勧誘する周旋人等顕はるゝ時は領事館にても取調べ置き度儀あるに付き其周旋人の姓名人相及び其勧誘方法等詳細領事館に報告す

ることを望む要之日本政府は移民保護及取締の主意より渡航地と云ふものを區別し米本土に行くものと布哇に来るものへは別々に許可を得旅券の下附を受けるを要するの規則なるが故に布哇行の旅券を以て米國へ渡航するは即ち許可を受けず若くは渡航地を偽りて許可を受けたる者と見做され處罰せらるゝこともある可く加ふるに移民自身に取りても米國行は一

般に不利益なるのみならず是迄の周旋人等は政府の許可を得たるものにあらず概ね信用なく無責任の輩なれば移民の爲めには大に危険なるが故に領事館としては斯る移民の危険を知り且つ政府の政策及び法令の精神に違反したる事を黙止するに忍びず茲に論告する次第なれば我移民たるものは堅く決心して何人が如何様に勧告するとも決して渡米を企てざる様力むべし今移民保護法中參考すべき條項を左に示さん

第二條第一項 移民は行政廳の許可を受くるに非らざれば外國に渡航することを得ず

第二十一條 渡航の許可を受け又は渡航地を偽りて許可を受け又は渡航差止命令に違反して渡航したる移民は五圓以上五十圓以下の罰金に處す

第廿二條 法律命令に違反したる移民の渡航を周旋し代理人は五十圓以上五百圓以下の罰金に處す。

第廿三條 行政廳の許可を受けずして移民取扱人の行為を爲したる者又は營業停止中に移民を募集し又は其渡航の手續をなしたる移民取扱人及代理人は二百圓以上千圓以下の罰金に

處す
右論告す

何の眞似だ、人間が石ころじゃ無し、布哇に行くといふて出たものが其後何處に行くも勝手ぢやないか、ウルサク許可だの罰金だのといふて自國民の足を縛つた天罰で、遂に布哇轉航禁止にまで馬鹿を見せられたのであつた。イヤ早やどふも〜。

『日米』No. 8083 May 11, 1922)

(卅六)

|| 炭坑ボスの元祖

支那人虐殺の經過 ||

(子が日記の一節)明治三十六年三月九日ワイオミング州ロックスプリングに赴く、正午オグデン驛より出發せるなり、午後四時頃ロックスプリングに着す。停車場には久保澤悠策氏ボギーにて出迎へたり、瀛車中は七十度の暖度を保てるプールマン寢臺車に乗れるため此日の寒氣を知らざりしが、サテ此地に着くや寒風吹きすさみ雪降りたり。三月九日といへば陽春の花時にて加州のアーモンドの花を見てより旅行せる僕には、此寒烈の光景を見て驚きたり。停車場前のサルンにてウキスキー二三杯を傾け寒氣に抗せんとす、やがて久保澤のボギーに乗りて炭山第七坑に到る。途中の行程一哩半、此間予は冷え切りて齒の根も合はず、キャンプに入りし時は半死半生の行倒れの姿な

りき。

炭坑夫のキャンプに着くや力働義團長須田幸五郎あり、此人は昨冬より同志労働者を率いて此炭山にありしものなり、相見て大に喜ぶ。此夜予大に發熱してキャンプに倒れ起つ能はざる
こと十日間なりき。

ロックスプリングは海拔八千呎ロッキー山の裾野といふべき地勢を成している。茲に日本人にしてロッキー鎮臺の號ある鳥取縣人西山元が炭坑人夫頭として鎮座していたのであった。此人は實に邦人炭坑人夫供給者の元祖である。在米日本人歴史中炭山に關する重要な人物西山元を記録する前に此以前の事を少しく書く必要がある。

明治九年(千八百七十六年)頃は支那移民全盛の頃であつて、苟くも米國太平洋沿岸より山中部にかけて金礦、石炭、鐵道を通じて支那人の發展せざる地なく、實に山中部より太平洋沿岸の労働者は全部支那人の獨占であつた。其數約六万人と稱せられてゐる。

此頃支那人夫頭(ボス)にアセーといふ豪傑がおつた。彼は廣東州の人で孫逸仙と友人であつたと傳へられてゐる程の男で、可なり度胸の据つた親分であつた。此男がロックスプリングの本據を構へ、ワイオミング各地の鐵道、炭山に支那人労働者を供給していたが、此年同炭山に集りたる世界各國の移民は支那人の同炭坑に入り來りて就働せるを嫉み、ある時同盟して支那人のキャンプを襲ひ四十餘人を虐殺した椿事を惹起した。

此事件は炭坑會社の急報によりて米國政府は軍隊を急派し支那人を保護し、支那政府に謝罪して五十万弗の償金を支拂ふた。是を炭坑夫損害賠償事件と稱す。

ロックスプリングの重要な炭山はユー・ピー炭鑛会社と稱し米國第一と稱せらるゝだけありて此炭山には年中四千人程の坑夫が働いていた。處が炭山坑夫はストライキにかけては有名である。會社の深憂とする所はストライキである。其ストライキを未然に防ぐには各坑夫間の意志の疎隔を謀るに如くはない。そこで各炭山會社の智囊等は努めて同人種同言語の人を多くせずして異人種異言語の坑夫を多く集めた。斯くして各坑夫の意志の疎通を不便ならしめてストライキを防いだのであつた。

右の炭山經營策は資本家側の虎の巻であつた。それゆえ支那人虐殺事件があつた後は外国人保護の口實の下にロックスプリング炭山には米國軍隊が駐屯して常に支那人を保護してゐたことが十數年間であつた。

千八百九十八年(明治三十一年)支那人夫頭の豪傑アセーは炭山で病死した、此時ソートレーキ市に風雲を眺め氣焔を吐いていた青年西山元は同年十一月飄然としてロックスプリングの炭山に赴いた。此時は支那人労働者は稍々凋落して一角の勢力を維持するに足らなかつた。

西山はユー・ピー炭鑛會社を訪ひ日本人坑夫供給の事を談じた。ユー・ピー炭鑛會社は支那人に代わるものは日本人なりと

看破したかどうか審かでないが兎に角異人種たる日本人を歓迎することに西山は此年より炭山ボスとなった—私は此序で少しく他の炭山の元祖をの事を書く。

『日米』No. 8084 May 12, 1922)

(卅七)

Ⅱ炭山發展時代と

日本人の活動状態Ⅱ

米國炭坑に日本人を供給したる元祖は西・山・元なること前節に述べた通りであるが、日本人が炭山に働きたるが加奈太オニオン炭坑を始めとして次いで加州テスラ炭山には明治廿四年頃既に日本人の就働者があった。併しそれは坑夫ではなく坑外の雑業に服したものであった。眞の坑夫を入れたのは西・山・元が開祖だ。

明治二十六年(千八百九十三年)ユタ州マンタイ炭坑主なるウォールはユニオン炭坑より二十五名の日本人を得てマンタイ炭坑のヤードに働かしめたる記録がある。ウォールといふ人はオレゴン・シヨートライン鐵道人夫請負人レミントンの親友で其後鐵道に働ける二十人の日本人を同炭山に雇入れ頗る愛用したが四五ヶ月の後同炭山は産額面白からずして廢止した。西・山・元が最初ロック・スプリングに入れたる人夫は右ウォールが炭坑廢止の際に職を失いたる日本人を率いたのが抑の始めであつ

た。

西・山はロッキン鎮臺として海拔八千呎の高地に梁山泊的生活を續けていたのであつた。

記者尺魔は此當時桑港猫額大の地に「腮はづ誌」といふ滑稽雑誌を出し梁山泊を建設していた。西山は八千尺の高地より吾輩を笑つて居たと思はるゝ。

閑話休題、明治三十三年に稲垣某がニュー・メキシコのギャロップス炭坑に日本人を供給したが盛大ならずして終り。明治三十四年、橋本大五郎メキシコ炭坑會社と契約し、日本より大々的にメキシコ行移民を募集しユタ州から二十餘人の坑夫を送つたことがある。當時橋本大五郎はメキシコ名譽領事を拜命しているが、彼れはメキシコ人を鐵道に働かしめ、炭山に同國人を使用するなどメキとは關係の淺くない重要な人物である。

大五郎は明治三十四年八月ワイオミング州オークレーなるダイヤモンド・ヴィル炭山へ事務員窪田禎治郎を遣し、三十名の坑夫を送り後百人まで同炭山に働かしめた。

明治三十六年、倉永照三郎、井上久次郎等の手によりてロックスプリング第二坑に日本人を入れ松野倉之進事務員として五十名の日本人を働かしめた。

明治三十六は山中部に於ける日本人炭山の大發展をした年で後世に傳ふべきものである。此年コロラド方面には外園直一がマデエスチック炭山に人夫を供給し木山定造、高塚吉造共同してヘースチングス炭山に日本人を入れ、日米勸業社は此年三月

九日鷲津文三を特派し炭山を視察せしめ、同年秋、西山元と聯合して三百名の坑夫をロックスプリング炭山に供給した。此時主任が相川民之丞であった。

明治三十六年以後ワイオミング及びコロラド州の各炭山に日本人の就働した史實は枚挙に遑なき程である。曾て述べた通り日本人は支那人の足跡を辿って支那人と同じい運命に梟が付いている。併し茲に閑却すべからざるは、日本人は支那人と異なり土地に親しむことの興味と文明の利器を利用する能力が優っていた。

日本歴史を見ても在米日本人の歴史を見ても支那人は日本人の兄さんである。否寧ろ師父の如きものである。此師父たる支那人は米國に於て早く排斥された。而して弟子の日本人は之に對し何等の援助も與へず、對岸の火視で通過していた。師を尊敬せざる日本人は因果觀面、支那人同様の浮目に會はされている。我々は債罪の生活を今後續くべき運命を育っているのだ。

日本人は小樽口の民族である。其文明を剽窃することに於て世界無比である。而して小股掬ひに於て世界無比である。小樽口小股掬ひこんな特長のある日本人が果して世界人類の優勝者であらう乎。私は斷じてノーと云。

日本人が小樽口、小股掬ひの傾向を帯びたのは徳川末期から明治年代の産物である。其實日本人は花の富と、虫の音と、鳥歌のとに憧がれて風流第一の民族であった。私は此次第を他日書いて見たい。

『日米』 No. 8085 May 13, 1922)

(卅八)

|| 先生とチャン公の由來

支那人は日本人の先輩 ||

今頃の日本人は生意氣に支那人を目してチャン公といふ輕蔑詞を用いるが、これは悪いことだ。チャン公とは、熊公、八公の如き稱號と同じい意味になっている。人様を輕蔑した稱號で排日米國人が日本人をチャップと云に同じき失敬の言葉である。

在米日本人が支那人をチャン公と唱へたしたのは、故黒澤格三郎(醫師)だと思はれる。格三郎は地口駄洒落の妙を得た醫者で桑港日本人間最初の醫師として有名な男であった。彼れが支那人をチャン公と唱へたのは、明治二十七年日清戦争當時から日清戦争は日本を世界に廣告するには頗る有力な戦であったが、此時から日本人は舊恩を忘れた自大野郎となったのであった。

日清戦争前までは支那人を目して先生と唱へていた。先生とは師匠先輩を意味したる一種の敬語である。

日本人が支那人を目して先生といふべき理由は日本歴史上に明々白々たるもので、實に日本の文物制度はすべて支那から習ったのである。

史を按ずるに文武天皇御宇大寶元年し、粟田ノ直人を遣唐大使に任じたるを遣唐使の始めとし元明天皇(女帝)養老元年(西暦七一七年)に安倍ノ安磨を大使とし藤原ノ馬養を副使として渡唐せしめ此時安倍ノ仲麿、吉備の眞備といふ大學出身の秀才を唐土に留學せしめた(日本は此頃皇室直轄の大學があつた)。此一行の中で僧正義淵の徒弟にして最も卓越せる玄昉といふのも留學僧として渡唐した。それは丁度明治初年頃から十年頃まで米國留學をした日本秀才と同じ趣であつた。

遣唐使、遣唐留學生等は支那文物制度を習ふて日本の制度を改めた。奈良朝から平安朝まで約百年の間、日本の諸制度、諸設備はすべて支那に模倣したものである。特に注意すべきは帝都の縄張り設計などは丸で唐から傳へたもので、九陌九條の町割りから羅城門までスツカリ支那物質文明を其まゝに移植したものである。

右様の次第で日本人は支那を先進國として敬ひ、在米日本人も此傳統の感化を受けた關係上支那人を先生と唱へたものであつた。

米國に留學した日本人が一も二もなく米國を謳歌してデモクラシーを直ちに日本に實行しやうとする經卒と千年以前に支那に留學した日本學生とは少し違ひがあるやうだ。古代の日本人留學生は支那で色々の學術を習つて來たけれども、それを日本化していたやうだ。そして日本固有の文明を飽迄維持していたやうだ。其一例として支那留學生たる安倍ノ仲麿が支那を去ら

んとする時に歌つたのに

「天の原ふりさけ見れば春日なる、みかさの山に出でし月かも」
右の歌を吟詠した時、支那人には分らないので、之を支那譯(漢詩)にして見せた處が王維(玄宗皇帝時代の大詩人)始め支那の文人等が涙を流したとある。

咄しは大分横道に這入つたやうだが、兎に角、日本人は支那人を師として文明を傳へたことは過去千二百年來である。ソコで我々日本人は支那人を先生と呼ぶ道理があるのである。

支那人は日本國の師匠のみでなく米國移民の師匠であつた。加州を始め山中部北部諸州を旅行する人は各都市に支那人街を見るであらう。其支那街は當時の支那移民の發展を記念すべき好個の歴史資料である。そして此支那人街の一隅に日本人が居候的に巢を作つた事蹟を見るであらう。

「支那町に居候するジャップ哉」此の諷句は私が二十五年前サンノゼで詠んだのであるが、日本人は全く支那人の居候から發達したものである。考へて見ると支那人先生をチャン公など呼ぶのは忘恩の野郎共の申分だ。

『日米』 No. 8086 May 14, 1922)

(卅九)

|| 女がなければ世が暗

土着永住の奨励 ||

在米日本人が明治二十三四年頃に二千ほど居たが、正業者女房持は僅かに五六人であった。赤羽根忠右衛門、萩原眞、東ヶ崎菊松、田中鶴吉、竹山祐嗣、此他セーラ旅館に二三人の女房持ちがあつたが記憶していない。

此頃自分の女房を「働き」と稱して醜業婦にしていた者は可なり多かつたやうだが一々記載するのを見合せる。日本人醜業婦が此時代に七八十人程であつた筈で其大部分はピンブと稱する色男、乃至亭主持であるゆへ、コンナのを計算して女房持とすれば其數は百名もあつたかも知れぬ。

日本人醜業婦の全部は白人、支那人相手で日本青年は指を嚙へて其盛況を傍觀するのみであつた。

此頃渡米した日本青年學生はいはゆる神州清潔の民で醜業婦を蛇蝎の如く悪んだもので、風俗矯正といへば直ちに醜業婦撲滅を云々した。基督教會を中心とした矯風運動がしばしば活動して桑港はモートン、セントメリー、デュポンド、クキンシー等の各國賣春婦の門を叩いて轉業を勧誘したのだが、此運動は餘り効を奏さなかつた。

本文の記者等は醜業婦撲滅運動には賛成でなかつた。元來醜業婦といふものは其女自身が醜業を營むと云ふよりも、男の方

が之れを要求するのである。淫を買ふ男の方が却つて醜業を助長したので、女だけを責めるのは間違っている。そこで此頃から妻帯論が唱道された。吾輩等は此妻帯論鼓吹者の先頭に立つたものである。

私が明治三十年頃に發行していた「腮はづし」といふ雑誌に左の風刺的一文があるから抜粹して見よう。

後癡意氣賦

寸善尺魔法師

是歳十月ノ望、支那街ヨリ歩シテ將ニ本社ニ歸ラントス、客予ニ伴ツテ脱奔ノ坂ヲ過グ、夕陽已ニ傾キ、白首徘徊ス、妖艶笑ヲ帯ビ我面ヲ見ル、顧ミテ煩腦起ル、行々談ジ相答フ。已ニシテ歎ジテ曰ク、人アレドモ家無ク、男アレド女無シ、身輕ク尻早シ、此同胞ヲ如何セン。曰ク、今ヤ志士ハ舉ツテ遠征ヲ説キ、植民ヲ奨ム、大言壯語其狀銅鐸ヲ敲クガ如シ、顧フニ安ソゾ女ヲ得ル所ナラン乎。我會テ之ヲ知人ニ謀ル、知人曰ク、我郷美人多ク、渡米ヲ望ム久シ矣以テ其必要ニ充テン、是ニ於テ旅費ト寫眞トヲ送ツテ女ヲ呼寄セントス、政府狐疑アリ、頑々専制、胸狭ク心小、愚説頻リニ出ヅ、只ダ日月ヲ費スノミ。而シテ面倒言フベカラズ、予口ニ任セテ頑論ヲ破リ、女ヲ娶リ一家ヲ構ヘ夫婦共稼セザレバ植民ノ實ヲ擧ゲ、貿易ノ利ヲ占ムル能ハズ、蓋シ政府之ヲ行フ能ハズ、盲然トシテ其渡航ヲ禁止ス、移民自墮落トナリ、博奕ヲ打チ、女郎ヲ奪ヒ合ヒ、騒動喧嘩ス、米民之ヲ嫌ヒテ排斥ヲ唱ヘ、凜乎トシテ其レ當ルベカラザル也。

反ッテ渡航者ヲ自由ニ放任シ、其行ク處ニ聽セテ而シテ出セ、時ニ娼婦トナルモノアランモ、何國モ同ジ、世ハ車輪ノ如シ、利ト害トハ五分々々ノミ。須臾ニシテ客去リ、予モ亦坂ヲ下ル。途ニ一牧師ニ逢フ、怒氣奮然トシテ予ノ顔ヲ睨メ、而シテ言ツテ曰ク、渡娼ノ策宜シキ乎。其姓名ヲ問ハバ默シテ答ヘズ、嗚呼嘆々我レ之レヲ知レリ、四年ノ昔、大呼シテ廢娼ヲ唱ヘタルモノ子ニ非ズヤ。牧師愧然苦笑ス、予モ亦笑ヒ再ビ言ハントスレバ、其形ヲ見ズ。

之より五六年前桑港學生間にバチラ黨なるものが起つた。獨身生活で一世を送るといふ主義の下に樹てられたもので、安孫子久太郎は此黨の牛耳を執つたものであった。然るに何時とはなしに此黨の主義信條に背いて結婚する者が現はれ、獨身黨は年と共に瓦解の運命に立至つた。安孫子は明治四十年まで孤城を守っていたが、翌四十一年に遂に其主義を抛つて奥様を迎へられた。

獨身黨員でなくして獨身を維持している名士は唯だ副嶋八郎のみである。

私などは始めから妻帯主義であつた、それが爲め子澤山で大貧乏を今まで續けて來たのであつた。

『日米』No.8087 May 15, 1922)

(四十)

Ⅱ 最初の日本使節

米國側の記録Ⅱ

千八百五十八年(安政五年)の下田條約に依ると、同條約の批准交換は華盛頓府に於て行はるべき筈で、それは日本に始めて來た海外の使臣は米國であるから日本から派遣さるべきであるとの見地から外國奉行たりし新見・豊前守を大使として米國に特派することになったのだ。

丁度日本皇太子殿下が英國御訪問ありしに對し英國皇儲殿下が其御答禮として日本に御來訪遊ばされたと同じ趣きである。

然るに新見大使が米國に派遣せらるゝ當時は日本から海外に出づるものは死罪に處せらるゝ禁制が歴々として存したる時代ゆへ、特派の使節と雖も大問題であつた。そこで廟議が一決して愈々國禁を破ることになり、千八百六十年(萬延元年)二月に此使節一行は日本を離れた。

フォスターの米國東邦外交史に據ると使節の一行は七十一人で華盛頓にある記録には六十人である、ソコで行方不明の者が十一人いる譯になるが、此十一人は數にも入らぬ下郎輕輩であつたのか、又は途中で死んだのか知れない。

若しそれお花さんと灘萬の主人を西園寺遣佛大使一行に數へるや否やで、平和會議に於ける日本使節隨員の數に不同を來すのだから歴史湮滅の嘆は隨處にある譯だ。

新見大使一行は米國軍艦に乗り桑港に着き南下してパナマ地峡を超え更に大西洋の浪にゆられて同年五月華盛頓はウキラード・ホテルに落付いた。木立の多い華盛頓に初夏の風かほる五月に着くプログラムは、タウンセンド・ハリスの遠謀深慮の致す處、米國側では此遠來の珍客に對して主人振を發揮した。

華盛頓の夏と冬とを知つたなら實に主人側の遠謀深慮が窺はれる。華盛頓の冬は實に惡るい氣候だが、陽春から夏へかけては駭蕩たる別天地で、初夏の旅人を喜ばしむるに足るのである。大統領ブキャナンが公式に使節を迎へたのは五月十七日、その日、未明に一行の一部は白聖館に來集して一行に宛てられたる室を見分したとき旨を申込み、それから大使は馬車に乗り海兵巡查、軍樂隊に護られて白聖館に乗り込んだ。物見高い彌次馬が押すなぐの大混雜で此一行を見物すべく滿街を埋めたのは無論のこと、白聖館の中でも接見室に宛てられたるイーストルームには共和國の紳士淑女等が椅子テーブルの上に充満して東邦の珍客を待構へたとある。

同年秋、英國エドワード七世が東宮にいまして、白聖館を訪問なされたことがある。此時イースト・ルームには馬丁、酔漢、乳母、子供までが群集して、無禮講を極めたものであつたそうである。當時の記録に「貴賓の一行は解放されたるデモクラシーを現實に目撃せられたるならん」と書いてあるが、其時には白聖館の窓から出入したデモクラシーが澤山あつたらしい。蓋し白聖館が多少面目を具へたのはルーズベルト以來のこと

で、其以前は國民の建てた建物だから國民に屬すべきものだといふ、米國民一流の見解から誰れ彼れの區別なく勝手に飛び込んで來たものらしい。クリーブランド時代でも野天同様に心得て白聖館の中で勝手に禁酒演説や救靈演説をした位で、白聖館を大道と心得ていた程であつた。

此の白聖館に訪問したのが忠孝の檻に育てられたサムライで、大統領との接見式が正午に行はれた。主席使節新見・豊前守は紫の絹の廣き袖の衣と同じ廣いパンツを着け其他は紫色の同じ装束を纏ひ、何れもキャップを戴いて紐を頸に結んでいたと米國側の記録にある。

今に残る寫真で見ると富士の卷狩の五郎、十郎みたいな格構で、同じ長さの刀を二本差し、草履或はサンダルの如きものを穿いている。當時の米國人の得た印象は極めて錯雜したものであつたらしい。（此稿つゞく）

〔日米〕No. 8088 May 16, 1922)

（四十二）

Ⅱ 最初の日本使節

華盛頓に於ける光景Ⅱ

定められたる接見室に入り來たりたる使節は、嚴肅な沈黙を守つて三度お辭儀をした。大統領の前に立ち更に同じ數のお辭儀を繰返した。それから元に戻つた。それは將軍より任命せら

れたる使節のお辭儀其次に自分が米國に派遣せられたる御辭儀で都合三度になる譯だ。

三度のお辭儀をした後に將軍(徳川)の親書を捧げた。大統領から答禮があり、式はそれで済んだ。使節の退くに方り日本隨員が「軍隊式の正確を以て御辭儀をした」と窓から飛込んだデモクラシーの連中が驚嘆して記録しているから面白い。

條約批准の正式應答が済んだ後はサスガ米國人は女の天下である。此頃華盛頓交際社會の女王であったレーン嬢といふ美人が内閣婦人連と共に使節一行に握手を求める。處が日本使節に於ては、女に握手など致しては大統領に對して失禮に當ると逃げたらしい。レーン嬢といふ美人は大統領ブキャナの姪で白聖館社交を掌り有名な女であった。

レーン嬢の寫眞が今尙も残っているが、之を見ると彼女は豊頬曲眉、バルーン、スカーフだから、今時の寝亂れ髪にヒステリー面、二本の脛の長い程には使節をして慨嘆せしめなかつたに違いない。

土曜日の午後に使節の一行は白聖館の庭で海軍々樂隊を聴いた。そのあとで大統領は親密な友達に左の咄をした——曰く、「彼等日本使節は俺を皇帝陛下と呼ぶ。甚だ几帳面な人達である。彼等の爲すべきこと御辭儀の数まで日本出發前に文書を以て訓令されて来たものらしい。彼等には俺が解らない。土曜の軍樂隊演奏の際に俺が友達を見付けて握手したらう。處がそれを見た彼等は合衆国皇帝たる俺が庶民の中に交つて握手するこ

とが經卒千萬と考へていたらしい……。彼等は何でも手帳に書付ける。見取圖を書く。何でも見遁さない。そして彼等は自ら持することが甚だ高い。勿論お辭儀は低い、訓令された度數以外には決して頭をさげないとある。

他の記録には斯んなのがある——土曜は軍樂隊演奏の際にレーン嬢が小栗豊後守のカタナを見たがった。この小栗は其職司からすると、一行の監督菅(大目附役?)であり、階級からすれば三番目の人である。豊後守はカタナを手に取りて——カタナとは彼等の携へる二本の武器の長い方の名稱である——いとも優雅なる微笑と共に日本語で「貴女よ、ご覧なさい」と謂つた。そこでレーン嬢は、輝く劍の鞘を拂ふて——鞘は半ば木を、半ば革で銀を鏤めている——充分見てから所有主に返した。所有主は彼の名譽の象徴であり護身の具たる武器が斯かる美人の興味を動かしたることに就き愉快を感じたのが明らかに見えた。

右の記録では小栗は Ogoori と綴られ、カタナは Katana で英語國民の容易に發音を間違はない形に書いてある。將軍は無論タイクーン Tycoon で翌年から白聖館の主人になったリンコーンの秘書役のジョン・ヘイなどが大統領をタイクーンと綽名をつけたことなどを思ひ合はせると面白い。但し小栗豊後守の祖先を愛蘭人だと主張する氣は毛頭ない。

使節は十六箱の贈物を献げた。金銀を鏤めた鞍やら寶劍やら茶器やら高價の物が澤山あつた、今白聖館のグリーン・ルーム

にあるキャビネットは此時の献上品の一つである。序でだから言ふが其室に支那から贈られたサツマ焼なるものがある。華府駐箚の大使も御退屈の節には國際的ジョークにしては如何で御座る。

大統領ブキャナンは使節に金牌を送った。それは「千八百六十年日本より米國に來りし最初の使節を記念す」と銘打たれてあつた。この金牌は日本の何處かに有る筈である。若しそれ舊幕瓦解と共に零落した幕臣の兒供等が、融かして賣つたなら茲にも歴史の湮滅の嘆がある譯である。

『日米』No. 8089 May 17, 1922)

(四十二)

Ⅱ米國佛教會の始まり

今の坊主は高利貸Ⅱ

明治三十一年私は誹毀罪の爲め入牢の身となつた。これが有名なデロン事件である。此事件の一部始終を話すと長くなるから本稿では述べない。

翌年の春に私は出獄した。當時新世界社長副島八郎、同主筆若宮宇之助、山口縣人會長河村八十武、和歌山縣人會長津田立一、梁山伯同志等は私を大黒屋に迎へて出獄祝會を開いてくれた。

入獄中新世界社長副島八郎は私に同情して毎週二弗程の差入

れをしてくれた。使者には岩波といふ早稻田出身の文學者であつた。此頃私は毎日新世界新聞に三欄程の文章を寄贈してゐた。「洋行歸り」「お玉さん」「新救世軍」など可なり多くの創作をしたやうに記憶する。

明治三十二年春、私は新世界の記者となつた。それは副島君の厚意に報ゆるためである。此頃の新聞生活は中々面白いもので在米日本人歴史上見のがすべからざるものがある。それは追て書くことにするが、

私が明治三十二年、新世界記者生活をした時、在シアトルの舊友山田作太郎「鈍牛と稱し滑稽文の泰斗」から添書を携えて來た一青年があつた。竹内某といふのであつた。此青年は哲學館(今の東洋大學)の出身で私の同郷の先輩、井上圓了の弟子であつた。

山田の添書を携えて來た竹内青年は日本から來る御多分に洩れぬ漠然たる書生であつた。私が「貴様は何しに米國に來たか」と聞くと「學問をし來た」といふ、金があるのかと聞くと一文も無いといふ。然らば如何するかと聞くと、宜しく頼み申上げますといふ。

折角添書を持つて來た青年ゆへ打捨てる譯にも行かず、其翌日から新世界新聞の配達をやらした。此青年は小氣の利いた男で時々哲學上の話などもする、「達磨廓然」の咄なども知つてゐる。自力本願の極致が他力本願だといふ消息も解してゐて東洋哲學上の咄相手には面白い青年であつた。

或時「竹内貴様は新聞配達などをしてるよりも佛教青年會を企てよ見る、此國にいる日本人は大部分が眞宗の門徒であるし米人中にも基督教の信仰に飽きた連中も澤山いるから佛教を此國に宣傳すると屹度面白いよ」

私が竹内に此話をしたのは所謂漠然たる咄であつた。併し私は日本佛教を此國に布いて見たい考は此以前から抱いていたのであつた。

明治二十九年、西本願寺の僧伊藤洞月といふのが歐米視察をして桑港に來たことがある、此時私は同僧と會談し佛教を米國に宣傳してはドウかと尋ねた。然るに洞月の答は左の如くであつた。

「日本の佛教は日本で布教すべきもので外國には不向のものであります。日本佛教は尊王奉佛といふ變な形になつたので世界に出すことは考へものです」

洞月の布教觀は實に達觀であつたが、私は其頃洞月の説を否定していた。私の佛教觀は世界の全人類を光被すべき大宗教なりと感じたのであつた——今もそう思ふている——洞月の此説は私には狹隘なる邪説としか思へない。

そこで竹内青年が渡米したのを幸にして佛教青年會を起さしめた。竹内は配達の傍ら名簿を携えて遊説し、其頃桑港に居た三崎正教といふ坊主と共に三ヶ月間運動の結果三百人ほどの會員を得た。

そこで私は更に佛教青年會に獻策した。「竹内、已に三百人

の會員を有する以上、日本西本願寺に申請して開教師を送らしめよ、屹度出来るよ」竹内は私の獻策を半信半疑に聞いて居たが明治三十二年春、西本願寺に開教師派遣の請願書を出した。處が按じるより産むが安く、同年秋、西本願寺の秀才西島覺了、蘭田宗恵の兩人が第一の開教師に選まれて渡米した。蘭田は其後本願寺大學々長、西島覺了は慈恵病院創立者として有名である。(つゞく)

〔『日米』No.8090 May 18, 1922〕

(四十三)

Ⅱ米國佛教會の其後

他力本願の衰頽期Ⅱ

明治三十二年、佛教青年會が始められた頃は、日本人の生活状態は實にあはれなものであつた。佛教青年會が始めて會場を有つたのはポーク街であるが、此家には無論カーベットは敷かれてなかつた。ペンキの剥けた荒廢した家を借りて佛教青年會の本部にしたのであつた。

最初の開教師は西島覺了師で蘭田宗恵師は少し後れて渡米した。西島は才氣縦横、志想堅固なる佛僧として内外人の信念を繋いだ。蘭田宗恵師は病弱でヒヨロ／＼した學究的人物であつた。併し學問が能く出來て、白人信徒も集め講演を企てたことは屢々あつた。

明治三十三年に原田了哲といふ人が渡米し、サクラメント佛教青年會の開教師となつた。此人は西本願寺の秀才で、サクラメント市に來てから多くの信徒を拵えた。此頃私はサクラメント市に在留して同師と懇意の間柄になり、或る時は家を隣りて毎日共同生活した事もあつた。

明治三十四年にはサクラメント佛教青年會はオー街の巨屋を二千五百弗程で買収した。之れが加州に於ける佛教會土地所有の筆頭である。

オー街の佛教青年會が買つた土地家屋は、堂々たる建築でルームの数が二十もあり、屋敷は三ロツト打抜き處であつた。此家は、化物屋敷として白人間には評判がわるかつた爲め、二千五百弗で買収したのであつた。其頃の噂では、此家には女の幽霊が出る、二階の一室に宿泊すれば必ず女の幽霊に見舞はるゝといふのであつた。

私共獨身者等は此頃女とあれば幽霊でも嬉しかつた。そこで私は其幽霊ルームに一夜を明かしたことがある。「原田君、私は女の幽霊に逢いたいから今晚泊めて下さい」といふと、原田師は「ウン泊り玉へ、幽霊が出たら僕に急報し玉へ」といふ。それで此幽霊ルームに一夜を明かしたが不幸にして女の幽霊が出てくれない。

「女の幽霊でも出てくれれば他力本願も有難いものだが、出ない以上は自力で女を捜すより方法がない」と思ふた。私は此頃から他力本願を馬鹿にし始めたのであつた。

絶対にアミダ如來を頼むのが浄土真宗の教義で、自力などが毛筋ほど這入つても極樂往生が出來ぬと力説するのが真宗本願寺の信條である。そこで此タノムといふ言葉が色々に解釋されタノムといふは自力であるの、「たのませ・て・救へ玉へるミダなれば、たのむ心も我れと起らじ」など、人間の意思を全然滅却した教義の註釋などが出で、やれ自力だの、やれ三業だのと、八ケましく議論があつて、門外漢をアキレしめたこともあつた。

米國に來た眞宗開教師は右様の愚論に拘泥せない新式の人々であつたが、爛熟した日本佛教の形式を傳へて、搭堂伽藍を建立する傾向を帯びて來た。先づサクラメント市で化物屋敷を買入れたるを始めとし、フレズノ市では淺枝開教師が同地方の愚夫愚婦から金を集めて大伽藍の建築を企て、ロースアンゼルスでは泉田開教師が同じい計畫をして本堂を建立し、桑港でもパイン街に佛堂を建立した。

今から考へると私は竹内青年に餘計な策を與へたと悔んでゐる。私は元來禪宗の信徒であつた。私は從容錄第四則の世尊指地の話が快心の史實として尊敬していたのであつた。

「世尊、衆と共に行く次で、手を以て地を指さして曰く。此處に宜しく梵刹を建つべし。帝釋、一莖草をとりて地上に挿して曰く。梵刹を建つること已に竟んぬ。世尊微笑す」

右の本則が私の哲學的見地であつた。一本の草を地上に挿して大伽藍と觀ずる「隨處に主となり縁に遇ふて宗に即する」大悟道を嬉しく感じたのであつた。然るに眞宗佛教は何をしてい

るのである乎。釋尊から大痛棒を喰はせらるゝ下根小智の迦藍沙汰に没頭して人心本來の面目を閉却している。他力本願の末路は近づいて来た。

『日米』No. 8091 May 19, 1922)

(四十四)

|| 炭山に於ける支那人

虐殺の動機と其光景 ||

支那人が日本人の兄さんで在米日本人は支那人の發展より後るゝこと二十五年、そして同じいやうな目に遭ふている消息は前號において屢々書いた。東洋人が白人優勢の土地に來て虐められるのは憤慨に堪へぬといへば其通りであるが、天の其民を地上に保育し玉ふ大攝理から考へれば悲觀すべき筋合の者でないとも觀ぜられる。私は樂觀的見地から支那人虐殺の經路を寫して見たい。

支那人が千八百七十五年時代即ち明治八九年頃は曾て述べた通り、太平洋沿岸、山中部諸州にかけて約六七萬人働いていた。そして此頃大西洋沿岸及び山中部諸州に集まりし白人等はカウボーイ的の冒險家のみであつた。喧嘩争鬪は飯よりも好物な若連中が多かつたのは勿論である。公平に評したならば支那人は古い文明を有している個人主義の民族であり白人は新しい文明(?)を有てるヤレ／＼的の雷同民族であつた。

支那人は此頃山中部の炭山に八百人位、同じユー・ピー鐵道に亘りて三千人も働いていた。其數に於て固より白人に劣らないが彼等は個人主義の絶頂に進化した丈け團體的結合には乏しかった。由來個人主義民族の優勢を示す唯一無比の特色は團體結合にある。言を換へて云へば附和雷同のヤレ／＼的行動である。然るに支那人はボスを重んずる服從的道德を知り利害の打算が明白であるため、カウボーイ的の團結力に欠けていた。これが炭山に於ける支那人虐殺の起こる由因で、支那人は文明過ぎたために虐殺されたとも考へられる。

虐殺のあつたのは支那人排斥法案が成立した二三年前の出來事で、此頃は政治家の尻馬に乗つて支那人排斥を高唱するものや、新聞の尻馬に鞭打つて支那人排斥を力説する政治家が多く現はれた。一般群衆の心理は此毒瓦斯的空氣の中に養はれたゆえ何かのハヅミで支那人を陵辱しようとしたものである。但利害の打算に明かなる資本案乃至事業家階級は恒産あるが爲めに恒心ありて感情激發の渦中に巻き込まれなかつたのであつた。

ロッキー山麓、ロックスプリング炭坑に於ける支那人虐殺の動機は世にも有りふれた動機であつた。或る日同炭坑第七坑にて一支那人と白人坑夫との争論があつた。此事もとより小事であるが白人坑夫が争鬪の際微傷を帯びたので、此事を傳聞した白人坑夫等は群を成して支那人タウンに押掛け其家屋に放火し逃る支那人を銃殺した。其銃殺されたもの四十名に及んだ。

當時同炭坑に働ける白人は重に愛蘭種米人、伊太利移民、獨逸

人、テニシ人等のワイルドウェスト氣風の野次馬であつた。

右の虐殺事件は炭坑會社の急報に依り合衆國政府は直ちに數百名の州兵を繰出し支那人保護に當らしめ、暴徒の主謀者と覺しきものを捕縛した。華盛頓駐劄支那公使は之れを國際問題として米國政府に交渉し炭坑會社書記は二名の支那人證人と共に華府に出張した。此事件は随分米國中央政府を困らせ結局米國は支那人今後の生命財産を保護すべき保障を爲し、常に州兵二百名を駐屯せしむることとし支那人の受けたる損害に對して五十萬弗の償金を支拂ふこととなりて段落を告げた。

右の州兵駐屯は約二十ヶ年間繼續し明治三十一年に於て引揚げた。明治三十一年は支那人夫頭アセーが死亡した年で、西山元が始めて日本人坑夫を同炭坑に供給契約した年である。

炭坑會社は此頃より斯く各國人を雇入れて均衡を保ち、以て同盟罷業を防ぎ、同炭坑には二十八ヶ國の人種をキャンプを區別して就働せしめた事がある。

日本人は支那人に次いで排斥を受けているが、未だ右様の迫害を受けたことが無い。そして今後も生命的迫害を受けることは無いであらう。米國は既に秩序ある米國となり移民教育の普及は四十年前と同日の論でない特に太平洋沿岸諸州の文化は驚くべき長足の進歩を現はしている。排日論は追々學理的に進んで來た。我々は大いに戒めねばならぬ。

(『日米』No. 8092 May 20, 1922)

(四十五)

II 加州開拓の先驅者と

妻帯媒介人の巨人 II

今日の羅府は加州の羅府でなく米國の羅府となつた。日本人の此地に在るものも其數に於て加州第一である。併し羅府は最近二十年前に發達した都會で、日本人の歴史も同様である。

今より二十年前には羅府日本人の數は五百に達しなかつた。此當時羅府に周旋好きを以て有名なる人があつた。それは菊池武治といふ人である。

菊池は今より二十年前羅府に於て土地周旋業を開き土着永住を鼓吹し、一面には妻帯を獎勵した。此當時日本人にして土地を所有する者一人もなく、妻帯者も亦數人を出でなかつた。

「土地を持たしむるに如くは無し」とは彼れの常に抱懐せる經世策であつた。そこで彼れは土地周旋業の看板は名のみにて細君周旋業者とも云ふべき行動を執つた。

處が土地を賣れば手数料になるが妻を周旋しても手数料にはならぬ。手数料にならぬのみならず此仕事は繁昌すればする程身錢を無くする營業である。故菊池は之れが爲め少なからぬ損失を招いた。某氏の計算によると菊池は羅府在住十年間、百人の配偶者に交渉を試み、七十五人の媒介をしたとある。

彼れは早くより羅府に青年會を組織し、後日本人會長となり土地と妻帯を勧誘すること實に十年一日の如くであつた。而し

て彼の恩顧を受けたる青年擧げ數ふべからざる程であった。悲しい哉。彼れが牛耳を執れる青年會は數千弗の負債を生じ、彼れは其負債に堪へずして、身を雲烟の中に投じ、杳として其消息が聞えぬ。

世間彼れが負債のために身をくらませるを非難する者は少くない。好漢志望徒らに高く手の之れに及ばざる者があつたであらう。併し此失脚の一事を見て彼れの功勞を湮滅してはならない。

時代は人を犠牲としたまた人を成功せしめる時代の勢力は人意を以て迂ぐべからざるものである。若し（若を許すならば）菊池が今日の盛時に逢著し、其抱持せる經倫を行ふたならば、彼れは決して落魄の運命を見るもので無かつたであらう。悲い哉、時は人を待たなかつた。

私は此編に於て菊池を追懐するのは、單り菊池に對するの情を洩すためでない。世間多くの人に「勝てば官軍、負くれば賊」の態度を以て處世の要道と心得財あれば敬ひ、財なければ卑しなるの惡弊に墮入しつゝあるを慨かんとするのである。それ財餘りて志なきものは貧にして志ある者よりも貧である。此點に於て私は菊池が貧に居て魏然たらざりしを惜む。

私は此機會に於て故野田音三郎を追懐せざるを得ない。彼れは明治二十二年に渡米し、櫻府フレスノの開拓者として、夙に一般に認められ、モントリー漁業者の開祖として農會創立の鼓吹者として其同胞に盡したるの功勞は多大であつた。而かも彼

れは貧を以て一生を終つた。其志固より蓄財でなかつたから貧を以て終るも、彼れの悔ゆる所でなかつたであらう。併し一般人は彼れの貧を笑ふて彼れの功勞を記せざるの忘恩を恥ぢないやうである。此點に於て私は野田の貧を悲しまずして、世間人心の陋劣を悲む。

今日パイオニアと稱せらるゝ人の中に其富巨萬を算する者は少なからず。而かも顧みて其功業を誇り得るもの幾人ある乎。富を抱いて世に盡さゞは社會の害毒である。蓋し富みを得んとするの心は世に盡さんとする志を基礎とせねばならない。世に盡さんとするは一種の略奪者であるまい乎。

スタンフォードは一介の書生より身を起し巨萬の富を作つた。生前彼れは其全部を大學に投じて惜まなかつた。カネギーは一介の勞働者より起つて數億の財産を作つた。而して其大部分を社會奉仕のために抛つた。日本人の某々者は米國に渡りて富を作つた。そして故郷に莊宅を構へ餘財を高利に貸付けている。アングロサクソン人と日本人意氣の區別が茲にあるならば、私は日本人の前途を容易に樂觀し難い。

『日米』 No. 8093 May 21, 1922

(四十六)

Ⅱ 米國最初の二領事

富田と高木の渡米Ⅱ

米國駐在日本帝國領事を任命したのは、明治五年紐育に始まり、富田鐵之助が第一番目で其次が桑港で明治六年高木三郎が副領事に任命せられた。此二人は慶應三年日本幕府最初の公許留學生である。彼等渡米の動機と其當時に於ける日本政府の海外的交渉を書いて見る。

御承知の通り徳川政府は長い間、外國との交際を禁じていた。寛永十三年(一六三六)三代徳川家光の時に老中より長崎奉行への訓令を見るも其嚴禁の消息が分る即ち左の如くである。

「邦人を外航せしむべからず、若し忍びて渡航する者あらば其者を死刑に行ふべし。又已に外國へ移住し日本へ還り來る者死刑に行ふべし。」

右の訓令のあつた翌年寛永十四年十一月、島原に於て天主教徒が亂を起したので、松平信綱九州諸藩の兵を率いて之れを討ち其後は愈々鎖國の方針を固執し、耶蘇教を嚴禁し、之を犯す者は誅戮し、又禁書令といふのを布き支那譯と雖も外國事情を窺ふの書物を禁じ獨り通詞醫師と天門方のみに和蘭書を繙閱するを許した。これは一向に世界の大なるを知らしめざる政策であつた。

處が其後二百二十年間世界の發達は長速度を以て日本を刺戟

し、嘉永六年六月には例のペルリ提督が軍艦四艘を率いて浦賀に來り、翌年正月更らに七艘の大艦隊を率いて浦賀に來つた。

此年さすがの徳川政府も開國を餘儀なくせられ、次で安政五年米國使節タウンセン・ハリスと假契約を結んだ。

米國は慶應年間に桑港横濱間の航路を開き、潜行者は續々として現れる。此勢は到底防ぎ切れないと覺つて、幕府は遂に慶應三年學術研究の爲め海外渡航希望者に對して許可を爲すこととした。

其當時、勝安房守は其息小鹿を米國に留學せしめ、海軍修業をなさしむる意があつたが、何分小鹿は十三歳の少年であつたから適當の隨行者を物色してゐた。此時勝の塾生に富田鐵之助、高木三郎が在つた。勝は之を隨行者に簡拔せんとし其旨を傳へると、兩人は大に喜んで承諾した。

そこで勝は各一箇年學費一千兩を支給するを條件として、富田を仙臺藩から、高木を庄内藩から借り受けた。此一行は慶應三年七月二十四日米國郵船に搭乘して横濱を解纜した。當時高木三郎が受領せる旅行免狀は日本最古の海外旅券で頗る興味のあるものであるから左に抄録する。

第六十六號

限五ヶ年 軍艦奉行

勝安房守家來

生國出羽 高木 三郎

年齡 二十六歲

口 常體、身丈五尺三寸、

面 丸キ方、眼大キ方、

鼻 常體、

書面の者安房守總領勝小鹿従者として亞國へ罷越度旨願に因り此證書を與へ候間途中何れの國にても無故障通行せしめ危急の節は相當の保護有之候様其國官吏に頼入候

慶應三年丁卯年四月七日

日本外國事務局

此旅券の番號は第六十六號であるから、此時代に各藩より英露、佛三國に留學生を派遣せる消息も解し得られる。

右の如くにして富田、高木の兩人は勝小鹿といふ十三歳の少年をいたわり乍ら渡米したのであったが、彼等がボストンに至りて英語の研究に従事せる間に日本は戊辰の大革命が突發した。

武士道の感化を受けた兩人は維新革命を如何に感じたのであつたか分らないが、兩人とも主君の爲めに盡さんと考へたらしい。そこで翌明治元年六月桑港から便船に乗って歸朝した。

十三歳の小鹿は、此時ニュープランズウィックに勉學せる伊勢太郎(實は小楠甥横井左平太)に託された。

富田、高木兩人は歸朝早々勝先生を訪問したる處、先生より「何故歸つて來たかコノ馬鹿野郎」と叱り付けられ、時勢を知らざりしを悔へ、同年十二月再び米國留學の途に上つた。其後此兩人の事を書けば澤山面白いことがあるが、餘白から簡單々々

の聲が聞こえるから擱筆。

前號の紙上「土地を持たしむるに如くは無し」とあるは「土地を持たしむるには妻を待たしむるに在り」の誤り又「世に盡さんとすは一種の略奪者」とあるは「世に盡すの志なくして徒らに富を得んとする者は一種の略奪」の誤り

〔『日米』No. 8094 May 22, 1922〕

(四十七)

Ⅱ ベルリ來訪の側面觀

一生懸命の大滑稽Ⅱ

今から考へると、米國水師提督ペルリが日本訪問の史實は日本國人に取て重大の國難であると同時に米國にとりては甚だ滑稽の事であつたであらう。此當時の米國人には煙りを立て、航海する黒船やら大砲やらは、尋常なものであつたが、日本人としては變化魔法の怪物であつた。いはゆる切支丹の大魔が到來したかの如く錯覺したのであつた。

嘉永六年六月三日、米國軍艦四隻乗組兵卒五百人、ペルリに率いられて相州浦賀に來る。奉行戸田伊豆守氏榮に告げて曰く「合衆國政府、特ニ使ヲ貴國ニ派遣シ、隣國ノ通商ヲ求ム。希クハ貴國ノ重官ニ見ユテ國命ヲ達セン」

此報に一たび達せし時、幕府の驚き一方ならず、直に諸藩に命じて沿海の警備を嚴にし、且つ有司を集めて評議を凝らした。

此會議は實に重大とあつて水戸・齊・昭・侯は特に會議に列席した。

當時見識第一と呼ばれた水戸齊昭侯の意見は、

「當時ノ形勢ヲ視察スルニ、其請求ヲ許ハ到底爲シ得ベカラザル所ナルヲ以テ兵備ヲ嚴ニシテ彼カ入寇ニ備フベシ」

といふのであつた。併し幕府は相模久里濱に外賓引接所を設け浦賀奉行戸田・伊豆守及び林・大學ノ頭をしてペルリを引見せしめた。

ペルリ提督と幕府代表との會見は九日四ツ時、久里濱と指定した。ペルリは艦隊を浦賀より久里濱へ廻航し、投錨するや否や砲門を開いて祝砲を放つた。其殷々轟々たる砲聲は山嶽に震動したので、村民は戦争が始まったと速断して右往左往に狼狽したが、其放ちし大砲は更らに爆裂した模様がない。「やあ空鐵砲だぞ、騒ぐなやーい」といふ聲が聞えた。

砲聲は十一發で止んだ。村民は其空砲なりしを知り始めて胸撫でおろしたが、間もなく數艘の端艇はペルリを護衛せる兵士随員と共に上陸に及んだ。

ペルリ一行が引接所に入らんとする時、海軍士官の號令の下に兵士は一齊に劍を抜いて横列を作つた。見物の村民は口々に「それ抜いたぞ」と驚く、日本兵士等もスワと云はゞ切付けん身構へをする、村民は四方に逃げ迷ふ。すると再び上官の號令にて米兵は足を揃へてペルリを護衛しつゝ引接所に這入つた。「まだ戦争が始まったのでなかつた」と見物の一同は安堵の思ひをした。

そこでペルリはお土産と國書を捧げたが、此時通譯者は例の中濱・萬次郎であつた。(萬次郎は嘉永四年正月に米船に送られ琉球に着き直ちに幕府に仕えたのであつた) 前號に萬次郎の漂流を安政元年とせるは嘉永元年の誤りなり。

ペルリが捧呈した國書は萬次郎等の翻譯で見ると左の意味である。

「我國洋ヲ隔テ、貴國ト相對シ汽船十七八晝夜ニテ達スル得ベシ、拙土、國ヲ成スコト新シケレドモ人口ノ増加日一日ヨリ多ク、貿易年ニ盛ナリ幸ニ貴國、我ガ請ヲ容レ、海港ヲ開キ、貿易ヲ允許セラレバ、大ニ國家ヲ利スルコト論ヲ俟タズ、若疑惑ノ其間ニ存スルコトアリトセンカ、請フ試ミニ數年間ノ實驗ヲ微セヨ益ナシトセバ即チ止メラレンノミ、且、我國民ノ支那ニ航シ、或ハ貴國ノ附近ニ於テ捕鯨ヲ計ル者航海中或ハ颱風ニ苦メラレ、或ハ食餌材料ニ缺乏ヲ來シ、憐ヲ貴國ニ請フ者アルニ際シテハ幸ニ救済保護セラレンコトヲ希望ス。云々」

右の要求は讀んで字の如く、何等無理の注文でないが、三百年間鎖國一點張りで通した日本に取つては一大難題であつた。何か口實を設けて追還へそうと苦心した結果、幕府は左の返答をした。

「事重大ナリ、容易ニ答フルコト能ハズ、加フルニ將軍病アリ(實は將軍家慶は此時薨じ喪を秘していたのであつた) 大事ヲ議スルニ便ナラズ、請フ明年、長崎ニ來リテ命ヲ待テ」

ペルリはおとなしく明年を約して還つた。日本國中は此報を

聞いて、蜂の巣を壊したやうに惑ひ狼狽だ。寄ると觸ると黒船の話で持切った。朝廷では七社に勅して靖寧の祈りを上げる、海岸の防備を急ぐ。品川灣に五ヶの砲臺を築く。大砲の代りに寺の釣鐘が引下ろして海岸に並べる。大騒が持上った。(此稿つゞく)

『日米』No. 8095 May 23, 1922)

(四十八)

Ⅱペルリ來訪の側面觀

一生懸命の大滑稽Ⅱ

ペルリの來航に大狼狽てにあはてたのも、釣鐘を引ずり出して大砲に擬た滑稽も要するに日本人が三百年間世界の交渉關係を杜絶し、島國の櫻の花に酔ふていたからである。言を換へて云へば科學的智識の訓練がなかったからである。新らしいことは丸で魔法邪法と考へる思想は畢竟科學的智識の欠乏から來るのである。

今日日本政府が代議政治を行ひ乍ら尙ほ且つ外來思想を危険視し、ポリシビキを恐れて秦の始皇帝の二の舞を演じ、シベリア國境に萬里の長城を築いて危険思想を防ぎ兼ねまじき滑稽を演ずるのは丁度ペルリ來航の時代に演じた滑稽の傳統的不覺を受繼いでいるのである。

私は事の序でにペルリ來航時代の日本上下が演じた滑稽の笑

話を書いて見る。そして今日と比較してどれだけ日本人の頭が進歩したかを諸君と共に考へて見たい。

第一回ペルリ來航の時九里濱沖にありし軍艦は艦員の飲んだ葡萄酒やビールの空罎を海中に棄てた。中には沈まないで浪に漂ひて海岸に打寄せたのが澤山あった。漁民は珍しい品物であるから争ふてそれを拾ふた。處が時の役人は中々の邪推深い物識である。「是は先方に於て毒を入れ置き日本人を毒殺せんとの軍略ならん」と疑を挟んで左の令を下した。

「米國軍艦より打捨てたる品々を拾ひし者は一々届出で設け置きたる場所に藏め置くべし、心得違のものありて万一届出を怠る時は直ちに召捕るべし」といふのである。正直の村民は拾ひ上げた空罎を掛りの役人に届出で一軒の空家に積み込み役人は嚴重に戸締をしたさうだ。

或日の日中、同地の名主差配役小川茂周外數人が軍艦見物を許されて出向いた處が、午睡時間と見え一人の水夫が釣床の上に寝て居た。これを眺めた一同は「彼等は罪人なるべし實に異人は殘酷なものだ、兎を縛りて店頭に賣物とするやうにしていゝる、如何に惡事をなせばとて附添人もなく打捨て置くは氣の毒なり、日本人は斯る非道なことはせず」など評し合ふたといふ。

かくてペルリ艦隊の歸國の時、幕府代表者より雞、大根、人参、燕などの土産物を贈られ、軍艦からは飲料水五十石を請求した。役人等は小船に水を積入れ漕ぎゆく此水を手桶で船にあげるには随分の騒ぎだと思ふていと軍艦から一筋の鐵繩が

下つて来た。手真似にて此繩に觸るべからずといふ。一同傍觀したるに一人の水夫下り來り、其黒き鐵繩を水中に入るゝや、輕々と凄まじき音を發し、須臾にして五十石の水を吸上げたので、之れを啣簡なるを知らず、一同仰天し、切支丹の魔法だと呆れ驚いたといふことがある。

右様の野蠻人を相手にして相當の尊敬を拂ひ、將軍病氣の由を聞いて談判を見合せ、明年を約して去つたペルリの心の中おかしさが込上げたであらう。

こんな大騒ぎの中にも日本人は飽く迄詩的趣味が失はれていない。當時は「大津繪ぶし」が流行していたが、黒船來航の事實を歌に謳ふた者があつた。曰く

雨の夜に、日本近く、毛ぼけて流れ込む唐模様、黒船に乗組八百人。大砲小砲を打并べ、羅紗猩々緋の、筒は襦袢着て、黒ん奴は水底仕事をする。大將軍は部屋に住つて眞面目顔。中にも毛ぼけたジャガタラ唐人めが、海を眺めて、キューライ、キューライ、キンメウメウ。貰ひし大根、アメリカさして土産に持つて行く。

此俗謡はペルリの來航當時もなく出來たものであるが、後世だん／＼訛り、歌の文句も前後顛倒して謡はれるのが多い。米艦當時の光景を短い歌の間に髣髴せしめた作者の伎倆は感心だ。

全く歌の通り、ペルリは此來航には目的を果さず大根土産に貰ふて本國に引揚げた。米國人は悠長だ、そして寛大であつた。

然し米國の國策は一定していた。ペルリは翌年約束を履んで更に軍艦七隻兵卒六百人を以てやつて來た。是から愈々大眞面目の滑稽劇が演ぜられる。

『日米』No. 8096 May 24, 1922)

(四十九)

II ペルリの再航

日本空前の外交談判 II

ペルリは昨年六月の約束に基いて嘉永七年正月に早々とやつて來た。今度は軍艦七隻、浦賀灣頭を壓して威風堂々たるものであつた。幕府は、町奉行井戸對馬守、林大學頭を遣し、日延べを申込んだ。ペルリは最早承諾しない。

ペルリは昨年來航の時、將軍病氣の趣を以て談判延期を請はれたに對し快く承諾して引返したが、此時から日本の到底開國を欲しないことを看破した。そこで再航の時は戦争をする覺悟で來たのである。

是より先、幕府は昨年ペルリより差出した書翰に對し、取捨に苦しみ、專制獨裁政治の例を破つて各藩に諮詢した。諸説紛々として一定しないが、世界知らずの大名、特に水戸・齊昭・侯すら開國に大反對であつた程で、國論は鎖國一點張に歸着した。前面には開國を迫る米國の大艦隊を控え、背後には諸侯の鎖國論で牽制せらるゝ板挟み。幕府の苦衷實に察するに餘りある。

へてんも利ず、日延べも聽れぬ。幕府は愈々ドクタン場に坐る覺悟で、二月十日、林大學頭。井戸對馬守。伊澤美作守。鶴殿民部少輔に全權を命じ、横濱を引見所とし、ペリリとの談判が開かれた。當時主席全權たる林大學頭の手記せる『林大學頭對ペリリ提督問答』は實に天下の絶筆、後人の長く記念すべき者である。左に之を録して見よう。

林大學頭對ペリリ

提督問答

嘉永七年二月十日

ペリリ曰く——我國從來人命を重ずるを第一として國政取扱ひ候事に御座候得ば自國は勿論假令他國並に平生不通の國と雖、人民漂流等にて難洪致候者見受候得ば力を盡し是を救ひ手厚く撫育致事に候、然るに貴國に於ては人命を重ぜられ候儀は一向に不承及候、其譯は他國船が日本邊にて難船仕候ても決して御救ひ不被下候、海岸近寄候得ば砲發にて被防之、又日本國へ漂流致し候者有之候節は各人同様の御取扱にて嚴敷禁獄致且日本國人民漂流致候は我國の人民救之貴國へ御返し可申と湊邊へ参りても一向御請取も無之候へば是自國の人民迄も見捨候様に相見へ如何にも不仁の至と存候我國近來開け候事には候へども當時追々強大の國と相成我國カルホニヤは日本國と相對し太平洋を隔候而已にて間に別國も無之候得ば自今追々日本海を往來し候船數多く相成可申處、右様の御國法にては殊之外難澁致し多くの人命にも懸り候事に御座候へば何分難捨置候、尙又是

迄の如くにて御改無之御救不被下候得ば誠に寇讎に候へば國力を盡し戦争に及び雌雄を決し可申心得にて用意は十分仕置候。我國近來隣國メキシコ國と相戦ひ國都迄も攻取候事に御座候事に御座候貴國も事により候へば右様可相成る難斗候御勘辨可被成下儀と存候。

米國一流の正義人道を眞向に振りかざして、先づ對手の膽を抜かんとする。併し武士道で練りあげた林大學頭はビクともせず、左の辯解を試みた。

大學頭曰——時機に寄候得ば戦争にも可及候へ供、全體使節被申候事は、事實相違之義多く有之。全く傳聞の誤りより右様にも被思候事と被察候。尤我國は外國交通無之事故、外國にて我國政事向、不被心得候義、無餘儀と存候。我國の政事、左様の不仁なる儀には決して無之。先第一人命を重じ候儀は、日本は萬國にも勝れ候事に候。夫故當今三百年に近き太平打續き候事にて、中々人命を輕じ候様の不仁にて如此は参り不申候。此太平打續き邦内一和致候より國政の善きを見るべきなり。併乍、我國法にて大船を造り外國へ往來致し候事を禁ずる事に候へば、大洋中にて他國の船々を救ひ候事は出來不申候へ供、日本邊海にて他國の船、難洪に及候節は、來て薪水食料を乞ひ候へば、随分手當致遣し候事は從來左様相成居り、追々海邊へは觸置事候にて、他國の船は一向救ひ不申と云には無之候故先にも申候通り、是迄の様、薪水食料は遣し可申候。

林大學は、先づ薪水食料の供給を誓ふた。鎖国の第一壘は既に陥落した形である。(次號大學頭答辯つゞく)

『日米』No. 8097 May 25, 1922)

(五十)

|| 日本空前の外交談判

林大學頭の答辯 ||

(林大學頭答辯の續き)

且又漂流の儀、咎人同様、禁獄致候様申され候は、是又、全く傳聞の誤りと相見へ申候漂流は、我國法にて何の地へ漂着致し候共、夫々厚く手當致、護送して長崎へ遣し和蘭カピタンへ相渡し、其國々へ返す事に候。既に英國の民も北地松前邊へ漂着致し候事有之、是等も皆々厚く撫育致し長崎へ送り英國へ返へし候儀に候。尤漂流の中にも不善人物有之、何分國法を犯し我儘不法を致し候者有之候へば、不得止姑く執へ置候て、長崎へ遣し候事も御座候、是は全く漂流の不法より右様取扱候事に候得ば、左様の者共、其國へ歸り、何が故と咎人同様の取扱などと申觸らし候より、色々傳聞相誤り候哉も難斗、何様にも非道の政事と申ては一切無之事に候。使節にも篤と我國の様子に付、相考候へば、事實は相分り、疑念も忽ち解け可申候。貴國にても、人命を重じ候事に候へば指て累年の遺恨を結び候と申すにも無之候所、戰爭に及び候程の儀とも不被存、使節等も被相考可然儀と存候。

茲で一應の申開きをしたので、ペルリも強いて追及もしなかつた。そこで問題は實際問題に移る。

ペルリ曰く——只今被仰候處にては豫々薪水食料等は被下他國の船等も御救被下候様、被成と有之候様承り候得共是迄の處は、我國の船、折々貴國の海邊へ參り候節は、兎角被是と被相拒中々薪水も容易に不被下、毎々難洪仕候。併し、豫て右様の御政事に相成り候事にて、以後も尙又薪水食料石炭等も被下、難洪の節御救ひ被下候事に候へば、兎角可申にも無之候。

ペルリの外交は、米國流のサラリとしたもので、日本全權の申開きを其儘善意に解して、さて確かりと釘を打つ。

——然らば以來は、愈々薪水食料石炭等被下候様、御手當の儀、夫々仰付置被下度存候且、漂流の儀は、只今如仰、厚く御撫恤被下御返し被下候儀に候得ば、宜敷くと存候。扱亦、交易の儀は、何故御承引無之候哉、交易は有無を通じ大益に相成候事にて、方今萬國交易日夜に盛に相開け、是に依りて國々富強にも相成り候事に御座候。貴國にても交易御開き相成候はば、格別御益にも相成、決して御不爲に相成り候筋は無御座候間、是は是非共御開きの方可然と存候。

ペルリは難船救助、薪水食料の供給、漂流者保護の承諾を得たる後、「有無相通」の交易を求めた。始めより開國反對の國論

を代表せる大學頭は、斷然として之を拒けた。

(五十一)

II 日本空前の外交談判

恩人乎、非恩人乎 II

大學頭曰く——如何にも交易の儀は有無を相通じ候事、國益にも可相成候得共と、元來日本國は自國の產物にて自ら足り候て、外國の品物無之候とも少しも事缺候儀は無之候故、交易は不致法に相定候事に候得ば、中々容易に相開き候事は相成り不申候。先づ使節此度渡來の主意と被致候は、第一人命を重んぜられ、船々御救の儀、其望に叶へ候へば、眼目は立候事にて、交易の儀は利益の論にて、指て人命に相拘り候事には無之候儀には候はず哉。先づ眼目主意相立候得ば、宜き儀には無御座候哉。

あなたの要求は、人命救助であるからには、其主意が立つなら宜しいではありませんか。私の國は自給自足で充分でありますから、交易は眞平御免。人命救助と交易と別問題です。ペルリも茲に至つて二の句が繼げなかつたと見える。流石のペルリも稍しばらく考へて後、

ペルリ曰く——是は御尤の儀に存候。如何様、如仰、此度渡來の主意は、前々申述候通り人命を重んじ候故、船々御救ひ被下儀肝要の事に御座候。交易は國の利益には候へ共、人命に相拘り候と申すには無之候得ば、交易の儀は強て相願申間敷候。

——(以下次號へつゞく)——

『日米』No. 8098 May 26, 1922)

林全權から交易の儀は眞平御免。この蠻民度すべからずとはね付けられたペルリは思ひの外辛抱強く交渉を進め領事派遣の事を申出た。大學頭は、之にも同意せずして拒絶した。

大學頭曰く——交易にも候へば一人の役人差置候様無之候ては、都合の儀も可有之候へ共、只々折々薪水等遣す計りの儀に候へば、左様無之候共、相濟可申候、且、唐和蘭の外、異國人措置候儀禁じ有之事故、相成難く候。

唐、和蘭の外、異國人の入國を禁ずるとは、全く區別的待遇である。日本人ならば鯨鯨立をして其非を鳴らすであらうが、デモクラシーの使節は案外理屈を述べなかつた。

ペルリ曰く——一人指置候儀御承知無之候ては、何分にも不安心に存候間、是非御承知非下候様致度候。

大學頭曰く——此事は政府に於て亦も相許し可申儀に無之候得ば、承知は難相成候。

丸でおぼし娘が頭を横に振つたような鹽梅。どうも手が付け

られぬので、

ペリリ曰く——左候へば、先づ其儘に被成置、若又、御差支の儀出來候節は、一人は指置候様に被成可然と存候。尙又十八ヶ月の後、使節參り可申候間、其節、此事は御談判に及び可申候。

見込まれたが最後、どこまでも物柔らかに付け纏ふて來るのが女たらしの名人。十八ヶ月の後まで待つて口説落して戀を遂げやうとする米國人の氣質、短期では出來ない藝當。

大學頭曰く——然らば十八ヶ月の後、尙ほ又談判に及び可申候。且、下田開港の儀は只今直ちに相開き候様には參り兼候。いづれ奉行其外役々の者、申付彼地へ住居に相成候上之事に無之候ては不相成候故、是亦十八ヶ月後相開き候様可致候。

始めにおどして、中頃くだけて、娘の氣を引き乍ら、一寸手先きに觸つて見た形。まんざらイヤでも無さそうなを見て、

ペリリ曰く——御開港の儀は早々御願申度候へども御役々出來御引移り等に相成候得ば何れ少々は御手間取に相成候は御尤に存候。併、一八ヶ月と申候は餘りに久敷事に御座候へば、何卒當年中には御開きに相成候様仕り度存候。

一步一步と迫る言葉。此上は嫌ぢやくの一點張りでは濟まじき形勢。金鐵の鎖國論を忘れたのでは無いが、物わかりのよい林大學のこと。此上は一身を投出して國家の危急を救ふ覺悟を定めて、

大學曰く——左様候へば來年三月までに相開き可申候。

鎖國の第二壘もまた陥落した。何といふても手詰の談判。諾といはば今でも夫婦。否といはば刺殺さんず權幕。親(國)の爲めに身を殺すは武士道の一つ。

ペリリは大學頭の「三月までに相開き」ますとの一言を聞いて結審の微を洩した。

ペリリ曰く——然らば來年三月御開きに相成候やう奉願候。

とう／＼口説落された。善は急げとあつて、直様、和親條約の誓紙を取交はすことゝなつた。此條約は十二條であるが、其骨子は薪水給與と漂流民救助のみで、貿易の事は一つも書いていない。併し、第十一條に下田に領事を派遣することを許し、後にハリスが來て交易を口説く種が蒔かれてあつた。

幕府はいよ／＼結納を取交はすことゝしたが、此縁談には兼ねて不承知の水戸齊昭侯は、どんなに立腹するか知れない。そこで幕府は叔父さん格の齊昭侯には其縁談を秘して告げなかつ

た。

米國使節ペルリの申出でと、談判の内容とを驗するに、米國は日本に對して所謂野心なるものを包藏していたと思はれない。彼れは世界の大勢に立脚して日本を誘導したのである。併し人命を重んぜざる日本の態度に對しては「戦争を以て雌雄を決する」の覺悟は確然たるものであった。ペルリを日本の恩人と見るべき乎、否乎は、一に米國が日本に對する動機の如何を看破することに依て定る。

〔『日米』No. 8099 May 27, 1922〕

(五十一)

Ⅱ區別待遇の撤廢

自由平等の宣傳Ⅱ

米國使節が日本に對し、一番骨を折って談判したのは、區別の待遇の撤廢であつた。使節ペルリ提督と日本幕府が締結した和親條約を見ると此消息が最も明瞭に看取される。以下條約文面の梗概を記して見る。

日本國米利堅國和親條約

亞墨利加合衆國ト、帝國日本ト、兩國の人民誠實不朽ノ親睦ヲ取結び、兩國人民ノ交親ヲ旨トシ、向後、可守個條相立候タメ合衆國ヨリ、全權マツゼウ、カルプレス、ペルリ(人名)ヲ日本ニ差越シ、日本君主ヨリハ、全權林大學頭、井戸對馬守、

伊澤美作守、鶴殿民部少輔ヲ差遣シ、勅諭ヲ信ジテ、雙方、左之通取極候

第一條

日本ト合衆國トハ其人民永世不朽ノ和親ヲ取結び場所人柄ノ差別無之事

第二條以下全文は省くが、其要點は

第二條 下田、箱館開港ノ事

第三條 漂着者受渡ノ事

第四條 漂流者平等取扱ノ事

第五條 下田近海自由航行ノ事

第六條 必要品相互取極ノ事

第七條 物品賣買規定ノ事

第八條 薪水食料供給ノ事

第九條 平等待遇ノ事

第十條 難船ノ外、下田箱館以外ノ港に猥リニ渡來セザル事

事

第十一條 米國領事ヲ下田ニ置ク事

第十二條 條約批准ノ規定

右ノ條、日本、亞墨利加兩國ノ全權調印セシムル者也

嘉永七年三月三日

千八百五十四年三月三十日

林 大學頭 花押
井戸 對馬守 花押

伊澤 美作守 花押
 鶉殿 民部少輔 花押

マッセウ、カルプレス、ペルリ 手記

此條約の目的は云ふまでもなく「日本ト合衆國トハ其人民永
 世不朽ノ和親ヲ取結ビ場所人柄ノ差別無キ事」である。「場所
 人柄」とは國土人種といふことである。アメリカの人民が日本
 國土に參らば他國人と區別せず、仲善くして生活すべし。同時
 に、日本人がアメリカ國土に參らば他國人と區別せず、仲善く
 暮らすことが日米條約の主義信條であるのだ。

私は此處まで書いて來て苦笑を禁じ得ないのは、今日に於け
 る米國の一部の人民の唱ふる排斥論である。ペルリが懸命の努
 力で日本の迷夢を破つた平等の待遇は、反つて米國の子孫によ
 りて裏切られてゐる。國祖の面上に泥を塗るやうな不孝な子孫
 が米國に産れたのは、實に米國の耻辱であるまい乎。

強辯至極なる排日檢事の口をもつて言はしむれば「法律は生
 きてゐる者であつて、記念的遺物でない。時代と必要に應じて
 解釋されるものである。故に加州の外人が土地を所有し、且借
 用するを禁じたものである」と。斯様な議論がペルリの子孫か
 ら飛出す位なら、日本も開國なんかするんじゃない無かつた。

法律といふ者は、固より記念的遺物で無い。時代々に變り
 ゆく者であらうが、「場所人柄ノ差別無キ事」は今も昔も變らぬ
 筈である。ペルリ時代の精神もハーデング時代の精神も、此精

神には變りが無い筈である。若し、ペルリ時代とハーデング時
 代とで其精神が變はるとするなれば、米國人は先づ日本に一人
 も居る事が出来ない運命になることを考へねばなるまい。

私は日本開國の仕末を略記するに當つて、米國の今の子孫等
 が、其當時の史實を呼び起して猛然として反省悔悟の態度に出で
 んことを望むのである。米國の祖先は何等の野心もなく世界を
 指導啓發した。而して我等が其啓發されたる最大の道念は「永
 世不朽ノ和親」と「場所人柄ノ差別無キ事」である。嗚呼、日
 本を啓發した米國は、反つて日本の爲めに啓發される時代と
 なつた。思へば、我等の使命もまた重大の者であると云は
 ねばならぬ。

『日米』No. 8100 May 28, 1922)

(五十二)

|| 新聞雜誌の今昔

驚くべき言論機關 ||

在米日本人新聞雜誌の歴史は、在米邦人の社會を形成する上
 に重大史實の一つである。日本人が桑港を始めとし、明治二十
 年代(今より約三十五年前)には約五六百程在留していた。然
 るに此頃から新聞雜誌なるものが、邦人によりて發行せられた。
 シカゴ大學の社會學教授パーク氏は四年前、加州日本人の狀
 態視察の爲め加州に見えられ、其時私は氏と二時間の會談をし

たことがある。パーク氏が此時の質問は左の如くであった。

「日本人は米國に於て約三十程の新聞雜誌を經營している。即ち在米日本人數七萬五千、内三萬人を小兒とし、殘四萬五千人の青年が千五百人宛つ、一個の新聞雜誌を受持つ勘定である。人口に比例して其數の多きは蓋し世界一である。何故、日本人は斯くの如く多くの新聞雜誌を發行しているのである乎。」

私は此質問に對する答案を有つて居なかつた。私も實は在米日本人が斯くの如き多數の新聞雜誌を有する理由を疑ふこと尙ほパーク博士と同様であつた。併し私は日本人である。日本人の出來事に對して皆目存ぜぬでは相濟まぬ氣がしたので、「日本人は意見を發表することを好む民族だから」と答へたが實は不安に堪へなかつた。

パーク博士が四萬五千人の日本人に對して三十の新聞雜誌あることを不思議に考へた。今日より昔時を省れば、一層不思議の事實が多い。それは明治二十年より三十年頃に於ける邦字新聞雜誌の數多いことである。

此頃は桑港を中心とせる在留民の大多數は學生である。家持と稱すべきは靴工、洗濯業者、少數の雜貨店で、其數五十にも達しない。而して田舎に散在する日本人は鐵道工夫の外、一時的の出稼者のみゆへ、新聞雜誌の購讀者でない。桑港で發行する新聞雜誌は唯だ桑港學生間に讀まれるのみである。それも統一なき日本人社會ゆへ、各階級を通じて讀まれるのでなく、所謂人間に配布する位のもので、日刊新聞と雖も發行數三百以

下だつた。

今、明治二十四年より三十年頃までに發行せる日刊新聞の關係者及び購讀者數を考へると大畧下の如きものだ。

(一) 日刊『桑港新聞』(石版) 明治二十四年創立、關係者、大和正夫、菅原傳、日向輝武、巨理篤治、八木原長治等。發行紙數七十五枚より百三十枚までにて明治廿九年廢刊。

(二) 月刊『金門日報』(石版) 明治二十五年創立、關係者、永井元、寺澤六之助、矢野弦吉等、發行紙數右同様にて、明治二十八年春廢刊。

(三) 日刊『新世界』(活版) 明治二十七年四月創立、關係者、副島八郎、田部井宗次郎、石川定邦、中澤福太郎、梅田藤太郎等。發行紙數、明治二十七年頃八十枚、三十年頃二百枚、三十三年頃五百枚。

(四) 日刊『ジャパン・ヘラルド』(石版) 明治二十九年創立、關係者、岡田依三郎、米田實、川島天涯、横川省三、鷺津文三等。發行紙數、百三十枚、明治三十一年『日本新聞』と改題、關係者、安孫子久太郎、小林彦次郎、森本市太郎等。

(五) 『北米』(活版) 關係者、川崎巳之太郎、ヘート青年會員。明治三十年創立。發行紙數、百五十枚、明治三十一年、『日本新聞』と合併し、『日米』と改稱。

(六) 『日米』(活版) 日本新聞、北米新聞と合併し改題せる者、關係者従前の如し、發行紙數、明治三十一年頃二百五十枚。

同三十三年頃四百枚。

右は日刊新聞の明治三十年前に創立されたものゝ概畧である。最初桑港にある有志家の學生等は、其言論を在米邦人に讀ましむる目的で言論機關を設けたのでなく、全く本國政治に對する不平を漏さん爲めに新聞雜誌を發行したのであった。今の言葉で申さばポリシビキーの宣傳である。日本々國では思ふ事が述べられぬから外國で思ふ存分の事を述べ、それを本國に郵送したのであった。

處が日本政府の取締りは頗る嚴重で、在米邦人の出版したミミオグラフの小紙片は横濱へ到着する否や、發賣禁止で差押へられた。

『日米』No. 8101 May 29, 1922)

(五十三)

||新聞雜誌の今昔

生活の粗惡第一 ||

明治二十二年、『自由新聞』が創立されてより、廿四年迄にミミオグラフの小新聞から石版を経て活字までに進む間に左の諸新聞雜誌が發行された。

『自由新聞』（週刊、最初ミミオグラフ版）明治二十二年創立、關係者、菅原傳、日向角太郎（輝武）、松岡辰三郎、巨理篤治、畑下熊野、井上平三郎、渡邊勘十郎、其他愛國同盟一派。右

は第一號を發行するや横濱に於て直ちに差押へられ、發行禁止に會ふて、

『十九世紀』と改題し、明治二十四年、活字を取寄せて一回發行せるが同じく發賣禁止を喰ひ、廢刊し。同志は後に、

『小愛國』なる週刊を發行したが、明治廿四年に至り日刊『桑港新聞』を發行するに至つ。

月刊雜誌には

『遠征』明治二十四年創立、活字雜誌で、此雜誌は政治的色彩を離れ、専ら文藝に重きを置き、關係者は、山田亮、佐竹作太郎、高木梅軒、竹川藤太郎（獸嚇）等にして、遠征社で發行したが、三四號で廢刊した。

『愛嬌』月刊文藝雜誌にて石版摺、關係者、川原愛嬌、同榮治郎、後岡田溪水の手に移りて『東洋』と改題す。

週刊『東洋』明治二十八年『愛嬌』改題し、關係者、鷺津文三、野口米次郎、岡田溪水、三四號にして自然消滅。

月三回『腮はづ誌』明治廿八年創立、邦人最初の滑稽雜誌、關係者、鷺津文三、山田作太郎、太陽陽太郎、上田恭助、渡

邊寛信、山田亮、高橋孤泉等にして明治三十一年誹毀事件のため鷺津、高橋は九ヶ月の禁錮に處せられ、同年廢刊。

月刊『喜の音』美以教會發行にしてミミオグラフ版、明治二十七年創刊、三四年繼續せるが、世間の注意を受くるに至らずして自然消滅。

月刊『太平洋』米西戦争の年（明治三十一年）創刊、關係者、

鷺津文三、野口米次郎、高橋孤泉なりしが一號を發行するや、鷺津、高橋入獄して消滅。

新聞雜誌が在米邦人の讀物として發行されたるは明治二十四年以降の事にして、其印刷の不完全なる發行部數の僅少なるは到底現代人の想像し能はざる所である。

月刊『桑港新聞』が『金門日報』と前後して石版新聞を發行せる頃は、在桑邦人の耳目を驚動したのである。然るに此石版印刷といふのが甚だ怪しい安物で、機械一式五十弗價格の代物である。石版職工といふは新聞社長で『金門日報』社長永井元『桑港新聞』社長大和正夫は何れも石版職工を兼ねていた。

新聞配達といふのが之れも頗る揮つたもので、日向輝武やら巨理篤治もやった。斯く申す私は日本から渡米當時フロックコーを着流して配達をやり、購讀者を驚かしたこともあった。

活字で日刊新聞を發行したのは『新世界』で副島八郎が元祖である。副島は明治廿七年四月同志と共に活字新聞を創立し活版職工もやれば炊事も一手でやる。時には配達もしたことがある、頗るの努力家であった。

此當時、日本人の働口は至つて少なく、且つ、給料が甚だ安かつた。曾て述べた通り此頃レストランの料理人が月給廿五弗、皿洗が十七八弗で、山村梅次郎など齒科の腕利か白人齒科醫の所に助手として働いた時、アウトルームのアウトミールで一週六弗の給料であつた。以て其給料の如何に安直なるかを想像すべきである。

右様の状態ゆへ、新聞雜誌従業者の生活は實に慘憺たるものである。社長が石版職工や配達をする位は屁の屁であるが、三度の食事は出来兼ねた。此當時最古の新聞として誇つていた桑港新聞がケチンには破れストーブ(古物にして代價五弗なりき)を備えて居たが、石のような、ビスケットをバタも附けずに食ひ小便のようなコーヒーはミルクが入っていない。餓死に瀕するにあらざれば、到底喰ふに堪へざる食物であつた。

此頃新聞社のビスケットを石ケットと稱へ、ピフステーキを石テーキと綽名した。實はそれ以上の悲惨であつた。

〔日米』No.8102 May 30, 1922〕

(五十四)

Ⅱ新聞雜誌の今昔

貧乏生活の好模範Ⅱ

凡そ世界に貧乏人は多いけれども明治二十年代の新聞關係者ほど貧乏の者は無かつたであらう。それは身から出た道樂だと言へば、それ迄であるが、然らば當時新聞關係者以外にどんな樂の生活をしたのがある乎と調べて見れば、實は五十歩百歩で一日働いて一弗にも足らぬ連中のみであつた。

新聞關係の連中は、固より衣食の保障はなかつたが、自駄落の生活に甘んじて、自個の主張を満足せしむる慰安に生きていた。之に反し、いはゆる家内の勞働者たるものは、終日働いて

矢張り喰ったぎりであった。尤も、此中に月二十弗の月給を取り、月十九弗五十仙を貯へた塚本松之助の如き人間業では出来ない程辛抱人は稀れにあつたけれども、それは異數であつて、多くの學生労働者は其日暮しの者であつた。

そこで、新聞生活の連中は議論と氣焰とに生きる。先づ一日三度の食を二度にし、或は一度にし、或は二日にブレット一本で暮らしていても何か慰むる所があつた。昔、支那には方術師といふのが在つて、風を喰ひ、霞を吸ふて生きていたといふ譚もあるが、當時の新聞生活は全く一種の方術師みたいなものであつた。

私は此頃一種の方術師を以て任じていたが血氣盛んな少年等は大に弱つていた。第一番に倒れたのが八木原長治といふ青年で板垣退助の自由黨四天王の一たる八木原繁趾の令弟で愛國同盟員であつたが、桑港新聞の配達係りをしていた。處が、新聞社のケチンは毎朝社長大和正夫がビスケットを作るけれども、彼が配達を済まして歸る頃は、石のやうな喰べあらしの片々が残つてゐるのみで、外に喰べるものが無い。

市内配達は紙數約七十枚位であるが、其道程は可なりに遠い。第五六街の場末からミツシヨンの場末までは二哩餘あり、引返してゼシー、オフワレン街に廻ると四五哩歩かねばならぬ。然るに歸つて見れば食ふものが無い。彼れは榮養不良の爲め遂に眼病を患ふに到り、明治二十八年春、同人等の必死の運動で船賃を拵え、歸朝せしめた。

同年春、野口米次郎といふ青年がバロアルト邊から徒歩旅行をして桑港に來り、桑港新聞社へ這入つて同じく配達を申付かつたが、腹へらしの名人であつた爲め三日で配達をやめた。其次に配達をしたのが方術師の私であつたが、一週間程で代りが出来たので命が助かつた。

當時の新聞社生活は唯だ食べる事にのみ全力を傾注したのであつた。併し、書いてあることは天下國家の經倫策で堂々たるものであつた。

明治二十六年頃の桑港新聞の總收入は何程であつたか帳簿もなければ記録もないが、多分一ヶ月の収入五六十弗と思はるゝ。其故は新聞一ヶ月五十仙で廣告料は一ヶ月廿五仙から二弗が最高で、ある時、太平洋氣船會社の廣告四半ページに一ヶ月五弗を得た時は驚異の眼を擧げて其高價を讚嘆したことがある。

右様の収入なるに拘らず、居候が澤山集つて來る。尤も、此居候といふのが時々新聞記者や配達夫に化ける。口があれば働くし、口が無ければ新聞社に遊んで居る。其不秩序、其亂雜は名狀すべからざる者であつた。

ある時私がケチンに集る居候を數へたことがあつたが、其數十二人に達し、新聞従業者は僅かに四人であつた。

此頃『新世界』は社長副島が青年會の賄ひ方をして新聞を経営していたので、比較的食べる者に窮してゐないやうであつたが、それでも居候のために食ひ潰ぶされ月々損失を招いた。

私が『臆はづ誌』といふ滑稽雑誌を發行したのは居候分布の社會政策？から割出したのであつたが、不幸にして桑港新聞が廢刊したので、此政策は失敗に終り、茲に梁山泊が形造られた。此頃私は號を魯痴眞と稱し、たあいもない生活を三年續けた。

日米の前身なる日本新聞では安孫子久太郎が金門レストランを經營し新聞を發行していたが、是も新聞社同人に食ひ潰ぶされレストランは閉店した。

(『日米』No.8103 May 31, 1922)

(五十五)

|| 誹毀の訴訟事件

相撲場の心理状態 ||

明治二十四年から三十年頃までの新聞生活は前號に述べた通りであるが、此頃の新聞雑誌に従事している連中は青年のみで自然其記事は活氣に富んでいた。そして其活氣が人事に關する記事として現はるゝ時は何かの衝突が免がれない。

當時日本人の社會は其區域が甚だ狭い。随つて毎日の記事も其範圍が狭いのであつた。當時の新聞記事は新聞によりて傳えられなくとも小さな日本人社會では口から口に傳はつて知れわたるので、實は新聞記事は噂さの跡を書いていたに過ぎない。

「お・石・砂・田の乳くり」でも「筒尾のピストル往生」でも「裏天お花對大内の失戀事件」でも新聞に出ない前に社會は既に承知

している。

そこで新聞の三面種は極めて細微な人事の内面を穿つことに努力を向ける。何某の細君が着物のオーダーを取るために支那人取醜窟に出入りしたのを見付けると、「其の妻は醜業せり」との誤報を傳へる。そこで亭主なる人から嚴談を申込まれる。次いで誹毀の訴訟が提起せられる。中裁が這入る、取消は中々しない。揚句の果てがピストルを差向けられる、謀殺未遂罪で反對に告訴するといふやうな事件も澤山あつた。

私の關係した訴訟事件で、最の顯著なのは、第一が「デロン事件」で其次は「公同會事件」である。デロン事件は白人某婦人が日本人某と關係して破倫の行爲があつたといふ事を狂畫に畫いたのが、誹謗の告訴となり、畫工高橋孤泉と私は一ヶ年ほど係争の後、九ヶ月の禁錮に處せられた。それから「公同會事件」は新世界に執筆せる頃、同會を三日に亘る論文で攻撃し、社長副島、記者川邊、鷺津三名が起訴せられ、三千弗づゝのボンドで假出獄をし、約八ヶ月に亘りて係争の結果、無罪を申渡された。明治廿五年から三十二年までに新聞記事が因で誹毀の訴訟の起つた数は十二三件もあつたが、右の二軒を除くの外、最後まで戦つたのはなかつた。大抵、仲裁が這入つて引下げたものである。

元來、誹毀の訴訟を提起する動機は感情一點張りで前後の分別などをして起こすのでない。そして多くは本人の意思で訴へるといふよりは周圍の連中から遣れ〜と煽てられる事が多

い。夫れ故、訴へた本人は馬鹿を見るのが多い。訴訟提起當時は憤慨もし、對手の新聞記者を困らせるつもりで訴へるのであるが、事件が進行するにつれて、代言人の喰ものになる。始めの氣勢は半年、一年と経つ間に氣が抜けて仕舞ふて。丁度ビ―アの口を開けて日が経つと同じい趣になるものである。多くの訴訟沙汰が仲裁人に一任されてウヤマヤになるのは訴訟の感興が永續しない爲めである。

過去三十年來、日本人が米國法廷に訴えた誹毀事件は、大概日本人の恥を外國人に晒らしたものである。無分別に他人の行爲を書き飛ばす記者は因より不都合千萬であるが、それを憤慨して法廷に訴へるのは兒供氣の失せぬ連中である。新聞に書かれて傷つく程の人間は、新聞に書かれなくても傷のある人物だとも云へ得る。書かれたとか、書いたとかは其本人の人格に増減が無い筈である。キタナイ事を書く記者は書いた奴がキタナイのである。書かれた本人が必ずしもキタナイので無い。そこで新聞記事の眞正面から憤慨するのは、傷持つ足の人間か、若しくは修業の足らぬ虚榮心の人だ。

今も昔も變りがない。新聞記者ほど厄介至極の者は無い。大ナポレオンが曰ふ如く、「百萬の敵には恐れぬが、一本の筆に恐れる」と嘆じた如く、世に立つ人は筆が一番恐ろしい。思ふに目明一人、目盲千人の世の中に筆持つ人は大いに注意して其天職に忠なるべきである。

此文を書く時、東部の友人から報知があつた。それは、日本

人新聞雜誌に關する訴訟沙汰を某大學社會學教授が取調べつゝあるといふことである。某教授は日本人生活狀態を調査する順序として、新聞に對する一般智識の程度を研究する爲めに、記者の筆致やら讀者の眼識を精査する必要ありと考へたのであらう。私等始め新聞係争者は是れから米國科學者の試験科目に上ることであらう。

〔日米〕 No. 8104 June 1, 1922)

(五十六)

Ⅱ 加州民歴史的自覺

四十九年祭の創設 Ⅱ

加州の住民は、加州開發の歴史を七十四年目に自覺して、茲に四十九年祭を創設した。此歴史的自覺は今後の加州人を文明に導くべき第一歩だとも觀ぜらるので私は少なからず興味を覺えた。

金礦發見當時から、今日にかけて、加州民はワイルド・ウエストの氣分に満ちていた。世界の加州は時々刻々に文明の潮流が押寄せて來るにも拘らず、加州民は文化上、ワイルド・ウエストの氣分が失せないのであつた。東洋の先覺者たりし支那人を輸入して大陸横斷鐵道を完成し其工事が終るや否や、支那人を極力排斥し、支那人の布設した鐵道に高軒をかきつゝ支那人を排斥した。之が即ちワイルド・ウエストの氣分である。

彼等は人間の努力を記念し感謝することを知らなかった。國土の價値は人間努力の價値なることを知らなかった。そして白人といふ者は神様から威張りぬく可き特權を授けられたる人種だと思ふていたのであった。彼等は野蠻にして愛すべきエンデアン(土人)を人殺の武器を揮ふて征服した。彼等は支那人を太平洋岸に輸入して鐵道を布かせ炭山を掘らせた。彼等は南部不毛の地を開拓する爲めアフリカから澤山の黒ンボーを移入した。而して動物同様に使役して米國の産業を開拓した。そして業成るや、之を排斥し、之を虐待した。

併し、米國人のすべてがワイルド・ウエストの氣分の者では無かつた。其證據には、金礦發見から十三年目の千八百六十年にはリンカーンが大統領となり、其翌年奴隸廢止事件から南北戦争が始まつた。此戦争は四年間打續いて、千八百六十五年に南方の敗北で終結し、リンカーンは其二年前に奴隸廢止令を布告した。此戦争の内容に就いては史家の間に多少の異論はあるけれども正義人道の權化としてリンカーンは不朽の名を遺し米國歴史上―光彩を放つに至つた。

若し米國人が人道の爲めに義戦を起こした史實を求むるなれば此戦争は實に好適例で、米國の人道賛美者が金科玉條として引證すべき大事實である。

之れは東南部の出来事であつて、西部諸州の人の關する所であつた。リンカーン時代に起工した大陸横斷鐵道は、當時セントラル鐵道の發揮人スタンフォード等が中央政府を動かして、

一哩に就き六萬弗の保護を得、専ら支那人を使役して工事を急いだのであつたが、千八百六十九年(明治二年)に竣工を告げた後は、「鳥盡きて、狗煮らる」で支那人はワイルド・ウエストの連中から放逐の運動を起こされかゝつたのであつた。

支那人は、鐵道工事によりて輸入せられた安價勞働者であつたが、黒ンボーとは大分譯が異ふていたので、排斥は受けたが虐待の數は少なかつたやうである。それに支那人は東洋文明の素質を有つていたかも知れなくして可ならざるなき順應性を帯び鐵道から炭山、炭山から土地開墾、開墾から農業、農業から市内商工業と轉化して各所に其勢力を張つた。

一例を挙げれば加州農園最初の開拓者は支那人である。明治十年代の加州の大果物園、大葡萄園は多く支那人の開墾し植付したもので、バイナの葡萄園もナトマの葡萄園も支那人が植付けたものである。川下のデルタも其最初は支那人であり、モントレーの漁業も支那人が古くから始めた。實に加州の開拓(特に農業漁業の開拓)は支那人の功勞を以て第一に押すべき史實が歴々として残つてゐる。

現に千八百六十年時代のサクラメント市街を一瞥すれば支那人の勢力が想像されるのである。今のサクラメント市は、ケー街と第十街邊が一番繁華であるが六十年前のサクラメント市は、アイ街と第二街邊が一番繁華の場所であつた。而してアイ街と第三街にかけて支那人は二丁四方を占領してしたのであつた。

梓弓、引きかへさん由もなし。すべては運命である。併し、加州人が歴史を反省する心得が出て来たことは、やがて忘恩を悔ゆるの第一歩で、喜ぶべき現象である。

『日米』 No. 8105 June 2, 1922)

(五十七)

Ⅱ 四十九年祭の印象

日本姫おけいの手箱Ⅱ

「古きを纏ねて、新きを知る」とは千古の格言である。文明人は歴史の跡を纏ねて新しい教訓を得るに努むる。サクラメント市が今年始めて舉行した四十九年祭は加州人の文明を表徴する有意義の催しである。

加州金礦発見は千八百四十八年であるが、金礦発見が疾風の如く世界に知れ渡ったのは、千八百四十九年である。私は事の序でに此時代の出来事を年表に照して記して見る。

(一) 千八百三十七年 (日本天保八年、仁孝天皇御宇) 米國大尉サター、十名の兵卒を引連れサクラメント河を溯り、今のサクラメント市のある地點に上陸し、サター城を築く。

(二) 千八百三十九年 (支那、清宣宗皇帝) 阿片の亂始まる。

(三) 千八百四十三年、支那戦敗し、香港を英國に割譲す。

(四) 千八百四十六年 (弘化三年) 米墨戦争。

(五) 千八百四十七年、モルモン宗徒、ロッキー山を超えてユタ

州ソートレーキに植民す。

(六) 千八百四十八年、カリホルニヤ金礦発見。

(七) 同年墨國は敗戦の結果、カリホルニア及びニュー・メキシコ兩州を千五百萬弗にて米國に割譲す。

(八) 同年、日本高知の人、中濱万次郎、カリホルニア沖の島嶼に漂着す。

(九) 千八百六十九年 (明治二年) セントラル・パシフィック鐵道大陸横斷の完成を告ぐ。

(十) 同年、スエズ運河工事落成して新航路開通。米國大統領グランド就任。日本に於て始めて新聞紙の發行を許し、電信

創設さる。

加州金礦が発見せられてから廿一年目、大陸鐵道が開通した年の春、日本移民は初めて加州の地を踏んだ。此一行に例のおけいさんが居たのである。

明治二年渡米の日本移民は獨逸人スネール (日本名、松平武平衛) が率いて来たことは曾て述べた通りであるが、その後調べて見ると、此最初の移民は米國郵船チャイナ號に依りて二月と十月の二回に運ばれ、契約者は四十名の筈であるが、途中何かの故障が出来たものと見え、プラサビルに到着したのは三十八名である。而して其中、夫婦者が六組あり、引率者の隊長スネールは日本人の細君を連れて居り、それがプラサビルで相の兒を産み落したと傳へられている。

おけいは嬢は獨身者であったことは確かである。併し一行中

の何に當るかは今も尙詳かでない。

私は四十九年祭拜觀のため、サクラメント市に旅行し、おけいけいの記念品を見た。それは女持の手箱である。

此箱は五つの抽斗がある。高さ一尺三寸、巾一尺位の品で、徳川末期の作品と思はれる。私は最初此箱は和蘭邊から渡來した物だと考へた。併し其金具やら、細工の形状やら塗方を考へると全く日本製で、此頃歐洲へも輸出した品と思はれる。

此頃日本工藝品は支那で發達した張木細工が可なり發達して、おけいけいの手箱の上部に張られてある剝木は槐の木目を磨き上げたのが張られてある。抽斗の内部は黒の漆塗りで、手軽く出來ているが、丈夫に作られている。

此手箱を買つて貰ふた時のおけいけいの嬉しさは想像に餘りある。彼女は此手箱を朝夕傍らを離さず、金礦發見時代の事ゆへ金砂なども入れて喜んだであらうが、現在抽斗しの中にあるのは、其當時の貝ボタンが幾種か貯へられているのみである。私は此貝ボタンを手に乗せて眺めた。そして、おけいけいの指先きに觸れた此品が五十五年後に同じ日本人の指に觸れたことを奇しき因縁と感じた。

最初の日本移民の事蹟は尙ほ調査すべき事項が多い。此旅行に於て得たる記念的印象は後來多ほくの糸口を解く手始めとなるであらう。私は此記念品を態々プラサビルの山奥から持來られし篤志家の好意に感謝を表する。

〔日米〕 No. 8106 June 3, 1922)

(五十八)

〓 四十九年祭の印象

古色を帯びた遺物 〓

四十九年祭記念博覽會は、七十餘年前の光景を眼前に浮べる趣向である。先づ中央入口のトンネルを潜ると「コルマ鑛山の山道」が高く聳へて見える。山路崎嶇として一溪開き、溪流に沿ふてキャンプが點々として建てられ「金山ホール」が其頃の子夜會のダンスを偲ばしめる。「古代の麥粉製造所」は日本で見る水車其まゝで、唯だ齒車の數の多いのが少しく進んでいると思はれた。「熊落し」「古代武器」から、サクラメント最古の銀行「デオー・ミルバンク」が七十年前の面影を見せている。私が一番感じたのは其頃のワゴンである。此ワゴンは東部で作られたもので、此ワゴンに乗つて數千哩を旅行した健兒の勇氣が想像される。

ワゴンで思ひ出したが、彼の加州有名なる詩人オーキンミラーは鑛山發見時代にゴールヒルで馬車のドライブアーをした人であつた。ミラー詩人は其頃の事を語つて曰く、一日の所得二十弗であつたが、アップル一箇が五弗であつた。當時金も取れたが物價の高いことは想像以上である。

千八百五十六年製造の消火ポンプが、ミルスビルから出品せられた。此ポンプは黄金の鍍金が施された頗る美麗なもので二十人掛りで操縦するやうな仕掛けになつている。此頃には珍し

い貴重品であったであらう。

見世物として優なるものは、某老人が四十九年間貯ひた長髯である。此老人は四十九年間手入れした髯を公衆に見物さしていたが、其長サが十七尺あるといふ。髯の見世物は二人あったが、次の一人は十尺であった。恰度日本産の尾長雞のやうなもので、頭と尻だけの違ひだ。

両方に黒山の如き人集りがある。何事かと歩を移すと、七十年前のビールを賣るといふのだ。七十年前のビールが貯へられたのではなく、七十年前と同じい酒精の含んでいるビールを賣るといふのだ。現時鼻水のやうなビールに飽きた連中が運霞の如く詰め寄せるのは無理のないことだ。賣れるとも賣れるとも、私のような突貫力のない男は、一日待っても有りつけそでもないから、押すな〜の大景氣を傍觀したのみであった。

私の手頸と、首の邊が痒さを感じた。それは蚊に刺されたのである。サクラメント市は四十九年祭が始まるや否や蚊が澤山たかった。蚊が七十年前の心持になって産れて來たとすれば、蚊といふ奴も却々の歴史家である。そこで私は急に怖氣ついた。といふのは、七十年前のマリア熱に伝えられては迷惑至極である。チヨボ髯は剃り落せるがマリアには免疫がない。

頸に土人式のハンカチーフを捲つけた友人が澤山いた。無禮公許のやうな古代氣味で、アイスクリームの御馳走になった。不思議のことには私は非常に酔ふた。此日はサンデーであったやうだ。晝頃から三四軒の友人を訪問するたびに、サイダを戴

いた。頗る酔ふた。近來私は酒を用いのでサイダに酔ふたらしい。

サイダの元氣で終列車に乗った。此汽車は七十年前の氣分で二時間程後れて着いたのであった。オークランド波止場に着いた時は午前三時で、ボートは無かった。一夜を待合室でコロがり眠った。全く七十年前のトランプを演じたことを嬉しく感じた。

朝五時のボートが桑港から遣つて來た。此ボートには王府邊の花園業者が澤山乗り込んだ。花籃を抱いた人の中に交じりて桑港に着いた。花屋の古老林廣吉氏に久しぶりで邂逅した。三十年前の花園業者の懷舊談が出て此處にも歴史の復活を感じた。

〔日米〕 No. 8107 June 4, 1922)

(五十九)

Ⅱ 正金銀行、三井物産

東洋瀛船出張所の始りⅡ

横濱正金銀行が桑港に始めて出張所を設けたのは、明治十九年六月である。之れより先き紐育には明治十三年既に横濱正金銀行の出張所の創設あり。それは高木三郎といふ最初桑港の日本領事たりし人が、紐育最初の領事たりし富田鐵之助と協議して出張所を設くべき建築をしたものであった。

正金銀行が始めて紐育に支店を設けた頃は、日米貿易は實に微々たるものであった。在米日本人の數も米國全體で百八十名位であったから、預金など稱するに足らない。唯だ日米貿易は後來發展すべき希望があるとの一種の空想から店を開いたに過ぎないのだ。

桑港横濱正金銀行出張所は、明治十九年の創立で、其頃の主任は檜原某といふ人である。鍋倉直は第二次の主任で明治二十三年に就任した。

此頃の正金銀行出張所はマーケット街フィラン・ビルディングに二室を借り、其レントは廿二三弗だと記憶する。其デスクの上にはミルトンの詩集があり、店員は主任外一名で頗る無聊に苦しんでいた。此頃加州には三百人程の學生が各所に散在し、家内の勞働に従事し、商店は竹山甲斐が小さな店に竹細工などを並べて商店と號したに過ぎなかつた。

明治十九年頃の日米貿易は、多く紐育に於て取引せられ、桑港に日本品が陸揚げせられても其取揃商は紐育商人の手によりて配布せられ、桑港商人は荷物の香りを馥ぐ位の者であった。

米、味噌、醬油などの取引量は無く、稀れに味噌醬油が輸入されても、それは船員の手荷物として運ばれたもので、税關の記録には無い。

明治二十三四年頃、柴田又吉、井出百太郎、伊藤外海組、富士商會が前後して雜貨店を出した。伊藤外海は美術雜貨店をサター街とグラント・アベニュー邊に出し大商店であった。柴田

はマーケット街に安物の雜貨店を出し、井出は第六街に、富士は第五街に食料及び雜貨店を出した。此頃甲斐商店はカネー街に移り美術商として、伊藤外海と并稱せられた。

正金銀行桑港出張所は右の如き少數の商人と、百五十程の醜業婦の預送金を取扱うのみである故、ミルトン詩人がデスクの上で跋扈するのも無理はない譯だ。

鍋倉直は珍田領事時代を通じて明治二十八年に歸朝し、明治二十九年には青木鐵太郎が出張所主任となつて就任し、明治三十一年に戸澤鼎といふ人が主任として見えた。此頃より銀行の業務は繁昌して、出稼移民が預金送金の數は増加し、日米貿易も亦桑港を中心として各所に活動する者が多く現はれた。

桑港震災前後には穂積太郎が就任し、此頃から出張所を改めて支店と稱したのである。

三井物産會社桑港出張所は明治三十年に創設され、最初モンガモリー街に事務所を置いた。此最初の主任は小田柿捨次郎で現三井物産常務取締役である。書記としては管野某といふ元氣のよい青年であった。

主任小田柿は此當時無妻で、中々の好飲家であつたから時々新聞の三面を賑かした。人物は中上川彦次郎に能く似た處があつて包容力が有り、頭腦も明晰であつた。彼は三十五年に歸朝し、次いで來たのが御酒本徳松といふ人で、小田柿とは正反對な小心翼翼の人物であつた。現在三井の會計課長を勤めて居るそうである。適材適所を得たものであらう。

三井がモンガモリー街に始めて出張所を設けた頃は正金銀行が始めて出張所を設けたと同様店員は無聊に苦んでいたやうであった。此頃小田柿の話に日本から石炭を輸入し一噸六弗で桑港の商人に賣ったといふことであつた。

東洋汽船會社は明治三十一年に桑港出張所を設け、日本丸、香港丸、アメリカ丸の三艘を以て日米間の航路を開き、主任はユブリーといふ白人で、日本人事務主任として中島信行、事務員として小林某が就任した。中島は水戸の人で世才に長けた圓満の男であつた。小林は肺患の爲めに歸朝して死んだ。

〔日米〕 No. 8108 June 5, 1922)

(六十)

Ⅱ三元老の會合

三十六年前の懷舊Ⅱ

久しぶりで日本から松岡謙が米國に見えた。松岡は明治二十一年の渡米で、サクラメント平原に於ける日本人開拓者の一人である。彼れは明治二十一年サクラメント市に到り、廿三年ペーカスフィールドに到りて廿四年フレズノに到り、ハッホードのバトラー葡萄園に始めて人夫を入れ、明治二十六年櫻府に便利公所といふ農園人夫請負事務所を創設し、廿八年始めてパイナ葡萄園人夫供給を請負ひたる人で、サクラメント・バレー開拓者の一人として、在米日本人歴史上重要な地位を占むる人で

ある。

舊友、西博夫サリナスより來たり、五月十八日、舊友一同王府の竹崎犀吉を訪問すべく、私も此一行に加はつた。古色蒼然。茲で、右三老の渡米年月を調べて見る。

松岡 謙 明治廿一年三月

西 博夫 明治廿一年二月

竹崎犀吉 明治廿一年一月

依之觀之殆ど同時代に三人とも米國に渡つたのである。竹崎はシアトルに、松岡、西は桑港に着いた。

松岡は仙臺、竹崎は高知、西は鹿兒島、末席を汚したる尺魔は越後、即ち日本本土の野蠻人が二名、九州で一名、四國で一名の勘定。

竹崎の寓居を訪ふたのは午後六時であつた。「珍客來」とあつて、竹崎は高知時代の「タタキ」といふ料理を拵へていた。

そこで古物三人がドヤ／＼と押掛けた。門を叩く——門と云ふても戸である——内から十三歳ほどの少年が出て來た。竹崎の四十年前はコンナ小僧であつたであらうと、先づ懷舊の感興が湧く。「パパは？」と聞くと「パパはたたきを拵らへて居ります」此少年は米國産に似合はず日本語が頗る巧妙である。(茲で少したたきの講釈をしたいが長くなるから見合せ)「たたき」を筆頭とした御馳走が卓上にならべられたる時、奥様に對するアイサツが在つた。奥様は沈黙の方であるが、それでも婦人の特長を現はして、私共よりは對話が立上つてゐる。

卓上を見廻はすと——どうも貧乏人の兒はイジぎたないと思ひながら——卓上を見廻はすと、鱸の刺身(例の名物のたつき)・法華草のひたし物、蛤の吸物。しかし、禁酒國とあつて、ノー・ドリンク、ノー・リカーであつた。誠に然るべき筈である。

此三人の客の中で、大食家を以て三十五年來、同人間を驚かし今尙、健啖を以て著名なるは西・博・夫である。彼れは昔時支那料理屋に到る毎に三椀の飯、三皿の豆腐洋と二椀の麵汁を平らげて、尙ほ物欲しそつであつた。昔の支那飯の椀は今のに比べて二倍大で、二倍の量が盛られたものだ。

「西は大食家だ」と私が悪口の火蓋を切ると、話は大食の昔語りとなる。復讐の意味で私の大酒家なる史實が例證される。それから西は面白い昔話をした。それは彼れが北部シアトルに放浪した頃の珍話である。

西がシアトルに放浪したのは、今から三十三年前の千八百八十九年頃であつた。此頃のシアトルは開け始めの港で森林を繞らした寒村であつた。當時、インデアンが此附近に澤山住んでいて、時々タウンに出没する。米國政府は此野蠻人を保護するため月一回日を定めて食料を與へてをり、瀛車に無賃で乗せたものだ。西は幸にして其容貌風采がインデアンに似ているため意外の待遇を受けていた。無賃で瀛車に乗つたことも屢あつた。處が一利一害は數の免れざるもので、インデアンには國禁とあつて酒類を賣らない。西は或日の夏、某日本人と共にサ

ルーンに行き、麥酒一杯を求めた。然るに友人には浪々と注いで出したが、西には出さない。西はバーテンダーから土人と見られたのであつた。

そこで同行の友人はおかしさを嘯殺して色々と説明し、西の日本人なることを證明して、漸く一杯にあり附いたといふことである。

其次が松岡のサクラメント入りの昔話が、四十九年祭氣味で述べられた。彼れは實に明治二十一年に櫻府に飛び込んだのであつた。(此稿つゞく)

〔日米〕No.8109 June 6, 1922)

(六十一)

Ⅱ長澤鼎の渡米と

薩藩の海外留學生Ⅱ

現在ソノマ郡サンタロザーに鎮座している長澤鼎は年齢八十位の老人であり、在米日本人歴史に一光彩を放てる人であることは、大概の人が知っているが、此長澤がドーして米國に流れ込んだかを知っている者は多くあるまい。

長澤鼎は薩藩の記録に據ると、中澤鼎といふ假名である。本名清水賢次郎。彼れが如何にして米國に來りたるかを尋づねて見ると、日本開國の當時の海外思想が明かに讀まれるのである。私は少しく其前後の事情を述べて見る。

寛永六年、米國使節ペルリ始めて相州浦賀に來る。日本幕府に開國を求む。目的を果たさずして歸る。

嘉永七年正月、ペルリ再び浦賀に來り、七隻の大艦隊を以て日本に開國を迫る。同年日米和親條約成る。

安政四年、日本幕府と米國領事タウンSEND・ハリス間に修好通商條約締結せらる。攘夷鎖國論大に起る(徳川家茂將軍)。

安政五年、開國、鎖國論二派に別れ、安政の大疑獄事件あり。安政六年、大老伊井直弼、刺客の爲に殺さる。

蔓延元年、露國軍艦對馬を占領す。此年新見使節米國に來る。文久二年、攘夷の詔勅あり、天下大に亂る。此年薩摩藩島津

久光勅使、大原重徳を護衛して江戸に到る。其歸路がいはゆる生麥事件を惹起したのであった。

生麥事件とは何乎といふと、文久二年八月、島津久光が勅使大原重徳を幕府に護衛し、其歸還の途中で生麥村に差しかかった。處が英國人四人、行手を横切った。藩士は「無禮者ツ」といふや否や、右の英國人四名を斬り捨てた。

日本の習慣からすれば、勅使の鹵簿を衝くは斬捨てられるのは當然であるが、英國人としては用捨のならぬ大事件である。

天下の大道を横切らうが縦切らうが自由であるべきものである。英國人から言はしむれば、理由なくして人間を殺害したのである。そこで英國公使は幕府に四十五萬弗、薩摩から死傷者撫恤金として十萬弗を要求した。

幕府が此要求を受けた時、第一に驚いたのは英國人の野暴天

である。苟も勅使の鹵簿を衝く人民は磔刑にさるべき重罪である。然るに英國公使が、左様の重犯人のために損害賠償を申出たのは、人を馬鹿にした申分である。英國人たるべき者は右様の無禮を働いた廉に依り、詫狀を一札入れ、今後左様の無禮者を堅く戒むべき筈である。幕府はそう考えたのであった。

處が英國人は奇妙な議論を持ちかけて來た。それは正義人道に反するといふことである。日本の側では勅使の通行先を横切るのは正義人道の敵だと考へ、英國人はあたりまへの行動だと考へた。大枚四十五萬弗と十萬弗の撫恤金を申出たのは、當時の日本では途方もない言掛りだと考へたのである。

そこで此談判は中々埒が明ない。英國は口頭の争ひでははてしが無いといふので、數隻の軍艦を差向けて手詰の談判に及んだ。英國は海賊の仕上た國だけあつて米國のような手ぬるい事をしない。談判と同時に大砲を放す位は何とも思はない。幕府は止を得ず四十五萬弗を出すことを約束した。併し薩摩は十萬弗を出すと云はない。

英國は薩摩が撫恤金を出すと云はないので大に怒つて、文久三年六月廿八日、軍艦七隻を以て薩摩鹿兒島に到り、生麥村殺傷の下手人と十萬弗撫恤金を要求した。薩摩は中々之に應じない。そこで七月二日、英國艦隊は薩摩の汽船、天祐丸、白鳳丸、青鷹丸の三艘を押へた。薩摩は大に怒り、砲臺より、英艦を砲撃した。サア大變の事になった。

英艦は應戦し、薩摩は目かけて砲撃し、鹿兒島は大火災が起つ

た。此時薩摩の猛勇士は裸體で戦ふたが、臺場は英艦の砲撃によりメチャクになり、市街の火事は二日間止まなかつた。薩摩は到底敵とすることが出来ないで、講和を申込んだ。是が有名な生麥村事件の顛末で、此事件が長澤等の英國留学の動機である。

〔日米〕 No. 8110 June 7, 1922)

(六十二)

|| 三元老の會合 (續)

松岡謙の櫻府入り

貨車がホテル ||

御斷り 此記事は回数に誤りあり 七日掲載の「長澤鼎の渡米」と前
後したれば此段御斷り致したく。

松岡曰く。何のために櫻府へ飛び出して行つたか。覺えて居ないが、サクラメントは加州の首府で、金山にも近い處だから面白ことがあると思ふたやうに考えます。明治二十一年頃は櫻府、桑港間に一日一回の割引瀛車があつて、片路一弗五十仙。僕は此時二弗五十仙程の大金を持つていたので、これさへあれば先方でスクールボーイの口に有りつくまで命に別條がないと考へました。

午後三時發の瀛車で、七時頃にサクラメントに着き、第二街

邊のルーミングに一泊して、廿五仙を支拂ひ、それからビー新聞に二日間働口を求める廣告を出した。此料金五十仙。翌日になつて懷中を調べると心細い、僅かに二十五仙を残すのみである。ビー新聞に行つて手紙が來ていない乎、を聞くと「まだ」といふ。二日目には最早ルーミングに泊る金が無い。止を得ずブレッド一本と、巻烟草一箱(五仙)を買ひ、お百度を踏むつもりで、ビー新聞に手紙が來ていないかを問合せると、二日目に二本の手紙が來ていた。早速一軒の家に掛合ひに行きました。

愛蘭人らしい主婦が出來て來て一ヶ月十弗拂ふから働くかといふ。處が給料はそれで可いとしても此家にはルームが無いから外泊して働かねばならぬ。十弗の給料で外泊するんじや、勘定に合はぬと考へて、其家を辭し今一軒を掛合ふて見ると、終日働いて一ヶ月六弗くれるといふのだ。これは前の家より餘程割がわるい。そこで之れも斷つて仕舞ふたが、サア此末は乞食をする外に方法がない。

既に昨夜は停車場の空貨車の中で一夜を明かした。ブレッドを買う企も無くなつた。此上は一軒づゝ聞き合せて働口を求むべしと決心して、ケー街を片端から聞き合せた。第一がウエスタン・ホテルであつたが、斷られた。其次が何といふ家か忘れたが、六七軒目にステートハウス・ホテルで働口を得た。此仕事はバーの掃除をするので、一ヶ月十五弗を支拂ふといふ。明日から仕事を始めると言われた。僕は昨日から食事をしない。

そこでホテルの主人に右の事情を話すと、主人は大に驚いて早速ダイニングルームに連れて行き大きなビーフステーキを食べさせてくれた。其時の厚意は今も忘れません。

此當時サクラメントで一人の日本人にも出會はなかつた。幾らかの日本人が居た筈でしたが日本人社會といふ者が無かつたから何處に何者が居たか分る譯もなかつたのです。

尺魔曰く。此頃サクラメントには十五人程の日本人が女郎屋のコックやら掃除人やらをしていた筈で、大工國之助などは既に黒婦人と結婚して兒を儲けた頃であります。それから此年に福岡雷次郎は櫻府に旅行したことがあるし、其前年には森銀之助が此地に參り一人の日本人を尋ねあてた話もある。

竹崎曰く——此年の六月(明治二十一年)僕はサクラメント市を通過してウッドランドに着いた。此頃西龍之助といふ紀州人が同地に居り、同年秋、高尾庄太郎、馬場小三郎に面會した。松岡曰く——僕は明治二十一年秋、再び桑港に戻り、學僕生活をして、明治二十三年春、ベーカーフィールドに旅立つた。此頃桑港に宮原六之助といふ人が居て、ベーカーフィールドの大地主ウエアム・カーといふ人が社長をしているカーン土地會社の牧畜人夫として日本人を入れる約束をし、始め六十人の日本人を入れた。峰島儀一と僕は其人夫の通譯に雇はれて行つたのであります。

カーン土地會社の牧場は數十哩の廣さで、牧牛二十五萬、當時加州第一と稱せられたもので、日本人労働者は其放牧してい

る牛の飲料水を供給する仕事でありました。牧牛の飲料水はウインドミルが數十個所に設けられているが、風のない時にはポンプで突かねばなりません。數十哩の大原野を幾つかの受持に仕切り、其井戸の番をするので、面白くない働きであるから、久しからずして労働者は飽きて仕舞ひ、僕は翌廿四年に労働者を率い、バイセリアの伐木仕事の口を取り同年フレスノに到り、ハンフォードのバトラー園を初めて請負ひました。(つづく)

『日米』No. 8111 June 8, 1922)

(六十三)

|| 日本人の元祖争ひで

私の不學を恥ぢた ||

して見ると、フレスノに始めて入り込んだ日本人は松岡かも知れんと、私が言ふと、竹崎は「イヤそうでもない」其譯は明治二十四年の七月に野田音三郎と峯島儀一はフレスノに會し、ルーサン葡萄園を引受けて百五十人の日本人を入れた。

私は曰く——それでは松岡は、ハンフォードの開祖で、野田と峯島はフレスノの開祖だ。

とかく元祖争ひは、いもりの黒焼を惚薬として發明した頃から面倒な問題の一つとなつてゐるやうである。そこで、西が曰く——日本人が初めて借地をしたのは誰だか知つてゐる乎といふ。竹崎曰く——それは明治二十二年に、僕がウッドラン

ドのマーチンの畑を借りたのが始めてであらう。西曰く——
イヤそうでない。

尺魔曰く抑も、日本人が農業に足を入れたのは、ソノマ郡が始めてであった。明治七年に中澤鼎（世間では長澤鼎といふ）がドクトル・ハリスに随伴してサンタロザーに來り、初めて葡萄を植付けた以來、どうしたものか日本人は此附近に發展したものであった。中澤がソノマ郡に居た爲めに其腹を嗅ぎつけてソノマ郡に集つたものか、乃至は偶然に行つたものか分らないが、ソノマ郡には早くから日本人が這入り込んだのであった。

西曰く——僕が明治二十一年に鍍金蟹を持つて來た頃に一時歸國したことがあったが、其時、鮎ヶ瀬軍三郎といふ男と同船した。此男は明治十九年からソノマ郡クロボデルに於て四十英加程の土地をリースして関某といふ人と共に西瓜だのトメトだのを耕作したと語つた。是が日本人土地借地の元祖だと思はれる。

竹崎曰く——なる程、そう聞けば、そうであらう。然らば僕の元祖は撤廢する。

そこで、中澤は土地所有者の元祖、鮎ヶ瀬、関は借地人の元祖といふことに決定した。

エンヂンの火夫をしたのは僕が元祖だと西はいふ。エンヂンの火夫とは何かと私がいふ。西は得意な顔をして左の史實を物語つた。

「僕が明治二十三年にウードランドのマーチン園に働いた。

それはエンヂンの火夫として働いたのであった。其頃マーチンは五英加ほどの苺園を有つており、此苺園に灌漑するために、立釜の蒸氣エンヂンを据付けていた。此頃はガソリン・エンヂンは無かつた。古ぼけた蒸氣エンヂンの十馬力のが雨に曝らされて園中に在つたのである。

「其燃料は麥藁で、一分時間と雖も油斷はならぬ。僕は釜燃きをして、晝飯時にヂャンといふ青年と交代したのであった。

或る日、僕が晝飯タイムにヂャンと交代してキャンブに這入るとドーンといふ音が聞へた。主人マーチンは「エンヂンが破裂した」と叫びながら僕と一緒に現場に馳せつけた。處がヂャンの姿が見えず。エンヂンは濛々たる煙の中に半死半生の體である。

ヂャンの姿が見えないので、僕はあちらこちらを見廻はした。

驚くべし。三四十尺のフヘンスに人間の足が引掛つていた。それはヂャンの足であつた。ヂャンはエンヂンの破裂で五體が分裂したのであつた。

尺魔曰く——然らば西は在米農園に於ける火夫の元祖だと記録する。

竹崎曰く——日本人野菜業者の先祖は誰れ乎、知っている乎。

尺魔曰く——野菜作りの元祖は僕だ。明治三十九年リビングストーンに於て、茄子を二英加作つて、氣狂だと言はれたことがある、といふと、竹崎は、馬鹿野郎と怒鳴たので、少々引下

がった。

竹崎曰く——野菜業者の元祖は和歌山縣人白山資一郎といふので、明治二十四年にワイ街の墓地附近に一英加半の土地をリースしたのが始まりである。此當時、彼れは日本大根を蒔いて香の物にして、ナトマ葡萄園に送り日本労働者の舌鼓を鳴らしたことがある。

それから、フロリンの元祖は明治廿二年頃、水夫上りの島田といふのが、苺摘人夫を送り込んだのが始まりである。茲まで話が進んで幕になった。

(『日米』No. 8112 June 9, 1922)

(六十四)

|| 森、鮫嶋等の渡米

日本公使の元祖 ||

生麥事件で英艦の砲撃を受けた薩摩は、到底其武器戦術の西洋に及ばざるを覺つた。英國に對して十萬弗の償金を幕府から借用して相濟まし、一先づ平和に解決したが、此頃から日本の先覺者は、日本が西洋に劣つてゐることを痛感したのであつた。特に薩摩は散々の痛手を蒙つたので、之れではならぬと感じた。

此頃は天下の志士浪人等が鎖國攘夷論を高唱し、各藩また之れに同意し、攘夷の詔勅が下つた程であるが、攘夷の先覺者、島津三郎(久光)・大久保市藏(利通)等は攘夷の到底行ふべか

ざるを知り、寧ろ彼の長所を學ぶの必要ありとし、時の藩主、齊彬公に献議して、開成所を創設した。此開成所といふは一種の外國學校である。

開成所は八木元悦、石河確太郎が教官で、森有禮、吉田清成等は此學校で學んだ。そこで薩藩は百尺竿頭一步を進め、開成所出身の秀才を英國に留学せしむる策を樹て、之れを藩公に献議した處が、大に悦ばれ、早速留學生を出すことに一決した。

然るに幕府は豫てより邦人の海外に渡航することを嚴禁してゐる故、薩藩の留學生は表向き海外に出づるは國禁を犯すこととなる。そこで協議の末、名を脱藩に託して斷行することとなり、留學生十名はすべて假名を用いた。

森有禮(澤井鐵馬)

吉田清成(永井五間助)

市村勘十郎(松枝淳藏)

畠山義成(杉浦讓之助)

中村博愛(吉野清右衛門)

鮫嶋尙信(野田中平)

清水賢次郎(中澤晰)

村橋某(不詳)

三笠(不詳)

田中(不詳)

以上十名が留學生で、家老、新能刑部(石垣鐵之助)・學長町田久成(上野良太郎)・差添人として寺島宗則(和泉千藏)・五代

友厚(閔研藏)等これを監督し、一行十四人、慶應元年三月二十一日英國ガラバ瀛船會社のオースタラニン號に搭乘し、鹿兒島灣頭、羽嶋を出帆し、香港、新嘉坡、彼南、錫蘭、孟買、蘇尼土、カイロ、アレキサンダーを経て英國サウサンプトンに到着したのが、同年五月廿三日である。

一行は即日、倫敦ケンシングトン・ホテルに投宿し、倫敦大學校ウキリアムソン氏の斡旋に依り倫敦大學に入り、各々其目的の學科を修めた。森有禮は將來海軍に従事する志望にて豫備として化學、數學、物理學を研究したとある。

斯くて一行はホテルを出で、ベースウォートの寄宿に移つたが、其後更らに教授グレーンの許に寄宿することになった。

右の留學生等は翌慶應二年暑中休暇を利用し、弘く各國の事情を視察すべく、森、松村は露西亞に、鮫島、吉田は米國に、畠山は佛國を巡遊した。

暑中休暇から倫敦に歸つた學生等は、各國の長短に就いて比較研究を遂げたが、鮫島、吉田の米國美風談が最も同人等の感興を引いたのであった。それも其筈で、鮫島、吉田は米國に於いて新宗教家ドクトル・ハリスの恩寵を受けたのであった。

ドクトル・ハリスは、其頃ボルクトンに葡萄園を所有し、青年食客を集めて宗教を宣傳していたが、鮫島等は米國視察の時、時の英國代議士オリハント氏の紹介で、ハリス氏の客となり氏の偉大なる人格に接したのであった。

翌慶應三年、日本の天下大に亂れ、薩藩は英國留學生に學資

を送ることが出来なくなつた。そこでハリス氏が佛國博覽會見物の途次、英國に立寄られしを機とし、尙ほハリス氏に乞ふて米國留學援助の承諾を得、同年一行は米國に渡つた。之れより森はパン焼きをなし、中澤其他の青年は學業の傍ら農園に働いた。

森と鮫島は、ハリス氏の神託によりて、日本國難を救ふべく、慶應四年(明治元年)に歸朝し、明治政府に仕へて、明治三年九月政府の命により、森は小辯務使に任ぜられ、米國に駐劄を命ぜられ、鮫島も同じく少辯務として、英、佛、獨に駐劄を命ぜられた。之れが日本から公使を派遣した始めである。

『日米』No. 8113 June 10, 1922)

(六十五)

Ⅱ 中澤晰加州に移る

サンタローザの開拓Ⅱ

ハリス氏の農園を手傳ひたる薩藩の留學生等は、其後森、鮫島等の歸朝と共に種々の變動があつた。中澤晰はハリスの信任を受けて、専ら葡萄栽培の仕事に従事し、政治的青雲の志を絶つた。ハリスは此頃加州に於て葡萄栽培の事業が、米國第一なることを知り、加州移住の計畫をしたのであった。

明治六七年の頃、ハリスは同志と共に加州移住を企てた。此計畫に参加したのが、薩摩の書生、中澤晰であつた。彼れは、

加州桑港に着き、それからソノマ郡の一地を下し、山林を開墾して葡萄を植附けた。此葡萄栽培の事業は幾多の困難に遭遇し、或時は虫害の爲め全園を焼捨てたこともあった。併し彼れは當園の支配人として色々なる研究を積み、大醸造所を設け、以て今日の成功を齎ち得たのであった。

明治十五年頃、預言者ハリスは病歿せられ、中澤は此葡萄園を繼承して今日に至る。此間約五十年間、一事一業に熱中して其志を變へざるは邦人第一と稱すべきである。

私は加州葡萄栽培の歴史に就て知る處が少ない。それゆへ加州に於て何地に於て何人が葡萄を始めて植附けたかを知らないが、大體の上に於いて考ふるに中澤が葡萄を始めて植附けた頃は、スタンフォードがテヘマ郡パイナに始めて葡萄を植附けた頃で、ナトマ葡萄園の植附けられしより三四年の後と思はれる。フレスノ附近に乾葡萄が發達したのは、之れより約十年の後のやうだ。中澤の同學生で英國に同行した連中の内、最も名の現はれたのは、刺客のために倒れた森有禮で、彼れは明治元年歸朝するや、泰西の事情に通ずるの故を以て、同年七月、徵士外國官權判事といふ官に任ぜられ、更に八月、議事取調御用掛に命ぜられ、明治二年六月、廢刀論を提唱して上下輿論の反對に會ひ、位記を返上して職を去り、郷里鹿兒島に隱遁した。然れども時世は人材を要するを以て彼れは明治三年再び政府に召され、外交多端の折柄ゆへ十月辨務使館(後公使、大使館)に昇格を英、米、宇(獨逸)佛の四ヶ國に創設することとなり、

森は少辨務使從四位を授けられ、米國駐節を命ぜられた。

森有禮は同時に交際事務及び留學生管理を委任せられ、名和道一(辨務權少記)・外山正一(辨務少記)・矢田部良吉(外務文書大令史)及び從者荒井當之進、内藤誠太郎を率ひ、明治三年十二月朔日、東京を發し、郵便船グレート・リパブリック號に搭じて横濱を出帆した。

鮫嶋尚信は同じく、少辨務使を命ぜられ、英、佛、獨三ヶ國に駐節を命ぜられたのであった。

事の序でに森、鮫島兩辨務使と同船して歐米留學の途に上りたる者の名を記せば左の如である。

伏見滿宮、隨行者、東久世通禮井、上庄藏、田坂虎之助、山崎橘馬、熊澤善庵、丹羽某、松野磯、岡田某都合八名

獨逸留學生としては、池田謙齋、相良元貞、山脇玄、大石良二、荒川邦藏、尾崎平八郎、北尾次郎、今井巖、大澤謙二

英國留學生としては、西園寺某(公望?)、萬里小路某、石野某、黒田帶刀、南貞介。

米國留學生としては、畠山長平、五十川中、木村熊二、神田乃武、馬込爲助、大儀見元一郎、中原邦之助、林莊藏、此總計三十七人と記録さる。

一説には神田乃武は、岩倉大使一行に隨行して渡米せる如く記録せるものあれど、神田は華盛頓に於て大使一行と會せるものにして、岩倉大使渡米の時は彼れが留學僅かに一ヶ年の頃に當っている。

長・沢・(中・澤)の同學生、吉・田・清・成は、明・治・五・年大藏少補となり、第一回外債募集の爲めに英米に派遣せられ、森・有・禮の反對に會ふた珍話を残している。

長・澤・時・代の同學生は公使となり大臣となり、日本官海に時めいた。獨り長・澤は無官の帝王としてサンタローザの農園に仙骨を保っている。森、鮫・嶋等が幸福か、長・澤が幸福か知らぬが後輩私は寧ろ長澤を尊敬するものである。大臣、大使は日本に澤山いる。長澤は一人しか無い。

『日米』No.8114 June 11, 1922)

(六十六)

II 料理屋の初期時代

大和屋彦天大黒屋 II

在米日本人料理屋の元祖は、誰れであらうといふ話が某處で出た。私共のやうに渡米早々新聞生活をして貧乏で押通した者は、料理屋の智識には頗る缺けているので、實際経験の上からすれば無知の階級である。しかし鰻屋の前を通過して香を馥ぐことは通行者の權利である以上は料理屋の噂さ位は想して貰はれるであらう。

在留日本人に向つて、日本人専門の商賣を始めたのは第一がセーラボードングで、之れは赤・羽・根・忠・右・衛・門が明・治・十・三・年頃から始めた。それから後に日本人専門の商賣を始めたのが、日

本料理店で、萩・原・眞がサクラメント街とスタクトン街邊に始めたのが元祖である。

萩・原・眞は明治十四年頃の渡米で、彼れは箱館に居留し、米國に或る日用事を頼まれて行つた處が、其船は不意に出帆し萩原は不思議の機會で米國に渡つたといふ珍話がある。

萩・原は若い時分から器用な男で、料理もすれば歌も謡ふ。箱庭も作れば、村芝居もする。手まめ足まめ口まめの男であつたから、米國船に乗つてから後は随分米國人に調法がられたものであつた。

彼れは、米國に渡つてから二三航海、太平洋沿岸の船乗り生活をしたが、其後桑港に定住を決心し、前記の場所で大和屋とふ看板を上げて料理屋を始めたのが、明・治・十・八・年頃である。此當時日本人は學生四五百人、水夫百人位い桑港に住んでをり、給料の安い時であつたから料理屋といふても極めて小規模のもので、彼れが開業した家は家賃七八弗で客間が二つしかない。

お客として見えるのは、水夫が主もで、一品十仙、飯は食放題で五仙であるから利益といふ利益を擧げることには出来なかつた。彼れは料理屋の傍ら白人の庭園に働き、綺麗な日本式の庭を拵えて主人の氣に入られ、其後、料理屋よりも庭師の方が専門の姿となり、明・治・二・十・四・年妻君を連れて再渡米をして間もなく右料理屋を駒・田・常・三・郎に譲り渡した。此頃ゼシー街に彦・天といふ飯屋が出来た。一食十仙三度廿五仙といふ安直で、天麩羅など食はして書生派の食事機關となつた。大和屋は駒・田の手に

移つてから大黒屋と改名し、彦天飯屋は書生の方、大黒屋は水夫の方を顧客として營業した。これが廿五六年頃の事である。

駒田は後、私に語つて曰く。「私が大和屋を引受けた頃は一日の売上高總計三弗の時は大繁盛の日で、大概一弗から一弗五十仙位いの商売しかありませんでした。そこでイクラカの儲けは食込んで仕舞ふて、毎朝の買出の資本が無い。買出しといふても豚四五十仙、豆腐、魚、野菜を五六十仙仕入れるのですから高が一弗もあれば事が足るのですが、其一弗がありません。籠を下げて支那タウンに行く途中辻の處で立ち、誰れか知っている水夫が通らぬかと待っていると、不思議に知っている者に出會ふのです。」

オイ君、一寸一弗貸して下れんかとやると、宜しいと一弗出してくれる。其金を持つて支那人から色々を仕入れをして來たことが度々ありました。時々船が這入つた時などは五六人連でドヤ／＼とお客がある。斯ういふ時には、オーダーを受けてから急いで支那町へ駆け付けて仕入れをする。其時は常客の誰れかれから廿五仙三十仙と借り集めて資本に充てるのでありました。

桑港で日本料理屋をしてやや體を備へたのは、大黒屋がデユポンド街に移轉し、千代志がボスト街に、小川亭がエリス街に店を出した頃で、日清戦争の始まつた年である。併し此頃の料理屋は風儀のよい者で、婦人のウエトレスは居らず、酒なども少しの日本酒なら輸入されたが、一本二十仙で、其後二本三十

仙に賣つたこともあり、ビアは一コート入り一本廿五仙、バイント十五仙、さしみ、煮魚一品十仙であつた。

食物の進歩は文明の徴象である。此點に於て私は料理屋の發達を希望する。併し現今のやうな料理そつち退けて白粉臭い女を以て料理屋の本職と考へるやうでは、在米日本人の文明も墮落だといはねばならぬ。

『日米』No. 8115 June 12, 1922)

(六十七)

|| そばやとすしや及び

料理人の名人考 ||

明治十八年このかたの料理屋の話は前號に書いたが、料理屋の元祖は必ずしも日本からの料理人でなかつた。例へば元祖の萩原は料理人として出來上つた人でなく、二代目大黒屋の駒田も素より料理人でなかつた。すべては米國三界の世渡り上、止を得ざる事情で料理番になつたのに過ぎない。

然るに料理屋が米國に開元されてから趣味を以て立てる料理屋の主人等は自分の手の拙なることを感じたと思へて、日本から生粹の料理人を呼寄すべく交渉した。萩原眞は明治廿二年春から交渉を始めて、日本一方の大家、生稻忠兵衛を明治二十二年に呼寄せた。忠兵衛は在米日本人の料理人としては餘りに上等であつた。そこで名を世界見物に託して渡米したのである。

生・稻・忠・兵・衛は、柳橋生稻の總領に生まれ、純日本式の料理人として日本が一二を争う程の名人である。彼れは明治廿二年、桑港に着し、大和屋（萩原）の家に寄寓した。この時大和屋の料理番は繁公といふ水夫上りであつた。

生・稻が、一日大和屋のケチンに腰を掛けて、繁公の肴の身おろしを見た。其伎倆が忠兵衛の目から見れば、甚だ未熟に見えたので、忠兵衛は思はず「ああ肴がさぞ痛く感ずるだらう」と云ふた。繁公はこれを聞いて勃然として腹を立てた。「オイ、爺さん、お前は肴の身卸を知っているかい。知つて居るならやつて見ねー。」

忠兵衛はおかしく思ふたが、繁公を怒らしても悪むいと考へ「サア、少しは知っていますから、明日私が身卸をして見ましよう」かいと答へ乍ら、翌日大きなシエバスを求めて、組板に乗せた。「繁さん、一寸見ないか」繁公は満身怒氣を含んで忠兵衛の料理を見ている。

忠兵衛は日本から携へて來た庖刀を出して、先づ一刀にシエバスを兩つに割いた。「サア刺身にするかい。大根があるかい。」

忠兵衛は半片を刺身に切つた。そして大根をツマにした。其庖刀の使ひ方が巧妙自在を極めたので、サスガの繁公も一言も返す言葉が無く、忠兵衛の前に兩手をついて「イヤ爺さん、誠に恐れ入りました。」

忠兵衛は明治二十五年歸朝、翌廿六年シカゴ博覽會内に日本

料理店を開業し、始めて日本料理の粋を米國人に紹介したのであつた。

生・稻は其後、佛國、英國を旅行し、千九百十五年桑港に於けるパナマ大博覽會に來りて、ブキヤナン街で十仙一品の料理屋を開き、桑港のボリヤ的料理店を驚かしたことがある。

此當時、生・稻は私に語つて曰く。「イヤもう只今米國にいる料理屋さんは、料理屋でござせん。あれはチャブ屋と申してな、横濱邊の場末で淫賣をする家と同じの者でござす、田舎者は料理なんていふ者を食はしても譯が分りません。頸玉の白いのを料理だと思ふてゐるんですからねハハ、ハハ、。」

明治廿九年、大黒屋は勝さんといふ料理人を日本から呼んだ。翌年勝さんは大黒屋を引受け、駒田商店を開業した。其翌年勝さんの大黒屋は小林といふ料理人を日本から呼寄せ、後小林は大黒屋を引受けた。

明治二十六年の頃に桑港に藪そばといふのが起こつた。主人は荒井某といふので、日本東京やぶそばの家元の主人公であつた。この時から桑港にそば屋が流行したが、藪そば以外の者はすべて田舎流で、シカモ原料が悪いので、好蕎家の口に適する者はなかつた。

すし屋は明治三十年頃に港すしといふのがデユツボ街に開業した。此すしやは何代か變つて今の主人に遷つた。以前のは江戸流で味のつけ方や酢の使ひ方を知つていたが、此頃ははずべて中國式の者である。

天・麩・羅は青・柳は元祖である。青・柳は明・治三十二年、竹・本・梅・壽といふ義大夫の師匠が始めたもので、此頃、在桑していた生・稻・忠・兵・衛が後見役で天・麩・羅の衣が秘密だと誇っていた。其後代が變り勝・路の代になってから小林が衣の改良をして今日に及んでいる。しかし、金を儲ける割には料理はすべてが劣て参った。

『日米』No. 8116 June 13, 1922)

(六十八)

|| 日本料理の元祖と

東西文明の調和 ||

春・舟・郎氏は此頃日米紙上で日本料理の爲めに万丈の氣焰を吐かれた。そして在米日本料理の盲目を暗示せられた。私は氏と同論である。

蓋し、日本料理の粹は世界各國中其比を見ざるものである。世界多くの料理は動物的である肉と脂肪と野菜の使ひ方に過ぎない。然るに日本料理は動物的調理から超脱して精神的宗教的の境地に達している無味の味を提出し、色彩と食物との調和を藝術化し、未だ食はざるに既に視感に訴へて味感を順調に導くの巧妙幽玄、之れ東洋哲學を具體化する大藝術である。たとへば日本料理の粹は一服の名畫である。思想的にいへば禅機である。人間の意識認識を膳中に入れたる偉大の教訓である。此の眞善美の三體を一味の藝術に表現したものが日本料理の特長

で、支那、佛蘭西人が到底其領域を窺ふ能はざる優秀なるものである。

處が日本移民は多くは不學である故、自國で發達した尊ぶべき文明を辨まへない。鯉節の文明とハムの文明とを混同しているのは兎も角も、學者として日本に名ある澤・柳・政・太・郎なども文明なるものゝ意義を履き違へているやうだ。

邦人新聞紙を見ると、六月三日、澤・柳・博士は羅府で一場の演説を試みられたとある。其大要に據ると「日本人は曾て印度支那の文明を模倣した。併し、日本人は獨創力に富んでいて、玉十露盤で微分、積分をはぢき出した。それは西洋人よりも數學の智識が早かった。」茲までは無難の歴史的説明であるが、其次に

「在米同胞は斯くの如き、創造力に富んでいる民族の血を承けた以上は、十年一日の如く亞米利加三界に來てまで味噌汁に香の物でもあるまい」といはれたさうである。

私は此演説を糞と味噌を辨ぜざる大なぐりの言論だと評する。澤・柳・博士は何故味噌汁と香の物を冷かされたのであらう。日本人の生活内容に味噌と香の物の在るのが何故日本人の創造力に對して悪影響があるのですか。奇論といへば奇論、愚論といへば頗るの愚論で、學者として寧ろ笑ふべき言説であるまい乎。

凡そ民族の創造せる文明は、其子孫が之れを修正改訂して完全なる新文明を完成するのであつて、いはゆる創造なるものは

潜在意識の産物である。而して潜在意識は祖先傳來の齋である。日本人が十露盤から積分をはぢき出した思考力は味噌汁と香の物が關係が無いとは申されまい。而して味噌汁と香の物は米食人にとりては古來數百年來の調理的工夫から完成したもので、米國人の知らざる食物製造法の一つである。澤柳博士が雜作もなく馬鹿にしてのける程左様に馬鹿な食品では無い。此食品を何故アメリカ三界で用いては悪るい乎。

日本にバタが這入り、パンが用いられ、干果物が珍重がられるのは、西洋の食物文明が日本に普及したのであらう。同時に日本人が茶を輸出し、味噌醬油を輸出して西洋人に其味を嘗めさせるのは、日本食物の文明を西洋に普及する譯である。日本は西洋のマネをして進み、西洋は日本のマネをして進むのが東西文明の調和の始めであるまい乎。而して其東西文明調和のキーを握っているのが、在米日本人乃至在日西洋人である。日本の俗學者はこんな事は知るまい。

序だから話すが日本は糞の文明を有っている民族である。日本人が今日まで長らへたのは、糞を上手に利用した爲めで、若し糞の利用がなかったならば、穀物野菜は甚しく欠乏した筈である。米國は土地が新しいから人糞の必要なくして作物が成長し、人造肥料の原料も豊富である故、糞の文明が発達しなかつた迄である。

話は大分横道に這入ったが日本料理の文明は、今後西洋人に向つて宣傳すべき價值がある。同時に、味噌、香の物は決して

笑ふべき者ではない。

生・稻・忠・兵・衛がシカゴ博覽會を筆頭として世界のあらゆる博覽會に参加し庖刀一本を揮ふて日本料理の文明を傳えたのは、今の半可通の學者が世を迷はす愚論と大分質が異ふようだ。そして此名人を世界に紹介したのが在米日本人料理屋の元祖萩原眞であるとするれば萩原翁の功績は没すべからざるものである。

〔日米〕No. 8117 June 14, 1922)

(六十九)

|| 生稻忠兵衛と米僂畫伯

有法の極は無法に歸す||

生・稻・忠・兵・衛はセントルイス博覽會の年に紐育に日本料理店を開いていた。此博覽會には久保田米僂畫伯も見えられ、其作品を陳列した。そして翌年紐育の客となつた。此時生稻は日本料理の粹を凝らして大使、書記官、米僂及び紐育の知名の邦人を招待したことがある。

生・稻は、一週間前から料理の準備をし、當日來會の客人を歡待した。給仕には養女を當らしめ器物調理の吟味をして一同を驚かす趣向を立てた。

愈々膳部が出で本膳、二の膳の本式の料理がならべられたる末、娘は其膳を型の如く引いた。生稻が其引いて來た膳を調べて見ると、驚くべし料理を本式に喰べたのは某書記官の奥様一

人のみであった。

生・稻は、數日後、畫・工・米・僊を其寄寓せるホテルに訪問した。

米・僊曰く「イヤ爺さん先日は御馳走になりました」生・稻曰く「先生、先日の料理はドー考へました」米・僊曰く「誠に結構でした」

生・稻は更に問ふた。「先日出したしる物をどう見ましたか」

米・僊曰く「何でしたかね。覚えていません。」

生・稻老人勃然として怒つた。「オイ、久保田さん、おめいは畫をかくのをヤメるがいいぜ。」

米・僊は驚いた。そして其故を問ふた。生・稻曰く「あのしたし物はな三日前に白牡丹の鹽漬を晒して、そうして青磁の鉢に盛つたのだ。食べちゃ甘くないが、料理色彩の苦心は此處にあるんだ。おめいはそれがわからん乎。」

米・僊は生・稻老人の説明を聞いて敬服した。そして自分の不用意を詫びたといふ。米・僊其後人に語りて曰く「生・稻老人の丹精と努力には敬服しました。吾輩等が繪をかく用意は、生・稻が庖刀を揮ふ用意よりか劣っています。世のへボな畫かきは生・稻の足下にも寄れん」と。

生・稻はバナマ大博覽會の時桑港に來て、大博日本委員の招待會の料理を引受けた。其献立は頗る振つたもので、中央に噴水を装置し、築山には松檜を飾り、池水には紅白の魚が踊つてをり、櫻桃其仙百花爛漫として一個の仙境を出現した。而して其點綴せる植物、動物はすべて大根人參の類を用い、其技巧は彼れの庖刀一本から成つたのであった。

其料理を始める一週間前、私は生・稻老人と語つた。彼曰く、今度のパーラーにマウンテン・トラウトを出すつもりですが、何か面白い趣向が無いでしょうか」私曰く。「トラウトの煮びたしはどうかね。日本で鮎の料理に匹敵すると思ふ」生・稻曰く。などほど、わつちも左様思います。で、一つやってみるつもりです。

彼れはマウンテン・トラウトを煮びたしにして、其皿に花鱈魚を盛り、トラウトの形狀を包んで卓上に乗せた。満堂の客人其何物なるかを知らせ、箸を着けて始めて、トラウトの美味に感じたのであった。

宴終りて後、私は生・稻老人に向かつて聞いた。「日本料理といふ者は融通の利かないものだと思ふていたが、今日の料理で見ると、すべてが新しい。」

生・稻曰く。「そこでごわす。料理といふものは規則がありませんが、其實は規則の無いもので、自身の器用次第で規則を破つて規則に合はせるのです。アメリカに居て料理をするのに、日本の品が無くては出来んといふやうでは、料理人の腕が足らるのでごわす。」

東洋藝術上の格言に、「有法の極は無法に歸す」といふのがある。生・稻老は此邊の哲學にまで達しているのだと思ふて、私は快心の握手を翁と取交わしたことがあつた。

今頃、米國に來ている多くの料理人は何をいぢつているのであらう。有法の極が無法に歸する消息なぞは勿論知る筈がない

としても、今少しく日本料理の精神を發揮してもよさそうな者である。鼻水みたいな吸物と、肴の煮付けに、黄瓜のなます、それに胃にもたれるやうな天麩羅を拵えて、御一人前五十仙は恐入る次第だ。

日本人が日本料理を食べるのは當然である。そして日本人が日本料理を食べると、破産をする程、今の日本人は生活的にゼロだ。

〔『日米』No.8118 June 15, 1922〕

(七十)

Ⅱ時計及寶石屋の昔時

渡邊四郎と中島某Ⅱ

在米日本人間に始めて時計商を始めたのは渡邊四郎である。

彼れは明治十九年頃の渡米で、同志樋口門之助(後日本文タイライターを發明せし人)等と共に明治二十四五年の交サクラメント市に到り最初の日本人會を創立した一人であるが、明治廿八年再び桑港に出で、若干の安時計を仕入れ、夏季地方農園に行商し同年冬デュポント街の入口に時計屋を開業した。

此當時のジュボン街は兩側とも醜窟で、遊客の通行が多かつた。随つて時計屋寶石屋として質屋を兼ねることは有望の商賣であつたが、何分資本に缺乏していた爲め思ふやうに商賣が發展しなかつた。

渡邊の時計屋は直しが専門の姿であつたが、元々時計職人から出來上つたのでないから、客人に満足を與へる譯に行かず、家賃十弗程の小店を維持するに非常に苦心であつた。

此頃日本人として時計屋の客人となる者は暁天の星の如くで彼れの顧客としての日本人は女郎の外、金を有つてゐるものがない。今日では女が腕時計を用いる故、可なり婦人を顧客とする餘地はあるが其頃の女は腕時計なんか持たない。

全く持たない譯ではなかつたが其分量が甚だ少ない。男といふ男は一弗の融通もつかない野郎共ばかりゆへ、時計などブラサゲる男は、嬪夫が水夫の外は無いといふても宜しい。

右様の時代に時計屋を開業せる渡邊は二年程其店を持ち堪へて居たが、とう／＼やり切れずして明治三十一年春に中島某といふ者に譲り渡した。

處が此中島といふのが頗る附きの大家であつた。彼れは「時計直し」の看板をぶら下げて、労働者の安時計を修繕していたが本來時計職人でなかつたのでどうも工合がわるい。

直ほした時計は三四日に必ず文句を持たまれる。中島は之等の客人に對つて曰く。「君は鯨銚立をしなかつたか。君はメツチャクチャに走らなかつたか。君は毎日ねぢを掛けたか」などと反問に及んだ。

客人は閉口して、中島時計店を號して「時計こわし」といふ綽名をつけた。實際のところ直す分量よりも、こわす分量が多かつたやうだ。

明治三十四五年頃から、日本の時計師が米國に渡り始めた。廣島縣人、財滿孫次郎、山梨縣人、降矢甚之助などは此頃の渡米で、日本からの本職であつた。彼等は渡米早々、米國の時計職人を見た、そして其伎倆のへたなのに驚いて、獨立營業を始め今日大いに成功した。

天賞堂の渡邊金次郎は明治二十五年の渡米で、寶石商として其歴史が古い。併し彼れは時計職人から出たので無く、寶石商として成功したのである。

羅府の片岡時計店、フレスノ市の平自由堂などは桑港震災後に崛起した素人上りの名人である。之等の人々は手も八町口も八町で、生れが職人でないがへたな職人以上の技術に達している。

茲に一言したいのは、時計職工、時計商、寶石屋の人々は其頭腦が緻密である。商賣にかけては水も洩らさぬ用意が周到のやうだ。現在米國の寶石屋、時計屋はジューの專賣で、ジューは頭腦の緻密を以て世界有名である。私は時計屋とジューが如何なる歴史的關係を有するかを知らないが、日本人の時計屋が多くジューの如き頭腦を有ち、其營業ぶりが堅實にして持久なるに敬服する。

渡邊四郎、中島等が明治三十年以前にガラソッチを取扱ふた頃と、今日の在米日本人とは譯が違ふて來た。私の考ふる處によると、明治三十年以前に、日本人中五十弗の懐中時計を有する者は二三人であつた。

萩原眞が明治三十年二月にスイツルから三百弗の時計を取寄せた頃は、今日スペックルが仏蘭西からロダンの名作を取寄せた以上の驚異であつた。

私等同人は明治三十年前にはガラソッチも持參していなかつた。それも其筈である。新世界、日米兩新聞社が、電話を掛けることすら出来ない時分である。兩新聞社は明治三十三年に始めて電話を掛けたのであつた。

〔日米〕 No. 8119 June 16, 1922〕

（七十二）

|| 福音會と美山貫一

在米日本人團體の元祖 ||

明治七年、美山貫一なる青年支那傳道總理ギブソンに宛てたる添書を持ちて渡米す。渡米の夜、ギブソンはハワード街の教會に説教すべく演壇に立つ。貫一携えたる添書をギブソン總理に呈す。ギブソン披き見て、大に喜び、此青年の支那ミッシヨンに來るべきを諭す。翌日貫一ギブソンを支那傳道館に訪ふ。ギブソン彼れにベスメントの一室を與へ、撫育すること父の如し。

美山貫一は、敬虔なる基督教信者であつた。ギブソン總理の撫育を受けて、支那ミッシヨンの階下、蠟燭の火で聖書を研究した。

此頃のカネー街にデニスといふ西洋人が齒科醫の事務所を有ち、此處に小谷野啓三といふ日本人が働いていたが、貫一は小谷野と交りを訂し、此事務所に集る青年等に聖書の講義をして聞かした。青年等は時々支那ミッシヨンに集り、例の蠟燭の火で聖書を読んだ。

當時米國には日本人が合計百名ほど住んでいて、其多くは水夫上りであつた。桑港に七八十名の同胞があつたけれども、基督教に歸依する連中などは少數であつた。此時代に貫一が多少ながら聖書に親しむ青年を作つたといふことは非常の努力であつたと思はるゝ。

時の支那人傳道總理なるギブソンといふ人はペルリが浦賀に行き、日本に開國を迫つた頃に支那に傳道に出掛けて行つた人であつたが、彼れは在支十八年間に僅か二人の信者を得て歸米したと傳へらるゝほどの人である。

ギブソンは風骨堂々として冒險的アングロサクソンの遺風を備え、英國清教徒の大精神を體現した名僧であつた。在支十八年間、二人の信徒を得たといふ丈でも、彼れの大見識が想像される。

茲に浮んだ事は、西曆五百二十七年、(日本繼體天皇第二十一年)梁の武帝大通元年に、印度から達磨大師が支那廣州に到着して、有名なる「廓然無聖」の問答があつた。達磨は支那傳道のために出掛け、時の天子武帝と問答をした。佛教崇信の第一人者として支那に聞えた武帝が達磨の話が解らないので、達磨

は「不識」と最後の言葉を遺し揚子江を渡つて少林に到り、面壁九年したとある。

此九年間の達磨の黙唱が大祖慧可を産んだのであるが、ギブソンが支那に於ける傳道も其通りであつた。十八年間の支那傳道に於て二人の信者を得たギブソンは實に達磨以後、千五百年目に達磨同様の難行苦行を積んだ人である。思ふにギブソンは支那に於て達磨二倍の十八年間苦行の結果、一九年目に日本人の貫一を見出したのである。たとへば貫一は達磨に於ける慧可であるまい乎。

美山貫一は世のキリスチアンとしては、餘りに立派過ぎた人であつたらしい。彼れは、清教徒の正統を承けた熱心なるクリスチアンであつた。彼れはギブソンの人格を體得し、蠟燭の明りて聖書を研究し、先づ小谷野啓三を感化し、明治十年、福音會を創立したのであつた。

最初の福音會は支那ミッシヨンのバスマメントに産れた、此時の會長が貫一の感化を承けた小谷野啓三である。

福音會々長が小谷野啓三であり、其創立の中堅者が美山貫一であることに就いて、我等は偉大の教訓を茲にも見出し得るのである。今の野郎共は何んでも蚊でも會長になりたがる惡癖がある。其器にあらずして其位に居る穢氣がある。人を立てずして其位を貪つた所で、其會は榮えないものである。自ら謙讓ことの出来ない連中が會をもつことは、寧ろ會を毀すことである。此意味から考へて、美山貫一は偉人であつた。

福音會創立以降、幾多の変遷があつた。併し明治二十年頃までに渡米した青年で、今日社會に勇飛せる者は、多く此會の薰陶を受けたのであつた。一例を擧ぐれば、三井の米山梅吉、鹿嶋の星野行則、日米の安孫子久太郎、科學研究所の創立者中村清七郎などは福音會の出身である。

『日米』 No. 8120 June 17, 1922)

(七十二)

|| 日本人墓地の設備

美以長老の創立 ||

支那人傳道總理ギブソンは日本人に對して特筆すべき同情者であつた。美山貫一が始めて同師に面會して支那ミッシヨンのベスメントに立て籠つてから以後、ギブソン師は日本人を子の如く愛した。

此當時日本人には墓地がなかつた。米國に來た日本人は死ぬることなど考へていなかった。それゆへ墓地のことを考へることも無かつた。處が人間といふ者は生まれたが最後、屹度死ぬると決まつている。日本人が米國に來て死んだ例は澤山ある。

咸臨丸乗組員の渡米から桑港に往復した日本人で、死んだ奴が可なりに多い。そして其死骸を埋める處が無い。無い譯ではなからうが、其都度面倒が多いので美山貫一等はギブソンに請ふて日本人墓地を求めた。

ギブソンは支那人墓地の中に小さき場所を求め、之を日本人墓地に充てた。此代金五十弗程で、此頃の青年等が此地代を募集することは容易の事業でなかつた。

私は茲まで書いて來て、再び支那人に對する懷舊の念を禁じ得ない。日本人は何といふても支那人に對しては先生の稱號を奉るべき歴史的事情を有している。明治七年に、既に支那傳道會館が桑港に在り、達磨以上のギブソンが在り、日本人が其ベスメントに養はれて居り、支那人墓地の一角を割きて日本人墓地を設けたのであつた。生活的經濟的に在米日本人は支那人の居候をしたのみでなく、墓場まで支那人の居候をしたのであつた。

斯う考へて見ると、日本人はドノ點からしても、チャン公を馬鹿にする資格は無い。私は此機會に於て明かに言ふ。日本人が支那人を輕蔑する間は、決して日本が有力の國にならない。日本及び日本人が先輩の支那に向つて尊敬の念を深くすることに於て、日本は世界の先進國たり、東洋諸民族の支持者たるこゝとが出来るのである。

個人としても、民族としても祖先の恵澤に感謝せざる者は必ず滅亡する。私が諸君が輕蔑なさる支那人を尊重すべきことを力説するのは、其先輩の努力に敬意を捧ぐべきを唱道するのであつて、決して支那人に阿諛すべしといふので無い。

閑話休題、明治十七年、美山貫一は歸朝し、米國の美風を日本青年に傳えた。米國の天地に憧れつゝありし青年等は、貫一

の演説に動かされた。安孫子久太郎、大澤榮三、米山梅吉、佐藤信忠、間山武一などは其尤もなるものである。

安孫子久太郎、佐藤信忠、間山武一等は明治十八年に渡米し直ちに福音會に入り、大澤榮三、米山梅吉等は明治十九年に渡米して、同じく福音會に入り、美山貫一は多くの學生を率いて明治十九年再渡米した。

同年美以教會監督ハリス日本傳道より歸米し、同年ドクトルストージ(長老教會派)桑港に來り。美以教會及び長老教會の日本人傳道部が創立せられた。

基督教主義の青年により創立せられたる福音會は、此年支那ミッションのベスメントからゼシー街に引移りて、一個の獨立團體を形成した。

美以教會が創立せられてから日本人墓地は同會に引繼がれ、佐藤信忠(美以教會創立者の一人)は委員に任命せられた。其後、日本人墓地は狹隘を告ぐるに至り、サンマテオに更に墓地を購入した。現在の墓地はそれである。干時、明治三十四年。

ギブソンが日本人に盡したる功勞は枚擧に遑なき程であったが、彼れは最初の日本人小學生として島田重助なるものを桑港リンカーン小學校に紹介して入學せしめた。それは明治十九年の事である。

此頃支那人は桑港の小學校には雜居を許されなかつた。支那人に對しては既に分離學校があつて、混入を許されていなかつた。然るにギブソン師は日本人の爲めに始めて島田を白人同様

リンカーン・スクールに入學せしめた。

想ふに、此頃日本人と支那人との待遇を異にすべくギブソン師が主張したのは、人種的意味ではなく、實際の境地から主張したものと思はれる。

『日米』No. 8121 June 18, 1922)

(七十三)

|| 政府自ら貿易に當る

神鞭知常氏の渡米 ||

北米に於ける日本貿易の率先者は、富田鐵之助(最初の紐育領事)それから佐藤百太郎(佐藤尙中の男)で、此兩人は明治五年、岩倉大使が渡米せられた頃に既に日米貿易に熱中した先輩であつた。此當時、日米貿易は多く歐米人の手に依つて支配され、貿易品としての大衆たる生糸すら歐州製の物が米國市場に威張つて居り日本製などは誰れも相手にする商人は無かつた。

富田佐藤等は紐育に於て此等の事情に精通し居り、何とかして日本から生糸其他の直輸出を試みたいと思ふていたが、何をいふにも日本の工業は其頃お話にならない幼稚なもので、福嶋縣二本松町で木鐵混用の機械製糸場を始めて起したのが明治六年であるから、イクラ米國に在る日本人が世界の大勢に通じ地団駄を踏んで見ても國民産業の無智識は遽かに啓發する由が無

かった。

そこで富田鐵之助、佐藤百太郎等は相前後して歸朝し、世界的貿易の忽緒にすべからざるを當路の役人に説き廻った。先づ明治七年には紐育領事たりし富田が歸朝し、時の内務卿大久保利通に説き、日本商品直輸出の議を建策に及んだ。

日本政府でも海外の智識する大久保、木戸、伊藤(博文)などが居り、海外貿易の利は夙くに承知の上であるから、富田の建策を容れ、其當時群馬縣令であった河瀬秀治を内務大丞兼勸業寮檀頭——今の農商務局長——に任じ、後、勸商局長に任じ専ら海外貿易を奨励せしめた。河瀬は富田と相談の上、同藩の秀才神鞭知常(後國權黨より選出せられ、第一回衆議院議員となりし人)を横濱税關吏から抜擢して勸業寮出仕となし、明治八年二月二十五日、横濱出帆の汽船でアメリカに特派した。

神鞭は政府の役人で、同時に商人であった。彼れは生糸、茶漆器などの見本を持參して渡米し、直ちに紐育に到り、其持參した機械制生糸の見本を紐育の商人に見せた。此見本は群馬縣大崎會社(河村傳衛經營)の機械糸で、日本最初の精良品であった。

處が紐育の商人は、こんな良品が日本で出来る筈が無いといつて信用しない。それは多分歐羅巴製の製絲を見せたんであらうと考へたのである。

神鞭は頗る癢に障ったが、之迄の日本製品が粗惡で、外人の信用を博するに足らなかつたことを知り、「兎も角も此見本で

日本に註文を出してみろ」と掛合ひ、直ちに若干の註文を日本に向かつて出さした。處が神鞭の言の如く同質の良品が届いたので、米國商人は驚いた。

其當時は日米間に荷為替の機關が無かつた。(正金銀行は明治十三年、大隈重信大藏卿の時始めて三百萬圓の資本で政府保護の下に創立されたのだ)それ故、内務省勸商局は註文が來ると、製絲業者から製品を買上げ、之れを紐育にある神鞭に輸送し、彼れは其代金を受取り、之れを日本政府に送つたのであつた。政府が儲けたか儲けなかつたか分からぬが、政府が商賣人を兼ねたことは右の如く事實であつた。

神鞭は明治九年に歸朝し、佐野理八等の經營せる佐野組の代表者として福井信が同年に紐育に渡り、引續いて生絲貿易に従事したが、久しからずして失敗に歸した。

日本が世界第一の生絲輸出國として、貿易の大部分を占むる斯業も其始めは右の如き次第であつた。茲に先輩の苦心が潜在している譯である。

中後、茂木惣兵衛、原善三郎、小林吟次郎、佐野令三、小野哲郎、渋澤義一、田中新七、渡邊文七、小川勝三、小島周、若尾幾造、奥村鹿太郎などが續々起つてこんにちの盛況を呈しているが、我等は切に先人の苦心に感謝せずに居られない。

神鞭の後に渡米して、民間生絲輸出商の開祖となつたのが有名なる佐藤新井組で、此二人の事蹟に關しては森村組の開祖たる森村豊の事蹟を記述する時に詳らかにするつもりである。

『日米』 No. 8122 June 19, 1922)

(七十四)

Ⅱ東部邦人移住の先驅

森村、新井等の移住Ⅱ

明・治・九・年・三・月、米國船オシアニック號は佐藤百太郎外五名の青年を乗せて來た。

新井領一郎 (生絲商、上毛人)

森村豊 (市左衛門弟、土佐人)

増田林藏 (狭山製茶店員)

伊達忠七 (三井組店員)

鈴木東一 (丸善書店員)

此年は費府に萬國大博覽會が開催せられた。此博覽會は米國獨立百年記念の大博覽會であつて、日本が始めて海外博覽會に参加したのであつた。此參加費三萬圓(千八百七十六年)。

當時の米國駐劄日本公使は吉田清成(長澤鼎等と慶應元年に英國に留學せる一人)紐育領事は第一世の領事富田鐵之助が歸朝し、高木三郎(最初の桑港領事)が富田と交代した頃であつた。

日本人が東部諸州に留學生となつていたのは慶應年代から可なりによくあつたが、留學生にあらずして商業貿易に志して渡米したのは右の六人が筆頭である。

此當時、桑港にはケーブルカーはあつたが、まだ電氣燈は無かつた。蓋しケーブルカーは米國中桑港が最初であつた。そして紐育も今日のやうな世界第一を誇る程の大都會でなく、明治十六年(千八百八十三年)まではブルックリン橋の渡錢を徴取していた程の都會であつた。

茲に右の六人の青年が少しばかりの商品を携えて來たのであ

太平洋岸に於ける加州が墨國から割讓された當時より、桑港は米國西海岸の商業中心點たりしと同じく、紐育は米國開國以前から米國商業の中心點であつた。日本と米國は嘉永七年に於て始めて交際國となつたのであるが、此頃の米國市場は紐育が中心であつて、桑港などは有つて無きが如き開港場に過ぎなかつた。

日米貿易は明治初年頃には大西洋岸に行はれ、それも日本商人の手で行はれたのでなく、歐米人の手に依つて行はれ、商品はずべて歐羅巴から紐育に廻はつて來たのである。

此の趨勢を見て、第一に感じたのが佐藤百太郎である。

佐藤百太郎は、明治三年始めて創立された大學東校(今の醫科大學)校長佐藤尙中の男で、明治初年に米國に留學し、ボストン市ポリテクニク工藝學校に學んだ日本最初の科學研究者である。彼れは卒業後、獨立自營の志を抱き、明治八年歸朝。日本朝野を遊説し、左の五名と共に再び米國の人となつた。之れが商業貿易的移民の先驅で、日米貿易史上重大の地位を占むる人々である。

る。ツーベッツもフォーベッツも分らず。米國人のいふ言葉がオンドルスタンドを致さぬ。日本で聞嚙ったエマルソンのリンコンだのを口走つても米國人には更にオンドルスタンドをして貰はれない。

そこで森村豊は先づあきれかへつて、慶應義塾で習ったイングリシをやり直すべく、ボケブシー市のイーストマン商業學校に入學し、エマソンやらリンカーンやらアングスタンドやらの發音を覚えたといふ。

新井領一郎(現横濱生絲會社長)が當時の感想を語りし一節に曰く、「私共は石に嚙りついても初志を果す決心で渡米しましたので、紐育に着いてから頗る儉約を旨とし、第三街九丁目のアイリシ人が經營しているむさくるしい下宿屋の一室に宿泊し、朝はブレッドと茶で濟まし、晝はフロント街に在った事務所近邊の屋臺店で一仙で三箇の安ケーキを買つて來て喰べる、晩には場末の安ミールでラウンドステーキを頬張る。どうも米國の牛肉は堅いものだと思つていましたが、實は貧民窟の料理を食つていたのでありました。それから毎朝下宿屋から廿五六丁もあるフロント街までは鐵道馬車にも乗らず、テク／＼歩いたものです。」

バイオニヤの苦心は西も東も同じい。そして其苦心は愚かの爲めの苦酸であらうか。志望の爲めの苦行であらうか。私は我が新井翁等のために尊敬の念を禁ぜざるを得ない。(次號には森村兄弟の事蹟を書いて見る。此雜話の材料、中水谷涉三君編

述「紐育日本人發展史」より得る處頗る多し、特に附記して同君に感謝す。)

『日米』No. 8123 June 20, 1922)

(七十五)

Ⅱ 森村兄弟の貿易

士道的商人の成功 Ⅱ

森村市左衛門が明治四十二年五月に自記せる「我が社の精神」なる一文は、彼が實踐躬行の餘滴にして、世間の偽善者を慙死せしむに足るべき金玉の大文字である。左に其全文を抄録す。

一、海外貿易は四海兄弟人權擴張共同幸福を得て、永く世界の平和を保ち、國家富強の基を開き、將來國家に志す者の執るべき事業と決心したる社中也。

二、私利を不樂、一身を犠牲として、後世國民の發達するを樂とするを以て目的とす。

三、至誠を心とし眞實を旨とし約束を違へざる事。

四、ウソをつかず、慢心、イカリ驕り、怠り、私慾を慎むこと。

五、身をケガスなかれ、朋友は肉身より大切なり、和合共力するときは其功德金錢杯の及ぶ所にあらず、終生の神靈也。

六、天の道を信ずべし。天は人の爲めに萬物を經營し、寸時も休むことをなし。

右の條々を鐵石心を以て勇氣昇天の如く確守すべし。修養して

怠らざれば心神の至誠天に通ずべし。

明治四十二年五月

森村組總長

森村市左衛門謹白

森村市左衛門の主義信条と、其人格の偉大に關しては、他日これを披瀝すべき機會あるを信するが故に、茲には其翁の評論を書かぬ。

彼れは土佐藩の用達であつた。丁度大倉喜八郎が新發田藩主溝口の用達の家に生れたと同じ。茲にも私は森村と大倉の比較を述べない。森村は會津征伐の時板垣退助の軍に従ひ、輜重の用を辨じた。兵器被服などを外人より買入れ、之を土佐藩に納めて居たが、其代金は小判を箱詰として外國に輸出せるに際し是れ實に容易ならざる國家の大事なることを痛感した。

彼れは此時から國寶を外國から取戻そうと考へた。そして其方法としては日本の製品を海外に輸出し、小判を取戻すべしと考へた。此考は後に幾多の修正變改があつたであろうが、彼れが海外貿易に志す初一念は小判取戻しの動機から起つたものであつた。

市左衛門は慶應及び明治初年の際には和蘭貿易を専らとしていたが、明治時代から日米國交が頻繁となるに従ひ、米國に注目した。此當時、米國の國情に通じ、學者たり預言者たり經綸家たるものは、福澤諭吉先生一人といふべきである。彼れは福澤と相知り、米國の事情を聞き、常に其指導を受けていた。而

して米國の國情を知るに及んで、愈々米國雄飛の志を堅くした。

併し彼れは自ら米國に渡るには其無學なるを危ぶめる爲め實弟豊が丁稚奉公していたのを呼戻して福澤先生の弟子にし、先生が創立した慶應義塾に入れた。豊は此年十三歳であつた。

時は漸く熟して來た。明治九年、ヒラデルヒア米國獨立百年記念博覽會の開ける一年前、佐藤百太郎が歸朝し、米國雄飛の消息を傳えた。此時市左衛門は豊を渡米せしむるに決し、新井、伊達、増田、鈴木等と共に佐藤に託して渡米せしめたのが明治九年三月であつた。森村組の米國飛躍は此時に始まつたのである。

豊は米國に着するや、商業教育を受くるの必要ありと感じ、ボケプシー市なるイーストマン商業學校に入り、翌明治十年、佐藤百太郎と共同し、一商店を紐育第六街二百三十八番に開いた。其名を「日の出商會」と付けた。

緣起の良い名前であるが、店は小ぼけなものであつた。店の商品は左の如くである。

紙製掛地、漆器小箆筒、花鳥繪、絹花鳥模様竹簾、有田燒、陶器、蒔繪印籠、眞葛、香山花瓶、提灯、紙、絹製日傘、扇子、木製衝立、錦光山、丹山製品、縫屏風、金屏風。

斯う並べて見ると、大層賑かそうであるが、高價の物は三四種しか無い。それで豊は時々商品を抱いて行商をしたと傳へられてゐる。村井保固が來たのが明治十三年で此時から、森村組の發展時代に入る。(つゞく)

『日米』 No. 8124 June 21, 1922)

(七十六)

Ⅱ 村井保固の渡米

森村組の大発展Ⅱ

森村豊は、二年間佐藤百太郎と共同して日の出商會を續けたが、明治十二年に日の出商會を解散し、獨立して森村商會を起した。そして明治十三年には第六街に移轉し、三階建の全部を一ヶ月三百弗で借受けた。此發展に關しては現森村組總支配人たる村井保固を特記せざるを得ない。

村井は伊豫宇和島在吉田村の百姓の家に生れ、幼時お寺の小僧にやられた。それは父の仰せで、保固の志ではなかつた。彼れは十四歳の時、即ち慶應元年江戸に飛出し、後、福澤先生の慶應義塾に學んだ。此青年は世間一般の風潮兒と其趣を異にし、福澤先生の理想を體得していたらしい。此當時同學生としては犬養毅、尾崎行雄などがあり、彼等は自由民權の議論を唱ひ、未來の大臣を以て理想していたが、獨り保固は商工業を以て濟民愛國の要道なりとし、學業稍進む頃、義塾演説館に於て一場の演説を試みた。其要領に曰く。

日本の急務は商工業の發達を促がし國家を富ましむるに在り、商工業を發達せしむるには是迄の如く素町人根性を有てている者に一任す

べからず、宜しく文明の教育ある者が進んで其所に當らざる可らず。今や書生の大部分は自家の生計をも獨立し能はずして徒らに大言壯語を敢えてすれども、それは實際に益なきのみ。實業は天下の公事なり。予は今後實業の方面の開拓を計らん、而して今日以後政治演説を試みざるべし。

村井の演説は當時の青年には頂門の一針であつた。異彩を放てる此演説は遂に福澤翁の耳に入った。翁は其弟子の中に自己の主張せる實業經國の精神を抱ける者あるを聞き、會心の微笑を洩して喜ばれた。一日保固を自邸に招き「お前が、實業界に入らうとするならば、三井か岩崎に頼んで見よう」と云はれた。村井は有難くお受けすると思ひの外「イヤ先生、私は興へられたテンプルで事務を執ることは望みません。小僧から修業して見たい。天秤棒を擔ぐのは決して厭ひません。」

福澤翁は此頃森村市左衛門より一人の書記雇入れたき旨の依頼を受けておつた。それで村井を召して「お前は簿記及英語の會話が出来るか」といふと、村井は言下に「左様なものは出来ません」といふ。翁もチト驚いたが、此青年別に成す處ありと考へ、森村に紹介した。

森村は一日村井と面會し、其意のある處を知り、いよく雇入れることにした。そこで給料は何程入用かと聞くと、村井は「學校教師なら五十圓か七十圓は要求しますが、今度始めて商店の見習をするのですから、月謝を差上ぐべきであります。併

し私は裸一貫の者ですから、食料として月七圓貰受けたい。」

森村は、其月より七圓五十錢を拂ふこととし、村井を京橋區新肴町の本店に雇入れた。そして荷造其他の雜務に使用したのであった。時は明治十二年五月である。

此年紐育なる實弟森村豊から店員一名を派すべき註文があったので、市左衛門は保固を選抜して、此年九月二日横濱出帆のシテ・オブ・ペキン號に搭乗せしめ、未來の大村井は同年十月紐育の人となったのである。

此時保固は廿六歳、森村豊と同年輩であった。

村井は機智を藏せる一個俊秀の青年であったが、英語や簿記には長じて居なかつた、其反對に大眼目を把握するの頭腦があつた。彼れは着任早々、開函、荷造等の雜業に従事していたが、米國商界の事情が明かなるに随ひ、日本製品の大改良を行ふべきを覺り、適材を適所に用いて諸般の新設備を起した。

而して彼れの最も慧眼なる點は邦人の賣子が米人に劣れるを看破し、其商店に米人男女を使用したことにある。彼れは店員に對して人種的差別を置かず、公平に待遇したのであつた。彼常に人に語りて曰く「支那人が外國で組織的商工業に成功せないのは、米人と同化せず、米人を登用して各自天與の惠澤を分つことを欲しないからで、此點に於て日本人の理想は協同一致愛民濟國である」云々。

『日米』No. 8125 June 22, 1922)

(七十七)

太平洋沿岸の雜貨商

甲斐織衛、竹山祐嗣

古い記録に曰く。明治十九年桑港に於て甲斐織衛、竹山祐嗣始めて日本雜貨商を開く、甲斐は慶應義塾出身の青書生にして、竹山は新潟縣の漢法醫なり云々。

右の記録は某氏の日記にある一節である。當らずと雖も多少の事實を含んでいるが、其實一知半解の記録であることが左の史實に照らして明瞭である。

竹山祐嗣は、越後三島郡熊ノ森村、眼科の大家竹山祐ト先生の一家で、明治初年頃、長谷川泰と共に蘭學を修め、長谷川と共に東京本郷に於て濟生學舎を創立した人で、現在米國に於て名聲赫々たる野口英世は實にこの濟生學舎の生徒であつた。

序に書いて置くが、長谷川泰は越後古志郡新組村漢方醫の兒で、十六歳の時に國を飛び出して長崎に至り、蘭學を習ひ醫術を學んだ人である。今日世に知られたる後藤新平などは泰の後輩である。新平は其後衛生局長を務め、後、臺灣民政長官となり、累進して内務、外務大臣となり、今東京市長となつてゐるが、長谷川泰は仕官に志が無かつたので醫者を拵ふために竹山祐嗣と共同して濟生學舎といふ醫学校創立した。

泰は明治二十三年、國會開設の時、第五區(古志、三島郡)

から選ばれて衆議院議員となり、國會解散に遭ふて再選し、後藤新平が臺灣に轉任してから、其後を襲いで衛生局長になった。泰の弟子として米國に在留する醫師は可なり多い。櫻府の柴太郎、先年歸國した竹岡己之吉なども其一人である。

竹山祐嗣は早くより米國渡航の志を有し、明治十七年に意を決して桑港に渡り、直ちに醫術を開業した。然れども當時桑港在留の日本人は其數極めて少なきのみならず大部分は強壯の青年であり、偶々病氣に罹つて診療を乞ふものは、窮困者であつて樂禮を拂ひ得る者が殆ど皆無といふべきであつた。「醫は仁術なり」との格言もあること故、竹山は快く患者に接したけれども仁術者の御本人の生活は日に窮乏を告ぐる至つた。

そこで竹山は、醫術で生活することの甚だ難きを知り、若干の資本の工面して明治十九年秋ターク街十七番に小店を借り受け竹細工、陶器、漆器、日本米、醬油、味噌などを商ふことにした。之れが桑港邦人最初の商店である。

竹山後に語りて曰く。其當時米五俵、醬油五樽を仕入れたるに、米は損なくして賣りたるが、醬油は一樽二弗では高いといふので買手が無く、二ヶ年間も残つて居つたから、其半分はカラ／＼に乾きました。此頃醬油を四合瓶に入れて一本十仙で賣りました。日本仕入値段は一樽日本金八十錢でありました。

甲斐織衛は、同年桑港六街に美術雜貨商店を開いた。太平洋沿岸に於ける最古の邦人美術商店である。

甲斐織衛の歴史は、日本商業貿易上重大の意義を成している。

彼れは一介の商人でなく學者にして士道の上に立てる貿易家であつた。

織衛は、慶應義塾第一回の卒業生で、明治十年には既に福澤先生の門下に一頭角を現はしていたものである。御承知の通り、明治十年は西郷隆盛の亂のあつた年であるが、此年兵庫縣廳の發起で、兵庫に商法學校が始めて出來た。此時、同縣廳から福澤先生に依頼があつて、一人の主任(校長)と數人の助教員を求めて來た。福澤は即ち織衛を其主任に推薦した。

其頃日本では森有禮が拵えた商法學校が一つあるのみで、其商法學校は西曆丸呑みの學校であつた。福澤先生は西洋の智識に長じ進取の氣に富める大人物であつたが、西洋丸呑みが大禁物であつた。そこで織衛が赴任するに臨み、左の忠告をせられたさうである。

「今の世の中で、小學校などをペンキ塗の建物を拵えて、そして田舎でやっているのは大間違いだ、今度お前が行つたならば片っ端からソナナ學校を叩き潰す考で極く平凡にやれ、所謂昔の寺子屋見たやうな教授をしる。」

織衛は商法學校の組織及び科目を工夫し、三年間此學校を監督した。(此稿つゞく)

『日米』No. 8127 June 24, 1922)

(七十八)

Ⅱ太平洋沿岸の雜貨商

甲斐織衛、竹山祐嗣Ⅱ

甲斐織衛が兵庫商法學校々長の生活中、兵庫商人と交際せる間に、矢吹英二、早矢仕有的等の創立にかゝる貿易商會といふ者が二十万圓の資本で出来、米國に生絲を賣込むといふので、織衛を紐育支店長に招聘した。

織衛は明治十三年始めて米國の地を踏んだ。此當時の様子は後人の參考になることが甚だ多いから、彼れが二十年前、三田會に於てなせる演説の數節を抜萃して見る。

「……桑港は今日から見ると此時分は未だ開けない處で電氣燈が唯た一つしかなかったです。パレスホテルといふ旅館に行つた處が、電氣燈が一つ點いているけれども、電氣燈の何物たるを知らぬ。丁度上陸の時は夕方、人の顔が能く見えぬ場合であつた。勿論、瓦斯燈は諸方に點いて居りました。處がホテルに這入ると恰も月光の如く、何だか殆ど分らぬ、それから上を見ると、アークライトが吊下つて居る。ハハア之れが窮理書で見た電氣燈かと自分ながら驚いた位、此時ホテルへ尋ねて來て出逢つた人が柴四郎(東海散士)といふ人、其人は柳谷領事の許に居た書生であつた。段々桑港の風を聞いたが、其頃の日本人が百人居らぬと云ふ。其百人も實にボロ／＼した下宿に居るといふ譯で、日本人に逢ふて却つて此方が赤面する様な勞働者

見たやうなものであつた。」

「……紐育の西洋人が(私を見て)云ふには、お前何しに來た。何處の學校に這入るのかと云ふ。此方は學校に來たのではない。商賣に來たのだと云ふたら、西洋人が驚いて居た。日本人が商賣に來るなんて此頃西洋人の考へに乗らぬといふ位に日本人を知らなかつた。」

「……二十萬圓といふ大資本を以て株式會社見た様な貿易商會は日本で唯つた一軒、其二十萬圓の資本ある會社の甲斐が此度支配人として出て來たが何らも生絲の事を知らぬ奴だ、お負に慶應義塾の書生、日本ではコンナ青書生を商賣人とするのか知らんと云つて人が我々共を大に嘲つて居つた。」

織衛が米國に渡つた頃の日本商人は商業道德の何物なるかを辨へない時代ゆへ取引は野蠻交易方法で現品取引をするより致方がなかつた。織衛は此時代渡米して土族的商賣を實行し、見本と異なつた品物は數ヶ月の後でも謝罪して引代へてやり或は渡した後に不良品があれば代金を返却して日本商人信用維持に努力した。彼れは右の演説の結尾に左の如く論じて居る。

「商賣は正しくなければならぬ、正しい事をするに就いても日本の素商人見たやうでは可かない。土族的で學問ある人が行かなければ到底發達しないといふ經驗を得たです」云々。

織衛が支店長として従事したる貿易商會は其後廢業し、彼れは歸朝後再び桑港へ渡り第六街に於て美術雜貨店を開業したのであつた。

甲斐商店は其後カーネー街に商店を移し、明治二十年代に於ける太平洋沿岸の日本美術商として聲價を保ち今日に及んでい

る。
竹山祐嗣は、明治二十六年、サクラメント市に引移り、同市に於て食料雜貨店を開いたが、時代が餘りに早く、其營業振はずして再び桑港に移り、桑港震災までマカリスト街に雜貨店を所有し、火災後廢業した。

尺魔按ずるに、米國に於ける多くの事業は單獨經營の者は榮えずして、共同經營の者は隆盛である。それは一人にして多方面の長所を兼ねる事が人間に於て不可能なることを證據立てゝいる。此點に於て森村が友人を信用し、適材をして適所に活動せしめたる雅量に推服せざるを得ない。彼れが「朋友は肉身より大切なり、和合共力するときは其功德金錢杯の及ぶ所にあらず、終生の神靈なり」と誓ひたるは、人倫の大道にして而かも事業の要道である。

竹山祐嗣は不幸共同者を得ず事業中途にして死し甲斐織衛もまた數月前永眠した。而して森村甲斐は商店を残し、竹山は多くの米國産兒を残して逝いた。竹山の長女はブラジルに在りて植民新聞經營者、黒石清作に婚し長男は今年亡父の遺志を繼いで醫科大學を卒業した。私は此稿を結ぶ時追悼の涙を催した。

『日米』No. 8128 June 25, 1922)

(七十九)
Ⅱ 色々の仕事の開祖 Ⅱ

ある繪を見たことがある。それは子供の時分である。

眉の逆立てる男が、棍棒に揮つて小川に半身を没し、雜魚を追ひ出している。其下流に眉の眞直な中肉中背の男が竿を横たへてゐる。これが第一圖だ。

第二圖を見ると中肉中背の竿を持つてゐる、男は其竿に澤山の魚を盛つて、嬉しそうに笑つてゐる。

第三圖を見ると、眉の垂れた細長い顔の男が、竿の雜魚を奪ふて逃げる形が畫いてある。

そして第四圖を見ると、眉の逆立てる男は、憤然として雜魚を略奪した男を睨んで居り、眉の眞直な中肉中背の男は、奪はれた魚籠の方を見ずして富士山を眺めてゐる。

棍棒を揮ふて雜魚を追出したのは織田信長である。竿で信長が追出した雜魚を捕獲したのは豊臣秀吉である。そして、秀吉が捕獲した雜魚を竿ぐるみ奪ひ去つたのは徳川家康である。

私の見た諷畫は以上の歴史的事實を畫いたのであった。

此畫は、獨り三百年前の歴史を語るのみでなく、今日の人事百般を語る。

在米日本人が米國に渡りて以來、半身を小川の泥濘に埋めて棍棒を揮りまわし、雜魚を追ひまわしたのは先輩の努力であつた。唯それ棍棒を揮りまわしたのであつた。其雜魚は後入の移

民達がすくひ揚げたのである。そして更に其移民の中から雑魚を掠めて行くズルイ者が現はれて、ヤレ成功じゃ、ヤレ金持ぢや、ヤレ敏腕ぢやと讚美しているのである。初期移民時代に棍棒を揮りまわして雑魚を追ふた者はイイ面の皮で、後入者は其苦心も努力も省みず、棍棒を揮りまわした男を馬鹿野郎だと嘲けるのみならず、時には無能呼ばりをして得たり顔している。

信長が無かつたならば、尾張の百姓の子、関白秀吉は決して無かつたであらう。況んや家康が三百年の天下は決して産れて来なかつたのだ。

在米日本人中、古くは此國に渡りて色々を事業の魁をしたのは大概失敗の歴史を歿している。實は此失敗の歴史は後人成功の犠牲である。一粒の種が腐らなければ多くの麥を殘麥收穫することが出来ないのと同じ道理だ。麥を刈取りながら腐つた種を笑ふものは忘恩の痴者である。

□田中文藏の蠶紙

長野縣人田中文藏といふ人は明治四年(千八百七十一年)に米國で養蠶業を起さんとして蠶卵紙を携えて渡米した。其頃右様の考を起したことは實に驚くべき先見者といふべきであるが、不幸航海中に蠶紙は海水がかまつて損傷し、此目的は失敗に歸した。

田中は此失敗を恢復しようとして色々な新事業を考へジャクソン街に吹矢、達磨落しの場所を設けたが、之れも引合はずして廢業した。田中は其後支那傳道會館のダウンセラーに寄宿

し、ミルク配達をしていたが、其後の消息が分らない。田中は養蠶計畫の開祖で、遊技場の開祖で、ミルク配達の開祖である。

□大弓場の始り

大弓場の開祖は、東京府人島崎彌三郎で、彼れは明治十八年頃渡米し、明治二十五年デユポント街とバイン街の角の空き地に大弓場を設けた。處が其顧客は日本人のみで西洋人は來て遊ばなかつた。それが爲めに一年程して廢業した。

ロス・アンゼルスにて大弓場を設けたのは、宮城縣人須田幸五郎で、大正年代に入つてからである。友人等は彼れに大弓居士の稱號を奉つている。彼れは始めより營利の爲めに大弓場を設けたのでなく、健康増進の爲めに會員組織として設けたのであつたから勿論失敗などしない。

昨年頃より桑港金門公園日本喫茶店に萩原眞が大弓場を設け基督教青年會もまた道場を設けている。あまりはづまない様である。

遊技場では何といふても玉突場と射的場が衰へない。それは西洋人が顧客にする強みがあるからである。

『日米』No. 8129 June 26, 1922)

(八十)

Ⅱ技術名人考Ⅱ

茲に技術といふは頭と手との能きに關するすべてを意味する

のである。碁、將棋から、ベースボール、球突、魚釣、美術工藝、或は琴、三味線、音曲の類、演劇、角力、柔術、ボクシング、何でも此内に含む。學問上技術として取扱ふには以上列擧したものを分類すべきであるが、假に技術の中に入れて書く。

アメリカに渡つた日本人の中には駄物も澤山あるが、名人も可なりにある。先づ明治十七年頃に渡つた勝田蘭谷といふ人は彫刻家としての天才であつた。彼れは世にいふ名人肌の男で、年中酒を被つていた。人が依頼しても氣が向かなければ決して作業に着手しない。彼れは美術鑑定眼を有し、日本骨董の鑑定を頼まれたりして居た。彫刻は餘り大作は無いが、拳大の置物などに妙を得ていた。

美術修繕を以て其歴史の古いのは水原と星野とである。水原はキャプテン水原と稱し、郵船會社創立前に既に船長として外國に航海を進めた人で、現瓜生出羽海軍大將の先輩である。

彼れは明治廿四年渡米し、平生好める細工物を以て米國に立たんとし、先づ美術修繕の爲めにネーフンドーマン會社に雇はれ、美術品修繕の業に従ふたが、此從業中、燒繼セメントの發明をし、其後獨立して斯業に従事すること三十餘年に至つた。彼れの修繕上の工夫は永年の經驗と相俟つて名人の域に達している。

印判師としては、持木印判師が随分古いもので、彼は名を賣らず支那町の一隅に引籠っているが、其伎倆は立派なものである。

小圃千浦は明治三十六年の渡米で、畫工として渡米した。彼れは米國に於いて獨立の研究をなし、意匠圖案を以て桑港一角の美術家として立つている。併し茲に閑却してならぬことは彼れの「釣り」である。彼れはスポーツマンシップに對し充分の諒解があり、ベースボールの選手として名あり、桑港野球團の元老であることは、世間で知らぬ人は無いが、彼の「釣り」の名人なることは未だ天下に知る人が少ないと思ふ。

私は次號に「釣り道樂」なる一題を設けて、此消息を傳へるつもりであるから、茲には唯だ千浦が「釣り」の名人たることを一言して置くに止める。

時計師の名人としては天賞堂の渡邊金次郎である。前號の紙上渡邊は日本からの職人で無い趣きを載せたが、後に考へて見れば、それは渡邊違ひで渡邊四郎とはきちがへたのであったことに氣が付いてヒヤリとした。

處が天下自から明ありで、私の該記事を讀んだ櫻府のエフ君は第一番に私を詰責せられた。以下渡邊金次郎の事を書いて私の粗忽を詫げる。

渡邊金次郎は明治廿四年の渡米で、日本では子供の時からの時計職人で、渡米後紐育の時計學校に入學し卒業して後、桑港で時計寶石屋を始めたのである。彼れは時計を作製するの術を知り、單なる時計直しとしては上等過ぎる程の伎倆がある。在米日本人中時計直しの名人として特筆すべき人であるのだ。

指物師としては小幡泰藏が古い。彼れは日本指物師の家に生

れ幼少の頃より斯道に熱心であり、其後伎倆大に進んだ。小幡を普通の建築的大工と見るのは間違っている。彼れは道具指物の名人といふべきである。

圍碁の名人は米國には勿論ない。併し其名が古く現はれているのは、羅府の古西・豊龍と桑港の長谷川半老である。古西は初段に先二程の伎倆であるが碁打ちとして桑港に二十餘年滞在し碁會所の開祖である。當時彼は羅府にあつて相變らず仙骨を帯びている。

理髮師としては、西島勇蝶が明治二十六年頃桑港に始めたのが元祖である。併し彼は演藝が好きであつたから、其後俳優に成つた。

理髮師の名人としては、安さんであらう。安さんは日本でも有數な理髮師であつたが、彼は音曲の名人で女に持て過ぎたために渡米したと傳へられている。

『日米』No. 8130 June 27, 1922)

(八十二)

II 技術名人考

隠れたる英雄 II

前號の紙上で、古く渡米した各方面の名人？を紹介しましたが、實の處を申すと、世間には名の知れた人は案外ツマラヌのが多い。眞の名人は世に隠れているやうである。

たとへば、私の知っている範圍の一例を擧げて見ると、中村雄次郎の如きは、美術鑑定者としても、彫刻家としても、在米日本人中随一と稱すべき地位にあるのだ。

中村雄次郎は、明治十八年の渡米で、長い間桑港にクックとして働いていた。彼れの渡米當時は曾て述べた通り、働かうと思ふても働きの場所の無い時代であつた。然るに中村はドコで覺えたか西洋料理の本職となつたのであつた。

彼れはドコで覺えたとも無きクックの名人として桑港白人の間に働いた。そして彼れは其働いて得た金の全部を美術品に打込んだ。

彼れに接したものは何人でも彼れを一個温良の好々爺と見るであらう。そして長い間アメリカに居て何をしていたのだと思ふであらう。私は世間無趣味の没曉漢が中村を何と見るとも構はない。唯私は彼れが藝術に對する造詣深く、自から筆刀を揮ふて好める道に忠實なることを讚嘆せざるを得ない。彼れは實に趣味の人、藝術の人である。

恐らく彼れの博物館を見たる人は在米日本人中多くあるまい。若し一度彼れの博物館に至り、四千年來の遺物に接し、而して彼れの製作にかゝる彫刻、繪畫を見たならば、雄次郎が如何なる人たるかを了解するであらう。

序だから一言するが、彼は現在「岳陽樓」を製作中である。彼れが此製作はサンタクルーズ友人の許より得たる天然木を基礎とし、自然を拵げずして人工の妙を盡くしたるもので、彫刻

上別に一家をなしている。其纖巧、其氣韻、其刀勢、尋常作家の窺ふ能はざる創意を發揮している。

大弓場の開祖は島崎老人であることを前號に書いたが、弓引の名人は佐藤夏生である。彼れは鎮西八郎爲朝の子孫だといふ説があるがそんな事は當てにならぬ傳説だとしても弓矢にかけては在米日本人中、其比を見ざる名人で、いはゆる飛鳥を落とす伎倆がある。現時基督教青年會に備付けてある弓矢は佐藤が大部分寄附したもので、同時に彼れは弓の師匠である。

羅府の須田幸五郎は同地に於ける大弓場との開山であり、同時に弓の名人であるが、彼れの弓は八封弓で、當るも弓、當らぬも弓といふ哲學的な弓で、衛生的の運動には頗る徹底した弓道であるが、佐藤の弓とは比べると的は當る分量が少ない。須田に言はしむれば、當らぬのが弓の弓たる本分だといふのである。私も此説には同論だ。

将棋の名人は、松屋(菓子屋)の片山翁が桑港第一で、彼れは三段の伎倆があるといふことだ。それから海老原翁といふのが初段、其外初段の人が二人あると聞いたが名を忘れた。

片山は明治三十年頃の渡米で、曾てパイン街に湯屋を開業していた。海老原は漢學の先生で國語漢學の造詣が深い人であるが兩人とも頗るの變人で、世の中を馬鹿にして居る。同時に常人に馬鹿にされている。之れは五分五分で當人の天才には増減がない譯だ。

發明家としては、加州では川崎歌吉が元老である。彼れは明

治三十年シアトルに上陸し、後桑港に入りてより發明工夫に全力を傾倒している。彼れの發明慾は私共の飲酒慾以上で、見る者、聞く者、すべて彼れの研究に上らざる者なしといふべきである。彼れは現に三十餘の專賣特許の發明をなし、更に百四十の發明を完成せんとしつつある。

川崎の發明に於て最も感ずる處は、彼れが人生生活を基調として發明を進むることである。彼れは決して毒瓦斯や爆裂彈の發明を好まない。彼れは平和なる人生を主として經濟的、產業的に發明の歩武を進めている。此點に於て、川崎は在米日本人中の名家、高峰、野口以上の新發明家たる前途を有している。

『日米』No. 8131 June 28, 1922)

(八十二)

|| 技術名人考

「釣道樂」の話 ||

前號サンタクルーズから出した「海濱の俗感」にも書いた通り、私は「釣り」には門外漢である。併し私がノーサーベードといふて斯道の名人を湮滅するに忍びない。

桑港を始め加州各地で「釣り」を樂む日本人の數は年を逐ふて殖えて來た。回顧すれば、私共の渡米した頃は「釣り」どころの話でない。ヘタにまごつけば腮を釣るのであった。

今から三十年前に我々貧乏書生が集つて狂句を戦はした事

がある。其時の句に

「辜丸で肴釣のは命がけ」

といふのがある。實に奇々怪々の狂句であるが、此頃「釣り」などをすれば命がなかった。

日本人が釣を始めたのは、本職の漁夫を除いては、チブロンに働いている松本歌右衛門が開祖である。彼れは明治二十年頃の渡米で、桑港の金満家でチブロンのアーク別荘——別船を持っていた某氏の家に通っていたが「釣り」が大好物であった。

彼れは右の別荘に通っていた時、主人の留守に小舟に乗って「釣り」に耽っていた。或日小兒と一緒に舟に乗り、鐵砲と釣り竿を携えてビーチに遊んだ。然るにドーしたハツミか知れんが、彼れは船の上に死んで仕舞ふた。

船中には六歳の小兒が泣きながら浮かんでいた。伊太利の漁夫が見付けて大騒ぎとなった。それは今から三十年前の事件であった。

松本の死因は今にも分らない。私は魚の怨霊が松本に取付いたと思つている。

其後山口縣人、海田豊三郎が「釣り」を始めた。彼れは明治二十四年の渡米で、長い間白人家庭に通っていたが、其後齒科醫になり、桑港に開業していたが三十二年ぶりで二年前歸朝した。

海田は釣道樂の開祖である。彼れは今から二十五年前、既に釣り竿を擔いでノースビーチに太公望をきめ込んでいた。此當

時、釣竿一本に十弗を費すのは現時千弗を費すよりも贅澤であった。然るに海田は其頃十弗の竿を有っていた。

海田が「釣り」を始めてから白井豊吉、杉山伊三郎、常光友輔、駿賀屋の吉本などが「釣り」の道樂に入門して斯道の達人となった。そして小圃千浦は斯道の名人として浦島太郎このかたの名聲を放つに至った。

杉山伊三郎は、桑港地震前、書籍店を出していたが、彼れは「釣り」に興味を有ち、書籍店を賣飛ばして、スポーツイング・グーツストアを開業した。彼れは金儲けのために氣にくわぬ商賣をすることを好まない。食はないでも氣に入った商賣をする程の仙骨を帯びている。

杉山がスポーツイング・ストアを始めた頃は、日本人にして「釣り」の鑑札を受けていたものは僅かに三人であった。今から七年前でも僅かに七人しか無かつたのである。然るに今年、杉山の手を通して「釣り」の鑑札を受けた日本人が桑港だけで三百四十八人ある。

女性の好釣家としては齋藤老夫人、龍野夫人が兩横綱である。この兩夫人は釣を垂るれば立處に大魚を獲るの妙技に達している。漁夫が斯んな嬢を有つていたら遽かに金持になるであらうが、世の中は片廻いものである。

序だから書いて置くが、桑港附近の釣魚地としては、サンクインテン(牟屋のある處)チキンポイントそれからロデオ、キロットの棧橋、ベーカースピーチ。

釣竿の最も上等なのは千浦のピンロージの皮竿、これは印度から渡來したもので、彼れが二年間苦心の作品、長さ二十四尺直徑、手元二吋、鋒先二分とある。竿投の妙手として千浦と杉山は諸外國人を後へに墮若せしむる。彼等は釣糸を二百四十尺の遠距離に投げる。大概の人は、百四十尺位いしか投げ得ないのである。

「釣り」は道樂といへば道樂であるが、衛生的の道樂である。千浦曰く「私の家では妻も子供も病氣しません。風などは一切引きません。お医者様には氣の毒ですが…。」

〔『日米』No. 8132 June 29, 1922〕

(八十三)

Ⅱ妻ノロジの元祖

上野と吉岡の妻ノロⅡ

世間で、妻ノロジといふ言葉が流行している。此の妻ノロジといふ用語は、今から三十年前、斯く申す私が始めて唱へだした言葉です。それが太平洋を渡って日本に行き、唯今では可なりハイカラの用語になっているやうだ。

私が此言葉を發明したのは雑誌「あごはずし」を發行した頃でありました。其當時在米日本人にして奥様を持つて居なさる人は、東ヶ崎菊松、松丸弦吉、田中鶴吉、赤羽忠右衛門、高橋七五郎、西本長太郎、竹山祐嗣其外數人に過ぎなかつた。

男ばかり住んでいる世の中ほど殺風景のものはない。男が女を求める熱心の狂奔は、社會を攪亂せずには止まない。そこで其頃野郎共の自殺者が多かつた。大内金太郎は實に其一人である。

今日になって見れば、桑港には女が多く、ドロに參つても細君あり子供ありでお賑かの事であるが、三十年前に女を得ることはダイヤモンドを捜すよりも骨の折れた藝當であつた。

右様の社會に生存している男子諸君は、自然女を愛しなさる米國で女のイバルのは實は女の不足から來た習慣である。チト變な論ですが、需要供給の原則から來た經濟的の者である。

其頃、領事にして奥様を持參せられた方は其數が頗る稀れであつた。第一の領事高木三郎は無妻、第二の柳谷謙太郎も無妻、第三、第四、第五、第六の珍田捨巳が妻をつれて領事になつて來た。

珍田の次が神屋三郎といふ領事であつたが、妻君を愛し過ぎて肺病になつたと傳へられている。其次が陸奥廣吉伯が領事として見えられたが、無妻であつた。其次が上野季三郎で、妻帯領事として子澤山の人であつた。

妻ノロジといふ術語は其頃から盛んに用いられた。トいふのは其頃桑港領事館に吉岡彦一といふ書記生があつて、後廣東領事になつて死んだ。此男が天下有名なる妻君崇拜家で、何んでも蚊でも「僕の妻が」と出る。其妻君を稱讚することに於て天下の絶品であつたので、私が「吉岡は妻ノロジだ」とひや

かした。

妻ノロジ―は面白いと上野がいふ。「小村に報告し玉へ」と私がいふ。吉岡はそれが爲めに廣東といふ處に領事になつて行つた。廣東は女を大事にする處だといふ話した。

序だから書いて置くが、今から三十年前には領事でも書記生でも妻君を携帯した者は少なかった。陸奥領事の時代に天野といふ書記生が嬢を持つて居り、其後上野の時代に河西信が妻を持ち、吉岡、大山が妻を有つて、それから嬢持の領事、書記生が殖えて參つた。

其頃牧師で妻のあるのは無かつた。クリストが随分色男であつた如く、基督教の牧師も大方色男であつたので、艶聞が可なりあつた。私等は美以教會の先生をしている某白婦人と日本人間の艶聞を狂畫に書いたために訴へられた。九ヶ月の懲役に處せられた事がある。寔にお恥かしい事でありませぬ。

元來、妻ノロジ―といふ語は日本流の語である。西洋では妻ノロジ―が當然である。女に對してノロイとかノロケるとか云ふ言葉は西洋にない。西洋人は女にノロイのが「愛」といふ言葉になつてをり、それを人類の美德としてゐる。

日本は武士道といふ奴隸的道德が發達した爲めに、女を愛することをノロイとかノロマとかノロケルとかいふて、之を卑める悪習慣がある。併し男が女にノロイのは愛である。夫が妻にノロイのは家庭圓滿の要諦である。男が女にノロイ程天下は泰平であるべき筈である。

併し最後に一言したいのは、ノロイとかノロケルといふことも、それは分量の問題である。無茶苦茶にノロイのは妻君をつけあがらせて、反つて家庭の圓滿を缺くのである。妻ノロジ―も中庸を得て始めて家庭圓滿になるので、極めて心すべきことである。(附記カカといふ字は女偏に鼻、ムスメといふ字は女偏に良と書く味のある字だ。)

『日米』No. 8133 June 30, 1922)

(八十五)

|| 高峰の海外留學と

新發明の發表 ||

輕氣球急造の事業は完成し、直徑二十尺の紙製大氣球が出来た時そこで赤坂溜池の空地で試揚を行ふた。山懸參軍、西郷從道等檢閲のため臨場し、滿都の民衆をヤンヤと云はせた。そこで絹製の輕氣球を急造し、戦地に送り出すといふ段取りになつた。熊本城と本軍との聯絡が開けたので、實戦に使用せずになつた。

右の輕氣球は實戦に用いられず済んだが、輕氣球母體を塗る護膜と、飛揚の動力たる水素瓦斯製造は此時から日本學界に大成の緒を得たのであつた。

明治十二年、工部大學第一期卒業生中十二名を選抜し、之を海外に送るの議あり。讓吉も其選に入り、翌明治十三年、佛國

汽船に便乗して香港に到り、同地から英國汽船で倫敦に至り、グラスゴー及びアンダーソン大學に學び、夏季休暇をば利用してニューカスル、ラン、タイン地方の化學工場を見學し、在英三年の後歸朝した。

彼は歸朝後農商務省出仕として官房分析課長となり、藍玉、陶器、釀酒の科學的研究をなし、日本工業試験所の基礎を造つた。此頃、讓吉は日本酒の腐敗多量なるを憂ひ、モルトの製法を發明し、灘、堺の釀造家を説き、酒造試験所を設立せしめ、清酒の釀造法を改良した。世間に傳えもれているウイスキーの釀造發表は此頃の研究から出たものである。

明治十七年(千八百八十四年)米國ルイジアナ州ニューオリアンズに於て綿花百年祭を兼ね、萬國大博覽會のあつた時、讓吉は事務官として出張を命ぜられた。同行者は服部一三、玉利喜造、讓吉は此時始めて米國の人となつたのであつた。

讓吉の目は此時燐礦に注がれた。といふのは、此博覽會に南カロライナ州からフォースフェードロック(燐礦)が出品せられ其燐礦は英國に多量輸出せられていることを發見した。讓吉は此燐礦が日本に缺乏せるを知り、私財を抛ち、見本若干を日本に輸入し、翌年各府縣の農事試験所に配布し、作物の肥料に試用せしめた。燐礦が日本肥料に用いられたのは、實に讓吉の發見が始めてであつた。

日本が糞と尿の肥料的文明は讓吉が燐の輸入から古くなつて仕舞ふた。併し此當時、該肥料を用いさせるには随分の苦心があつた。讓吉後に語りてい曰く、或る百姓が燐礦を大根に施した處が、ペラボーに大きな大根が出来た。それを市場に出した處が、病的だといふて買手がない。其百姓は爲めに大損を招いて、燐肥を用いないので、其説明に大骨を折りました、云々。

讓吉はニューオリアンズ博覽會から歸り、吉田清成、洪澤榮一、益田孝、大倉喜八郎、淺野總一郎、三井高保等の日本財界巨頭を説き、資本金二十五萬圓の肥料會社を創立した。人造肥料の開祖は實に高峰讓吉である。

讓吉が肥料會社を起した頃の日本農業界は、甚だ幼稚なものであつた。讓吉が創立した大日本肥料會社は、洪澤榮一が社長で、高峰讓吉が技師長であつたが、社運が振はない。そこで讓吉は地方講演に出掛けて、糞と燐との關係を講釋に及んだ。

讓吉が釀造法の新發見をしたのは、肥料會社創立以後のことである。世間で彼れがニューオリアンズ博覽會の時に新釀造法を發表したやうに傳へているが、それは嘘だ。讓吉が新釀造法を發明したのは、大日本肥料會社を起した後のことである。

讓吉は、大日本肥料會社を創立した頃、深川區釜屋堀に一家を借り受け、麴やらモルトの製造を研究した。そして幾つかの專賣特許を得た。

讓吉の專賣特許は、其數が甚だ多く、世間で知つているタカジアスターゼ杯は後年の發明で問題でないのだ。彼れはタカジアスターゼ發明前二三十の發明をしていた筈である。私は一々其名前を覚えていない。

『日米』 No. 8135 July 2, 1922)

(八十六)

Ⅱ新島襄の渡米

日本人最初の學生Ⅱ

嘉永元年に土佐の漁夫の子中濱萬次郎がサンドウキ子嶋に漂流して米國の鯨船に救われ、米國で學問をしたことは曾て書いた。これは日本人が米國に學問をした初まりであるが、萬次郎は米國に學問をするつもりで漂流したのでなかった。眞に米國で學問しやうと考へて密航を企てたのは新島襄が開祖である。

新島襄は七五三太といふて千八百四十三年(天保十四年正月十四日)江戸板倉侯邸に産れた。父新島民治(是水)は上州安中の藩主板倉侯に仕へた人である。安政五年、七五三太が十六歳の時、藩主板倉から蘭學の研究、航海術を學ぶべきを申付かり、西洋の書物を見た。其頃聖書は漢譯の物しかなかつたが、七五三太はある日漢譯の聖書を讀んだ。「心の貧しきものは福なり。天國は即ち其人の者なれば也。哀む者。柔和なる者。義を慕ふ者。矜恤ある者。平和を求むる者。義の爲めに責めらるる者。さまざまに罵らるる者は幸福であることが書いてあつた。

「汝等は地の鹽なり、鹽もし其味を失はゞ何を以てか故の味に復さん、後は用なし、外に棄てられて人を踐るのみ。汝等

は世の光なり。山上の城は隠るゝことを得ず。燈火は升の下に置かずして燭臺に置き、すべての物を照らすべし。汝等の光を耀かせ天に在す汝曹の父を榮むべし」

十六七歳の彼れは聖書を見て頗る感激した。彼れは乃父にも藩主にも背いて基督教の先生を求むべく、二十一歳の時、函館に脱奔した。

襄が函館に走つたのは蔓延三年で、此頃函館に在りし希臘教の宣教師ニコライの庇護を受けて英語を勉強し、密に米國渡航を計畫した。諸君が御存知の通り此當時外國に行く者は死刑に處せられる法律が日本に嚴存していた。此國禁を犯して海外に出るのは命懸けの大決心であつたのだ。

襄は命懸けの決心をして、元治元年六月十四日の夜陰に上海に航すべき帆前船に乗り込んだ。其當時、日本幕府は上海に役人を派遣していたので、此役人に見付かたが最後、本國に送還せられて鈴ヶ森邊で打首になるのだから、襄は苦心慘愴の結果、米國ボストン行の大帆前船ワイルド・ローパーといふ船の船長に嘆願して、アメリカに連れて來て貰ふた。

襄の旧名「シメ太」は西洋人には呼びにくいので、ジョーと呼ぶことになり、此のジョーが後に新島襄といふ本名になつた。

襄が乗り込んだ船は、ボストンの巨商、アール・フュース・ハーデーの所有船で、此ハーデー夫婦が頗るの好人物であつたから、襄がアメリカに着いてからはハーデーの家に寄寓し、マサチューセツ州アンドヴァ中學校に通學し、後アーモスト大

學に移り、明治三年六月同大學を卒業した。

襄が米國に於ける學業の成績は卓越せるものであつたらしい。校長シーリー氏が襄の學業成績を聞かれた時答へた言葉に「純金に鑲金するは無用です」といふのが残っている。

襄は更らにアンドヴァ神學校に入り、明治四年卒業し、明治五年二月、岩倉大使一行渡米に際し、召出されて通譯を仰付けられた此當時、米國通としては新島襄が岩倉大使に召出された時の逸話は、後人の參考とすべきものである。襄は國禁を破つて、外國に出た凶狀持である。然るに日本政府から召出されたのであるから事態は容易でなかつた。然るに襄は大使に謁見するに當り、日本舊來の風習を破り、ハロー／＼の平民的禮法を用いたといふことである。

其頃岩倉大使は烏帽子、直垂の装束で、手に笏を持っていられた程、舊式の時代であつたから、襄がハロー／＼には随分驚かれたことである。併し此時の公使は森有禮といふ英國仕入の男で、新島襄を非常に尊敬していた人であつたから、万事都合よく納まつた。

襄が此頃ハーデー夫妻に出した文書に面白いのが澤山ある。此文書は同志社大學に珍藏せられてるので、ザラに世間には現はれていない故、私は其二三を此機會に發表して見る。

『日米』No. 8136 July 3, 1922)

(八十七)

Ⅱ 新島襄の手簡Ⅱ

岩倉大使に面會せる新島襄が明治五年に恩人ハーデー夫人に送つた手簡は左の如きものである。

ハーデー夫人貴下、

予は當地に歸着後子の國禁を犯せる舊罪赦免の公認書を得んが爲めに日本政府に向ひ再び書を裁せんと欲して筆を執りぬ蓋し子の最初の書狀中には子が基督教を信奉することを明言せずして單にアンドヴァに於て勉學中なる事を記載し神學を學習せることを言はずして唯文化の根源に就て學びつゝある旨を記したればなり予はアームストに於て公使と會見せるとき彼に語りて曰く「予は逮捕を懼れて疑懼戰慄しつゝ暗夜に彷徨する盜賊の如くに基督教に對する子の信仰を隱匿して歸朝することを好まず公然基督教の博愛に基きて一身を處理し我良心の光明に照して事を斷ずる基督教徒として歸朝せんと欲するのみ」と

ボストンに於て

一八百七十二年二月十六日

× × × × × × × × × ×
 フリント君貴下、

日本公使は米國の教育制度に就き日本全權大使に詳細なる報告をなさしめんがため予にワシントン府に來るべき様申越されたれば前週より其取調べに従事し頗る多忙なり予は全權大使の

一行ワシントン府に到着するを待ちて直ちに彼地に出發すべし
予は異教徒なる大使の前に立て基督の爲に證せんことを期せり
基督に就て語るには予の爲めに甚だ好機會なりと信ず冀わくば
予の爲め又大使のために特に祈禱を捧げられんことを

ジョージタウンに於て

一八百七十二年三月八日

× × × × × × × × × ×

彼が恩人ハーデー夫婦に送りたる左の手簡は實に當時の光景
と彼れの心事を窺ふに好資料である。

テーデー君及令閨貴下

予は昨朝首府に安着し森有禮氏より懇切なる歡迎を受く到着の
時は甚だしく疲勞し居りしを以て大使の旅館に赴かずして直に
日本公使館を訪ひ公使に面會して予を閑靜なる私人の家庭に寓
せんことを請ひり公使は甚だ親切に其自邸にて休息すべき様勸
め呉れしも頗る混雜し居る故毫も眠る能はず午後に至りて公使
附の米人秘書官は首府より二哩を隔たれるジョージタウンに於
て適當の寓所を予の爲めに發見し呉れたり森氏は今朝アーリン
トン館に到らん事を請ひしかば予は豫定の時刻に參館して日本
の文部卿に面會せり

現今合衆國に留學せる日本學生は文部卿に參考材料を供せんが
ために悉く召集せられ如何なる提議も如何なる建言も自由に之
を爲すの權能を與へられ且其動議は多數決に依りて決せらるゝ
ことと定められたり彼等の謁見室に入るや直ちに日本國の敬禮

を爲せりと雖も予は彼等の背後に於て室の一隅に直立したり予
は豫て此集會に臨むに先ち一書を森氏に呈して貴下と予の關係
を述べ予を他の學生等と同一視せらるゝことなからんことを請
へり森氏は常に好意を持つて予をを遇せられしかば予は他の學
生等と同一視すべからざることを文部卿に告げたり蓋し予はボ
ストンの知己の補助に依りて教育せられ未だ曾て日本政府より
一厘だも受けしことなければなりされば文部卿も予を日本政府
の奴隸の如くに待遇するの權利を有せざりき

森氏は文部卿に告げて曰く「新島氏は予の請を容れて當地に來
られしが是れ決して束縛を受くべき奴隸としてに非ず教育上の
事に關し多少參考の資料を供せんとの好意に出でしものなり故
に貴下に於てもよろしく其好意を謝せられて然るべし新島氏は
ボストンの友人に對し負ふ所あるが故に其同意を得ずんば日本
政府に一身を委ねること能はず又政府も氏を強制するの途なか
るべし故に新島氏に對しては萬事双方の合意に依りて成立すべ
きことを知了せられたし幸いにして氏は三週間の休暇を有する
が故に貴下にして若し一友人として氏を待遇せられんには氏も
亦必ず貴下のために盡す所あるべし氏の日本を思ふの情は何人
にも劣る所あらざるべしと雖も唯奴隸の如き待遇は氏の快しと
せざる所なりと森氏の此言は深く文部卿を喜ばしめ且室内の會
衆をして悉く其視線を予に集中せしめたり文部卿は予の直立せ
るを見るや森氏に向ひ「彼處の隅に立てるは新島氏なりや」と
問ひ其予なることを確むるや直ちに坐を立ちて予の許に來り握

手をなし最も温雅にして而も威嚴ある禮を行ひ以後共に親交を厚くせんことを語られたり彼は六十度の角度をなして予に敬意を行ひしかば予も亦鄭重なる禮を返へしたり。

——(此手簡つゞく)——

『日米』No. 8137 July 4, 1922)

(八十八)

|| 新島襄の手簡

ハーデー夫人に送れる(續)||

彼が宝の一隅に佇立せる予に對して斯くも敬意を表せしことを思ふときは心中嗤笑を禁ずる能はざりき。かくて彼は諸學校視察の爲め此國を巡回せんとしつゝあるを以て彼の通譯者として説明の勞を執る可き辭令を予に交付せしかば予は彼に告げて曰く

「若し斯く爲すべく命ぜられんか予は之を辭せざるを得ず、何となれば予は日本政府より補助を受けつゝある人々より區別されるべきものなればなり。左れど一定の報酬を給せられ之を爲さんことを請はれなば予は喜んで其任に當らん」と茲に於て文部卿は森氏に告ぐるに予の請ふが儘に予を待遇せんことを以てしたり。

學生等は翌朝十一時に再び會合すべきことを決し又種々の動議を提出せしも予は自己と彼等と同一の地位に置かざらんこと

を努めの一つの投票をも爲さず。又一言をも發せざりき。散會するに當て文部卿は彼等に對して握手の禮を爲すことなく唯三十度の角度に於て敬禮を行ふのみなりしが、予に對しては特に宿所を尋ね又其寓居を訪はんことを請ひ、予の健康を祈り、握手を爲して後再び七十度の角度に於て敬禮を行へり。予は多くの日本人間に在りて獨り斯くも尊敬を受くるを見て心窃に嗤笑を禁ずる能はざりき。蓋し予は自ら或特別の地位を有する者たることを感ぜず、又努めて予の名の知られざらんことを希望せしに拘わらずかゝる待遇を受けしを以てなり。予は最初客室に入るや室の一隅に佇立し嚴正に己身を持せんと企てしが遂にその希望の如く爲すことを得たるは予の深く喜とする所にして、貴下に於ても予の勝利を聞きて喜び玉ふならんと信ず。蓋し予は自由の人たればなり。畢竟貴下の補助に依りて此自由を得るに至りしを以て衷心貴下に對して感謝の至りに堪へず。予は今にして初めて貴下の祈禱の神聽に達せしを知る。希くば尙予の前途の爲に祈禱を繼續せられんことを予は人々の尊敬を意とするものにあらず。唯神の賤しき子として存せん事を冀ふのみ。

ジョージタウンに於て

千八百七十二年三月十日

襄は米國小學制度の調査を託せられ、米國小學制度の比較研究をして大部の報告書を作り、岩倉大使一行と共に歐洲に渡つたが、歐洲で病に犯され、一行と歸朝することが出來ず、翌明治六年九月に米國アンドバーに歸り、翌七年アンドバー神學院

卒業式に参列し、「日本に於ける基督教の宣傳」なる日本語の大演説を試み、彼れが後年同志社を創立すべき抱負を披瀝した。

彼れは明治七年、ロトランド府に於ける米國傳道會社の集會に出席し、告別の演説を述べ、日本に基督教の學校を設立すべきを公表し、列席の諸名士に多大の感動を與へ、ヴァーモンド州知事ベーヂ氏を筆頭として一千弗の寄附を得、パーカ博士、ハーデードツヂ等より五百弗宛の寄附を得、直處に五千餘弗の寄附を得た。而して彼大志を抱きながら明治七年十二月に十一年ぶりで日本に歸つたのであった。

彼れが歸朝後に於ける日本の活動は目醒しいものであった。闊達にして燃ゆるが如き彼れの運動は日本上下の民衆を驚かした。幾多の壓迫反目と戦ふて明治八年京都舊島津屋敷に同志社を創立するに至つた。

此當時基督教は國禁が除かれたばかりで一般民衆は邪宗を以て目し、千年來の情力を持つて國教となつてゐる佛教僧徒は種々なる難癖を付ける。新島が此間に立ちて獅子吼をしたのは六百年前日蓮が多くの迫害に堪へて辻説法をしたと同じ趣があつた。

私は在米に於ける日本人歴史の片影を書くために新島襄先生の事蹟に觸れた。併し私が先生の史實を書くには餘りに其材料が貧弱である爲め或は先生の徳を傷けんことを恐るゝ。但し茲には海外に於る學生としての第一人新島襄を特記するに止める。

懐ふに新島先生の如きは明治年代が産める偉人として福澤諭吉先生と比肩すべき人であらう。願くば後來の史家によりて先生の遺蹟を闡明し、其誤らざる史實を後昆に垂れんことを切望する。私は單に先生の名辭を此雜話に留むるのみである多罪々々。

〔日米〕No. 8138 July 5, 1922)

(八十九)

|| 沿岸農業史の片影

サンノゼとワッソンビル ||

太平洋沿岸農耕地に日本人の影を見たのはサンノゼが一番早い。明治廿一年頃農園として日本人の注目を引いたのは、ウーランド、バカビル地方とサンノゼ地方である。

サンノゼは太平洋日本人の發祥地で、ウーランド、バカビルはサクラメント平野日本人の發祥地と稱すべきである。

サンノゼ市はサンタクララ郡の首都で、ガーデン・シターの稱あり、氣候温和、空氣清朗を以て名あり、一時加州政廳を此地に移すの議ありし程の樞要の地である。そして日本人が此地に始めて入りたるは明治廿一年で竹崎犀吉が北部からウーランドに入り、堂本元之進が桑港からウインタースに乗り込んだと同年代である。

明治二十一年、和歌山縣人、堂本友治、松村源之助等十五名

第五街のサンノゼ果物罐詰會社に就働す。此時代は支那人勞働者の數多く、此附近一帶に四千人以上散在し、サンノゼ支那街は煉瓦造の一市街を形成して其勢力が旺盛であつた。

日本人の勞働者は支那街の一隅に借宅して、漸次附近の農園に働き、日給七十仙より九十仙ほどであつた。

明治二十三年、當地方同胞の數漸く増加し塚本松之助、佐藤九藏、岡田皆吉の三名は共同して市内に小許の地面を借り受け植木園を經營した。これが同地方に於ける借地者の嚆矢である。

右の植木園は翌明治二十四年に大石徳太郎讓受け、其後十餘年經營を續けた。日本人が大集合をなしたのは、實に明治二十六年からで、此年より大農園を經營せるヒューム氏、日本人を試用することとなり、明治二十七八年の頃、日本人一千名以上を見るに至つた。

サンノゼに次いで早く開けたのはワッソンビルで、明治二十一年此地に砂糖ビーツ製造所が設けられ、アルバラードの製糖會社と兩々相對して斯業の牛耳を執つていた。後スペクルスはこれを買収し次でサリナスに一日四千噸製造の大工場を設置するに至り、沿岸第一のビーツ耕作地と称せらるゝに至つた。

ワッソンビルに始めて足を入れたのは、大阪人木村作三で、彼れは明治二十五年冬數十名の同胞と共に伐木開墾の仕事を受負ひ、翌年ビーツ耕作を受負を始めた。明治二十八年に熊本縣の元老馬場小三郎、大分縣人犬丸政一と共にビーツ耕作を請負

ひ、明治三十年には請負競争の弊を除かんとし、野田音三郎、木村作三、馬場小三郎等發起となり勞働同盟を設置したが、山村幸八に裏切られて同盟は瓦解し、一時物議を醸したことがある。

邦人で砂糖ビーツ請負の元祖は西博夫である。彼れは明治二十四年ウードランド地方からサクラメント地方に至り、それからブレサントンに徒歩旅行をして此地でアラメダ砂糖會社の農園三百英加を受負ふた。此當時桑港邊の書生やら北部から移住した勞働者を農園に入れたが、ビーツやら雜草やらを辨ぜざる素人ばかりゆへ、間引仕事に大に手後れし、バンクバーの友人の許に人夫の送致を依頼した。處が此頃北部には日本直航、布哇轉航の邦人群を成した頃ゆへ早速百五十の人夫が詰掛けて來た。僅かに三百英加の畑に二百人程の勞働者が集つたので、大部分の者は仕事口がなく、混雜を極め、受負事業は失敗に終つたことがある。

ワッソンビルの苺園は其歴史が可なり古いが、日本人の此地方で苺耕作を始めたのは明治二十七八年頃からで、岡山縣人西村仙右エ門外數名が共同事業で二十二英加の苺園を收穫物折半の方法で耕作に従事したのが同耕作の嚆矢である。

明治三十二年、梶岡八藏、久保田、上田共同にて同耕作をなし、翌年梶岡、西村、泉等共同して新たに二十五英加を植付け以後明治三十七八年まで同業に従事する者甚だ多く、フロリンと相對して苺全盛の時代となつた。

現今ワッソンビル及びフロリンの苺耕作は衰微し、サンオン・マウンテン・ビュー、パロアルト、サリナス地方に移住する者が多く、更らにフレズノ、マセド郡に新開地を見出すに到りて、苺耕作者の移動が多くなって来た。

『日米』 No. 8139 July 6, 1922)

(九十)

Ⅱ 沿岸農業史の片影

モントレーより南加迄Ⅱ

サリナス地方に始めて同胞が入り込んだのは、ワッソンビルより少しく後れ、明治二十三年頃のこと、金子、高橋などいふ者、賣春婦と共に連れだちて此地方に入りしも、農業に係がなく、明治二十六年、山口縣人白地政次郎農園労働者として此地に來り、翌明治二十七年馬場小三郎サリナス支那街邊に始めて旅館を設け、農園労働者の周旋をした。

明治二十八年には犬丸政一がキャストロビルでビーツ耕作の請負を始め、明治二十九年には高尾庄太郎、峰嶋儀一、野田音三郎、干濱一郎、西博夫、富安勝彦等、教育ある學生等、數群の労働者を率い各地に活動を始めた。

明治三十年には稲澤謙一、獨立傳道會を創立してサリナスに居を構へた。稲澤は熱心なる基督信者で、モントレーの富豪デビット・ジャックの信任を得、同氏の後援にてサリナスに教會

敷地を二英加半買入れ同胞の寄附を以て明治三十八年に傳道會館を設立した。

當時砂糖の値段が下落し、ビーツ耕作はすべて凋落したが、サリナス附近一帯の地はビーツ耕作地として一時全盛を極めたもので、其絶頂の盛時には同胞耕作面積三万英加上に上り、五千英加の現金借地、七千英加の歩合耕作、一万六千英加の契約耕作を見たものである。

野田音三郎がモントレーの漁業を始めたのは明治三十年の頃で、彼れがサリナス附近ビーツ園の請負をした頃、冬季を利用してモントレーの山林を開墾し日曜の休業を利用して海濱に出で小船を借りて(はへ縄)をした處が、大魚の掛ること夥しく、野田はそれよりモントレーに居を移し専ら漁業に従事し、罐詰場を設けた。併し事業に經驗なかりしと資金の缺乏とにより、苦闘十年にして業を廢した。

モントレーの漁業は最初伊太人支那人等が始めたもので今でも伊太人随分多い。日本人が同地に漁業を始めたのは明治三十一年以後である。此頃のモントレーは漁群が多く沿岸に集り來り、鮭、鯛、其他の雜魚は漁獲容易であつたが、近來漁獲大に減じ、特に鮑は沿岸の物を取盡したので遠く數十哩の沖に出漁するやうになつた。

今から十五年前には鮭釣りに出た漁夫がラッカートが引掛つた時は之れを海中に投棄したことが多かつた。

北部沿岸の漁業が衰へたのは何の爲かといふと、捕鯨船が此

附近の海岸を荒らすためだといふ説がある。そこで、漁夫は南
 加及びメキシコの沿岸に移轉する傾向がある。現時、サンビド
 ロ、サンデーゴは邦人漁業地として大活動を演じている。

サンタマリア、ガタロープの農業は明治三十一年ユニオン砂
 糖會社が同地に製造場を設け、ビーツ耕作をせるより始まり。

最初に此地方のビーツ園に活動したるは森銀之助である。明治
 三十三年、安孫子久太郎、砂糖會社に人夫を供給し、池田五六
 監督として出張した。

ベンチュラ郡、オクスナードも此頃よりビーツの勃興を來し
 邦人及びメキシコ人は春秋季に於ける働場所として活動し明治
 三十六年其絶頂に達し、當時ウエスタン農事請負會社と、日本
 人メキシコ人労働同盟との間に大葛藤が起り、其結果血を見る
 の騒動が起つたことがある。

其頃の記録によると、同地に集つた、間引労働者は左の如く
 であつた。

日本人	六百人
メキシコ人	三百人
支那人	百五十人
白人	百二十人

右の紛擾は日本人メキシコ人同盟の下にウエスタン農事請負
 會社をボイコットしたもので、キャンプに夜襲を行ひ會社就働
 の労働者をワゴンに積みて引出したる大事件で、ターラック日
 本人放逐事件よりも一層物凄いものであつた。羅府から湯淺銀

之助、渋谷清次郎、桑港より安孫子久太郎、鷺津文三が同地に
 急行し、調停の勞を執つたが、此間日墨人間に戦鬪が起り、調
 停者は羅府に引揚げたことがあつた。此頃オクスナードには小
 作者は多く無かつた。大概一時の出稼労働者であつたのだ。

『日米』No. 8140 July 7, 1922)

(九十一)

|| 岩倉大使の事に就て

鷺谷南強氏より來簡 ||

明治五年、岩倉大使渡米に關し、在東京、鷺谷南強氏より來
 示があつた。拙文の記述が遠く故國の人士に讀まれたるを一度
 は喜び、一度は愧ぢた。古き記録に關しては私の手元には參照
 の書に乏しく、否な殆んど皆無にして、古老の斷片、零碎の記
 録を考想するの外なく、常に隔靴搔痒の感に堪へないのである。
 幸ひ、氏が示されたる左の一文は私の記事の欠陥を補はれたる
 貴重なものと思ふが故に、讀者と共に興味を新たにしたい。

——「頃日連載さるる『歴史湮滅の嘆』至極同嘆に存候。

拜讀の間、自から興味津々として湧き、所謂興嘆に堪へざるも
 の有之候まゝ、遙かに敬意を表すると共に心付き候數點を擧げ
 て敢て御參考に供し度候。

「岩倉に關する記録によれば、——日本では此一行を開拓使
 といふ——と有之候得共、之れは矢張り「特命全權大使」にし

て、世間一般には唯だ「遣外國使」と申されたる様に候。即ち、正式には明治四年十月八日を以て

右大臣岩倉具視

特命全權大使として歐米各國へ被差遣候事

との辭令を發せられたるものに有之、同年十一月四日

遣外國使祭を神祇省に行ふ具視、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、

山口尙芳、衣冠帶劍齋場に入り事に即く理事官、書記官等衣冠帶劍斑

位に就く。

との記録有之候間、普通には遣外國使と呼ばれたる事と存候。

隨員の事——遣外大使は外務卿たりし岩倉が、特に右大臣

となりて之れに任せられ、

參議、木戸孝允▲大藏卿、大久保利通▲工部大輔、伊藤博文▲外務少

輔、山口尙芳、

の四名は特命全權副使となり、正副兩使節の外には隨行官四十八名なりし由に候（留學生女學生を合して五十四人）

發着期日の事——明治四年十二月東京を發し、翌五年桑港上陸の様御記載有之候へ共、小生の見たる岩倉公實記（勅命を奉じて故香川伯編纂せる非賣品）には

明治四年十一月十日東京を發し翌十一日横濱裁判所に在留の各國公使及び書記官を招待し晚餐會を催し袂別の意を表し十二日十時波止場から小蒸汽船に乗つて太平洋會社郵船アメリカ號に至り呶々

と有之候。而して出帆當時の狀景を記して

午後一字抜鐘轉輪す、此時砲臺及軍艦より禮砲十九發を轟放す、軍艦

乗組員は甲板上に羅列して手を額に加へ岸上の送別員は帽を脱し其行を祝す

とあり、當時は時間に總て何字と字の字を用ひ居たるものゝ如く「抜鐘轉輪」も面白いが、軍隊禮式を見て額に加えなども中々振つたものに御座候。

「愈々一行の米利堅合衆国桑方斯西哥港」に到着したるは四年十二月六日に有之候間。横濱より直航して而かも二十五晝夜を洋上に費したる勘定に候。

「船橋に日章の旗を掲ぐ、金門に入り、アルカトラス島を遇る時に島上より禮砲轟發す、船既に棧橋に達す、御雇の當港領事官ブロークス。理事官ウリヤム及フェルプス駐在の我が國官吏等出迎ふ

とは當時入港の狀景を記したるものに候。

尺魔曰く。南強氏は以下大使一行の宿泊所の事に就き、

「一行の宿泊したるグラランドホテルは今のマーケット街パレスホテルの處に在らずしてモンガモリー街に在りしとなし、記録によれば「具視副使及一行の諸員とはモントゴメリー街のグラランドホテルに入る」とあるモントゴメリー街は今のモンガンモリー街の事なるべし」云々。

と考證せられてあるが、是れは矢張り今のマーケット街パレスホテルの横筋の町をニューモンガモリー街といひ、グラランドホテルはパレスホテルと向合せになつていて、入口がニューモンガモリー街に在つたのである。即ち、グラランドホテルはマーケット街とニューモンガモリー街の角の建物であつた。日本にある記録に單にモントゴメリー街とあるはニューの字が落ちたのであらうと考へられる。

〔『日米』No.8141 July 8, 1922〕

(九十二)

|| 岩倉大使の事に就て

鷲谷南強氏より來簡 ||

さて大使一行はグラランドホテルに入り、

「電信を以て長崎縣に報じ之れを太政官に通告せしむ。」と有之候。此時代に於ける外國電報は総て長崎に於て接受したるものらしく候。

加州大歡迎の事——「貴説の通り一行の猿芝居にステージー・マネジアアたりし者は米國公使デロング氏夫妻なりし故、米國中央政府は大に一行を歡待したるに相違なけれど、又加州政廳も桑港市廳も大々に歡迎の意を表したる様子に御座候。勿論彼等は一面に於てモンキー芝居を見る如き好奇心もありたるとならんと存じ候。一行の記録には

十二月七日朝十一時、本府知事ウキリアム・アルフォード、陸軍將官スコフィールド及本府在留各領事等、具視の旅館に至り之れに謁す——

又本府市民世話役頭取アルビスウエーンは米國公使デロング誘引せられ具視に謁して祝詞を呈す、其譯文に曰く。

「我がサンフランシスコ港は米國聯邦の關門なり、今我等貴大使の着米を見て雙手を擧げて歡び迎へ茲に其安着を拜祝す、而して當地の市民等は皆貴大使の來意を知れり、請ふ試みに之れを述べん。

抑も貴大使等外交の友誼を厚くせんことを謀り、貿易を擴めん事を欲し。而して國の權利を掌握し公義を確然固執して歩を開明の域に進めん事を希へり。

貴國に未だ有らざる所の物若し我國に特有し、之れを貴國に給與し其便を得ば、之予等が深く悦ぶ處にして又た予が國の無き處を貴國に請求するも亦復是の如きを信ず、之れ各國の習慣な

り、我技藝學術及物産の諸製造平時戦時の諸器械より大小學校及び日用の諸事物に至るまで都て隠さず胸襟を豁開して之を貴大使の檢覽に供する之れ遠人を饗するの微意なり。今貴大使の予が國に来れる益々兩國の友誼を厚からしめ併せて兩國の洪益を表さん事を之れ祈る」と有之候。

却々鄭重に取扱つたものらしく、此頃には勿論ジャップ、マスト、ゴアの聲はなかつた筈に御座候。彼等大使一行の意氣甚だ熾んなりしは、總て來訪者に對し「來り謁す」で片附けて了ふ一事に就ても窺ふべく候。右の記録中「本府市民世話役頭取」とあるは、多分今の市長の事なるべく存ぜられ候。

此晚十字、陸軍將官スコブキールドは第二砲隊附屬の樂隊を大使一行の旅館に派し奏樂して一行の旅情を慰めたる由に候。

此時市民の此處に會集するもの凡そ四萬餘人頌聲を擧げて大使の平安を祝す。

とある大した人氣に候。

之れに對し、

具視、鳥帽子、小直衣、切袴を着けて之れに臨み衆に對して演説す、米國公使デロング其國語を以て之れを譯述す、市民皆手を拍ち頌聲を發して之を慶す。

とあるが、サーカスのジョーカーのような風體を見て、手を拍ち聲を揚げたのであらう。果して、それが所謂頌聲なりしや將た笑聲なりしやは疑はしく候。

序ながら此鳥帽子、小直衣、切袴はツーツと大使一行に付纏つて行つて、翌明治五年十一月五日大使等が英國皇帝に謁見する時、始めて新製の洋風大禮服と交代免職になったものに候。

大使一行の滯桑期間は十六日間にして、即ち十二月六日上陸、同月廿二日出發、尤も之は明治四年の事なれば日本にては未だ大陰曆を用ひ居たる事故、米國風に解すれば日取が遠ふべく候。明治五年十一月九日始めて大陰曆を廢し、太陽曆を用ゆる事となりて、明治五年十二月三日が六年一月一日となりたる譯に御座候。されば大使一行が海外に出で初めての正月を迎へたるはソートレーキ市にて此時、ソートレーキ市にて大雪に降り籠められ、

異國もなへて和らく色見えてわが大御代の春は來にけり

× × × × ×

白妙に雪ふり積るあめりかのかの

みやまをかけて越る時かな

の二首を大使が元旦試筆として揮毫され候。(下畧)

〔『日米』No.8142 July 9, 1922〕

(九十三)

Ⅱ 大和植民地の由來

模範的日本人農村Ⅱ

土地を國有制度にすべきか、私有制度にすべきか、財産を共有にすべきか、私有制度にすべきか。之れ過去數十年間、學者及び社會主義者、政治家等の討論研究する所、私は此議論を此の稿に於て戦はずを欲しないが、私の知る範圍に於ける史實から見れば、土地は地球上のあらゆる人類が適宜に分有(所有)すべき結論に達している。

私は土地を國家乃至豪族の所有とする事は、歴史上失敗であつたやうに考へる。今日の或論者は土地が貴族富豪に握られ、多數生民が所有の機會なきに概して土地國有を唱ふるけれども、それは弊害の一面を見て他面の弊害を解せざる者である。元來、人間社會が出来、それが國家(主權者ある國土)と進化する初期時代には、土地はすべて國有であつたのである。日本を例に引いて見てもそうである。日本は藤原氏といふ貴族が生じなかつた時代には、土地は國有であつた。然るに聖武天皇天・平・十・四・年・に開墾滿期となる地を収むる(國家が收容)する所から百姓等は怠けて元の荒地となすにより、今より後は三世一身を論ぜず、「永代これを収むる勿れ」との勅詔が發せられた。即ち土地は開墾したものが所有し子々孫々に傳へることを許され、大化以來土地私有を嚴禁されてあつた制度が破壊されたの

であつた。

理想から申せば土地は國有とし、各生民其分に應じて之れを耕耘し、生活を辨じ、國用に貢獻するのが宜しいが、土地國有の弊は農民を怠惰にすることと有司の專横を生ずるの弊がある。そこで聖武天皇天・平・十・四・年・の勅詔は土地の所有を認むるに至つたのであつた。

然るに土地私有の制度は豪族貴族と相結んで、その地米を割附する事となり、全國に莊園が廣まる事となり、貴族なる階級は莊園を領有し、地方の豪族となり、諸國に大名の起る原因となつた。封建制度はこれから生まれたものである。要するに國有制度を改めて私有制度となせるために其弊害として豪族が廣區域の土地を領有するに至りたるもので、之が後世農民土地分有制度を生む母であつた。

私は以上日本古昔の土地制度の變遷の概要を述べたが、此歴史的事實は不思議にも世界共通のものであつた。而して新開の國土、たとへば墨國、濠洲、サイベリア、米國新開諸州等は其始めの日本莊園の如き姿を以て少數の大地主に專有せられ、後入の移民は土地を所有するに難く地域餘りありて農耕開けず、偶々農耕に従事するものは借地人として之れに従ひ、土地の開くるに随ひ借地料を多く課せられ國民精神の不健全を招致するに至つた。

そこで如何にせば農民の精神を健全に導き、靈肉兩全の富を得べきかといふことが、各國の識者政治家によりて攻究せられ

結局隣接農村を建設して土地の厚生を計り、生民を教養するに在りといふことに歸着したのである。

農村を建設して隣保團結し、相戒め相扶けて靈肉の向上を成さしむるの方法は其國情によりて大同小異はあるけれども、家族に必要な土地を分有せしめ國家乃至聯邦政府或は政府保護監督の私立會社が農村を建設し各家族に對して長期拂込の方法を以て土地家屋を與ふることが要點である。

此方法は既に獨逸に於ては千八百八十六年農村建設の事業を中央、聯邦、私立會社の手によりて起し、デンマークに於ては千八百九十九年に於て貧民に土地を與へて農村を作らしめ、ブラジル、オーストラリア、ニュージーランド、皆之れに前後して国营農村を起し農民の獨立向上を計畫した。

加州は之れに鑑み、千九百十五年州會に於て農村組織及び農家財政機關問題を研究すべき法案を通過し五名の委員を擧げて世界各方面に派し、エルワード・ミード博士を委員長として調査の結果各國借地小作の失敗を明かにし、千九百十七年加州々營模範的農村をビュート郡ダーハムに建設するに至つたのであつた。

然るに我が「大和コロニー」は加州々營農村の起る十一年前マセド郡リビングストーンに於て建設させられたのであつた。私は以下少しく其由來と同地同胞の経歴を書いて見たい。

〔日米〕No. 8143 July 10, 1922)

(九十四)

Ⅱ 大和植民地の由來

模範的日本人農村(續) Ⅱ

加州マセド郡リビングストーンなる「大和コロニー」は千九百六年(明治三十九年桑港震災の年)に始められたものである。

其發起者は、安孫子久太郎を社長とせし、鷺津文三を支配人とし、峰島儀一、秋元正規、寺澤六之助、皆部梅太郎、瀬尾八郎を取締役とせる「日米勸業社」の創立であつた。(日米勸業社は明治三十五年の創立にかきり、加州及び山中部、アリゾナ等數州に亘り、日本人發展の大活動を演じたもので、在米移民史上重要な地位を占むるが故に他日改めて記述する。)

之れより先き、日米勸業社長安孫子久太郎は、皆部梅太郎、峰島儀一、等と共にスタニスロス郡モデスト及びターラック附近を視察し、ターラックが視察七年前一寒村に過ぎざりしに拘らず、僅々七年の後、驚くべき發達を爲したるを目撃し、此地方の土地が後來日本人に頗る有望なることを看取し、十哩を南せるリビングストーンに土地を所有せるモリツソンが千二百八十英加の土地を所有し、之れを賣放たんことを欲せるを聞き、彼れに就きて賣買の交渉を試みた。大和コロニー建設の動機は此時に始まつたのであつた。

元來リビングストーンは曾て千八百九十五年に伊太利人によりて植民地を開かれたものであつたが、經營久しからずして失敗

に終わったことがある。而して其附近大耕地は二三の大地主が専有し、牧草、穀物などを大農的に耕作していたに過ぎない。

自然此頃は地代も頗る安價であつた。モリソンと安孫子の交渉は結局一英加三十五弗とし一ヶ年五弗づゝの拂込七ヶ年賦といふ事に相談が纏つた。

今から考ふれば、一英加三十五弗、七ヶ年賦は實に驚くべき安價であるが、此當時の相場としては頗る高價の賣買で、リビングストン附近の白人は之れを聞いて「日本人が一杯喰はせられた、屹度失敗するに違ひない」と嘲つた者もあつた。其頃當附近の麥畑は大概一英加十五弗から二十弗位の相場であつただ。併し、拂込が七ヶ年賦ゆへ、小資本者に取りては取掛りが容易だといふ打算から高いと知り乍ら契約を取結んだ譯であつた。

右の計畫を始むる爲め第一回視察者として同地に赴いた者は塚本松之助、磯野徳治郎、鷺津文三、植田憲三、谷口文彦等であつた。一同は現場を視察したがモリソンの住宅の周圍に少許の桃、蜜柑等が植付けられていたのみで、一望漠々たる砂漠地であつた。

此年、十一月最初の視察者等を筆頭として買収の土地を左の如く分割引受くることになつた。此引受者の中には始めより拂込をせざる友人的賣買契約者が多かつた。併し第一回買収の土地は賣切れといふ事になつた。

大阪 植田憲三 四〇〇

山梨	小池實太郎	一六〇
和歌山	皆部梅太郎	一一〇
宮城	佐藤信忠	八〇
大阪	磯野徳治郎	八〇
新潟	興業組合	八〇
和歌山	増田興助	四〇
千葉	塚本松五郎	四〇
大阪	堀愛次郎	四〇
千葉	小倉定吉	四〇
徳嶋	野田太平治	四〇
大阪	永翁光太郎	四〇
岡山	宮野信吉	二〇
和歌山	谷口文彦	二〇
神奈川	細井米吉	二〇
滋賀	牧野敬造	二〇
合計十七口、千二百八十英加		

明治三十九年秋、右買入契約者の中、第一着として移住せるは貴志太次郎、皆部信知(梅太郎實弟)、植田富五郎(憲三實弟)、峰嶋儀一の諸氏であつた。彼等は實にリビングストン「大和植民地」の草分である。

此年秋、「米國殖産會社」は日米勸業社員、安孫子、峰島、鷺津、皆部(梅太郎及)びモントリーなる漁業家野田音三郎、桑港洗濯業者、塚本松之助、商會主、駒田常三郎、工事受負人、

井木久次郎、新世界主幹、谷口文彦等によりて組織せられ、資本金二十五萬弗の株式會社となし、最初日米勸業社買収の土地及び新たに近接地千五百英加を買収し、茲に「大和コロニー」の基礎を築いたのであった。

〔日米〕No. 8144, July 11, 1922)

(九十五)

Ⅱ大和植民地の由來

模範的日本人農村(續)Ⅱ

「大和植民地」は創立せられ、先入者は前途洋々たる希望を以て移住した。然し、此當時植民地創立者も、先入移住者も實は獨立農業には無經驗の者ばかりであつた。先入移住者たる貴志太次郎は桑港に商賣をしていた人であり、峰島儀一は天下國家の有志家であり、皆部信知は黄口の青年であり、植田留五郎は青年商人であつたので、すべて机上の算數は知つていても、葡萄園の經營には素人ばかりであつた。

此當時近隣に日本人農業家は一人もなく、誰れに教はろうといふ便宜もない。勿論其頃農會などの指南者は無かつた。(因に記す農會は千九百七年秋、スタクトン市に農業家大會が起り、それより翌千九百八年に日本人農會なる者が始めて創立せられたものである。)

先入移住者はローダイ及びフレスノ地方に見學をして、葡萄

桃等の植付に勵んだ。此創業當時は米國財界のパニックの起つた頃で、金融は悪るく知己友人間の金策をすることも困難であつた。先入者は植付に際し、苗木を買へば食料に窮し、食料を買へば苗木を買ふことが出来ない程貧弱の生活と戦つたのである。

翌千九百七年、米國殖産會社は第二區第三區を合して約千八百英加の廣區域を買収して之れを各農業家に分有せしめんとし「大和植民地案内」を發行した。今日右の「案内」を見るときは隔世の感がある。其中の二三節を引いて見ると斯うだ。

「葡萄は醸造用、食卓用とも好適地にして比較的小資本にて多額の収入を見る……昨年此植民地に隣れる葡萄園にてはマラガ及びトケー種を耕作し一エーカーに付百五十弗の收穫を得たり。」

右に據ると、當時の食卓用葡萄は廉價にして其收穫また僅少なりしを想像することが出来る。何となれば現今大和植民地のトケー及びマラガは大概一英加五百箱を出し、昨年は一箱平均一弗四十仙なりしを以て一英加七百二十弗を收穫したる割合である。特に、佐藤信忠氏のトケー園は昨年一英加に八百箱平均を出した實例がある。

「又酒葡萄は一噸に付現今十三弗より二十三弗までの價を保ち、如何なる事情あるも十三弗より下がることなしとは營業者の確信する

所なり、故に一英加より七八十弗の収穫を見るを得べし、云々。」

處が現今の酒葡萄は禁酒法實施一躍して七十弗となり、百弗となり、百五十弗に暴騰し過去三年間の平均百弗であったから一英加六噸平均と見積り六百弗の収穫がある譯である。

米國殖産會社創立當時、大和コロニー土地賣出價格は一英加六十弗で、六ヶ年賦であった。而して其案内書には幾らかの誇張を書いたのであらうが、夫れでも左の事しか想像し得なかつた。

「前途有望——當地方は(リピングストーン地帯を指す)今まさに盛運に向ひつゝある第一着歩の時代にして土地の代價は頗る低廉なり。

然れども附近隆盛の實歴に徴すれば當植民地の地價は後來三四倍に昇騰すること明なり、云々。」

六十弗の四倍が二百四十弗である。然るに現今リピングストーン同胞の農園は千弗より千五百弗の實價を有している。十五年大法螺を吹いたつもりが、今となつては其法螺が寔に小であつて、實際は法螺幾倍の騰貴を示しているから面白い。

大和植民地創立當時は各方面の日本人から色々の非難を受けたものである。地方某新聞の如きは其記者がリピングストーンの方角すら知らずして、熾んに與太り飛ばした「ヤレ大和植民地では雞が風砂の爲めに埋まる」だの「葡萄を植えても芽が出な

い」だのと與太り合つたものである。

或る時、私はサクラメント市に行つた處が一記者私に向つて曰く「君のリピングストーン土地は雞が埋まらないか」といふ。「ノー」と私が答へると「それでは、君の雞は足が長いのだらう」といふ、私は答へずして記者の股をウンとひねつてやつた。彼は痛いといふ。私曰く「君の股の皮は人並みより薄いんだらう」と交ぜ返して笑つたことがある。

——(此稿つゞく)——

〔日米〕No. 8145 July 12, 1922)

(九十六)

|| 大和植民地の由來

模範的日本人農村(續) ||

大和植民地が創立せられた頃の加州同胞は土地所有者が少なかつた。其當時の記録に據ると明治三十九年度に於ける土地所有は左の如くである。

地名	英加
アラメダ郡	九二
サンノゼ地方	一四六半
ワツソンビル地方	二八
バカビル地方	二〇五
サクラメント地方	六一五

フレスノ地方

二、七二二

南加

一、五九二

マセド(大和コロニー) 一、二八〇

合計

六、六七一

而してサクラメント地方六百十五英加の中、フロリンは其大部分を占め、五百英加の所有者があつた。

右様の時代に於て、大和植民地は一區域二千八百英加の土地を買収したのであつたから、幼穉の人々には大山師と見えたのであつた。

初期時代の農村は實に見すばらしい者であつた。移住者は農園中に小屋を立て、或る者は既の傍に起臥して農耕に努力したのであつた。現今のリビングストンの日本人生活状態は加州第一と稱すべき美觀を呈し、牧師館、幼稚園、會堂を始め各農家は邸宅の清麗、諸設備の完全等他に其比を見ざる程であるが、十五年前の遺物たる小屋の残骸を見るときは、初期時代の惡戦苦闘が如何に慘澹たるかを想起せしむる。

私は此機會に於て、大和植民地の有志諸君に望みたまは、諸君が移住當時の遺物を保存し、或は記録して之れを子孫永遠に傳へ、先人苦闘の事蹟を記念せしめんことである。之れ單り諸君の子孫の爲めのみならず、日本民族が米國に於ける事蹟を後昆に垂るる上よりして意義ある事業たるを信するのである。

千九百七年、大和植民地が擴張さるゝと同時に、植田憲三外三十七組の土地買入契約があり、同年、先の移住者を見るに至つ

た。

植田憲三、鷺津文三、峰島儀一、前田、奥田、皆部信知、仲喜代一、磯野徳治郎、奥江清之助、貴志太次郎、奥野徳松、野田佐枝、堀愛次郎、木元三松

私が此稿に於て大和植民地を模範的農村と稱するは、單に日本人に對する模範を意味するのではなく、あらゆる各國人に對して之れを稱するのである。而して茲に見遁すべからざる一事は農業者の成功すると否とは實に其方針と其組織の如何にあることである。

大和コロニー以外に日本人の農業者は數萬を以て數ふべきである。而かも是等の諸君は其努力奮闘に於て必ずしも大和コロニーの諸君に劣つてゐるのでない。たとへば川下に薯やアネオンを作り、沿岸地方でビーツを作り、コルサ方面に米を作ることは寧ろ大和コロニーの農業者以上の努力と苦心があるであらう。而して十年後の結果に於て果して何れが成功の月桂冠を戴いたであらう。

私は農業者の成功すると否とは其方針と其組織の如何にありといふた。而して其方針と組織とは何に由つて來る乎といへば、精神の確立にある。若し我が在米十萬の同胞が過去數十年繰り返したるが如き、腰掛的一時的の精神ならば、農村の經營は決して望むことが出來ない。其結果として農業は賭博的となり、労働者は賭博に耽るであらう。

大和植民地は其始め幾多の困難があつたが、今日は加州第一

と稱せらるる農村となった。若し在留農業者が之れを範として各地に農村經營の事に従つたならば、排日問題は自然に解決せらるるであらう。

以上の外日本人農村として見るべきものにボールス農村、バリア、グロービス、ルームス、フロリン等の農村がある。各一長一短は免れないが、ボールス日本村はプレスノ佛教會淺枝開教使の指導と啓發に因る處が多い。私は此機會に淺枝開教使の功勞を特記し、餘多の牧師僧侶が日本人農村の獎勵に努力せんことを望んで止まない。

〔日米〕No. 8146 July 13, 1922)

(九十七)

Ⅱ 本題の結尾

民族特長の維持 Ⅱ

吾輩は此稿を以て擱筆する。之を要するに日本人の此國に移住せる歴史は曾て其全部が寄生生活であつた。寛永元年一月中濱萬次郎がサンドイツチ島に漂着し、米國捕鯨船に救はれて渡米し、教育を授かりて歸朝せる以來多數の學生、出稼人、乃至學者と稱する者まで、其大多數は寄生々活であつて米國の文化に貢獻せりといふの事蹟がない。

別語を以ていへば、日本人の米國に渡りたる者の大部分は文明の模倣者にして創造者でなかつた。一國の最も尊むべき精神

教育ですら日本人は西洋の模倣であつた。人間のあらゆる快樂を享受すべき一切の機械も、人間の離るべからざる經濟の組織も學理も模倣であつた。日本人は寄生に始まりて今模倣中にあるのが對米日本人の關係仕末である。

茲に吾輩は米土の日本人が經過せる史蹟中に一二の創造的貢獻を發見することが出来る。それは海洋に於ける漁撈と、陸上に於ける農業と少數の發明家とである。

日本人は海國民であり同時に農本國民である。海國民としての日本人は大船巨舶を作るの術に於て航海の術に於て米國人に優つていなかつた。併し、漁業者としては米國人に及ばざる創造力を有している。

特に、農業に於ては世界あらゆる民族に比して優秀なる創造力を有している。

素より、日本人が米國に渡つて農業漁業を營むに當つて、日本固有の機械を用いたのではなく、其利器は多く米人の發明になれる者を使用した。農具でもガスリンボートでも日本人の發明ではなかつた。併し、同一の機械を使用して特殊の効果を収むる點に於て日本人は慥かに外國人の上に出ている。これは日本人の創造力でなくてなんであらうか。

日本人は以上二個の創造的能力を尊重して益々其特長を發揮せしむべきである。而して此能力を米土に残せる子孫に傳へて益々發揮せしむべきである。

世間憂ふるものあり、初代日本人は能く農業に成功せるも其

子孫は都市に走りて農園の創造者にあらざるべしと。吾輩も亦之れと憂を同ふするものである。然れども今にして此憂を感知する者の現はるゝは未だ日本系子孫の絶望にあらざるを意味する。我等は此憂を一般に普及して茲に第二世日本民族の特長維持に努むべきではあるまい乎。

我等日本人の移民は米國に渡りて以來餘りに多く働いた。富殖一點張りで働き過ぎた。農民の家庭には利殖に用ゆる農具が整頓された。而かも人生娯樂の用具は欠乏している。特に高尚なる思想を養ふべき文藝美術は皆無の姿である。而して更らに社交機關の絶無と、社交的興味の絶無とは文明人としての大欠點である。此欠點は、やがて成長すべき第二世子孫の嫌焉たらざる最大の欠點である。

我等は必ずしも其子孫をして農たり漁たらしむべき權利を有たない。併し我等が特長を子孫に傳ふるは我等の義務である。此道理よりして我等は未來の青年子女が満足して我等の特長を繼承すべき設備の完成に努力すべきであるまい乎。

特長繼承の設備は先づ、第一に我等日常の生活を改善せざる可らず。人は金のみ尊きものに非ずといふ觀念の上に立ちて我等は文明人の生活を味ふことを學ぶべきである。即ち我等は我等家庭の生活を高尚に保ち、同時に社會生活の向上に参加すべきである。

第二に我等は以上の結論として地方に農業教育の機關を設くる事である。農業教育は最初農談會の如きものを起し肩の凝ら

ざる懇談と娯樂とを以て始まり漸次進んで某々地方に農學校を創立することである。而して此農學校は努めて自給自足の方法を以て修學の便宜を計り、空論を避けて實地に親まじむるの學風を醸成すべきである。斯くの如き設備は單り我日本民族の特長を維持するのみならず、米國に貢獻する事の頗る大なるを確信する者である。(完)

『日米』No. 8147 July 14, 1922)